
友情伝説リターン・乙女ドラえもんズ

雪子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

友情伝説リターン・乙女ドラえもんズ

【Nコード】

N0959E

【作者名】

雪子

【あらすじ】

のび太君とドラズの友情の前で散った、とある敵。だが、空間の歪みという悪魔は彼を見捨てませんでした。彼に新たな力と野望を与えた。狙うのは親友テレカとドラえもんズ。彼ら全能力にはある秘密があったのです。空間の捩れを中和する力も持つ伝説のアイテム親友テレカ。みんな、ある程度そのテレカの危険性を知りつつも、それによって起きた争いを再び起こさないために一人一人持ち続けている。敵はソレを狙い、まず行ったことは彼らを強靱のネコ型ロボットから換えることだった。擬人化女体化、しかし声は元のまま。

ドラえもんズと友情を誓い合ったのび太は今再び立ち上がる。乙女
になったドラえもんズに困惑しながらも。

プロローグ・「はじめに言っておく、かなり困惑している」(前書き)

この小説にはドラえもんズの擬人化、女体化などが入っています。
嫌いな方はご注意ください。多少キャラが崩壊しているかもしれない
ことともご了承ください。

ブローグ・「はじめに言うておく、かなり困惑している」

ここは何処だろう。

眼鏡の冴えない小学生に、そして友情を誓い合った七体のネコ型ロボットの方にワシは破れたことまでは覚えていた。

まさか、鍍金が剥がれ落ち青い、スクラップ同然の子守ロボットと人間の友達……しかも昔の、まるでだめな小学生にワシの力が、憎しみが……

打ち破れるなんて！

信じられない。

信じたくない。

信じてなるものか。

だってそうだろう……

そうではなくてはワシがワシになった意義が……

なくなってしまう。

嫌だ。

[illegible]

見返してやりたくて、ワシは、ワシは……。

この力を手に入れたのに！

嫌な者たちのような力を得てしまったのに、ここでワシが消えてしまうのに……

納得できるものか！

この魂の叫びに時の歪が反応する。

神の悪戯なのか、悪魔の情けだったのか……そんなこと誰が決める？
ただ、これから起きる複雑怪奇な事件の発端だったことだけは確か
なのだから。

彼は一人タロットカードを眺めていた。

富豪の家のランプの精、魔術師として少年の子守をしているからだろう。

アラビア調白柱、大理石の壁。そして家の造りは勿論、彩る調度品
まで豪華で飾り棚の上に置かれた、ガラスの壺や時計などといった
装飾品たちは多々ありながらも互いに調和を保つこの部屋を与えて
いるのは。

日常的に必要なものも家具も満ち溢れているので、彼の部屋と割り
当てられてもほとんど彼自身がもってきたものはない。

まあ、だいたいは四次元ランプに収納しているのだから必要である
のだけだ。

彼の目に見える私物がこの部屋に一つだけある。それは壁にかかった
抽象画。

部屋の主とその友情を誓い合った者達の絵が飾られ、あたたかな趣
を醸し出している。

「不吉な予感がするであゝる」

占いの結果に思わずため息が出てしまうドラマメッド三世だった。

あまりにも動揺していたせいなのか、窓から来た不審な影を見落としてしまった。

影は素早く、ドラメット三世の後ろに近づく。

「どうした、ドラメッド！」

「うぎゃ！」

急に聞こえた声にびびる。

ドラメッド三世は思わず腰をかけていた椅子から勢い余ってジャンプ、机を飛び超え、重力に逆らえきれずに転げ落ちる。手にした一枚のタロットカードは無傷ではあるものの、主は絨毯に残っていた埃にまみれていた。

「な……なんであるか」

振り返るとそこにいるのは紫色のネコ型ロボット。黒いマントをなびかせ、高慢な顔つきではあるものの根は優しい、フランスの大盗賊。

「ドラパン！ いきなり何をするであるか！」

「ふはははは。なぐに、たまたま暇だったのでお前に会いに来ただけさ。そしたらお前が難しい顔していたからな」

ドラパンの唇がしてやったと歪む。

かなり自分は面白いぐらい彼の思惑通りの表情を見せたらしい。

「ちよつと、からかったというわけであるか。天下の大泥棒もこういうところは子供であるな」

やれやれと埃を振り払うと椅子へと戻る。

再び訪れるのは静寂の月の夜の光。

「で、何が不吉なのだ」

ドラパンが話を切り出す。

「そこまで聞いていたのであるか」

「まあな。おせっかいかもしれないが、お前たちにはかりもあることだし、私でよかったら相談にものるし、協力もするぞ。」

なんといても暇だからな、と言うドラパンの笑みがいつもの高慢から、友を想うソレと替わっている。

ああ、わがはいのまわりにはこういう親切な友に満ちている。

ピンチに陥ったときも、道を外したときも、自分を修正しようとなんばる仲間。

「ならば話そうか、わがはいの……」

再び手にしていたタロットカードを目にむける。

部屋の主ドラメッド三世が手にしていたのは死神のカード。

かつて友情の危機が訪れたあの時と結果が同じ。

あのときはキンキンにさせられ散々な目にはあったが……それ以上に今回は胸騒ぎもする。

前にも同じような気を感じている。

邪悪で、そして悲しい一体の同系のロボットのことが。

ちやうどそのとき、大事にしまっている友情の証から異変が起きてしまう。

そしてそれが、最低でも一人の小学五年生を困惑の奈落に誘うのであった。

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	8												

200X年

天氣雨

東京都

某ドラ焼き店

「ど、ドラえもん！」
今、眼鏡をかけた日本一有名なため小学生野比のび太は目を丸くしている。

辛うじて出てきた名前。
のび太の声をかけたその先にいるのは。

レインコートを着た、青い髪の少女。

「の、のび太君……あ、あれ僕、えっえー！」
手を見るなり、ドラえもんと呼ばれた少女はラーメンの具材のナルトになった。

「……………」
近くにいる茶髪の少女も声を出してはいないものの青髪の少女と同じくパニックに陥っている。

店の主に至っては何かよくわからないけどマジックでも起きたのかなと拍手を送っていた。
そう、まさか

タヌキ型から十代の少女に変貌する

というものを生で見るとは思えなかったから。

ブローグ・「はじめに言っておく、かなり困惑している」(後書き)

というわけで、いろいろと触発されて終にやちゃったぜ!と、書いてみました。色んなところから突っ込まれてしまいそうな綱渡りのなものになってしまいそうですが、長期になるうが、完結はさせます。ですので、温かい目で見守ってください。

念のために、ドラえもんズは全員出します。

第一話『小学五年生ではセーフだね、たぶん』（前書き）

ドラえもんのび太君がどうして部屋ではなく、ドラ焼き店にいたのか、そして茶髪の少女とは誰なのか（まあ、ばれはれだろうけど）のび太視線で第一話のはじまり、はじまり。

第一話『小学五年生ではセーフだよね、たぶん』

僕、のび太。

セワシという子孫から僕があまりにも頼りないので夢のような未来の道具を使いこなすお世話ロボ、ドラえもんを遣された、ある意味ラッキーな小学五年生として名高いのかもしれない。

しかし、その反面、事件に巻き込まれることが多くなった。

まあ、ほとんど僕が原因だったりするけど、恐竜や過去の時代、どこか遠くの惑星、地下帝国、宇宙開拓地、魔境に異世界、パラレルワールド……といった普通では考えられない冒険を僕たちは数々こなし、成長していったのは皆さんもご存知なはずで……。

しかし、こんないろいろなことが起きても僕が驚かなかったことはない。

今回も、驚かされたよ、ドラえもん。

君の四次元ポケットが光ったと思ったら、いきなり女の子になるなんて！

友情伝説リターン・乙女ドラえもんズ

第一話『小学五年生ではセーフだよね、たぶん』

ここは少し落ち着くためにも話を少し遡らせることにしよう。
ええっと、まだ雨は降らず雲がどんよりとしていただけの時間までかな。

いつものごとく僕は0点を取り、ママに叱られる前に隠そうと机の

引き出しの奥につつこんだよね、そんなとき。

「のびちゃん！」

階段の下から響くママの声。

内心どつきとしながらも、怒りを含んだものではなく、いつもの、いや、柔らかい声。

どうやら僕のテストに関するものでもお手伝いを催促するものではない。

「な、な、に、ママ」

「しずかちゃんが来たわよ」

しずかちゃん？

僕は慌てで階段を下りた。

引き出しを開けっ放しにしたような気がしたがそんなの些細なことだ。

好きな人が、僕にどんな用事があつてきたのかのほう百倍気になる。

眼鏡が擦り落ちない程度のスピードで僕は玄関に向かった。

「のび太さん。こんにちは」

聞きなれているソプラノ声。

やっぱりとして、僕に長年の恋心を抱かせている、女の子しずかちゃんのものだ。

「やあ、しずかちゃん」

幼馴染でいまさら畏まることもないのかもしれないが今日はしずかちゃんと遊ぶ約束はしていないのに、彼女からきてくれたことに舞い上がらない男はいるだろうか。いるはずないよ。もう、階段を猛スピードで下りたときから心臓がバクバクするよ　主に急な運動をした、息切れで。

くすつとしずかちゃんは微笑む。

白百合のように可憐で、僕もつられてにやけてしまう。

「あの、親戚の叔父さんからたくさんドラ焼きを頂いたの。よかつ

たらドラちゃんと一緒に食べて」

しずかちゃんは両手で持っていた紙袋を僕に手渡す。

紙袋の隙間から見えるのは茶色い物体。中から餡子が見えることから間違いないドラ焼きだろう。

「じゃあ、わたしはこれで。習い事もあるから」

「あ、ありがとう、しずかちゃん」

玄関の扉が静かに閉じられる。

なんだ、ただのおすそ分けか。

しかし、しずかちゃんからもらったものは大切に食べないと。

僕はママからドラえもんと一緒に食べるからといって白い大きな皿を台所から拝借し、僕の二階の部屋と戻った。

ところでドラえもんは今いない。

朝僕が学校に行く前に随分浮かれていた、と思い出すとおそらくミィちゃんとデートでもしているのだろう。

至極一般的な推理だ。しかし、腹が立つ。

「まったくドラえもんって浮気者だよな」

前にドラえもんの親友に聞いたことがある。未来にドラえもんの恋人がいるという。ドラミヤコといってかなりの美人らしい。写真などで見たことがないが、話からするとダンサーロボとして作られているから容姿端麗であるに決まっている。

耳をネズミにかじられ、なくしたドラえもんを笑ったというが、その後和解したはず……なのに。過去の僕の時代で浮気とは！

モテル男は違うのか！

……もしかして、セワシも彼女がない僕にしずかちゃんの心をゲツトのためにあえて彼女がいるドラえもんを寄越したのか！

モテルテクを伝授するために！

それなら鋭いヨ、セワシ！

僕の子孫とは信じられないくらいの気遣いに、余計なお世話だとか、深く考えすぎではとか、後から出て来る言葉は多くともその一瞬だ

けは感謝した。

「ただいま、のび太君」

低音のガラガラ声。青い古ダヌキと何度も間違えられるけどネコ型ロボット、ドラえもんが窓から帰ってきた。今日のミーちゃんのデートも絶交調だったらしく、満悦の笑みを浮かべていた。

「おかえり、ドラえもん」

「ん、この匂いは、そしてこの皿にのっているのはドラ焼き！」
目ざとく、そして一気にドラえもんは口に運ぶ。

「しずかちゃんからもらったんだけど……ドラえもん、全部は食べないでよ」

食い意地が張っていてしかも好物では警世しないと一瞬ですべてがなくなってしまう。

しかし、この考えは杞憂に終わる。

ドラえもんが一つ大きな自分の口に放り込んでからという動きが止まっている。最初、僕はぼくが一つ手にするまで待っているのかと思っていた。

口に入れ、ドラ焼きの甘い香りが口いっぱい広がる。柔らかいカスタードは少し歯に力を入れるだけで簡単に割れ、丁度いいくらいの大きさの僕の口の中に入っていく。

甘い。

ドラ焼きだからそういうものだけだ。

僕は持ってきた麦茶を口に含みながらも一つ平らげた。いつもだったら既に二個目に突入しているドラえもんが、まだ固まっていた。「ど、どうしたの、ドラえもん」

いつもと違うドラえもんは戸惑う。

そして、薄暗かった空からぽつぽつと水の粒が落ちてきた。

「のび太君、これ、何処の店の……」

「え、えっと……」

とりいでたるは、紙袋。

詳しくは見なかったが、とりあえずなんとか堂。

東京都の……ここから遠くはない距離の場所の住所が書かれていた。
「ふ〜ん」

外はもう、凄絶に雨が降っていた。

だが、ドラえもんはこの時ある決意を秘めたのだろう……マルマルとした身体をすべて覆い包む、レインコートを装着し、タケコプターを頭につけると外へと飛び出した。

「ま、な！」

あまりのことで、僕は対応に遅れた。

でも、スเปアポケットが押入れのドラえもんの寝ている枕の下にあるのは知っていたし、僕もレインコートをタンスから取り出すと、ものすごい形相出でいったドラえもんに続くようにタケコプターをつけ、窓から飛ぶ。

視界はいいわけではなかったが、ドラえもんの青く大きな身体は目立つので見失うことはまずない。

雨粒が眼鏡につこうと必死になってドラえもんを追いかけた。

東京都 某ドラ焼き店

ドラえもんを追いかけたら、ここについた。

和風の、落ち着いた感じのデザインがなされた店内。硝子ケースに様々な色とりどりの和菓子がある。つい見とれてしまっぐらいの美しさがあつたが、僕はそれらの奥にあるこの店の社名入りの紙袋が目についてきた。

しずかちゃんがもってきてくれた紙袋と同じソレを。

どうやらここが親戚の叔父さんからもらったドラ焼きを製造している和菓子屋さんらしい。

僕がそう推理していると後ろから肩を叩いてくる。

「がっ」

聞き覚えがある、その声。

「ドラニコフ？」

振り返ると、青い長いマフラーを口元にまで巻いた、ドラえものの親友。

ネコ型なのに狼になる、無口の謎多きロボット。

しかも声を出したとしてもほとんど鳴き声なので僕では翻訳こんなにやくがなければ通訳ができないけど、ドラえもんズ全員には意思の疎通がはかれ、彼の言いたいことを理解できるのだという。

ドラニコフ自身は俳優業をこなしていることもあり、しぐさを見れば素人でも彼の言いたいことぐらいはわかるけどね。

「がっ」

僕に名前を言われたことには喜んでいるけど……すぐ彼の表情は曇る。

その訳とは……。

「ドラ焼きが、甘すぎる！　こんなんじゃメタボになるよ！　もう！」

「何を、青ダヌキが！　こちらら百年の味を守ってるんじゃ！」

「タヌキじゃない！　ネコ型ロボット！」

……できれば他人のふりで済ませたくなる。

ドラえもん店主との口げんか。

「このわからずや！」

店の奥からドラえもんが飛び出してきた。

どうやら真っ先に殴りこんできたらしい……まったくもってドラ焼きの味にうるさいロボットだな。

「ふん、そんなに言うならば買わなければいいじゃろが。ワシかてお前さんのような青ダヌキに食わせるドラ焼きなんてありやしない

ぞ。客としても願ひ下げじや。帰れ、帰れ」

まあ、もともとこれしずかちゃんからもらったものだし。頂き物でここまで怒鳴り込むドラえもんの方がずうずうしい気がする。

これ以上店に迷惑をかけるわけにはいかない、そこで僕は

「帰ろう、ドラえもん」

「がう、がう」

ドラえもんの身体を抑えた。

ドラニコフは羽交い絞めにし、僕は前のほうを押さえる。

「の、のび太君！」

「ドラえもん、とにかく帰ろう。ドラニコフもせつかく日本に来たことだし」

ドラニコフがここで何をしに来たのも知らないし。

ここはゆっくり僕の部屋で昔の話なり、近状を語るなりして親友同士の交流のほうを重視するべきだろう。

僕はドラえもんの胸を強く押した。

その、刹那、ドラえもんのポケットとドラニコフのマフラーが光った。

目が強い光に反応し、瞼と閉じる。

むにゅっと妙に柔らかい感覚が僕の手に伝わり、強烈な光がなくなったので再び目をひらくと　僕はわが目を疑った。

青い髪の僕よりも年上の可愛い少女の胸を僕は触っているという信じられない出来事が起きていたのだ。

嬉しいけど……て、ちがう！

ドラえものの、あの、丸くてずしんとした姿が見当たらない。

しかも青髪の少女を羽交い絞めにしているのは 茶色の髪の少女
彼女は長く青いマフラーをつけて、本来耳があるところからネ
コのような狼のようにとがった耳が生えている！

「……………」

僕は冷静に、もう一度青髪のお姉さんをまじまじと見た。

着ているのはレインコート。

お姉さんのボディラインで多少形が変わっているように見えていた
が、このコートは間違いなく ドラえもんが先ほどきていたもの
と同じ。

立ち位置、状況……一つ一つありえないものから消し去っていくと
おのずと答えが見えてくるとはいっても……僕は僕が出したその答
えに驚かずには要られなかった。

できれば夢だとか、悪くても妄想で済ませたかった。

でも、僕はその答えをはっきりと口に出してしまう。

「ど、ドラえもん！」

第一話『小学五年生ではセーフだよ、たぶん』（後書き）

と、いうわけでドラえもんはドラニコフの女の子姿はのび太君と店主に目撃されたというわけです。

ちなみに、人間でいうとドラえもんは十九歳、ドラニコフは十七歳という設定。未来の道具によっていくらでも年齢設定を変えることができるでしょうが、スタンダードではそんなところとさせていただきます。では、つづきは次回で。それにしてもドラズ全員でくるまで何日かけるのでしょうか。何話かかるのでしょうか。できるだけ早く主要キャラを出せるようにします。

第二話『日頃のパターンって時々とんでもないことを起こすよね』（前書き）

いままで少女とか、お姉さんですましていた、今のドラえもとドラニコフを詳しく表現してみました。どんな女の子に変貌したのかは、お楽しみにね（笑）

第二話『日頃のパターンって時々とんでもないことを起こすよね』

ドラ焼きの神様に反感をかってしまったからなのか、そんなわけないとはいえ事実女の子になってしまった、ドラえもんはドラニコフ（現時点の確認による）。
しかも美少女。

ドラえもんは青い髪を胸の辺りまで伸ばし、オニキスのような瞳がしている。

全体的に落ち着いた感じのその色はマイナスイオン効果も秘めているのか人の良さそうな顔も相成って癒し系の可憐な面倒見のいい子供向け番組のお姉さん。

一方ドラニコフのほうは艶のある茶色の髪にシャギをいれたセミロング。アイスグリーンの氷の裂け目にみられるような透明感のある青緑の瞳は白い月。肌も白く透き通っていて、プロポーションはピナス像のようにまるで陶質の様な調律のとれた氷の芸術を思い起こす。

平凡と生きていたらまず会うことがない、縁がまったく感じられない別世界の住人ではないかと疑ってしまう……そんな美女がのび太の目の前に二人も突如現われたのだ。
言葉を失っても致し方ない。

「……………」

ごく、とのび太の喉が鳴った。

あのままのび太の時間は止まってしまったかと思ったが、重大な、

とてつもなく危機迫っている状態であることに気づいてしまった。
完全防具のロシア民族衣装をまとっているドラニコフにはパツと見
では問題ではなかった　しかし、ドラえもんはどうだろう。

黄色のレインコートからすらりと出てくる血色のいい肌色の太もも。
「も、もしかして……」

のび太はドラえもんの胸の感触から嫌な予感を感じていた。
異様に柔らかかったソレ。マシユマロでも指に突き刺さったのでは
ないかと思ったソレ。

のび太はある事実を確認するためにドラえもんの足の先に風のごと
き速さで視界を向けた。

ピンクの健康的な爪。靴はなおさら、靴下も履いていない素足であ
った。

「今、ドラえもん、て……」

レインコート一枚なのか！

首にかけた鈴もあるが、そんなアクセサリー今の状態では余計危な
いお姉さんにしか見えない。

白や透明ではなかったことで最悪な状況（身体のラインがくつきり
と見え、しかも危ないところが透けること）を阻止できているが、
雨の雫がすりりとした手足に滴る。

ぶかぶかよれよれであるものの丈の短いコート一枚の姿で公衆の面
前（今のところ目撃者店主のみ）でさらけ出せるか、今のドラえも
んを。

「うわ、わー！」

のび太の躊躇ったその言霊に続くものを感じ取ったドラえもん。
全裸にコート一枚では不審者とは思えないという事実に！

「は、早くどこでもドアを！」

「そ、それは……」

ドラえもんは戸惑っている。

なぜならドラえもののポケットはレインコートの中にあつたのだ

この状態で腹を出した日には猥褻物取締り法に引つかかる！

表参道を歩けなくなる。

のび太はこの時ほどスペアポケットを何で押入れに律儀に返したのだろうと思ったことはなかったという。

「……！」

救世主はすぐ側にいた。

ドラニコフはのび太の声に反応し、青いマフラーからピンクの大きな扉を取り出した。

どこでもドアだ。

「ありがとう、ドラニコフ」

「とにかく、安全で誰にも見られないようなところ！」

これで移動したその場で着せ替えカメラでも使えば、直面している危機は去るはずだった。

とつさに、のび太がドアのにぎりを回したのが悪かったのか。

たまたまドラえものの、女の子の素肌に反応したのがまずかったのか。

安全という言葉をつけ加えたのもネックだったのかもしれない。

ドアの向こうは湯気が満ちていた。

外気によって湯気が掻き消されるとともにあらわになるのは一人の少女の肢体。

バスタブの湯に浸かっているのもロに見たわけではないが。

「きゃー！ のび太さんのエッチ！」

乙女のもっとも無防備なとき不躰に來た罪が晴れるわけがない。

しずかはとつさに湯の入った手桶を侵入者に投げた。

「ごめんよ、しずかちゃん！」

ドラえもんとのび太はすぐに反応し、膝を曲げ、背を低くしたが、ドアを閉めたドラニコフは気がつかなかった。

「……！」

がこんつ。

脳天に直撃する音が響く。

反動で宙に一瞬浮いた手桶は重力に避けきれず、そのまま落下。

「んわー、ドラニコフ！」

ドラニコフの身体に温かいお湯が全身に降りかかる。

「……ガウ……う」

一難去つてまた一難とはこのことを言うのだろうか。

思わずしずかちゃんの入浴タイムに文字通り邪魔をしてしまったのび太一行はしずか宅の浴室の中でびしょ濡れになった。

のび太君はすぐに弾き飛ばされたというのに、ドラえもんとドラニコフはそのまま浴槽へと強制連行されていた。

二体とも濡れているので暖かいお湯にでも浸った方がいいとしずかが思ったからだ。女の子の口には勝てるわけもなく、ドラえもんとドラニコフは自分たちの今の身体を調べる必要もあったことだしとおとなしく指示に従う。

一方でたしかに今は女の子になったとはいえ、もとはあのみんぐりとしたタヌキもといネコ型ロボット。なんか理不尽だな、と思いつながらものび太はしずかちゃんの部屋で一人待つことになった。

「のび太さん、お待たせ」

ドラえもんは事の次第を打ち明けられたのか、しずかはもうすっかりいつものやさしい女の子に戻っている。女心は秋の空というが、つい数分前の壮絶に雨の降っていたのが今はすっかりと晴れたこの天気のように切り替えが早い。

温かいミルクの入ったコップがのび太の前に差し出される。

湯気で眼鏡が曇らないように気をつけながら、渴いた喉を潤す。
ぬくもりが伝わる。

ドラえもんたちがいきなり女の子になったから大慌てでこのんびりとしていなかった、のび太。

そろそろ一息つかないと自身が持たなかった。

（はたして、これからどうするのだろうか……）

ドラミちゃんに連絡するのかな。

いくらオイルで繋がっているとはいえ、実の兄が人間の、しかも女の子になってしまったと知ったらショックだろうな。

ゴキブリが出てきたときと同じくらい。

いや、いくらなんでも、兄の異変をゴキブリ出現と同様に考えるのは失礼というものか。

「ねえ、のび太さん。ドラちゃんと、えっと……ドラニコフさんが女の子になったのってわからないの」

「皆目見当もつかないよ」

ポケットが光ったと思ったら一瞬のことだった。

美少女戦士系統の変身シーンは長いのに　あ、たしかあれって視聴者のためのシーンで実際は0・3秒以内で済むとかいうか……。

スローモーションでここだけ再生させて頂きます。けて時間調節だけのものではない。

で、今の論点違う。

かなり違う。

ドラえもんとドラニコフが女の子になってしまったことだよ。

……あ、ソレに戻ってもわからない。

わからない。

ドラえもんーッ！

で、当人だよ。

のび太の思索は悩み、ツツコミ、そのまま表情になって現われているのでおもしろい百面相となって絶賛上演。

しずかもその様子を見て本当に原因はわからないのだろうと悟った。
わからないが、このままではいけない。

せつかくのチャンスを逃すのも。

「ねえ、のび太さん」

「なぐに、しずかちゃん」

しずかの手にティーンズファッション雑誌が握られていた。

「この服、ニコフさんに似合わないかしら？」

美少女に変わってしまったドラえもんとドラニコフ。その後の運命はとりあえず着せ替え人形にされるということだけは……確実だった。

「ん、なぜか寒気がする」

浴槽にぷかぷかと浮きながらドラえもんは身震いをした。

ある種の危機感。しかしそれは女の子のファッションショーに付き合うことに対する体力的、精神的苦痛をこれから受けなければいけないことに対してだけだろう。

「どうしたの、ドラえもん……」

一緒に湯船に浸かりながら、とろんとした目で見上げるようにドラニコフがすぐドラえもんに声をかける。

普段ボーとしているが、仲間の表情には誰よりも早く反応する。

いや、普段ボーとしているように見えるだけでドラニコフ自身は他人をよく理解する優しい心に満ちている。ただ、自分は相手の気持ち素早く汲み取ってしまうゆえに、自己完結し、わざわざ言葉にする必要性を見出せずに何も言わずにもくもくと行動に移してしまうのがつねである。

尋ねてくるというのは、本当に稀で……やはりドラニコフも今のこの状況についていけないくらい不安なのだろう。
人間の女の子の体になってしまったことに。

鋼鉄の身体から蛋白質の塊へと変貌してしまったことに。

メモリーを違う器に移し変え、データを保存することは口ボである自分たちはデータ上理解できる。しかし、心も持つ自分たちにすぐに受け入れられるものかというのは別問題だ。

ドラえもんとて、黄色から青にまったく変わってしまった自分を見たときは啞然とするしかなかった。原因は悲劇の素。自業自得とはいえ、妹にぎよつとされられたときにはいい切れないショックを受けた。

セワシ君が行方不明になってしまったと聞かされ、僕は自分がどんな醜い姿になっていても……自分だと気づいてくれなかったとしても……僕を認めてくれた、人間の友達を見捨てられなかった。時空警察に追われている犯罪者に人質として身柄を拘束されてしまったセワシ君を見たとき、止まらない足を、止めることもなく、たとえイカロスの羽根のように溶けてもセワシ君だけは絶対に救いたい、その想いだけで発射口に僕は飛び込んだ。

熱い。

かろうじて残っていた黄色いメツキも融解していく。

想像を絶する苦痛が僕の電子頭脳を支配する。

痛い、苦しい……。

でも、僕は……。

セワシ君を守る！

守らなくちゃ！

いつ消し炭になってもおかしくない僕に奇跡が起きた。ポケットの中から力が漲ってくるのだ。あの時は何の力が僕を、僕の身体に宿ったのかまで考える暇なんかなかった。

考えたのは　その犯罪者が、僕が学生時代校長先生に僕をクラス替えのさえ間違えて通した溶解炉に、生まれたとたん落ちてノラミヤーコさんに救われた思い出もあの溶解炉に　僕と同じように怖い思いをすればいい！

七色に僕のポケットがその刹那光った。

その後のことはあまり覚えていない。

急に身体が発射口から抜けるとともにセワシ君が僕に向かって走ってきた。

「ドラえもん〜！」

僕、こんなに変わったのに……セワシ君は、セワシ君は……。

「セワシくん！」

僕に気づいてくれた。

どんなに変わってもドラえもんはドラえもんだよって言うてくれた。たしかに僕の見えた目は変わってしまったけど、僕自身は変わらない。ノラミヤーコさんも僕だとすぐにわかってくれた。

親友もすぐに僕だと……いつもと変わらない態度。親友の証の親友テレカには青い僕の身体がそのまま映っていた。

まだ親友テレカを取り出していないけど、強烈な光を発していないところから見ると命の危険はないと思える。

僕の悪寒は親友の身に何かがあったとは違うものなのだろう。

表情が曇ったドラニコフに申し訳がない気持ちになる。

「うっん。僕の気のせい。だから心配しないでいいよ、ドラニコフ」
着せ替え人形になってぐったりするのはその二十分後。

なんだかんだといって今は太陽の光が降り注ぐ青い空。

空き地ですることといえば。

「うお、すっげー！」

「さすがジャイアン」

最新のラジコンを操作すること。

世界でも通用するようになるような言葉になりつつあるジャイアンズムの持ち主のガキ大将は、金持ちの狐顔のクラスメイトの玩具を借りていた。

緑の小型の戦闘機がジャイアンの操縦によって縦横無尽に空を翔る。

「ねえ、もういいでしょ、ジャイアン」

流石にスネ夫が痺れを切らしたのか、ジャイアンに返すようにせがむ。

そろそろ飽きてもらわないといつも酷い目にあってきたからだ。

「まだまだこんなもんじゃないぞ、スネ夫」

しかし、ジャイアンはリモコンから手を離す気はないようだ。しかも何かすご技を出そうとしている。

スネ夫は内心焦った。

空中回転ひねりなんかされたら 雷親父の家の窓ガラスを割り、その衝撃で全壊…… 68パーセント、コントロールに不備が出てその場で墜落…… 28パーセント、繰り出した技が決まり何ともなかったが繰り返される…… 9パーセント 早い話が故障させられる可能性が窮めて高い。

「まってよ、ジャイアン」

予想される悲劇を食い止めようとする。だが、そんなこと聞くわけがないのが、吾らがジャイアンだ。

「いくぞ、空中回転」

ああやつぱり……。

心の中で号泣しながら、残りの1パーセントである、無事に手元に戻ってくることを祈らずにはいられないスネ夫であった。

願いが叶うかどうかは定かではないが。

ただ、今回はその願いより、予測していた出来事よりも大変なこと

が起きてしまう。

「わあっ！」

空中から声が聞こえてきた。

太陽が一瞬隠れるぐらいの黒い影が、ジャイアンが操縦している戦闘機にぶつかったのだ。

「な、なんだ」

ジャイアンは思わずリモコンを投げ出した。

「ど、どうしたの、ジャイアン！」

スネ夫は間をいれずに拾い、とりあえず地面に降りるように操縦したが、戦闘機は土に埋もれた。

戦闘機を操縦しきれるほどの平常心なんて持てるわけがなかったのだ。

「ど、どうしよう、ジャイアン……」

「う、うぬぬう」

さすがのガキ大将も顔が渋る。

戦闘機に当たって落ちてきたのが……橙色の髪を三つ編みにし、チヤイナ服を着た女子高生ぐらいの歳の少女だったのだから。

とりあえず、ここにジャイアンがラジコンを空中回転させたら何が起こるか、に新たな項目……タケコプターをつけた少女に当たる、が付け加えられた。

第二話『日頃のパターンって時々とんでもないことを起こすよね』（後書き）

劇場版『ドラえもん誕生』いい話でした……作者は今でも熱いものが目から流れ落ちてきます。まだ見ていない方は是非見てください。セワシ君……君はいい子だよ。君のおかげで、ドラえもんが救われたよ……。ドラえもんズもかなりちょい役ですが、出てきます。とにかくお勧めです。

第三話 ベストをつくそうしたら、どんとこい、超常現象！（前書き）

声は元のままと記していますが、私の脳内イメージではドラズの皆は劇場主演時の声優の声です。ドラえもんは……古い人間である私は大山の〇代、です。といいますのもドラえもんズがテレビに登場していたときのドラえもん、オール大山の〇代の声ですから（H・20・4月現在）

第三話 ベストをつくそうしたら、どんとこい、超常現象！

ロボット養成学校。

一人前のお手伝いロボになるために今日も多くの生徒が学び、そして汗を流す。

お手伝いロボットコンテストで優勝したり、数々の難事件を解決したり、そして新しい物好きでおちゃめな個性派校長先生がいることでも有名である。

そして今日その学校を卒業した名物生徒がレポート提出のために来ていた。

彼はタイムパトロール警備隊の一員として、開拓時代の西部に駐在していることが多いのだが、母校からその日々の活躍を在校生の勉強の一環のために二二世紀に戻ってきた。相棒のエドとともに。

「そこまでは、いい……、そこまでは」

天然パーマなのか、緩やかなカーブを描く艶やかな金髪を白い手で掻き揚げるネコ耳の女性が校長室でぶつぶつと呟く。

「納得できるかは、別として」

目の覚めるような美人だ。しかも青の短パンのジーンズに黒いブーツとウェスタンルック。黒いハットにアメリカの国旗、星条旗を模した上着を着用。豊満な胸は白い布をさらしにし、隠している。

「あんさん……」

白い、馬型のロボットは困り果てていた。

この無鉄砲に付き合わされて今までいろいろと大変な目にあつた、ピンチに陥ったこともある、そのたびに、あんさん、ほんま馬使いあらいわ、とばやいたことも数知らず。

しかし、直面している問題とは違う次元だ。

こんなときノリが軽いここの校長先生の偉大さを感じている。

自分の相方がこんなに変わっても、面白そうじゃな、と軽く言っている。いろいろ検査し、今はそれらのデータを鼻歌交じりでまとめている。そこまで自分は適応できない。

エドは隣にいる突然変異した相方のため息交じりでこういうしかなかった。

「これからわてらどうなるんやらな……」

幸せが逃げていってしまう。

「こつちが聞きたいわい！」

彼女の閉じられた瞼が開くと、太陽に輝く海のような青い瞳が顕になった。

金髪碧眼の成熟したこの若い女性は数時間前黄色いネコ型ロボットだった。

名前はドラ・ザ・キッド。

愛称はキッド。

おやっさんの影響で江戸っ子節が入っているが西部開拓アメリカン魂は不滅である。

さらし以外の服は元のまま。

ベルトでウエストが調節できたことがキッドスタイルを変えずに済んだ秘訣だという。

この姿になった訳などはただいま寺尾台校長からの返答待ち。

「しかし、あんさん。よく待っていられるわぁ」

キッド本来の性格を考えるといくら学校内にいたからといっても校長のいうとおりここに留まっているとは思えなかった。

「ここが一番人の目に付きにくんだ」

姿が変わってしまってから男性にただ歩くたびに振り向かれていた。

今のキッド……バンキュバンのイケイケの完璧な美貌のおねえたまに振り向かないのは茄子か胡瓜ぐらいだ。

エドにも最初は例外なくじろじろと見られた。

「まったく！ どうなっているんだよー！」

この世の中

「これでも飲んで落ち着いてください、キッド先輩」

五月の男の子のお祝いに飾られる仮面つきの鎧武者が入れた前茶がキッドとエドの前に出される。

「おう、気が利くじゃねえか。バンパイアサイボーグ」

「これでもお手伝いロボを目指していますから」

バンパイアサイボーグ かつてドラえもんズと敵対した、人の精気をエネルギーにする戦闘兵器 あまりにも危険なので廃棄処分となつてしまつたロボットシリーズであつた。

彼の心無い科学者に自分たちを否定された恨みや憎しみは彼を戦乱の時代にまで遡り、時間犯罪者にしたてようとした。

しかし、彼は戦いに敗れ、首だけとなつた。エネルギーがなくなつて死を覚悟した己を救つたのは敵であるはずのドラえもんドラニコフだつた やさしさに目覚めて彼は、心から尊敬するドラえもんズと同じ学校に行くこと希望し、特別クラスで日々勉学に勤しんでいる。

「うまいな」

程よいお湯加減がおもてなし。

「それにしても、お前、グリーンティーとは……日本が好きなのか」
ドラえもん出身だからかもしれないが。

「ええ。ついこの間和菓子の特集が組まれた雑誌を眺めていたらドラニコフ先輩に今度この和菓子を買つてこようかと言われたときは嬉しかったですね」

急にドラニコフに背後から覗き込まれたときはびっくりしたと付け加えた。

「まあ、あいつはそういうやつだから……」

野獣になりきっていなくても普段からドラニコフは気配を断っている。

感知するにはそれ相応の注意力が必要となる。

好きなものの雑誌を読んでいたのなら気がつかないのは道理である。

「まさか、ドラえもん先輩も、ドラニコフ先輩も……今はキッド先輩のように！」

「よせやい、そんなわけないだろ？」

そんなわけがないと、キッドは思いたかった。

こんなわけのわからない現状に悩まされているのは自分だけだと思いたかった。

「では、なぜ親友テレカで連絡を取り合わないのですか、キッド先輩……」

バンパイアサイボーグの言葉が詰まる。

彼が続けたい言葉はわかる。

おそらくは怖いのもかもしれない、ということ。

ドラえもんズ全員が、女の子に変わってしまったかもしれないという事実を知るのを躊躇っているのかもしれないということか。

キッドとて考えたことはなかったわけではない。

女性に変わるとき四次元ハットが光ったような気がした。まるで、自分たちの意思で親友テレカを輝かせるような感覚もあった。だが、誰かがピンチに陥っている気はしない。親友テレカの自分たちは元のネコ型ロボット姿のまま。

青いドラえもんときは変わったのに。

考えたところこの姿は仮初……幻術にでもかかったのではないかとキッドは疑っている。

「心配するな。こんな姿になったのは俺だけかもしれないし。そう、知り合いに見せられねえだけだよ」

花嫁の振りしてヤマタノオロチ退治したとき、ドラニコフには笑われ、ちゃっかり写真を撮られていた（つい最近知った）という苦い思い出がある。

女装した自分の姿にも抵抗があるのに、ましてや今の形状は完璧な女…… ネタにされること間違いなしである。

（それにあのへちゃむくれには絶対見られたくない……）

しかしキッドの願いと裏腹に無常にも校長室の自動ドアが開いた。ドアの向こうにいたのは、黄色いからだで耳の変わりにある大きな赤いリボンがチャームポイントの笑顔が可愛い親友の妹。

「校長先生、この書類に判子を……」

きちんと持っていた書類が地面に落ちる音がする。

彼女の小さい体が小刻みに動き出す。

「ちっ」

この瞬間キッドは　もし、神がいるならば　この運命の悪戯に損害賠償を請求したくなった。

STUDY　ドラミちゃんの職業は大学教授である。

ちなみに、ドラえもんの肩書きは特定意志薄弱児童監視指導員。
豆知識にどうぞ。

「疲れた」

「……」

「おつかれさま、ドラえもん、ドラニコフ」
所変わってのび太の部屋。

しずかにさんざんリアル着せ替え人形として一時間弱のファッションショーを成し遂げた二人にのび太は拍手を送っていた。

しずかブランドにより、ドラえもんもドラニコフもすっかり可愛らしいちょっと個性的な女の子の服装になっている。

ドラえもんは薄い桜色の袖の着物に青い袴姿。大正ロマンの香りが漂いつつもお腹にはドラえもんの証でもある四次元ポケットがくっついてあり、黄色い鈴は彼女の胸元にある。

グデっとしているドラえもんに、常温ですっかりぬるくなった麦茶ではあるものの疲れを癒すには水分補給が一番だろうと、のび太はコップにそそいだ。

「がう……」

自分にもお願いといわんばかりに、ドラニコフも青いマフラーからコップを取り出す。

四次元マフラーなので取り外すわけがなかったのでこれは変わらないのだが、白いブラウスにチャックのミニスカートに黒いソックスという、元の服から一転した服装になっている。

ドラニコフの元の服はしずかが洗って返すといっているのだから仕方がないとはいえ、難儀である。足元がスースーして落ち着かないらしく時折ドラニコフは足の組み方を変えてはそわそわしている。

（それにしても……）

新旧日本の女学生の制服におちついてしまった二人に同情しながらも、のび太は眼福をちゃっかり頂いていた。

すこしだけカメラ小僧の気持ちがあったという。

鼻の先が伸びているのに彼女たちが気づかれないようにのび太は前かがみになりながら机に寄りかかった。

「お兄ちゃん！」

声とともにいきなり机の引き出しが勢いよく開く。

その一撃はのび太のあごにクリティカルヒット！

のび太の目に星が集う。星々は回転し、ちかちかのび太の頭にくるくると円を描きながら踊る。

「のび太くん！」

「がう！」

レスキュー隊も真っ青になるぐらいの予測できない事故であった。

「ご、ごめんなさい。のび太さん……でも、でも……」

今にも泣き出しそうなドラミ。

「落ち着け、ドラミ。お前らしくもない」

ドラえもんは自分の姿が変わってしまったというのを忘れて、ドラミをいつものようにたしなめる。

兄として。

「お、お兄ちゃん……」

ドラミは変貌してしまった兄の姿に驚愕した。

「まさかお兄ちゃんも！」

「え、お兄ちゃんもって……まあ……そうだけど……」

隣のドラニコフもすっかり女の子になってしまっていることを指しているドラえもんは思っていた。

「ところで何が大変、なの？ まさかセワシ君に何か……」

「いいや、それはちがうぞ、ドラえもん。原因は俺たちだ」

ドラミのすぐ隣から、ネコ耳金髪美女がスリッと現われた。むつちりとした太ももに胸は成人指定の。

聞き覚えのあるその声に反応したドラえもんはドラニコフ。

「ドラ・ザ・キッド！」

ぶつきらばうのこの喋り方で一瞬正体がわかった。

どうやら変装には向かないことだけはここで明らかになった。

「ああ。お前らも……」

キッドは自分の姿をじろじろ見られないことにだけは安穩の声を上げるが、顔が赤る。

「どうやら、大変なことが起きちまっている……ことだけはたしか、だな」

周りは緊迫した雰囲気にも吞まれようする。

彼女たちとなってしまったドラえもんズはこれからどうしていくの

か。

とにかく、元の姿に戻るために、原因を突き止めるために、彼女たちはそれぞれの解決策を検討する。

ドラミとキッドは未来に帰って校長先生の出方を待つ。

ドラえもん和ドラニコフはドラメツト三世のところに向かう。

ドラメツトの水晶玉だと原因を突き止められるかもしれないと睨んだからだ。

変わってしまった体を見せるのは恥ずかしいのだが。

「おれは……女性ガンマンに転向する気はねえぞ」

「がう、がう、がうう（ぼくだって女優で再デビューする気はない）」

「

……考えられる最悪な結果だけは阻止するために動く。

そしてここにのびている野比のび太の存在は記憶の彼方に吹き飛んでいた。

第三話 ベストをつくそうしたら、どんとこい、超常現象！（後書き）

次回やつと冒頭で出てきたドラメットに会いに行きます。ここで敵の正体を明らかにするのか、しないのかは…… 第四話で明らかに！ちなみにドラえもんの肩書き、ドラミの職業の豆知識はネットの掲示板で知りました。原作で確認していません。間違っていたら、ごめんなさい

春崎やよいさん、一週間もかかってすみませんでした。そして応援ありがとうございます。ゴールデンウィーク中、頑張ります。

第四話 未来の道具には夢いっぱい、魔法（建て前上）だって使えちゃうぞ！

いよいよ戦闘シーンに突入……後半部分ですけど（汗）

第四話 未来の道具には夢いっぱい、魔法（建て前上）だって使えちゃうぞ！

「僕も行くよ、ドラえもん！」

後頭部打撲によって気絶していたのび太。

朦朧とした意識の中でもちゃっかりとドラえもんたちの話を聞いていたのだ。

「の、のび太君。でも……」

オニキスの瞳が揺れる。

わかつている。優しい君は僕を巻き込みたくないということを。

ドラミちゃんが僕の頭に衝撃を与えたのはただの偶然だけど、ドラえもんにとつて見れば好都合だったのかもしれない。

関係ない、僕を置いていくこと。

でも、僕はドラミちゃんが泣いていたのを朦朧とした意識の中で知ったとき、ドラえもんズに異変が起きているのと知ったとき、いてもたってもいられなかった……心の中は。

「だって、今のドラえもんたちをほっておくことなんか僕には出来ない。親友が困っていたら僕だって手を貸したい。だからいいでしょ、ドラえもん」

痺れていた身体も今はもうこんなに動ける。

それに。

「いまさら、僕をここにおいていけと思わないでよ」

のび太は無邪気で、優しい笑顔でドラえもんを見つめた。
頼っていいのだと。

射撃と悪知恵ならば僕に任せてよ。

あえて言葉にはしないが、のび太の笑顔は語っていた。

「の、のび太くん」

ドラえもん、感動していたのでつい思わずいつもの癖でのび太に抱きついた。

少年が触れるには抵抗があるモノがのび太の顔に密着する。
白くて、丸くて、ふんにや、ふにやゝ。

マシユマロ二つの間に挟まると沸騰したやかんになるのはなぜでしょうか。

子ども相談室に電話してみたいくなる。

「まったくドラえもんは、いつもこうだよな」

「わふう」

どじでノロマで、でも何事にも一生懸命に一途に相手を想う。
入った先々で親友を作る名人。

自分たちもそんなドラえもんに魅了された元一匹狼だった。

キッドはかつて友達なんて甘ったれた関係なんて出来ないと思っていた。
いた。

ニコフも汚れた手ではかなうことが出来ないものだと思っていた。

でも、ドラえもんは……。

「ふ」

すべては昔のこと。

今思い返して思い出に浸るものでもない。

キッドは帽子を深くかぶりなおし、ドラミの手を握る。

「じゃあな。こっちは一足先に未来に戻る。そろそろ校長から何か一言あってもおかしくはないし、な。ドラミ、いくぜ」

「キッドー」

いつものニヒルに笑うキッドがここにいる。

先ほど校長室で悩んでいた彼女の影はもうそこにない。今はもう親

友に、頼りある仲間に残けた使命を、預けられた使命を、互いに全うすることにしたのだ。

「わ、わう！」

ニコフがちょっと待ってといわんばかりにキッドのジャケットを引っ張る。

「お、どうした？」

「わふ、わふ、わふっ」

ドラニコフは青いマフラーから取り出すのは菓子折り。

紙袋から先ほどドラえもんが怒鳴り込んだ店で買ったものだとすぐにわかる。

「バンパイアサイボーグに、だって。あ、そういえばアイツからも聞いたな……それにしてもこのサイズ大きくないか」

ざっと見積もっても十人分くらいある。大きなものだった。

どうやら全種類の和菓子がはいっているものはソレだったのと、どうせ校長やクラスメイトにお裾分けでもするのだろうと量が多いものを選んだらしい。

「へー。随分気に入っているな、バンパイアサイボーグのこと……」

「わふ」

「じゃあね、お兄ちゃん」

「ドラミも、後は頼んだよ」

「任せてお兄ちゃん」

すっかり本調子に戻ったドラミ。

未来に行くこの二人にはもうさほど本題はないだろう。

のび太の机の引き出しに消えた二人を見送った後、ドラえもんは親友テレカを取り出す。

描かれているのは、七体のネコ型ロボット。

相変わらずそこには人間の女の子の姿ではない、元の自分たちの姿が写されている。

「じゃあ、さっそくドラメットに会いに行こうか」

「わう」

「まって、ドラえもん……これ片付けないと、ママに怒られるよ」
「あ」

すっかり忘れていたようだが、しずかからもらったドラ焼きはドラニコフがいるからと咄嗟に押入れにしまいこんだのはいいものの麦茶はでたままであった。

大慌てで皿にのっているドラ焼きをママに手渡し、台所から借りてきたコップを戻すと、改めて、三人は机の引き出しに飛び込んだ。ドラメットがいる、アラビアに行き先を決め、タイムマシンが動き出す。

一方スネ夫宅。

広い庭にシャープで品のいい外見の住宅一軒家がこの家に住む人のステイタスを至極一般的なものではないことを象徴している。

「で、どうしよう……ジャイアン」

「う、うぬう……」

二人の小学生は困っていた。

事故とはいえ、女の子の頭にラジコン飛行機をぶつけてしまったし、かも気絶させてしまったのだ。

外傷がなかったのだけは救いなのだが、ただ、それだけ。

女の子一人をそのまま放置するなどといった非人間的なことはできず、空き地から近く、ゆっくり休めるところと急いで二人は少女をかかえ、スネ夫宅まで走った。

スネ夫のママは今日高校時代のクラスメイトの同窓会で一泊して帰るので家には誰もいない。それも利用してママの使っているベッドに少女を寝かせ、一息つき、現代に至る。

橙色の三つ編みおさげの少女をよくみていなかったが、落ち着いてみると少女の秀麗な顔にはどぎまぎしている。全体的に見れば中国風なのだが、髪の色に合わせた長めの丈の胴衣服の下には黒いスリットスカート。華奢で象牙色の肌にフィットしている。

ネコ耳も気になるのだが、めったに見かけることができない美しい少女であることには違いない。

介抱するために運んだのだが、このままではあらぬ誤解を呼び込んでしまいそうだ。

「ここは、救急車でも呼ぼうか……ジャイアン」

沈黙に耐え切れず、スネ夫は解決策を練りだす。

しかし、どうしてこうなったのかを説明するのは難である。

何処の世界に空を飛んでいた少女にラジコンが当たりましたなんていつて信じてくれる大人がいるだろうか。いつそのこと日射病で倒れていた少女を……だめだ、こんな嘘など言ったところでよい話

がねじれてしまったら、どうしよう。

「ああ、どうすればいいんだー！」

ジャイアンも頭を抱えた。

このままにはしておけないのはわかっている。しかし、自分たちではどうすることも出来ない。

こういうとき、役に立つのは誰だ。

「ど、ドラえもん……」

甲高い声。

少女の唇が動き、確かにその名を呟いた。

「ド、ドラえもんだと」

ジャイアンは自分のポケットの中を弄った。中から出てくるのはタケコプター。これは確か少女の頭についていたもので……。

「もしかしてこの人、ドラえもんの知り合いなのかな……」

それ以外の人が夢いっぱい未来の道具を持っているとは思えない。スネ夫の呟きは的を射ている。

「よし、いますぐドラえもんについてこい、スネ夫！」

「ラジャー」

スネ夫は喜んで家を飛び出した。

今ほどジャイアンのその一言が嬉しいと感じたことはなかった。

そしてスネ夫の家でとどまることになったジャイアンの顔は逆に強張っていた。

（スネ夫に……留守番、させればよかった……）

ジャイアン、少女を介抱するという沈黙の時間との戦い、延長突入決定。

曲がった時計が無数に散らばる空間を抜け、行き着いた先は銀色の砂山。

「あれ、夜？」

闇に溶け込んだ空を見たのび太が発した第一声はソレだった。

しかし、静寂だと思っていたここは無数の閃光が爆音とともにけたたましい戦場と化した。

「な、なんだ！」

のび太が声を上げるとともに一つ大きな光がこっちに向かってくる。「危ない！」

咄嗟にドラえもんはポケットの中からヒリマントを取り出し、光の玉の軌道を変えた。

何処に打ち返すか、考えていなくやぶから棒に投げたソレは、地面につくとともに 巨大な火柱を立てた。

「うわぁ」

火柱による爆風がドラえもんの体を浮かせる。

「う、うそ」

鳥肌が立つ。

のび太はかみ合わないがたがたいう歯を噛み締めながらやっとのことで声を振り絞る。

「の、のび太く……」

いい終わらないうちに、ドラえもんは爆風に攫われた。

「ど、ドラえもんー！！！！！！」

のび太は絶叫した。

ロボットの鋼鉄の身体であつたならば……重い体重であつたならば……こんな風ごときでドラえもんが……。

砂埃のせいなのか、のび太の目に一滴の心の汗が溢れてこようとした。

しかし、無慈悲な暗闇からの攻撃がおさまるわけがなかった。

「がう！」

ニコフが何かを察したのか、跳躍する。

普段の大人しいドラニコフでは考えられない、身体能力。

「なにが、あ！」

火柱の向こう 彼女の向かう先には無数の弾丸の姿がのび太の眼鏡のレンズに映る。

「がぁぁぁぁぁぁ！」

青いマフラーが靡く。

空に浮かぶ月のように光る瞳が闇夜に数多の光の線を描く。

人間の女の子になつたとしても、ドラニコフの爪先から迸る、猛ス

ピードによる風の摩擦によって目をつけた弾丸をなぎ払っていく。
一つ、二つ……。

彼女は月をバックに、華麗ではあるものの、その獰猛な獣のような鋭い刃を、無機物なものたちに容赦なく打ち付けていく。
縦横無尽とはまさにこのことを言うのかもしれない。

「す、すごい……」

ドラニコフに何処からともなくやってくる弾丸を任せることにし、のび太は急いで、ドラえもんが飛ばされたほうに走る。

砂に、自分の重みによって沈ませられ、大変走りづらかった。
でも、のび太は走った。

親友の無事を確かめるために。

バクバクする心臓を抑えながらも、懸命にドラえもんを探す。

「あ」

青い髪の乙女が銀の砂山にめり込んでいるのが見えた。

こんな珍しい髪の色をした女の子は しかも袴姿の 該当する
のは一人しかいない。

口に砂が入り込んだらしく、吐き出してもいる。
意識がある証拠。

「ど、ドラえもん！」

のび太は大急ぎでドラえもんの側に行こうとする。

しかし、靴に砂が大量に入り込んだらしく、先ほどからどんどんス
ピードが落ちていた。

後何歩足を進ませれば、君に触れられるのだろう。

ドラえもんを思ったよりも早く見つけたことによる安堵からかのび
太に隙ができた。

ドラニコフのスピードの逃れたのか、ただの偶然か風による悪戯か
……一発の弾丸がドラえもんの方に、のび太の後ろを通り抜けよう
とする。

「え」

弾丸によって捻じ曲げられた空気が砂を、のび太の肌を鑢のように削ろつと襲い掛かる。

ゴゴゴゴゴゴ。

接近する火薬を詰めたもの。

のび太が振り返った瞬間見えた無機物。

彼女が現われなければこれが最後の光景になっていただろうか。

「アラブカタブラ！」

その言霊一つで、弾丸が一瞬にして移動する。

どっかその辺で火柱がたった。

「え、ええええ」

のび太がもう今日で何回目かわからない絶叫を上げる。

あまりにも大声を出しすぎているので、明日の朝喉が枯れていないか心配である。

「口の中に砂はもうないであるか、ドラえもん」

先ほどの呪文を唱えた人物を思われる少女の声。

今時珍しい腰まである長くて艶のあるピンクの髪をサラサラと揺らしながら、彼女は倒れているドラえもんの側にやってきた。

「その声は……ドラメット三世」

「ひさしぶりでござるな」

ドラメットの紫水晶のような瞳がドラえもんのオニキスの瞳に写った。

第四話 未来の道具には夢いっぱい、魔法（建て前上）だって使えちゃうぞ！

結局、敵の影しか見えませんでした。早めに関きをアップするので見捨てないでください。

愛媛蜜柑さんの感想にも書かれてしまいましたが、ドラえもんズ、全員出ていないので、この四連休、目標は全員一度出してしまつてにしました。

あ、あと、ドラパン、次回は再登場します。冒頭部分でドラメット三世と一緒にしたので。

第五話「朝の占いを楽しみにしている人は多いに違いないのであります」(前書

いまさらながら、ドラドライレブンはなかったことにしてください。
つまり、スネ夫、ジャイアン、しずかはドラズとは初対面。

第五話「朝の占いを楽しみにしている人は多いに違いないのであります」

こういうとき、今日の運勢は何だったのか見ていなかったことを悔
いる。

大方、僕の今日の運勢はタイミングが合わないことが多いけど、き
つとなんとかなる、みたいな励ましの言葉付きのコメントだったに
違いない。

そうであつたに違いない。

でなければ……ドラえもんとび太が出かけてしまっているなどと
いったことになるわけがない。

(ど、どうしよう)

のび太のママからのび太はドラえもんとともに出かけたことを聞か
されて 途方もなく、重い足を動かしていた。

ジャイアンがソレで納得するわけもないし、あのオレンジ髪の女の
子のことだって謎のまま。

あ、なんか背中から汗出てきた。

このまま家に帰ったところで、ジャイアンに八つ当たりされるのが
目に見えている。

スネ夫の今の脳裏にはどうしたらジャイアンの怒りが和らぐか、だ
いくら考えてもドラえもん意外にいないような気がしてならない…
…だから、ドラえもんは今いないから。頼れないから。

スネ夫の顔がますます青くなる。

「あら、スネ夫さん」

女神の声かと思った。

しずかが、声をかけてきたのだ。

丁度スネ夫はしずか宅を通り過ぎようとしたのだ。

「しずかちゃん……あれ」

しずかの手に毛皮の帽子。

今の季節ではありえないと思った。しかも、よくよく見ると物干し

台にはなぜかロシア民族衣装が……サイズもどうみてもしずかちゃんを着るようなものには見えない。

「どうしたの、それ」

「これね、ドラニコフさんというドラちゃんのお友達のものなの」
それでもなぜしずかがドラえもんの友達の服を洗濯したのかまではわかるわけがない。

しかし、スネ夫の第六感が何か警告しだす。

しずかとこのまま話をしたほうがいい。

たしかにこのままではジャイアンに怒られるだけだし、少しでも気を紛らわせたい気持ちもある。

それに女の子が声をかけてきたのだ。ソレを無碍にするような男はよほどの朴念仁である。

でもいやらしい狼のようながめつさをもってはいけない。あくまで紳士的に。

「じゃ、今そのドラ……ニコフだっけ、は何を着ているのかなあ」

「ブラウスにスカートよ」

「へ？」

なんか、かかっている服と天と地の差がないだろうか。

そしてしずかの言葉から意外な事実が判明する。

「ニコフさんね、女の子になってしまったっていつていたわ。ドラちゃんもただけだね」

「しずかちゃん、その話詳しく教えてくれないかな。それも、僕の家に来て言ってくれないかな」

一縷の望みが見えてきた。

褐色の肌を隠すのは緑色の布。

エキゾティックな美人になってしまったドラメット三世。

「随分変わったね、ドラメット」

「ソレはお互い様である」

大正ロマンとアラビアンナイト。

元のタヌキもといネコ型ロボットの面影はつけていた四次元ポケットやアクセサリーぐらいだ。

「それにしてもドラメット、胸、危くない」

「ドラえもんはきっちり服を着替える時間があったのであるな……」

実はドラメットの主にボディラインを隠しているのは部屋の机のテーブルクロスだったりする。

「それにしてもドラメット、どうしてこんなことになったの」
降り注がれる弾丸。

ニコフが応戦しているとはいえ、原因がわからないことには対処の仕様がなない。

「そのことであるが、ドラえもん……」

紫水晶の瞳が俯く。

思い出すのをあえて封じていた記憶なのだが、今はそんなことで躊躇する余裕なんてない。

又同じ悲劇を起こしたくはないのだから。

ドラメットの重い口が開かれる。

「我輩たちを……また、操ろうとする……」

しかし、その先の言葉は……ドラメットの首元に光る刃によって遮断される。

「くっ」

ドラメットの数本のピンク色の髪が銀色の刃によって宙に舞う。

「え！」

その剣をみて、ドラえもんは目を疑った。

「ドラメット……！」

のび太の悲痛な声。

「安物の推理小説みたいに急に現われないでよ！」

……てっきりのび太は新キャラだと思っていた。

しかし、ドラえもん、ドラメットはわかっていた　この剣の持ち主を。

何度も自分たちが事件に巻き込まれたときに見てきたから、戦闘を供にした親友のものだから。

「お主もいたのであったか……まったくもって想定外である……」
天然パーマなのか、あちこちが跳びまくる長く赤い　情熱をそのまま髪に表したような女性がドラメット三世の真後ろにいた。

ドラニコフは信じられないという顔でいた。

狼のように長い尻尾も萎縮している。今まで弾丸を切り裂いていた人物とは思えないくらい、ニコフは動揺していた。

せっかく弾丸を発射していたところまで来たというのに　ここを抑えなければいけないのに　ドラニコフの殺気がみるみるとおちていく。

「あれれれ。君、どうしてそんな悲しそうな顔をするの。ここは怒るのが普通じゃないかな」

たしかにその声の主のいうとおりだ。

理不尽に、危うく命を落とす寸前にいたった友もいるというのに……でも、ドラニコフはその相手に牙を向けたくなかった。

「がっ……」

今にも泣きそうな目が向ける先には弾丸をこちら側に蹴り投げている人物。

ニコフやドラえもんと比べると身長が低く、黄緑色の髪を団子のように二つ結び上げ、小顔なのに大きな瞳という顔立ちのため幼い印象を与えるネコ耳の乙女。

サッカーボールを模した首輪をし、サッカーの丈の短いユニフォームにミサングを両手首につけた、いかにもストライカーといったところだろう。

だから、すぐわかった。

「ドラ、リーニョ……」

気づいたから、気づいてしまったから……お願いだから、正気に戻ってよ！

「くっわおおおおおおおおおん！」

ニコフは祈るように虚ろになった瞳の友、ドラリーニョに向かって吼えた。

「エル・マタドーラ、お主は既に操られていたのであるな」

ぱらぱらと数本、新たにドラメットの髪が剣によって切られた。動くなと牽制しているのであろう。

ドラメットの言霊によって彼の操る魔法道具が瞬時に現われるのを警戒してのこともある。

「え、あの人、マタドーラ!？」

のび太は思わず、指を指す。

いわれてみれば、角が生えている。

胸や乳、尻をすっぽり一ミリも差異なく被さっている。スペインの闘牛士の派手な服装もしている。

「ああ、たしかにおれはエル・マタドーラだ。でもよ、なんでてめえ、おれと親しそうに話してくる?」

「う、僕のこと忘れちゃったの」

「忘れちゃったのって……あったことあんのか、ああ?」

ムチムチプリンプリン（死語）のボディは小学生ののび太には刺激的で……もとい女性として美貌である。美しいことは正義である。

だが、一点だけ　そう彼女の濁った瞳は頂けない。冷徹な表情も……一点だけじゃないジャン。

それに視線も敵意しか感じない。

スペインで怪傑ドラとしてヒーローをしているマタドーラと思えなかった。

しかもあんなふうに睨まれたら……金を貸してくれといったらそのまま財布を出してしまいそうだ。

「一体何がおきちゃったの!」

のび太は大混乱した。

ドラメット三世は刃によって動けない。

ドラえもんはショックのあまり動けないし。

そうこう悩んでいるうちにのび太のすぐ横に何か黒いものが飛んできた。

弾丸ではないらしく、砂にただ埋もれていた。

しかし、かすかにソレは動く。

「がう……う」

ドラニコフの声。

どうやら砂の絨毯に落ちてきたのはドラニコフ。

で、ドラニコフも疲労困憊で動けな〜い！

……ピンチだ。

どっからどう見てもピンチだ。

よくフルーツポンチをフルーツピンチっていう低学年っているよね。

……まったくもって関係ない。

どうでもいいことだけしか頭に思い浮かばない。

それぐらいのび太は混乱していた。

逆に落ち着き払っていたのは、以外にも刃を向けられているドラマットだった。

「これで、確信できたであゝる……」

「喋るなよ」

マタドーラがドラメットの首筋まで剣を進ませようとした。だが！

「くっ！」

マタドーラの剣を持つ手が痺れてきた。

彼女の手一枚のタロットカードが刺さっている　　剣を高々に持ち、椅子に座った　正義のカード。

ドラメットは素早く正義のカードをマタドーラの手からやや斜めに引っこ抜く。

「！！！」

激痛がエルを襲う。

その隙が、ドラメットが力自慢のエルから逃れる手立て。

「マハラージャ！」

ドラメットのポケットから魔法の絨毯が飛び出してくる。

絨毯は主に向けられていた剣を勢いよく跳ね飛ばし、ドラメットを中央に乗せる。

「皆、掴まるでござる！」

少し大きくなったドラメットの手には皆それぞれ掴まって絨毯に飛び乗った。

「こつちだ、ドラメット！」

漆黒のマントも絨毯に降り立つ。

「君は……」

紫色のネコ型ロボット。

シルクハットと金色のスティックを持つ、見るからに怪しいロボットではあるもの。ドラメットとは旧知の仲なのであろうとのび太は思った。

現に。

「助かったである、ドラパン」

「なぐに、これぐらい。天下の大泥棒には朝飯前さ」

ドラメットは危機を脱してくれたカードをドラパンに手渡していた。

「ドラパン、どうして君が？」

「そのことはだ、ドラえもん。今説明できるものではない……これからお前のところに逃げるぞ。タイムホールが丁度空いているからなのび太たちが出てきた穴から、絨毯が飛び込む。」

ドラえもんのタイムマシンを引き攀れ、一同はのび太の机の引き出しへと空間を繋げた。

第五話「朝の占いを楽しみにしている人は多いに違いないのであります」(後書

と、まあ、無事ドラパンは再登場。これから、よろしくね。

あと、名前が出てきていないドラズは王ドラだけとなりました。が、もう正体がバレバレでしょうが……くれぐれもいわないように。作者からの切なる願いです。

あと、ドラリーニョとエル・マタドーラを操っているモノも想像がついてもまだ、秘密にしてください。

第六話 そろそろ名前を出さないと存在忘れられるよね（前書き）

やっと主要人物が全員で揃いました。長かった……すっごく長かった……気がついたら、もしかして、二万文字超えている！

……本当に呼んでくれている方には感謝しなければなりません。

長いこの文章を読んでくださってありがとうございます。

第六話 そろそろ名前を出さないと存在忘れられるよね

私は夢の中にいます。

身も心も浮遊しているとしか感じませんが、根元がどこかに繋がっている安心感……身体は今すやすやと眠っていて意識だけがあるから、ここは夢であること。ぼんやりした頭脳回路でもそれぐらいはわかります。

どうしてわかるのかと問われるとソレはもう呼吸をするがごとく自然に、としか答えられません。

夢なのだから今ここにある風景は現実的には何の意味もないのでしよう。

そして今、私はただ、雲の上にいるだけです。

フロイトあたりならば私がこの夢を見ている理由を知っているのかもしれません、心理学は私の分野からかけ離れています。

それにしても何ともさびしい光景なのでしょう。薄く透明な青色の空には太陽も月もなく、私の歩く雲以外の雲、星空は見当たりません。昼でも夜でもどちらでもかまわないといった、夢にはよくありがちといえはありますが、ただ、私の心にこみ上げてくるのは孤独感。

修行や、勉強中一人で黙々と身体と心を鍛えているときに感じるものとは違い、あまりにもここは暗すぎる。

牢獄。

その言葉の方が似合いでしょう。

私はそれでも行くあてもない夢の世界になぜか足を進ませる。

自分の意思、ではないはずなのに。

すると、大きなお城が見えてきました。

レンガ造りの、坪何百も有りそうな立派なものだとわかります。

でも、ナニから怪しげな草木が多い茂り、すっかり荒れ果てた城

前に行った、ドラシルバニアに似ていると思いました。あれはドラニコフに騙され、映画の撮影でしたが、ホラー要素も入っていたため怖い思いもしました。ドラリーニヨにいたってはもう泣いていましたね。

ドラメットの手を握り締め、びくびく震えて……人為的なものだと知ると懲らしめるといつていつもの調子に戻って……畏に対して、私は暗号を解読したのはいいのですが、そのまま暗号どおりに実行したら悲惨な目にあうというのに、学習能力がないドラリーニヨはもの見事にひっかかりましたね。おかげでボロボロですよ、私。後日、完成された映画を見たとき、私が解読するシーンはカットされてしまったが、あまりにも予想通りに畏にかかった我々は……滑稽でしたよ。

劇場は大爆笑。

子どもにも、こんな間抜けなことできないな、とか賞賛されました（泣）。

「くぴーっ」はその年、流行語大賞にノミネートはされました（笑）。

結果大ヒットとなり、出演料といって皆揃ってドラニコフに食事を奢らせました（当然）。

……でも、あれは監督の趣向によって作り上げられた城。

早くいつてしまえばエンターテイメントで、実物する建築物、人物、団体には一切関係ない、フィクションです。

目の前にたたずむ、この城は誰の思いで築かれたのでしょうか……。

え。

今、私はおかしいことを思ってしまった。

これは私の夢ではなかったのでしょうか。

まるでこれは見せられているとしか……考えられないではないでしょうか。

混乱する私。

増してくる不信感。

私は押し寄せてくる恐怖感に城に背を向けました。

早く、この城から遠ざからなければならぬ。

そう私の頭が警告してきます。

ネコ型ロボットの、短い足だろうとそれなりの速さなら……。

私は走り出しました。

城が遠ざかっていく……視界から消えるまで、私は走り続けた。

でも、私の長い尻尾を誰かが踏んづけてきたのです。

「ムギユ」

反動で私は見事に転ぶ。

顔面がめり込みました。

「イタタ……誰です、こんなことをするのは！」

真っ赤になった顔で真後ろを振り向く。

そこにいるのは、赤い色のネコ型ロボット。牛のような角を生やした、私の親友。

「エル・マタドーラ！　なんです、喧嘩をウリにきたのですか！」
学生時代から何かにつけて私を闘牛に見立て、ヒラリマントの練習に来ていました。

私も、拳法の練習台として彼を重用していたのでどっこいどっこいだけです。

「今はあなたと戦う暇はありません。エル、あなたも逃げますよ」
「逃げるって、どこにだ？」

「こんな不気味な城からに決まっています！」

私はエルの手を引っ張ります。

しかし、エルは微動もしません。こんなときにこの馬鹿牛は……なにをドラえもんズ一の力持ちを気取っているのですか。

「エル、早く逃げないと、また操られてしまいます！」

え！

私はまたおかしなことを思っている。

操られる、誰に、ですか……。

忌々しげにエルの口元が歪みました。

「……つれないな、王ドラ」

「なに、を、ああ！」

私は、エルの目を見てしまいました。

熱い、あのエルにはありえない冷酷な瞳。

そしてその瞳の奥にはどんよりとしたまだ視界に残るあの城のように虚ろで、嫌な気。

陰。

「のび太にあっている、もしくは彼の時代に來た者たちはここからではもう手出しはできない、とあの方の言う通りだな」

「本来の記憶、性格を捻じ曲げることはもうできないということです
か！」

「いや、あれはおれたち親友テレカを使うドラえもんズ一同があの方についていていないだけらしいぜ」

「操られている状態では違うとは言い切れないでしょうが！」

「それもそうか。やっぱり、王ドラは頭がいいな」

エルが笑う。

しかし、その顔は私がいつも知っているものとは違い、邪悪に満ちている。

認めたくはなかったのですが、彼はもう……。

「じゃあな、王ドラ。次、あう時はのび太を殺すか……お前の身体をずたずたにして、あの方のいいように組みなおしてやるよ」

「させません！ 私こそあなたを……」

エル・マタドーラに啖呵を切ったとき、私の立っている場所が揺らぐ。

橙色の髪 of 乙女がびくりと肩を震わせて、目を開く。

動きにあわせて、彼女の上にかかっていた布団がずれる。

「……」

「お、起きた！！」

見つめあうこと数秒。

ジャイアンは安堵する。

彼女が誰なのかがわかる。

しかし、彼女の目はきつかった。先ほどまで戦場にいた兵士のように磨かれた、目。

流石のガキ大将も怖じ気づく。

「えっと……すみませんが……」

少女は言いかけて、黙り込む。そしてきよろきよろとあたりを見渡

し、危険がないのを肌で感じたのか、鋭かった目が温和に変わる。
この少女の本来の顔なのだろう。

翡翠の美しい瞳がジャイアンの目を引く。

「私の名は王ドラ。のび太君とドラえもんが今どこにいるのか知り
ませんか」

ドスン、ガタン。

二階から騒がしい音がする。

また、のびちゃんが何かやっているのかしら。ドラちゃんがついて
いるというのに、まったくもう。

「のび太、静かにしなさいー!」

「はい、ママ。ごめんなさい」

二階の階段から響く息子の声。

あら、今日は随分素直ね。

それならいいか。

野比玉子はすぐに見かけていたドラマの再放送に目を向ける。

「ふう。みんな……」

机の引き出しからごきげんよう、ではなく満員電車のホールダツシ
ユなみにどやどやと出てきたのがまずかったのか、ママに怒られた、
のび太一行。

小学五年生一人に、ネコ型ロボット一体、あと、年上のお姉さまが
三人。

少々、郊外の庭付き一戸建ての子ども部屋では密度が濃くなってい
た。

「まずは自己紹介から始めよう。私の名はドラパン。未来のフラン
スで怪盗をしている」

「え、僕、野比のび太。二十世紀で小学生をしています」

互い、初対面なので挨拶をし忘れていたことに気がついた。

そんな、悠長に紹介しあう暇はなかったけど。

のび太という名を聞いたドラパンの目が光る。そしてなぜか血走っ
ている。

何か悪いことを言っただろうか。

失礼なことをした記憶もないけど……フランスっでいていたし日本人の僕ではわからない何か不可解なことをやっちゃったのかも……。ドラパンの目が据わっている。

「で、のび太。お前はもつと早くドラえもんズに会いにいかなかった……ドラメットも危うく操られるところだったのだぞ！」

「えっ、それって？」

「まさか……知らないとかいうのか」

ドラパンがさらに睨む。

「なんのことだかさっぱり……」

のび太はおろおろする。外見はたしかにファンシーなネコ型ロボットののだが、鋭い眼光は並のものでは出せない。

「まつである、ドラパン。のび太殿は何も知らないである」

紫水晶の瞳が開かれる。

「それに、皆にもまだいつてなかったである。敵の名を……ビツク・ザ・ドラが復活したことを！」

「「な、なんだってー！……！」」

一緒に暮らしているからかシンクロ率が高いのび太とドラえもん。「があう……」

一方でドラニコフは塞ぎこんで、やっぱりと声を漏らした。
あの、ドラリーニヨは……あの時と同じ瞳だったのだから。

高い天井に豪華なシャンデリア、南側は一面のガラス窓、白い壁には無垢板の床、赤いカーテンに黒い皮のソファに腰をつけている大柄なネコ型ロボット。

常に邪悪の笑みを絶やすことなく、赤い血のようなワインを硝子のグラスに注ぎ、飲み干す。

「うまいな……」

こんな上手いワインは久しぶりだった。

過去の冴えない小学生とドラえもんズに破れたとき、薄れる意識の中で死を覚悟したのに　今はまた昔のように、否それ以上の昂揚が彼、ビク・ザ・ドラの中に湧き上がってくる。

黄緑色の乙女が空になったグラスを受け取る。

「ビク・ザ・ドラ様、これからどうします。僕、暴れ足りない」
子どものように無邪気に甘えた声でビク・ザ・ドラに懇願する、
ドラリーニヨ。

「僕、あの逃がしちゃったお月様のような狼か、草木のような魔術師ともっと遊びたい」

邪悪な意志に支配されてしまったといっても、もともと何も考えていない無垢な子。早く、身体を動かしたいのだろう。

ビク・ザ・ドラがいやらしく笑う。

「まあ、さて、ドラリーニヨ。もう少しお前の友達をわが城に入れてから……」

「それはもうできないみたいだぜ、ビク・ザ・ドラ様」

赤い髪の乙女が髪をくしゃくしゃにしながら部屋に入ってくる。

「もう、のび太ってガキの時代に行ったらしい。さつき、橙色のネコ型ロボットを引き寄せきれなかった……この調子だと他の奴らはもうこの城に近づこうともしないだろうし、な」

エルはニヤニヤと笑いながら、赤い舌でチロリと果実のように瑞々しい唇を舐める。

禁断のみを今まさに食べようとするイブに匹敵する墮落。

「そうか……残念ではあるが、しかたあるまい……」

しかし、言葉と裏腹にビク・ザ・ドラの瞳もまた妖しく光る。

立ち上がり、彼の巨体でできた影が乙女達を覆う。

期待に満ち足りた症状で見上げるドラリーニヨとエル・マタドーラ。

二人は待っていたのだ、彼からの、命令を。

「では、第二弾と、計画をうつすか」

命令が下った。

より多くの人々を奈落に誘う産声が今まさに発せられたのだ。

第六話 そろそろ名前を出さないと存在忘れられるよね（後書き）

一部、二部とか分けていたら、一部終了ですね。

ドラえもんズ、無事全員登場。でも皆まだばらばら。

いつになったら皆揃うのか……それはまだ、ひ・み・つ。

まったく考えなしというわけではありませんよ……え〜と、多分。

第一部は別名、登場編。で、第二部は、学校編……になる予定。学校とは何処の学校でしょうね……そしてビック・ザ・ドラの今後の動向は！

では、次回に続きます。

第七話 一言しか言わないのに意外と美味しい役が多いよね、この子達（前書き

第二部スタート。

しかし、ぐたぐた。

そしていつもよりも長いです。

第七話 一言しか言わないのに意外と美味しい役が多いよね、この子達

「まだ何もないのかよ」

「あんさん、ソレ聞き飽きたわ」

「キッド先輩、私、お茶入れなおしましょうか」

「バンパイアサイボーグさん、いいの？」

ロボット学校校長室の一角でドラニコフからもらったお茶菓子と友にお茶をすすりながら校長先生を待っている。

気を紛らわすために、雑談も多い中、キッドはお茶がなくなると途端に現状に疑問の声を上げていた。女性になって不安なのはわかるが、受験シーズンの受験生のごとく言葉にするのが、おちたらどうしようというような鬱台詞ぐらいしかない状況は周りにも少なからず苦痛を与えていた。

ドラミも慣れてきたのか適当にあしらうようになってはいるのだが、沈黙に耐え切れずバンパイアサイボーグはしきりにお茶を煎れている。

同じものではなく、変えている。

緑茶から、玄茶、麦茶に昆布茶……レパートリーが多くて助かっている。

次は玉露にするといっている。

キッドもただじっと待つ性分ではないのは自覚しているので、頼む、と呟いた。

「はい」

バンパイアサイボーグは水屋へと向かう。

玉露だと煎れる時間がかかるのですぐには戻ってこないだろうちよっとスキップがはいつていたのはこのさい気にしないでおう。

「しっかし……おせえな校長……」

キッドはマスタードとケチャップをかけたドラ焼きを黙々と食べる。もちろん大量にかけているので、見る人をアッと驚かすだろう。しかも、今のムチムチ美貌のカウガールでは全国の青少年の夢を潰しかねない。

「ねえ、キッド」

ドラミはキッドの金色の髪に触れてきた。

長い髪はドラミの手をふんわりと包む。

「どうした、ドラミ」

「この長い髪の毛では動きづらくない？」

「あ……」

言われてみれば、食えるとき不便だなとは感じていた。

しかし、がさつなキッドはどうする気もなく何も考えずに髪をそのままにしていた。

「そうだが……」

そういえばドラえもんは髪の方を結んでいた気がする。

たしか雅結い（俗語）。

日本のアニメに詳しいキッドなのでそんな俗語が出てきてしまう。

「やっぱり。キッド、ちょっと、じつとしていて」

ドラミはポケットの中から赤いリボンを取り出す。

慣れた手つきで髪を一つにかき集め、シュルリと抑える。

口元を邪魔していた髪がなくなり、スツキリする。

「お、こりゃいいな」

キッドの金髪にシツクリくる、赤いリボン。

「サンキュー、ドラミ」

ドラミもにつこりと微笑む。

キッドはただ邪魔な髪が口元や首筋にかからないので喜んでいと思うのだが、ドラミの顔が少し赤らんでいる。

「青春や……」

馬はそのほほえましい光景を見ながらまだ残っている昆布茶をすすめるのだった。

その平和も後数分にはがらりと変わるというのに。
どらら、という可愛らしい声が、ロボット学校では珍しくもない
声が、まさかこんな事体を生み出すとは思わなかった。
そして、次々と。

「す、すみません。まだこの道がよくわからないもので」
まだだるい身体を無理矢理起こし、王ドラはジャイアンに案内され
ながらスネ夫宅を後にしていた。

「いいって」

そもそもラジコンを当てて目の前の美少女を気絶させてしまったジ
ヤイアンは後ろめたい感情がある。

「それにしても、本当にドラえもんと同じネコ型ロボットなのか？」

「ええ。本来は……」

橙色の髪に映える翡翠の瞳。

ネコ型の名残でネコ耳はあるものの、普通の年上のお姉さんと変わ
らない。いやそれ以上に可憐で魅力的な女の人。

ふとリルルを思い出す。

ジャイアンが今までであった中の女性で今の王ドラに一番近いのは彼女だった。

夜の十時に会った、謎深き少女。みたときはあまりの美しさにし
ばし、ボーとしていたものだ。彼女の正体はロボット惑星メカトピ
アが、前線基地建設と地球の調査のために地球に送り込んだアンド
ロイド。敵ということでジャイアンは彼女に酷いことを言ったこと
を今でも悔やんでいる。

メカトピアの圧倒的な軍事力に打ち砕かれ、ボロボロになったあの
時、急に敵が消えたので歓喜はしたが、しずかとミクロスから彼女
の最後を聞いたときから 天使になる 彼女の最後の言葉
涙が溢れた。

のび太がリルルと見たといったときは真っ先に彼女に謝りたかった。
しかし、のび太に手を振っただけで自分のところには着てくれなか
った。もしかしたらのび太の幻想だったのだと疑うこともあったが
……。

本当の天使になったのかもしれない。

今もこんな自分を彼女は微笑みながら観ているかもしれない。
リルルと同じ翡翠の目がジャイアンを捉える。

「信じてもらえないのはわかっていますが、私は、本当に」

王ドラの震えるような声。

「信じるさ」

タケコプターを持っていた、からではない。

王ドラはドラえもんの親友であること、今彼らに起こってしまった
怪奇現象。

どうしてこんなことになったか、まではわからないけれども、王ド

ラがそんな嘘を言うようなタイプとは思えない。

それに。

「私は早く、のび太君に会わなければ、ならないのです、手遅れになる前に！」

泣きそうな目で見つめられた。

彼女はまだ目覚めたばかりの身体で無理矢理動かそうとした。

案の定ベッドから転がり落ち、つい先ほどまでジャイアンは一人で歩けるまで王ドラを支え、のび太の家まで少しでも早くいけるようにしたのだ。

「あ、ジャイアン！」

スネ夫の声。

分かれ道でなぜかしずかと一緒にいる、スネ夫を見かけた。

「スネ夫、のび太とドラえもんはどうした？」

確か自分はスネ夫にのび太とドラえもんに会うように命令した筈なのに。

「そのことなんだけど、ジャイアン……ちょうど留守だったんだよ」
「なにー！」

ジャイアンの眉間に皺がよる。

「ちよい、ちよいまって」

「待つかー！」

ジャイアン怒りの鉄拳が今振るわれようとしていた。

「そこで関係あるような話があるんだって！ で、殴らないで！
ドラえもんとそのドラ何とかが女の人になったんだって！」

必死になっていいことをいう、スネ夫。スネ夫が目撃情報を持つしずかを連れてきたことも付け足そうと狐のような口が素早く動こうと頭が命令を下したときだった。

グワシャン。

大きな音がする。

音のするほうをみると、中華娘。

大きなネンチャクが道路に無造作に落ちている。どうやらそれが落ちた音だ。

「す、すみません……」

私もまだまだ修行が足りませんね。そんなことぐらいで平常心を失うとは。

顔も青くなってしまったようで、のび太の級友というたけしさん、スネ夫さん、あとしずかさんに私はとりあえずドラえもんが住むのび太君の家に連れて行ってもらうことになりました。あとは、入れ違いにならないように待っていたほうがいいとも言われましたね……。

王ドラのほうはすっかり、のび太の級友と顔見知りになっていた。

ドラマット三世によって、衝撃的な事実をしったのび太。

「ビック・ザ・ドラが復活するなんて……どうして……」

のび太はたしかにイージーホールにいた悪の親玉であるビック・ザ・ドラを倒した。

幹部たちの相打ち攻撃などで倒れたといえども心は一緒。ドラドラセブンとの友情パワーの勝利だった。自由の女神とのび太の願いにより皆復活し、元の世界に戻れた。

ドラえもんズとの出会いであつた。

「それはわからないであるが……」

「どらら〜」

「へ」

かわいらしい声が、ドラマットの四次元ランプから聞こえてきた。そしてそこから水晶玉がひとりでに押し出される。

「すっかり忘れていたである。もう安全だから皆出るである」

「どら、らつた〜」

了解というのか、ランプとドラマットの腹部にあるポケットからミニドラたちがぞろぞろと出てくる。

「ドラリーニョのミニドラたち？」

「……どらら〜」

ドラえもんの声に反応し、一斉によつてくる。三体しかないミニドラが。

「ドラリーニョがビック・ザ・ドラに操られる前に我輩たちに連絡するために遣わしたのである……後のメンバーは自分たちと同じく、ドラズの誰かに遣わせたのか、ドラリーニョと供に今はビック・ザ・ドラに仕えているかのどちらかである」

「がうう……」

ドラニコフの声。

覇気のない、憂い。

予想できたことなのに……。どうしてだろう。知っていたことの筈なのに……。なぜあえて聞くと堪えられないものがあるのだろうか。

「まだ、そんな声を出すではないであゝる……」

水晶玉に写る紫色の瞳。

神秘的で幻想的な反面、残酷な現実を見据えた悲しい色を出していた。

「女にし、我々を狙っているのはたしかではあるが、のび太殿に関しては……命を狙われているのであるぞ」

「えー、僕が」

何でというまでにドラパンの鋭い目がのび太に突き刺さる。そういえば、ドラメットに早く会いに行かなかったことにおこられたような……。

「水晶で見たところ、我々のはのび太殿の鼓動によって蘇ったためなのか……のび太殿と出会うかもしれないのはのび太殿がいる時空にいれば、ビック・ザ・ドラに操られることはないと出たである」

テンションを高めに水晶を掲げて言うドラメット。

その水晶を持つ手には鑢で傷つけられたのではないかと疑ってしまいうぐらい、細かい傷がついていた。

すぐに襲撃を受けたドラメットはのび太の時代に行くことが敵わず、弱々しいこの身体で頑張ってきたのだ。

「そうか、それでドラパンは僕がみんなに出会っていなかったのをおこったのか。すぐに会いに行かなくてごめんね、ドラメット」

「いやいや、知らなくて当然である。我輩もドラパンがいなかったらここまで機転が利かなかったのであるから」

おちこぼれセブンの名も伊達ではない。

「ありがとうである、ドラパン」

「ふん。私はお前が操られる姿なぞ見たくはなかったから協力したまでだ」

元は同じネコ型ロボットといえども今はミステリアスな美女に微笑まれたので少しドラパンの顔が赤かった。

「それじゃ、僕たちはのび太君を守るしか今のところいい手段はないってことなの」

ビック・ザ・ドラがどこにいるかわからないうちは、攻撃にまわることはできない。

「そうなるで、あるな……」

「がっ」

「へ」

ここに、のび太を守るための美女軍団が結成されつつあった。普通逆じゃない。

ドラえもんなんか名刀電光丸をポケットから出しているよ。

ツッコミしようにも、狙われているのび太がいうものはないだろう。皆それぞれ、得意武器や道具を出し寄せていた。

どうやら戦いの前に武器の総チャックと整理することに決め込んだらしい。

積み上げられていく武器を見てのび太は思った。

本当に、ドラえもんって子守り用のロボットなんだよね。

なのに、なんで地球破壊爆弾がポケットの中にあるのさ。
空気砲とショットガンがまだ許容範囲内だというのも悲しい。

「これくらいかな」

タイム風呂敷を片手にドラえもんたちが取り出した道具の山が築かれた。

「そうであるな……後は親友テレカ……ドラニコフ、翻訳コンニャクはちゃんとアルであるか」

「がう」

ポケット、ランプ、マフラーからよくこんなにも入っているものだと感心してしまう。

四次元って、すごいね。

「で、ドラパン。これらの道具を預かってくれないかで、あゝる」

「へ。なんでまた？」

「我輩たちのポケットは皆繋がっているからである」

「時空は超えられないけどね」

「あ……」

敵の手に堕ちてしまったともがいる限り、ドラえもんズの四次元ポケットは相手にも取られてしまう可能性があるのだ。

「……わかった」

シルクハットの中にドラパンは入れていく。

タイム風呂敷とヒラリマントといった布形の軽い奴のほかに、手元に残したのは、ドラえもんはショットガンに名刀電光丸とタケコプター、ドラメットはタロットカードと水晶玉と笛、ドラニコフは翻訳コンニャクとテレポートマシーン。

今着ている服の中に隠せる、持ち運びができるものしか残されていない。

本当に戦う気なんだ。

ずしりと重くなるのび太の心。

戦いを回避できるわけもなく、また敵がどこから出てくるかわから

ない状態。

時空の歪みが発することと親友同士だから働く第六感があるとはいえども。

「心配しないで、のび太君」

オニキスの瞳がのび太を見つめる。

「ドラえもん……」

たしかに僕たちはいくつもの困難とピンチを乗り越えてきたよ。信頼しているよ。

でも、今度の相手のビック・ザ・ドラは一筋縄ではいかないことを誰よりも知っているから……。

「では、我輩は王ドラに連絡するである」

まだ、どこにいるかわからない友。

「そうだね。キッドにも連絡しないと……親友テレカ」

ビック・ザ・ドラの復活、二人の友、ドラリーニョとエル・マタドーラが敵の手に落ちてしまったこと、のび太の命が狙われていること……話すことはたくさんあった。

辛いけど、この現実を伝えないと。

ドラえもんたちはいつもの調子で天に掲げる。

光が、集結される。

そして、その時……丁度新たな異変が起きたんだ。

どこにいるのかわからない、ビック・ザ・ドラの介入によって。

「校長！」

金髪の美女がまずその異変に……気がついた。いや、気づかされてしまった。

目つきが悪いミニドラに簀巻きにされた校長が連れ去れようとして
いるではないか。

「くくくどらら」

「むぐー！」

校長はご丁寧に猿轡までされていた。

「くつ」

考えるまでもなく、キッドはミニドラたちに向けて空気砲を構える。
大の大人がちまちました愛らしい生き物に銃を向けるのは絵的にい
いものではないが、寺尾台校長をこのままにするわけにはいかない。
とにかく、威嚇しようとキッドが引き金を引く寸前だった。

校長の、机が消えたのは。

「え……」

煙を立てるとか、よく忍者や超能力者が姿を消すのではなく、ス
テンドグラスが粉々に砕けるように、空間ごと切り刻まれ……消滅
した。

「ば、馬鹿な……なんで消えるンヤ」

「な、何がおこっているの！」

ドラミの悲鳴が校長室に響いた。

第七話 一言しか言わないのに意外と美味しい役が多いよね、この子達（後書き

さて、物が消えたところで、今日の話はおしまいです。そこまで書くまで結構な日数がかかってしまいましたが。こちらは私の力不足です。

しかも消えたというのがわかりづらいので、あとがきにも付け加えるという荒業までしています。

もちろん、ものが消えたのはビック・ザ・ドラが原因です。

何をどうしてそうなったのかは次回で詳しく書き出す……予定です。すみませ〜ん、なかなかまとまりがなくて〜。しかも王ドラまだのび太たちと遭ってない！

第八話 復活の呪文は……おっく、せん、まん！（前書き）

ファミコン世代ではないときついネタがありますが、ご理解願います。

第八話 復活の呪文は……おつく、せん、まん！

第八話 復活の呪文は……おつく、せん、まん！

校長の机が消えたことと、目つきがやたらに悪いミニドラに校長先生が攫われそうになっていること、どちらに着目すべきか、と聞かれたら……キッドは迷うことなく……。

「人命が優先だぜ！ ドカーン、ドカーン」

引き金を引く。

キッドから放たれた爆風がミニドラに向かって飛び掛る。

「……どららー！」「……」

空気砲による力の反動でキッドの金色の髪がゆれる中、強烈な風によって四体のミニドラが飲み込まれ、四方八方に飛び散る。
寺尾台校長だけを残し。

「さすが、あんさん」

空気砲の力を調節しつつ敵だけにしか当たらないように正確に打ち込む技術。

武者修行と、現役保安官助手としての経験によってできた神業。

エドはキッドを賞賛した。

「これぐらい、朝飯前だぜ」

キッドははにかみながらもニヒルに笑う。

「何の音ですか、キッド先輩！」

大慌てできたバンパイアサイボーグ。玉露を持ちながらではあるが、簀巻きにされ、倒れている校長を見て目を見開く。

思わずお茶がのっていたお盆が落下。下がクッションであったためかこぼれはしなかった。

「いきなりこいつらが校長先生をどこかに連れ去ろうとしていたん

だ」

「なんでまた……」

「知らないが……とりあえずこいつらのエネルギーを吸ってくれないか」

動けないようにしないと、安心は出来ない。

校長も許可するのか、コクコクと首を縦に振っている。

「わかりました。では、コードを解除します」

バンパイアサイボーグの目が一瞬赤く光る。

これが、戦闘兵器だったメカたちの能力が開放された証。

バンパイアサイボーグは相手の生体エネルギーを吸い取り、力を増す能力を持つ。時にはこの能力を応用し、捕虜に動きをたらせないようにギリギリの線まで力を吸う。

彼が四体のミニドラから手を翳し、吸い取り終えたところをみたところで、少しずれてしまった四次元ハットを深くかぶりなおしつつ、キッドは改めてミニドラたちを見る。

皆エネルギーがわずかなこともあって眠っている。可愛い彼らなのに……先ほどの悪行がうそのようだ。それにしてもこの顔には見覚えがある。たしか……ドラリーニヨとよく一緒にいる子たちではないか！

「なにい！」

いたずらにしては度が過ぎる。それに彼らを取り巻くのは邪悪な気配。

感じたことがある……嫌なもの。

背筋が凍った。

脂汗も出てくる。

「ま、まさか……」

頭では誰のものだったかまだ出てきていないというのに、身体はこんなにも反応している。

心のほうもどくどくと、不安的になる。

この気配があまりにも辛く、苦しいものだと言告してきているのだ。そうあれば、恋人を失った直後に起きた悲劇と同じ感覚。

「ビック・ザ・ドラ！」

キッドの瞳孔が開く。

直感を信じたくないと思った。

「ビック・ザ・ドラって、あの、ビック・ザ・ドラのことなの、キッド」

寺尾台校長の縄を解きながらドラミはキッドの取り乱しかたに一抹の不安を感じていた。

お兄ちゃんに聞いたことがある。

ドラドラセブン一同が倒れた事件。そしてイージーホールの消滅。

イージーホールとは時空を超える科学力と持つようになってからわかった、異次元。

その異次元は入った者たちの夢や野望をそのまま写し取り、自己満足の世界をやさしく見せてくれる。そのあまりの居心地のよさに中に入った者は元の、この世界に戻ろうとしない世界。

しかし、ただで見せるわけもない。甘い蜜で虫たちを呼びつける多くの食虫植物のようにイージーホールは取り込んだものの心を吸い取り、最後は抜け殻にし、捨てる。

危険地帯なのであるが、心は弱く、どうせ死ぬならばそこで死にたいと思うものも多く、一夜の夢のためにすべてを捨ててホールの中に消え去った者たちも多い。

だが、そこにイージーホールに飲み込まれずに、邪悪な意志によって逆にイージーホールの力を取り込んだネコ型ロボットがいた。

彼の名はビック・ザ・ドラ。

彼に関するデータは政府によって消失しているが、彼の名だけは今でも残ってはいる。

鏡の世界でオチこぼれのロボットたちに好物であるいじめっ子を差し出すように要求する悪魔、優しい言葉とおいしいお菓子をたべさせてくれるがプクプクになったら食べてしまうという妖怪など多くの都市伝説を生み出してもいる。

……学校の怪談じみているのもあるけど。

お兄ちゃんを除く、ドラえもんズに悪いコンピュータを埋め込み、世界を破壊しようとする企んだ世界的犯罪者である。

ビック・ザ・ドラが破れたことによって、イージーホールも崩壊。多くの人も現実に戻り、時が過ぎることによってイージーホール自体がなんらかの冗談にしか思えなくなっていたのに……。

復活したというの。

ドラミの手が校長の口を塞いでいるタオルを取り去る。

「うえ、ごほっ」

急に外気にさらされたことによって、上手く呼吸ができず、校長は咳き込む。

キッドは校長の無事を確認すると頭を振った。

冷静考える時間は少ない。まずはミニドラたちが操られているということは。

キッドの親友テレカが光る。

通信してきたのはドラえもん。

ドラえもんのメッセージに、キッドが焦燥するのはそれほどからなかった。

のび太宅。

訪ねてきた王ドラにも驚かされたが、しずか、スネ夫、ジャイアンも一緒だったのには困った。

本当に困った。

それは、皆を戦いに巻き込んでしまうこともあるが、目下の悩みは。

「んー、我輩らはスモールライトを浴びた方がいいのではなからうか」

「いや、行儀悪いけれど机や窓に座ればなんとかなるんじゃない、ドラメット」

「のび太殿がそういうのならば……」

大人数がぞろぞろとのび太の部屋にやってきたらギユウギユウ詰めるのは至極当たり前である。

大人サイズのドラズの皆はスモールライトを浴びて小さくなって部屋のスペースをとろうとしたが、お客様にしかも今はか弱き女性の姿の彼女たちにそこまでさせたくはないため、のび太は解決案を出した。

「では、私とドラニコフは窓の方にも」

「わう」

「では私は机の方にも座るとするか」

それでも、ネコ型ロボットの性が不安定なところに率先として座るのであった。

押入れはドラえもんがキッドと連絡中のため占領する中、廊下の戸もあけ、やっとのことで円陣を組む。

「では何処から話しましょうか……」

王ドラが厳かに話し始める。

金髪碧眼の美女の瞳が揺れる。

「なんだって、ビック・ザ・ドラによってドラリーニョとエル・マタドーラが操られてしまったと！」

落ち着け、俺……ビック・ザ・ドラが復活したならば狙われるのは俺たちだってわかりきっていたことではないか。でも……あまりにも早すぎる。

のび太の命が狙われていることも気が気でならねえが……。

「やはりそうなっておったか」

「校長先生、それはどういうことなの」

「キッド、まさにそのとおりじゃ……ビック・ザ・ドラが復活したのじゃ」

変に固定されていたためにまだ口が痺れて上手く動かないというのに寺尾台校長は残酷な事実を告げる。

（やはり、か……）

帽子をより深くかぶるキッド。

（あいつは、おれたちにある力の秘密を知っているからな……）
親友テレカを持った途端に目覚めた力。

テレカの力に見合うぐらいの力を持ち主に授けたため。普段は引き出すことはないのだが……ふとしたきっかけや、守りたい人のために使う。

ソレを自覚しているが、完璧に使いこなすことはない。

七人が揃わないと使いこなせないことも理由の一つだが、なにより……。

「それに、お主たちのコードキーが入れたワシの机が消えてしまった」

校長によって封印されている。

あまりにも危険だからと、引き出せないように厳重にコード化し、封印している。

「キー？」

ドラミは初耳か。

ドラえもんは無自覚で使ったからな。

親友テレカを手にしたものに与えられた特殊な力。皆それぞれ違うのだが親友テレカを媒体に自分たちの素質にあったものしか出せない。

今のところキーの存在自体を知らないのはドラズ内ではドラえもん
とドラメットにドラリーニヨだったのだが……。

「学園内に既にバリアが張られておるから、外部には持ち出されてはおらん筈なのじゃが……」

「しかしよ、校長。俺たちの今の身体にキーなんて差し込めるところなんかないんじゃ……」

「そう思うじやろうがな……お主の体を調べてわかったことなんじやが、キーを差し込める場所がある」

「うそ」

「こんなときに嘘など言わんわ」

いくからお茶目だろうと、こんなときにまで冗談は言わない。

「厳密に言つと、差し込むというよりは飲み込むというほうが正し

いが……」

「待てよ、それって口に入れるだけなのかよ！」

「そうじゃ。ネコ型ロボットのときは暗証コード入力などいくつかのセキュリティを突破しないといけなかったんじゃが、今のその身体ではたったのキーを飲み込むだけで解除されてしまうのじゃよ。あー、ここにいる四体のミニドラたち以外にも何体か既にビツク・ザ・ドラに操られていたらどうしよう……」
「ダディ十三号、マミー十四号！」

へんじがない、ただのしかばねのようだ。

「今時ドラ〇エ！」

キッドはどうやら日本のゲームにも詳しいようだ。

「え、ちよつと、キッド、口に入れるって何を？」

ドラえもんの方はキッドの声しか聞こえないので今学校で起きている事件がよく理解できない。

「あ、ドラえもん。まずいことになった。キーが学園内のどこかに紛失しちゃった」

「キーって？」

「……あとでドラニコフが王ドラにでも聞け。あいつらは知っていることだから……キーを口に入ればコードが解除できるっていえば後は教えてくれるはずだ。あと、俺が話しかけるまで親友テレカを俺に繋げるな。今未来では大変なことが起きているからな」

「僕らも行くよ！」

「馬鹿。お前らはのび太を守りぬけ。だいたい、学校内はトウセンボ・カバーがかけられているから入ることも出ることでもできねえんだよ」

「え、そうなの」

「未来のことは任せておけって言っただろ、じゃあな」

「うん。わかった。よくわからないけど、キッドに任せるよ」

「ありがとな、ドラえもん」

親友テレカの光が消える。

少し後ろめたい気持ちもあるが、まごまごしているわけにはいいかな。

マザーコンピュータに異常がある限り、キーがどこにあるのかわからない限り。

「敵も見方もわからねえが……探すしかないか。バンパイアサイボーグ、校長を頼んだぜ」

「はい」

「ドラミ……危険な目にあうけれど、俺に学校を案内してくれねえか……お前だけは俺は絶対守るけど、な」

キッドはドラミの手を握る。

柔らかい女性特有の肌ではあるものの、キッドの熱は変わらない。

「いいわよ、ガサツ君」

ドラミもここで待っている気はなかった。

大学教授として学校に勤務していることもあり、学校の案内には自分がつてつけであるとはわかっていたし。なにより、キッドやお兄ちゃんたちの役には立ちたい。

「ほな、いきますか」

キーを敵よりも早く見つけ出すため。

マザーコンピュータを目指して白馬に乗って、二人は学校を巡回する。

第八話 復活の呪文は……おつく、せん、まん！（後書き）

復活の呪文といってわかる世代が読んでいるのか不明なくせに、つい、作者はやっちゃいました。なにこれ、と思う方へとワンポイントアドバイスとしては、昔のゲームは今みたいなセーブ機能がなく、コンテンツする際にはパスワードで引き継いでいくスタイルが主流だったのです。とくにファミコンソフトのドラ○エ1、2ではそのパスワードのことを復活の呪文として町の教会で聞いていたのです。

はつきりいつて写し取るとき、面倒でした。

メモリーに容れられるようになって本当に楽になりましたよ、はい。

虹純晶さん、雪奈さん、応援有難うございます。

そしてこれからよろしくお願いします〜

第九話 歌はいいよね……一万年と二千年前から愛してる歌は（前書き）

捏造設定でんこ盛りです。それでも構わないという勇者はぜひここから先もお付き合いお願いします。

第九話 歌はいいよね……一万年と二千年前から愛してる歌は

気がついたら青い空だけ見ている。

天気だけはいい昼下がりに。

オゾンホールのせいで紫外線がますます強く感じる。

フロンガスはもう使うなあ（つつか、今のスプレーにあるの？）

日光湿疹の人には辛い、外でのたあいいいく、幸い僕はそういう体質ではないけれど。

何度もやっても、何度もやっても。

運動音痴にはやっぱり辛いよ！（体育）

今日は小学生に人気のドッチボールだけでも、ボールが顔に当たると、剛速球！

顔面セーフでもふらふらしていずれは足がもたれて転ぶ！

しかもみごとに転ぶもんだから笑いまで取ってしまう！

生き残ろうと必死に避けるが、カモにされてるので意味がない！

だからチームは絶対勝つために僕を最初から外野においておく。

替え歌

エー・マンが倒せない

そしてその自分の一機分（ゲーム世代特有）は他の人に使わせる。これがのび太のドッチボールでの役割だった。

ボールがきてもほとんど触らずに、横の人に任せるか、すぐ強い人にボールタッチ。

のび太がこの授業で気にするのは強いて言うなら紫外線対策ぐらい

だった。

つい、昨日までは。

もつともそれはのび太がいきなり運動得意のスーパー超〇〇人になったわけではない。て、いうかのび太のドッチボールでの役割は変わらない。今回の授業でももちろんのび太の特等席は外野である。ただ、紫外線対策よりも、この青い空をただぼーっと見ていることより夢中になってしまふことができただけである。

「それでは手加減なしでいかせてもらいますよ、ニコフ！」

橙色の三つ編みおさげの少女がボールを投げる。

ボールを中心に風が切れる音がする。

日曜朝の特撮タイムではないかと疑ってしまうぐらいの轟音を鳴らす、学校所有の変哲もなかったボール。

ただ、投げた当人の力が強すぎただけ。

扱う人によってなんでも凶器となるということを見に持って体験させる気なのか。

こんな球を小学生に取らせるのか！

「僕……こそ……。ここで王に……倒されはしないよ」

受け止めたのは、ぼそぼそとしゃべる言動とおとなしそうな見た目の茶髪の少女。

しかし、それは大きな間違いだ。

おそらく今この小学校にいる生徒の中で彼女より凄い獣はいないだろう。

学校の備品が燃え尽きる前に片手で受け止める。
しかも左手で。

「ここはせめて両手にしたほうがよかったのではないかである」
長い髪をヘアピンでコンパクトに纏め上げた力作、お団子の周りの

三つ編みという一見首が折れそうなぐらいの重量のピンク色の髪の毛小学生。それでも、けして運動能力は悪くはないのかボールを避ける、避ける、避ける。

「ひーっ、みんな、慣れるの、早すぎだよ」

青髪を雅結びにし、ボールに当たり、のび太の横に着いたのは先ほど。

ジャイアンのスピードボールに当たったとはいえ、仲間が繰り出す小学生論外運動能力に対応しきれないのに不満らしい。

これではのび太を守りきれないかもしれない、とか。

そう、彼女たちはドラえもんズ。

ドラパンの道具と根性のメイク術により、小学生へと見た目をチェンジさせている。

理由はのび太を徹底的に守るため。SPよろしく、二十四時間戦い抜きます、である。

昨日のうちにのび太の学校に編入。どんな手を使ったのか気になるが、同じクラスに入り込んでもある。

王ドラ、ドラニコフ、ドラメット三世は帰国子女として。

ドラえもんにいたってはのび太の遠い親戚という血脈まで捏造。

名前で変と思われないかと思ったけど、案外皆あっさり受け入れている……語呂がいいだけでいいのか！

そういえば、どこぞに今の年代の子って疑問に思っているなあえて追求しない姿勢があるというのがあったような……まさか、それ？名前ぐらい無問題なのですか。

こんな可愛い美少女四人がクラスに着ただけで男子児童は喜んでいたり、女子からもともと性格もいいお姉さまタイプにメロメロ。顔もよければ性格もいい。多少難癖があるがそのギャップがまた萌える。

……やはり、可愛いってことは正義なのだと思います。

そのジャステイスな小学生の姿になるまでにはいくつかの困難もあった。汗と涙と鼻水の結晶。付いてあるはずの耳を人の耳のように見せたり、髪の毛の中に隠したりなど。ドラメット三世は長い髪を三つ編み団子にヘアピン添えてと一時間も格闘し、ドラニコフは翻訳こんにやくを食べて日本語を喋る。

当人たち曰く、ネコ型より手足が伸びに伸びきったビツク・ザ・ドラによって変えられた姿よりは多少遠近感が元の姿よりは近くなっただという。

それで、もともと運動神経がいい王ドラとドラニコフはもう児童向けの熱血スポーツ漫画のごとく、わけのわからない必殺技を繰り出すまでになっている。

ちがいは必殺名を言っていないぐらいだ。

ほとんど彼女たち二人の独占場になりつつある、ドッチボールにハラハラしつつも、のび太は少し幸せな気持ちになっている。ボールを避けながらもチラッと見てくるドラメット三世。すぐ近くにいたドラえもんにも。

（こんな可愛い女の子に心配されているからな）

デレっとしてしまう悲しき男のこのサガ。

命を狙われているとはいえ、思わず、赤くなってしまう。

ふと、オニキスの瞳がのび太の異変に気がつく。

「のび太君、顔が赤いけど、どうしたの……もしかして熱射病？

保健室に行こうか」

「え、ち、ちがうよ、ドラえもん。へ、平気、平気。僕すこぶる元気だよ」

「それならいいけど……」

まさか、見とれてにやけたなんて言えるわけないよ、ドラえもん。
あ、でも保健室か……やばっ、あまりにもベタなシュチュレーションが出てきた、頭から。

〔妄想中〕

白いシーツに横たわる僕の手をドラえもんの白い可憐な手が握り締めて……

「のび太君が起きるまでずっと一緒にいるからね」
〔妄想終了〕

甘い。

健在な小学生としてはこれ以上の想像はできないが、それでもスイートないちごミルクジャンボパフェぐらいのものである。

しかも、現実世界でもドラえもんがのび太の手を握っている。

「体調崩したら、僕らに頼っていいんだよ、のび太君」

上目遣い。

マイナスイオンとともに爽やかな甘いブルーハワイの香りが……。

絶対、気が抜けない。

ドラえもんに今まで数々の醜態を見せてきたのび太であるが、ここまで美少女になったドラえもんに迷惑をかけることは男のプライドとして、なんとしてでもできる限り避けなければならぬことだと思っ

った。

たしかに思った。

だが、流れ弾がものの見事にのび太の後頭部に当たるとは……。

ちかったが ふうんさけれず ほけんしつ

見事な？ 川柳になったところで、のび太の意識がぷつつりと切れた。

いくら外野にいたとはいえ、流れ弾に当たって保健室に担ぎ込まれるということはおこりえることなのか。漫画よりも現実には奇なりとはよくいう。

その格言は、漫画じゃなくって小説だって？

そんなの関係ねえ！

「油断してましたね。てっきりビック・ザ・ドラにだけ気をつけていればいいと思いましたが……私たちがこの世界に来たということとで本来のできことから逸脱して事件がおきてしまう可能性もあるということ、考えるべきでした」

のび太の頭にたんこぶが出来ただけの話なのだが、ドラえもんズとしてはそういう問題だけではない。

「つまり、時間が、本来の歴史が狂ってしまうということであるか」多少交通機関を変えたりするなどの誤差があっても、目的地につけばいいという、時空法の理論からすれば、のび太のドッチボールで気絶するという些細なことはタイムパトロール隊が出撃する理由にあてはまりはしないのだ。

「……極論を、いうとね……」

のび太の子どもがちゃんと生まれればいいのだから……そう、のび太の遺伝子をそのまま写し取ったクローンにでも子孫を残すようにすればまるつきり歴史的には問題がない。

そこまでしないのは道徳的な問題。

しかし、ビック・ザ・ドラにはそういう倫理的なものが残っているとは思えない。

そして、なんらかしらの事故でのび太を失ったとたん……自分たちは間違いなく、ビック・ザ・ドラのいいように操られ、のび太の精

巧なクローンを作り出し、この時代においていき、未来の……自分たちの世界をめちゃくちゃにしてしまっただろう。

「たしかに、僕、不注意だった」

「これから気をつけねばいいことですから、そう自分を追い詰めないでくださいよ、ドラえもん」

慌てて王ドラがフォローする。

「ありがとう、王ドラ。で、ところでキッドが言っていた……」

「え、キッド、そういえば、まだ連絡ありませんね。丸二日たっているというのに」

「それは、この空間……だからじゃない。……皆が皆タイムマシンでこの時代にいつきに來たせいで時空が不安定になっているかも……」

あまり同じ時間内を頻繁に移動することはできないのはそのため。

「そうであるな。水晶でも、あと一週間ぐらいは時空が乱れて親友テレカでも連絡を取り合うのは難しいと出ているであゝる」

「……」

キッドの言う力についてドラえもんが聞くとすぐに王ドラは話をそらす。

ニコフもぐる。

だって話をあまりしないニコフがここまで長い文を考え、言うのは普通ではありえないのだから。

ドラメットの方はたまたまだと思うけど。

(……なんで、隠すのかな……)

気になるが……ここまで必死になって隠すことなのだから、まだ聞かない方がいいのかもしれない。ドラえもんはそう結論付け、今重要となっているのび太の警護についての反省会を休み時間を利用して行う。

ドラえもんが純粹にのび太の心配だけをしている姿をみて翡翠の目

が揺らぐ。

（すみません、ドラえもん……あなたの力は、言っても今は無駄だから……）

隠しているわけではない。

キッドは忘れていたのかもしれませんがね。

ドラえもんにはあるプロテクトがかかっているということを……。

ドラえもんの能力は運命を作り出すという親友テレカがドラえもんズに与えられた能力の中でも一番強力なものだ。

ある運命をただ操るのとは違いドラえもんの場合は自ら創造し、その運命を相手に半強制的に執行するという質の悪いもの。

独裁者にも時の支配者にもその気になればどんな善行も悪行もドラえもん一つの考えで現実のものとなってしまうのだ。その危険な能力のためドラえもんには仲間の中では一番嚴重なプログラムが組まれている。

（敵もそれを知っているなら、まずドラえもんを取り込まない限り力を使わせないと思いますが……）

だが、今の人間の体はネコ型ロボットの時のものより耐久性も、性能　ここは身体能力といっておこう　が著しく低下している。

のび太を抹殺しなくても、今の我々ではあっけなくズスタにされてしまうのかも……王ドラの顔色が悪くなっている。

ぼんやりとした月のような瞳でも刀のような凄みを持つニコフの目にとまる。

「王ドラ……君も無理しないでよ。僕にはわかっているから……」

「ニコフ。あなたは……」

「王ドラだけに使わせてごめんね、力……」

「いいえ。今の状況では私の力のほうを使ったほうがいいでしょう……この身体に馴染むためにも、キッドからの連絡を待つのに……。ビク・ザ・ドラの力もわからないうちに、ドラメット三世とあなたの能力を使わせるわけにはいきませんよ。特にあなたは親友テレカ以外の力も相乗されたら……」

だから、私は倒れるまでとはいいませんが、まだ身体に余裕がある
うちは少しでも……。

ポーン。ポーン。

せつかくの快晴。

動かさないと体が鈍っちゃうよといって城から飛び出したのはつい
数分前。

のび太の学校の近くの裏山から一人の少女はサッカーボールにヘデ
イングしながら呟く。

「あゝあ。ミニドラたち失敗しちゃったからな……」

あの子達の力を過信しすぎたのがいけなかったのか。

直接自分が学校に乗り込むべきだったのではないかと、ビク・ザ・
ドラに抗議はしたが、自分たち二人をのび太がいる時空におかない
ほうがもっと都合が悪くなると言われてしまったドラリーニヨ。

「それをいうならば、王ドラをこっち側に引き込めきれなかったときから、こうなるのは大体予想はついていたのだから、仕方が無いだろ」

森の緑に目立つ赤い髪の女性がドラリーニヨをつつしませるようにいう。

しかし、目はけだるさそう。

布団を敷いてさっきまで寝ていたせいであるが。

「そんなこと言っただって、信じられなかったもん。僕らにそんな力があるなんて！」

「お前は忘れていただけだろうが。ドラえもんと違い、強制記憶喪失システムが組み込まれていたわけでもないのに」

親友テレカを手にした瞬間から得た、特殊な力。

あまりにも危険すぎると判断されたために、みなそれぞれキーとそれに伴う強制プログラムが組み込まれている。

特にドラえもんのそれは危険すぎてがちのガードがなされている。

自分の能力を自覚させないよう、彼の能力に関わる会話をしたとたんだらえもんは一時停止となる。復旧するのにそんなに時間はかからないのだが、その能力に関する前後の文章がすっぱり抜けるという。

（運命を作り出す、力か……）

前に何気なく試したときがあった。悪戯半分と好奇心って言うところだ。そしたら、ドラえもんは倒れた。すぐに頬を叩きドラえもんを起動させたが、本人は自分がどうして倒れたか覚えていないという。つまりそれはドラえもんの記憶に自分がドラえもんの能力について言ったことがメモリーに刻まれていないということ。

そこまでするか、嫌悪感が出たが、あの校長がそこまでするぐら

い危険なものだということを再認識させられた。

「でも、ミニドラたちはちゃんとやってくれたぜ。一番厄介のだけはこちらの手に渡したのだから」

エルの首には一枚のキーが繋がれている。これは奪い取った封印キー。青いそれはドラえもんのもの。まずはそれがこちらの手で握っていれば問題はない。

「そんなこといっても、王ドラが……えっと、なんていう能力だったっけ？」

「時空を閉廷し、タイムトラベルしようにも出来なくする、力だ」

本来は願えば入れる、入れないも自由にできるのだが、制限されている今は細かい設定がでなくなっている。ただ、過去や未来からの干渉を一切受けなくするぐらいだ。

親友テレ力で連絡する以外は。

キッドの連絡を受けるまでこのまま時空から来るものをすべて拒否するだろう、力の限り。

「エル、だったらドラえもんか、王ドラをこちらに引き寄せればいいのでしょ。ね、はやく、攻撃しようよ」

のび太にでも。それともドラえもんか王ドラを狙ってぐちゃぐちゃに壊してしまえばいい。そしてビツク・ザ・ドラ様の力で取り込んでしまえば……。

「まあ、待っていな。わざわざ俺の力を使って、ここの時空だけを早く時が流れるようにした意味がねえじゃないか……キッドのいる時空の十分がここでは一日にまでした意味が、なあ」

久しぶりに使ってこの重圧感。

エルの力は任意で時空の流れを他所と異なるように進めたり遅らせ

たりする力。

キーを奪いきれなかったため、結構身体にキツイとか、あるが。

（良心というコントロールはビック・ザ・ドラ様にとってもらっているから王よりは使い勝手がいいな）

王ドラのほうはどうだか。

ドラリーニョの力が無い今、単独だけで使用しているのにはかなり無理がある。

「くくく……いつまでもつかない、優等生さん」

「エル？」

下手をすれば後三日ぐらいには体が動かなくなるのではないだろうか。

自分のほうは眠りながらアンタが動かなくなるまで待てるのに、な。

キッドがドラミとエドを連れ出して学校を探索そうとする間にはすでにのび太のいる時空では二日たっていた、と知ったらどう思うのだろな、キッドは……。

エル・マタドーラは再び布団の中にもぐりこむ。

「それに、リーニョ。ビック・ザ・ドラ様の命令なしに突撃はできねえって」

力を使うたびにシャスタしてしまうエルを見ながら、ドラリーニョはつまらなそうに頬を膨らませてまたヘディングをしだす。

（ビック・ザ・ドラ様の命令は絶対だもん。早く、作り終えてくれないかな……新しい玩具）

これができたら単独でも、のび太を襲っていいといわれたから。

晴天だった空にどんよりとした雲が太陽の光をさえぎるように集まってきた。

第九話 歌はいいよね……一万年と二千年前から愛してる歌は（後書き）

前回あれだけキッドのところを盛り上げておいて、キッドの出番はありませんでした（汗）

キッドの活躍を楽しみにしていた人には申し訳ありません。

そして、のび太の学校にすんなりとドラえもんたちは編入。

当初は先生や教生になってという方向も考えていましたが……手続きとか、今産休の非常勤でさえなかなか就けない状況の中で先生はいくらなんでもないだろうと微妙にリアルな社会的考えを含め、生徒の方にみんな括り付けました。
子どもの方が時間、たっぷりあるし。

感想、ありがとうございます！

時々潜って返信していますが、遅くなったしまうときもあってごめんなさい。

そしてこれからもよろしくお願いします。

今回は替え歌と捏造能力の説明に手間取って遅い更新となりましたが……次こそ、早めに……（目標一週間以内）。
では、次回に続きます。

第十話 思考力グルグル、運命に満ちたDファンタジーが、キツタキター！

ドラえもん歴代映画に登場した方々がついに真面目に本編に出ています。

全員というわけにはならないのですが……とりあえず好き（マニア心）とか設定上都合がいい（おいつ！）とか様々な理由から出します。

それとドラえもんズが親友テレカで得た能力も同時に全員発表！（捏造ですけどね）

第十話 思考力グルグル、運命に満ちたDファンタジーが、キツタキター！

赤いランプが激しく点滅するなか、硝煙の匂いを撒き散らす白い閃光。

その正体は……。

ぱっか、ぱっか。

馬のひづめの音。

ドカーン、ドカンッ。

金髪碧眼の女性が白馬にまたがりながら空気砲を絶え間なく打つことよってできた現象である。

「てえやんでえ！」

襲い掛かってくる警備ロボのタイヤだけを貫く、空気の弾。

キッドは知っている。彼らは、操られている。

何に、といわれるとビック・ザ・ドラに関連するものだろう。

ただ、彼の気配を感じないことから、彼自身はここにはいない……

彼に操られた何か。

追ってこないようにパンクさせるだけに留める。

「もうすぐで視聴覚室よ」

ドラミはキッドの腰にしがみ付きながら案内する。

「ほいな！」

エドとドラミの脳波は今繋がっている。キッドが生身の女性になっているため無線での通信が不可能に陥っていることもあるが、ドラミのほうがおペレーターとしても優秀だ。電脳をハックし、警備ロボが溜まっていなく、さらに最短のコースをエドに告げている。

「ひゅー、さすが、ドラミ」

優秀なロボット。伝達系を特化されているわけではないのに、時空を超えた兄のピンチを察知することができるくらいの感応性があるわけだ。

エドとの脳波シンクロにまったく問題ない。むしろ使い慣れている自分よりも的確だ。

「ふふ、ありがとう。でも、ちょっと早すぎ……」

あまりのスピードで落ちないようにするのがやっと。

丸い白い手の万能粘着でも、片手が風の壁に押し流されそうになる。

「ドラミ！」

エドの手綱を引いていた手を潜らせ、ドラミの宙に浮いた手をガッチリとキッドの左手が掴む。

「キッド！」

人間のぬくもりのある、白い手。

ネコ型ロボットのそれと違い、五つの指がガッチリとドラミの手を握る。だけど

「お前を絶対守るって言っただろ」

キッドから伝わる熱い思いは変わらない。

「キッド……」

「ドラミ、無理はするな。今の俺の身体は、弱々しい限りだけど、俺の射撃の腕は落ちてねえよ」

自信に満ちた、キッドの目はまるで勝利の女神のもののように見えた。

のび太は夢を見ている、と思った。

温かい布団のおいがあるのに、この目で見えている虹色……黄緑、赤、黄色、青、橙、茶色、桃色と七色だけと日本が虹としてよく使う色からは外れているものが見えてきたから。

「なに、これ」

炎のように鮮やかに輝くものを前に、今日こんな夢ということは、なんの深層意識なのかと考えてみる。

ボールにあたったばやけた頭ではドラえもんズのボディーカラーだと気がつくのに時間がかったけど。

「そっか。夢にでも出てくるな。たしかに」

どうせだったら色だけではなく、あの麗しい姿のほうをイメージしきれなかったのか。

あ、でも夢の中でそんな想像したら 鼻血が出る！ 思春期突入間近の少年には刺激が強すぎるのであった。

さっぱり妖精でも飛んできそうな雰囲気の中、何処からともなく、不思議な声が聞こえてくる。

《聞こえていますか……》

頭に直接音が聞こえてくる、懐かしい、ような……昔、どこかで聞いた少年の声。
誰だったか……。

《思い出せなくても、私は構いませんよ。それに、夢をかりて通信している限り思い出せないのが当たり前ですから》
え、そうなの。

《はい。夢ですから》
常識なのか。でも、そんな夢でなんて水臭いこといわずに、直接僕に言ってきてもいいんじゃない？

《でも、今の現世に身がない私にはこの手段でしか、話せないのので》
どうして。

《すみません。今はそれを詳しく説明する時間がありません。それよりもドラえもんズのことです。私が知っている限りのことをお伝えします》

次の瞬間　のび太の目が、意識が、別次元に跳ぶ。

それは、深海のように青く、かつて地底を歩いて横断したときのような……浮遊感と安心感が入り混じった不思議な感覚。

そんな中で意識に流れてくるのは美しい音　原始の時代から地球宇宙を照らし出す生命の鼓動であった。鼓動にあわせることで流れる記憶がのび太の細胞を一つ一つ包み込み、全身である契約の内容を知らせようとする。

親友テレカという伝説の秘密道具の、運命との契約　定められた摂理を崩しているのに好き勝手にやられているのに、世界は命あるものすべてを愛していた。

世界とて万能とはいいきれないことを知っている。世界によって命を息吹くものすべて世界に準じるとは限らないのはそのため。なら

世界は信じるものに世界の運命を任せてみるのもいいかもしれないと思った。世界が信じるのは、心ある者たちの魂の結合、とりわけ友情の力が好きだった。友情によって運命を変えさせるという特典を与えることにした。もちろん、世界は安心したいから、甘いとか軟弱というものでは決して運命を変えさせはしないように。自分たちの持てるすべての力を仲間と供に費やして、はじめて微笑むように、運命を変えさせるシステムを構築させる。

そんな契約を親友テレカという秘密道具に与えることにした。

そんな世界が与えた最高の力の媒体として作られたテレカだからこそ無限の力を持ち、時空を超えることも、運命を調整して普通ではありえないことをすべて可能にしていける。

世界は親友テレカの七枚にそれぞれ時空と運命を操る力を注入する。七枚それぞれに分担された能力。

初めての持ち主たちに継承させた。

誰がどの力を継承したかは、世界は天と地と彼らにまず教えた。

じゃあ、僕は運命を作り出すよ。

オニキスのような瞳を輝かせ、友情という絆を皆に諮らず、ただ純真に真心をこめて、伝え、輪にした者に与えた力。

ドラえもん。

……僕、運命を手繰り寄せて、結びつけるね。

残酷な宿命を背負わされていたが変わることを望み、心優しき者として進む事にした者に与えた力。

ドラニコフ。

なら俺はいらねえ、繋ぐ前の運命を断ち切らせてもらっぜ。

勝気で、あまり人に接したことがなかったが、彼らとの友情を心の底から信じると決めた熱い者に与えた力。

ドラ・ザ・キッド。

我輩は繋げるべき運命の糸が間違っていないか確認しよう。

この中では誰よりも冷静で、魔術師のように振舞えるように、秘密道具や自然現象システムに直接アクセスできる特化プログラムを搭載した者に与えた力。

ドラメット三世。

私はそれらを安全に行えるような空間をつくしましょう。

殺戮人形として生を受けるはずだった、優等生。だが、暖かき人物に拾われ、成長し、誰よりも力を平和に使いおうと願った者に与えた力。

王ドラ。

俺はその運命をすぐに実行できるように時を調節しよう。

情熱と希望と夢といった無限ものとなる未知なる力を秘め、多少無理が利くように作られた頑丈な体と精神を誇りに思っている者に与えた力。

エル・マタドーラ。

僕は皆が疲れ切れないように癒してあげよう。

誰とでも仲良くなれる、無邪気な純粋な心。サッカーというスポーツでより世界を楽しくお祭り騒ぎを呼び起こそうとする者に与えた力。

ドラリーニョ。

誓を聞き入れた天は微笑み、地は苦笑い。

でもほっとした。

友情の力で、我々を変えてくれる存在ができたことに。たとえそれが悪だろうと。

たとえそれが善だろうと。

彼らに関わった、彼らにどんな道を与えた者たちもまた、世界にとつては……。

ここでのび太に繋がれていた世界の音が遮断される。

何だと思うと、頭に直接響く音が聞こえてくる。

《私が……この時空で……教えられる……のは、ここまでの、ようです……》

たどたどしく、電波が乱れるように弱々しくなっていく。

あまりにも息絶え絶えと苦しそうな少年の声にたまらず、のび太は声を発す。

「ね、君は……」

《心配、しなくても……大丈夫ですよ。今の時代に、私の器が……作られていないだけですから。もっと、未来に……なったら、私の器が、作れ……その、時……ふっくつ、sいまs。G……う、様……、そrmd……ねmrにt……k……》

最後に近づくとノイズのほうが強くなり、少年の声が上手くのび太の頭に伝わらなくなっていく。

そしてのび太の瞼に午後の光が彼の眠気に止めを刺してきた。

「……」

低血圧気味ののび太がはつきりと目が覚めたのは珍しいことである。

「今の、夢だつて言っていたけど……」

授業を真面目に聞いていたものよりも、はるかに自分の記憶に鮮やかに蘇る、先ほどの夢の内容。

（ドラえもんたちは運命を操ることができるなんて……）

そりゃ、未来から来た時のドラえもんの台詞からそんな感覚はあった。だが、たくさんの経験やタイムパトロールのことを考えるとそれほど強制的に強烈に変わるようなものではないと思っていた。

やはり努力と根性の積み重ねによって自分が望む未来に　　しずかちゃんと結婚するという夢をかなえるしかない。

だが、ドラえもんズの力を最大限に利用すればこれくらいのことなんでもないようだ。

だって世界の運命は彼らにたえず微笑むから。

（でも、僕はそんなの望んでないな……）

これから頑張ればしずかちゃんと結婚できる運命を持つび太が、ビック・ザ・ドラみたいにならねえもんたちを操るように無理矢理運命を変えろとかはしたくない。

やっぱり、ドラえもんズとは親友だから。

マヌケでも、ドジでも　彼らの友として誇れるようになりたい。

自分自身で変えられるっていうのならのんびり、ドラえもんとも面白おかしく、泣きついたりしても、時には困難な冒険に巻き込まれても……心を大きくして……しずかちゃんの心をゲットしたほうが僕らしいと思う。

（それにしても……）

誰だか思い出せなかった少年の声。自分のことを知っていたということはどこかであっていったと思う。

しかもび太にビック・ザ・ドラがどうしてドラえもんズを狙うのかを教えた親切な声の持ち主。その声の持ち主に近いうちにあえるのか、遠い未来ではないと遭えないのかはつきりせずに一方的に打ち切られたのも残念だが、それ以上に誰だったか思い出せないのが悔しい。

（首まで出てきているような気がするのに……）

記憶の波が、である。

最後の方、自分を様付けするなんて……そついう知り合いはかなり限られているはずだ。

呼び捨てや君付けと比べるとのび太の記憶のデータベース上でヒットする件数はかなり少ない。

ドラえものの道具を使って世界を作り、その世界で進化していった住民の皆さんに神様といわれたこともあれば、世界を救ったときの賞賛されたときに言われたことがあったが……。

（でも僕にたいしてあんなに話すような雰囲気ではないよな……）
畏怖されて、まず彼らにはのび太に話しかけようとはしないだろうし。

（実態は今ないとかいつていたけど……）
夢の中というまどろっこしいことをするような人物が思い浮かばない。

不思議な力を持つ少年。もしかしたら別れたときはまだそんな能力を持っていなかったのかもしれないが……。

思索の渦に頭を抱えそうになるのだが、そんなときに限って敵は時間を与えるわけがなかったりする。

学校の校庭に無数の黒い影が降り立ってきたのだから。

「やっと、ビック・ザ・ドラ様から攻撃許可を頂いちゃった」

黄緑色の髪を団子にした、背中にダークパープルの羽の生えたサッカーユニフォームを着こなす残酷な天使が天空からやってくる。

後ろには、赤いランプに白と青といったパトカーみたいな飛行物体。たしかそれは 天上連邦の警察！

どうして、ノア計画は保留になったはずだし、彼らは直接ここに来るわけが……。

「何で、天上世界から！」

ジャイアンの声。

最初に目撃したのは丁度下校時間だった、ジャイアンだった。下から吼えてくる、困惑した怒声にドラリーニヨはゾクゾクと楽しそうに振るえ、反応する。

「はっは。天上世界を乗っ取っちゃったもん　ビック・ザ・ドラ様にかかれば今の世紀の……地上からの公害が原因で年々人口が減少し続けている天上連邦なんてすぐに占領しちゃうんだからね」
瞳孔が開ききった目で邪悪な唇をゆがめる。

「さあって、楽しいショーでも始めよう、殺戮の、ね」

ダダをこねたこともあつて、まだ予定の武器が一つしか完成されていなかったけど、テストを兼ねて実戦で使ってもいいっていわれた武器。ドラリーニヨは嬉々として羽根を広げ、イメージを膨らますとびっきりの、エネルギー弾。サッカーボールの大きさにしたのは自分が扱いやすいから。

クリーンエネルギーによって作られるので人体に影響なく、何発だつて出せる。

「ほんと、ビック・ザ・ドラ様って遊び道具考えるのも上手いよね
じゃ、突撃！」

ドラリーニヨの指示の許周りを浮いていた飛行物体は光線を出し、彼女は自分の背にある羽と同じくおどろおどろしい闇のエネルギーをのび太の学校に一斉に打ち込ませた。

「きやはは。壊れちゃいなよ！」

「そんなことはさせないである！」

三つのヒラリマントが闇のエネルギーを空に還す。

「んー」

ドラリーニヨはすぐに迂回し避けるが、大きさがあだになって避け

きれなかった飛行物体が闇の力に取り込まれ、爆発、炎上。

あまり戦力として自分としては期待していなかったが、それでもビツク・ザ・ドラ様から頂いた玩具。

こうあっさりと壊されてはいくらなんでも顔が渋る。

「いつから、気がついていたのかな？」

冷たい目が三つのヒリリマントを持つほうに向けられる。

ヒリリマントから飛び出すシルエット。

「お前が裏山にいたときからだな。私がわざわざ見逃すわけがないだろ、ドラリーニョ」

中央にいたのはドラパン。

「がう……」

左側にいたのは 翻訳こんにやくの効果ぎれたのもあるのか、戦闘になると手足のリーチ長いほうがべんりだというので年上のお姉さんに戻った 女子高生風のドラニコフ。

そして右側にいるのは紫水晶の瞳の魔術師。

彼女もまたドラニコフ同様小学生からアダルトチェンジ。

緑色の法衣に、ターバンを着こなし、ドラリーニョを射抜くように見つめている。

「関係ない人も巻き込んでまで……もう、我輩許せないである！」

地面すれすれのピンクの髪が風に靡き、怒声が校舎を揺らす。

彼女が法衣の裾から取り出すのはタロットカード。

偶然中世のイギリスに流れ着いたときであつた世界一の魔法使いテラリンから免許皆伝として受け継いだ、魔法アイテムが彼女の周りを勢いよく、円陣を組む。

第十話 思考力グルグル、運命に満ちたDファンタジーが、キツタキター！

天上世界について詳しくは「ドラえもん のび太と雲の王国」でご確認ください。

当時の風刺、環境問題をジャストアモーメントに取り扱った作品なので共感した方も多いはず……って、本当に読む年代のこと考えているのか1992年に公開の映画だぞ、それ。

下手をすれば、見てないよ、生まれていないよ、初めて聞いたよそのタイトル……という人いるよ。

謎の少年の声の正体もだいたい其の辺だし……（汗）。

こうなったら作中で疑問に思ったのならば……質問、感想で随時受け付けます！ それで逃れるしかないか、な……。

では、次回で。待っていてください。

第十一話 降臨、満を持して……ピンクスネーク・カモン！（前書き）

今回は『ウラナイノ』は占い専用だと思って、勝手にドラマメットの呪文作ってしまっています。でも後悔はしていません。

第十一話 降臨、満を持して……ピンクスネーク・カモン！

ドラメットの言霊が校舎に響く。

「ドラメーディア タロートリア マハーラージャ……敵を貫くカードよ 今、ドラメット三世の命により宿し力を解放せよ！」

紫色に輝く魔方陣がグランドを照らす。

刹那、タロットカードの剣のカードが光る。

光を浴びた手元のカードがすべて刃となって、緑の魔術師の元から離れ、敵に向かって突き進む。

風を切るその速さに、天空の無人飛行物体が次々と爆音を立てて炎上していく。

ドラリーニヨにはむしろ喜んでいる。邪悪な瞳をぎらぎらと光らせて。

「きやはっ やるね。さすがは特化ロボってことだね……。じゃあ、僕も凄いとこ見せよう」

羽根がまた、光る。

無数のボールが一瞬でドラリーニヨの周りを囲むように現われる。

「いっくよ」

彼女は目にもとまらない速さで、すべてを蹴り上げていく。

「がう！」

ヒラリマントを持ってドラニコフがドラリーニヨによって蹴り上げたボールの軌道を変える。エルみたいに相手に跳ね返せないが、致命傷、崩壊を避けるぐらいの芸当ならば身体能力がいいドラニコフにはできる。

距離が足りなくてもレポートマシンがある。

それに……。

「俺にも任せとけ」

ジャイアン。

ドラパンから空気砲を借りて、空中にいる敵を打ち貫いてくれる。天、地、ともに砲撃の嵐。

いつしかのび太の学校のグラウンドは閃光、轟音と土煙によって見えなくなる。

煙幕、とっていいだろう。

敵味方がわかりづらい。

ニコフは野生の感をたよりに敵と味方を区別しながら慎重にならざるおえなくなった。動きも自然と鈍る。

「大変だね、心やさしいのって！」

あざ笑うドラリーニヨ。

彼女にとつてみれば己だけを守ればいいのか、気配を読み取ってはボールを蹴る。

味方である筈の飛行物体にも躊躇なくボールを当てていく。

「くそっ、なんてやつだ」

ジャイアンが舌打ちする。

学校を、のび太のいるような場所に無差別に、攻撃してくるボール。一球、一球が不気味な色を発しながらグラウンドを決り削る。

通り抜けフープでできた防空壕に身を隠しながらも、校舎に向かって落ちてくる飛行艇を打ち抜く。

何発うつたか　　が、ある一発が中心を打ち碎かなかつたためか、欠片が、ジャイアンに向かってまっすぐ落ちてくる。

「な！」

丁度真下なので下に潜っても　回避不可。空気砲を持っている腕ではガードできない　防御不可。

絶望的だった。

だが、野生の感仲間を守るために鋭く、素早く働いていた。

「がっ！」

茶色い髪が、瞬時にジャイアンの目の前に写る。
ドラニコフだ。

女子高生の格好なのに、神々しかった。

だがジャイアンがもし彼女の目を観ていたら不安になっていただろう。ドラニコフの目は困惑していたのだ。

テレポートマシンで着たのはいいが、両手でヒライマントを持っていないため、落ちてきたものの軌道を、秘密道具で跳ね返す時間がないのだ！

火を吐いても、誘爆したらアウトだ！

……一撃で、決めるしかない。

月色の瞳が覚悟を決め、右手に力、精神を込める。

砲撃によって熱を持った欠片が、ちりちりと、ニコフの服を焦がす。でも、まだひきつけられるうちは手を出せない。

近距離で、できるだけ大ダメージを与える。

薄皮一枚に、差し掛かったら　白いブラウス、その下の……熱がダイレクトに感じる　今だ！

「ぐ、わわわああああ！」

叱咤するように吼える。

気合が込められた、仲間を思う一撃が放たれる！

ドラニコフの見解どおりに、爪から発した風によって欠片は塵よりも細かく、分解するように、宙にその姿を消した。

「がっ……」

肉眼で確認すると、ヒライマントを両手で持ち返る。

これで、またドラリーニョが放ってくるボールを追おう。

ドラニコフはタケコプターで上昇する。

「……」

ジャイアンは鼻血を出していた。

欠片が当たっていなくても、出てしまった。しかもジャイアンはニコフが振り向いていなくてよかったと思う。

下乳だけでもこの刺激だから。

「丸くて、白いものが……」

誰にも気づかれることないジャイアンの独り言。

風が焼け焦げて落ちてドラニコフの着ていたブラウスとその下にあったブラジャーをジャイアンの頭の上で通り過ぎたのはまもなくであつた。

「これを使え。ドラメット」

ドラえもんズの道具を預かっているドラパンはハットからなにやら取り出す。

「ありがとうである！」

笛だ。

ドラメット強大な魔法を呼び起こすために必要な道具。

すかさずドラメットは口元に当てて吹く　土煙の中。彼女のピンクの髪が薄汚れていくが、笛の音色はやさしくも力強く音楽を奏でる。

紫水晶の目が輝き、ドラメットの魔術が色とりどりの蛇を召喚しだす。

いや、正確には蛇に見える、風。

うねりを上げ、竜巻となつて、ドラリーニョの放ったボールだけを正確に体内に取り込んでいく。

「くっ！」

ドラリーニョはここで初めて焦りの表情を出す。

（親友テレカの力がなくても、兵器としても抑えられているというのに……）

何でまだ学校を守れるの、何で動けるの。

グラウンドの砂によって動きが遅くなっているのに。

「これからが本気だよ！」

そうだ。ビック・ザ・ドラによってパワーアップした自分ならこいつらを蹴散らすことぐらい簡単なのだ。

みれば、やつらはボロボロではないか。

ドラリーニヨは再び、邪悪な意志を羽根に伝え、闇のエネルギーを放出しようとイメージを構築しようと神経を集中させた。

背後にじりじりと近づくピンク色の蛇の竜巻に気がつくこともなく。

忘れっぽいのと目先の試合に集中してしまう性格は戦略にはむいていませんね……。

王ドラはのび太の家で絶えず閃光が降り注ぐ学校を見ていた。

「王ドラ、みんな、大丈夫かな」

すぐ近くにのび太。

そう、彼らはどこでもドアでとつくの昔に学校から避難していた。秘密道具を使えなくする特殊な電磁波がなかったし、ドラパンにあらかた道具を預けてはいるもののドラパンが出撃する前にどこでもドア、一つの道具ぐらいなら渡すのにそんなに時間はかからないものである。

ジャイアンは、戦うことを望んで残ったが、ほとんどの生徒はもう家に帰っている。

人質をとられるといった心配はない。

「あとはドラリーニヨが正気に戻ればいいのに……」
ドラえもんのため息声。

ドラえもんと王ドラはのび太から離れずにいるという役割を選んだため、加勢にも、様子を見ることが禁じた。理由はドラリーニヨにのび太が避難していることを悟られないため。だからスパイ衛星系の道具でも使えばすぐにどこか、安全な遠いところいることがわかってしまうので使えない。ただ、戦いの結果だけを待つしかない。信じるしかない。

「そうですね」
辛い。

助けにいけないことが。

でもこの場でのび太の安全を守らないと 彼らに戦うことを集中させるのが、私達の最善の策なのですけど。
翡翠の瞳が遠くに聳え立つ学校にまた視線を合わせた。

ピンク色の竜巻がドラリーニヨの背後に来る。

「させないで、ある！」

ピンク色の長い髪が巻かれていたのだ。

長い髪を振り乱した、紫水晶の魔術師がドラリーニヨの背にある機械を掴み、握力を込め、装甲を握りつぶす。

「な！」

どこにそんな力が…… というのであろう。

怒りで巨大化はしなくてもドラメットの力は相応のものがあつたのだ。

剥がれた場所から内部のコードが顕わに 緑や赤の色とりどりのコードがびっしりと詰められている。

「これであるな！」

紫水晶に写るのは黒い一枚のパネル。

装備者の想像したものを実体化させる重要な機械でもある。

すかさず、左手でそれを取り出そうと、侵入させる。

バチバチと漏電し、ドラメットの手に襲い掛かるものがあつた。あまりの痛さに顔が歪むが、このチップを壊すことが先決。

ドラメットの人差し指と親指がパネルを掴み、ひしゃげ、バキッと音を立てて割れた。

サッカーボールを模したエネルギー弾も音にあわせて一斉に消える。

「なんてことをする！」

振り返って、リーニョのすさんだ目が紫水晶に飛び込んでくる。

「ドラリーニョ！」

「気安く僕の名を呼ぶな！」

ドラリーニョは怒りに任せ、足でドラメットの腹部に蹴る。

「ぐっ！」

咄嗟のことで避けることができずにまともに、エースストライカーの、足に覚えがある彼女の反撃を受けたのだ。口から血の味がする。でも、ドラメットは下がらない。

下がるわけにはいかないのだ。

正面で、ドラリーニョを見た瞬間から彼女は止めることができない想いが出たのだから。

その想いが、ドラメットを前に進ませた。

「気持ち悪いよ！」

罵倒されても。

「下がってよ！」

何度も蹴られても……。

ドラメットはドラリーニヨから視線を変えずに距離を縮める。
緑色の法衣から出る両手がエースストライカーを包み込む。

「ドラ、リーニヨ……」

ドラメットは、ドラリーニヨを抱きしめた。

「ドラメット……三世……」

ピタリとドラリーニヨの動きが止まった。

あんなに大きな声で罵倒したのに。あんなに暴れたのに。

包まれた、音が心地よくて……互いの心臓の音が木霊する、この柔
らかくて、暖かいものを振りほどく気がしなかった。それどころか
もつと聞きたいと寄り添うように、近づく。

ドクン、ドクン。

（ドラリーニヨの音は暖かいで、あるな……）

たとえ、ビク・ザ・ドラに操られていたとしても。闇に身をゆだ
ねていようと　ドラリーニヨからの音は変わっていないのがわ
かる。

ドラメットの中でつい先ほどの怒りが、消えていくのを感じた。
やはり、親友を、憎いと思うことは出来ない。

そして哀しい。

なぜ我輩らは戦わなければいけないのか……操られているから……
そんなもの、理由にさえならない気がする。

「リーニヨ……」

紫水晶の瞳から一粒の涙が、頬を伝わり、ドラリーニヨの肩を濡ら
した。

一方ここは天上世界。

兜をかぶった女性と男性が廊下を走っていた。

フロアの照明は暗い　　ここは秘密の通路として長年つかっていないのであろう。

だからこそ隠れて逃げるには最適だった。そして追っ手にだけ逃れるしか考えられない状況にも……。

息を殺し、足跡が自分たちのものだけだと確認すると、いったん二人は壁によりかかって休むことにした。ずっと走りっぱなしで疲れたこともある。

それ以上にメンタル的に落ち着きを失った背中に羽の生えた衣服を身に着けている彼女を慰めるためにも。

「どうしてこんなことになったの……」

バイザーによって涙は見えないが、震える声から、容易に想像できる。

彼女は嗚咽を漏らしていると。

「バンホーさん、すみません……わたし……」

頭のいい女性だ。今は泣く時間さえも惜しいのは知っている。

しかし……。

「いいんだ。今は泣いても……」

心優しい騎士は彼女に泣く時間を与えた。

「ありがとうございます……」

高ぶった感情を抑えるのをやめ、パルパルは泣き出した。

騎士である自分はこのような不測の事態でも感情を取り乱すことはないが、彼女は違う。

彼女は天上世界の絶滅動物保護州管理員として働いているパルパルと、つい先ほど紹介されたぐらいで、あまり親しい関係ではないが、そもそもつい最近天上世界のことを知り、われわれ地帝国は交流を持つことにしたからもある。自分の妹のローと大差のない年の女性だということもあって、足手まといになるとわかっていても手をとって、一緒に逃げることにしたのだ。

あの邪悪なロボットたちから。

ドラえもんと同じような形であつたので戸惑つたが、気配がまったく違つたのですぐに逃げることを選択。

彼女も分かつたらしく、地の利を生かし、追つ手から逃れる道を選び、現在に至る。

（これからどうするべきか……）

祖国が乗っ取られ感情が不安定なパルパルの代わりに、バンホーは冷静に考えることにする。

「戻って来い！ ドラリーニョ」

天空からどす黒い声がドラリーニョの名を呼ぶ。

「……ビツク・ザ・ドラ、様……」

ドラリーニョの瞳がより濃くすすんでいく。

あわせて表情も凍りつくようになって 無邪気なドラリーニョ

には考えられない、無表情となった彼女が紫水晶に写る。

「ドラリーニョ……」

もう、緑の魔術師の声には反応しない。

「実験は成功した、もう帰って来い」

「はい……」

僕の主、ビツク・ザ・ドラ様の声だけを聞き、その通りに行動すればいい。

リーニョは腕のミサンガに取り付けられた一つのボタンを押した。

強制転送装置。

これでビツク・ザ・ドラ様の許に瞬時にたどり着けるのだ。

邪悪な光はドラリーニョの体を包み込み、いまもつとも敬愛している主へと送り返す準備をしだす。

「ドラリーニョ！」

ピンク色の髪がドラリーニョを離すわけにはいかないと奮闘するかのようにつくように見えた。だが、転送装置をそんなもので止

められはしない。

「……」

無駄な、ことと思った。

でも……。

声にしない、出来ない想いを持ちながらドラリーニョの姿が消える。

「ドラリーニョ……」

虚空となっても名残惜しそうにドラメットの髪は揺れた。

第十一話 降臨、満を持して……ピンクスネーク・カモン！（後書き）

ドラえもん映画も取り込んだよ、第二弾は「ドラえもんのび太と竜の騎士」。これまた古い作品ですが、バンホーさんはカッコイイし、恐竜に、超見所、風雲ドラえもん城……おすすめです。

確か記憶が正しければ作者が劇場で初めて見たドラえもん映画はこれ、です。

そして個人的にドラえもんのび太の〳〵歴代映画でベスト3に入るぐらいこの作品、好きです。

知らないとおの世で後悔しますよってぐらい（どない基準や）

ドラリーニヨは敵サイドに戻ってしまいました。洗脳がまだ解けなくてごめんなさい。

できるだけ早くなんとかしようとは思っているのですが……。
と、いうことで次回に続く！

第十二話 抱きしめた心の星白銀 今こそ時空を越えてはばたけ！（前書き）

星白銀はできれば心の中で英訳してください。

第十二話 抱きしめた心の星白銀 今こそ時空を越えてはばたけ！

けして広くはないバスタブに青い髪が揺れる。

「ふあゝ、いい湯だな……」

たしかに湯加減はいい。この身体の節々にお湯は心地よく、全身を優しくマッサージしてくれるようだ。女の子の身体になってからというもの今までよりもお風呂にはいるのが楽しみでならない。

（女ってそんなものなのかな？）

そのせいで、じっくり湯に浸かる時間が長くなってしまったのだが、それでも文句もいわずに今は女の子だから仕方がないわよ、と笑って許してくれるのび太君のママに感謝する。

ドラえもんは薄ピンク色に色付く柔らかい肌を天井のランプに翳す。体の緊張がほぐれる中、今日起きたことを思い返す。

学校生活に戻ったことに郷愁の年がなかったわけではなく、嬉しくテンションがたかった。そして油断していた。のび太君が体育の時間に気絶したことで、ドラリーニョの強襲で目が覚めたというか、痛感した。

のび太君を守ること、親友と戦うこと。

あまりにも、あまりにもこの哀しい事実がどこか他人事、絵空ごとに現実感のないと……一種の冗談ではないかと心の中で逃げていた。平和な学校生活を数日満喫しただけに、戦いの中にいなければならぬ現実を悪い夢だと思い込んだ。

（……ビック・ザ・ドラを倒さない限りは悪夢から覚めることはないのね……）

ビック・ザ・ドラの居場所がつかめない今はのび太君を全身全霊で守るしかない。ドラえもんは光に翳した手に力を込める。

「僕は絶対君を守ってみせる、のび太君！」

「呼んだ、ドラえもん？」

風呂場の近くでたまたま聞こえたドラえもんの声に反応したのび太。すっかりドラえもんが年上の女の人でしかも並の美貌ではなく、絶世が前につくほうの美しい人になっていることを記憶から消えていた。声が変わっていないから、つい忘れちゃうのよ。うん。

で、眼鏡の奥にね、映るのよ、質素で純白な肢体が。

……。

スタンド能力でも使ったのか、この時が止まった。石仮面の力で化けもんになったボスぐらいの時間。

時が再び動き出し……のび太の鼻からジェット噴射並みに大量の血液が出たのはまもなくだった。

「の、のび太くん！」

ドラえもんの声は空しく風呂場に響く。

その後、かろうじてドラえもんは素っ裸のまま倒れこむのび太を抱きしめるように地面からの頭からの衝撃を救ったのだが……のび太の血液をより少なくする結果を招いたのは言うまでもない。

下手すれば、聖衣を修復できるんじゃないってくらい。

致命傷は一つもないが、細かい無数の傷がある褐色の肌。

普段は緑の全身を覆う緑の法衣によって隠されている、傷。みんなとともに数々の冒険をしてきたもののドラメット三世ではあるものの、元来戦闘用のロボットではないし、運動能力が突発的に高いものではない。かわしきれなかった痕は残っている。

「まったくドラメットもずいぶん無茶してくれましたね……傷だらけですよ」

医療道具を取り出し、治療するのは王ドラ。

消毒液がドラメットの背中中の傷にしみこむ。

「いたいである！」

「バイ菌が残っている証拠です。何度もいいますが、今の私達の体は人間のものなのですよ。秘密道具で多少の傷はすぐに治るといえども、ロボットとは違い、脆い、軟い、傷つきやすい身体なのです」

「わかっているである」

そりやもう身に沁みて。

ドラリーニヨの高速サッカーボールは風を切り裂き、たとえボールから離れていても衝撃波のためヒリリマントといった道具が手元がないとたんぱく質の塊である今は傷ついてしまう。

「わかつているならば……なんで単身、ドラリーニヨに近づいたりしたのですか」

自ら呼び起こした竜巻に乗ってドラリーニョと対峙したことが不可解なのであろう。

たしかに目の前の王ドラや、ドラニコフ……未来にいるドラ・ザ・キッド、敵の手の中にはいるもののドラえもんズーの力持ちのエル・マタドーラといった武闘派ならドラリーニョを抑えられたかもしれない。

怒って大きくなるということができなくなったドラメットでは体格的には有利でもエースストライカーであるドラリーニョの体力に敵うわけがない。

そんなの、わかりきっていた。
でも……。

紫水晶の目を伏せる。

王ドラは返ってこないドラメットの言葉に治療する手が止まる。

「まったく、表情が読めないというのは不便ですね……」

「それは……我輩のせいではないでござる」

王ドラの瞳は閉じられている。

閉じるというか、目隠ししているというか……女性の、肌を間近で見たら照れまくって治療できないから、しかたなく……。

王ドラの目のところに「博多にわか」をやるときにかぶる半面の「目かずら」（アイマスク）がかけられていた。

よりもよってそれによつて視界をさえぎらせる王ドラ。

のび太の家の押入れに丁度眠っていたアイマスクがこれだったのだからといって、着けられればなんでもいいのか！

「この話の続きはとりあえず……」

治療を終えてからにしましょう。

コミュニケーションの基本は目をあわせること。目と目でコンタク

トをとろう！協会からの提供でした。
引き続き、本編をお楽しみください。

「では、正面を向いてください」

「触診だけでよく的確に傷薬が塗れるであるな」

それだけ腕がいいのか、医者卵、王ドラ。

どんだけ苦労したのか、想像するのも身震いする猛特訓の末に会得したと聞いてはいたが……その努力を女の子の前に揚がってしまう自身の欠点を克服するのに持っていかなかったのか、て、というかその欠点を直すほうが明らかに医者として患者に接するには必要なのでは？

治療してもらっているため、その考えは奥にしまいこんでいる、ドラメット三世であつた。

「んっ……」

胸の谷間に入り込む、王ドラの手。

血液の流れを司る心臓の音を聞くことで傷ついている場所を知ることができるといふ。

ひんやりとした指先が、一番体温が高まっているところを触つてくるのだから、ドラメットは思わず反応してしまう。

「声、出さないでくださいよ」

「それは仕方がないである」

感じるものは感じてしまうのだから。

王ドラに指摘されてますますドラメットの体温と心拍数が上昇する。王ドラもつい自分の言霊で意識してしまった。

（ドラえもんズの皆が女体化しているのですよね……）

小学生のときはちんちくりんの体なのでたいして意識をしていないが、アダルトバージョンの皆は……確実に自分は揚がってしまう。自分の姿でさえ、鏡で見たら……数分間もじもじして動きがとれな

かったぐらいだ。

博多名物によって目をさえぎってやつとまともに話せる自分。素で見ればかなり滑稽だ。

（とにかく治療を……）

ドラメットの腹部は打撲したらしく、内臓も傷めている。

王ドラ特製傷ナオルZを塗りこんでおかないと食べるのも辛いだろう。

（ドラリーニョに直接叩かれた、結果でしようけどね……）

ダメージでわかる。

よくもまあ……満身創痍で家に帰ってきたときも啞然としたが、こんな打撃を受けてもドラリーニョに恨み言一つ言わずに……。

すまん……ある。

謝罪と慈愛がごっちゃになったなんとも哀しい微笑みだった。

（己の力量の不甲斐なさに……それはドラリーニョを救い切れずにいるからなのでしょうが、ね……）

ドラリーニョの説得を再チャレンジさせるにも、まずドラメットは傷を治さないと。

王ドラは指先で丁寧に、塗りこむ。

真剣に、彼女の額から汗が流れてくる。

その汗が……博多名物をずれ落ちさせるとは思わなかった。

「あ……」

翡翠の瞳に映し出される、大きなチョコマン二個。

照れダンスが今開始された。

「しっかりするである、王ドラー！」

二階ののび太の部屋もまた賑やかになった。

王ドラの力が、暴発したのも、同時刻であった。

王ドラの意志とは関係なしに揺れる時空の壁。たまたま交差していたタイムホールの時空に反響し、乱れ、その影響で予期せぬところに繋がってしまった。

「はて？　ここはどこなのでしょう……」

丸っこいピンク色の兔が周りをキョロキョロと見渡していた。

森、なのか茂った草木が周りを囲んでいる。

しかも自然の。

自分が知っているブリキ草木とはまったく違うのが一目でわかった。
「うっっん……」

たしかに、自分はブリキン島からでた身だ。

サピオ様の命により、お客様でチャモチャ星をロボットの支配から救ってくれた通りすがりの正義の味方様にお礼と称して再建したブリキンホテルにて純粹にバカンスを楽しんでもらおうと、招待を目的に地球に来た、はずだ。

で、トランクのゲートでのび太宅に時空を繋げたのは確認し、飛び込んだ、はずだ。

なのに……。

「これは、いったい……」

ジャングルではないにしろ、明らかにモニターで確認していた光景と違うところにでてしまったのだけは確かだ。

「故障かな？ サピオ様になんていおう……」

ため息が漏れる。

せつかく地球の友達と……年相応の子供同士の交流の機会を遅らせてしまうのは忍びない。

のび太様たちと遊べるぐらいの体力をつけるために頑張ったサピオ様のトレーニングに付き合っていた自分に……なにより行く前にあのサピオ様の笑顔を見た自分には……。

今度こそ下心もなく純粹に遊べることに喜んでいるサピオ様の笑顔を曇らせたくはない！

好感度を高くしたマススコット系のおとぼけ顔のあるものの主人への忠義は高い兎型ロボット、タップの心は今燃えていた。

「ちょっと目的地からを遠くたっただけかもしれないし……探索をしましう！」

自身の跳躍能力は軟なものではないし、危険なことがあつて高められている聴力で回避できるはず。

「ん？」

さっそく、自分の自慢する耳から物音が聞こえてきた。

足音は二つ。歩数と地面を蹴る音から、なんらかしらの自分と同じ大きさの小動物とあとはサピオ様とそう変わらない年代の男の子の足跡だとわかる。

人間が居る、ということに安堵する。でもタップはどこかに隠れて様子を伺うことにした。

お客様以外の方に自分の姿　ボールと変わらない兎型ロボットではまだロボットがそんなに小型化&自律化が一般的にされていない地球では不審に思われてしまう。

下手をすれば、捕縛、解体……。

見世物で終わればいいほうだ、と思うことになってしまいかねない。小さい体を活かし、タップは草むらに上手く潜る。

草むらに転がったサッカーボールは見つかりにくいのも同じでよっぽど執拗にくまなく探さないかぎりはタップを見つけることはできないだろう。

息をこらし、気配をけして、たまたまこの地域に足を踏み出したものたちを見る。

敵意は……感じない。

見たこともない小動物が、楽しそうに草木を噛んだり、匂いを咬んでいたりと平和そのもの。

ポッポコツと可愛らしく鳴いている。

「待てよ、ポポル」

そして飼い主なのか、こちらも見ただこともないが、ジャラジャラと眩いアクセサリーをつけ、豪華な兜をつけた少年がにこやかに笑っていた。

「あ……」

タップは少年の顔を見て、思わず感激した。

「お客様〜！」

「え！」

ティオにしてみれば丸っこくて可愛いのが面妖なピンクのボールが飛びついたとは思っていなかった。

のび太と同じ顔ゆえに起きた出会いであった。

第十二話 抱きしめた心の星白銀 今こそ時空を越えてはばたけ！（後書き）

ドラえもん映画も入ってきたヨ！ の、今回は「ブリキの迷宮」と「太陽王伝説」。

比較的新しいものを入れてみました。

なんでタップが……と思う人も多いと思いますが、コアなマニアならわかってもらえるはず……ヒントは声優。

それにしてもタップは可愛いよね。能天気そうで主人想い。だからあのキャラと同じ声の人に……。

マニアックな話はこれまでにして、では次回をお楽しみに！

第十三話 Xファイル「月はでているか！」（前書き）

注意：ドラミとキッドの出番がまったくありません。

それにこの題名の元ネタわかる人が何人いるのかもまったくわかりません。

第十三話 Xファール「月はでているか！」

月明かりの下、ふんわりとした柔らかいベッドに黄緑色の髪の少女は埋もれている。

占拠した天上世界の、外交などでよく使われる一流ホテルのスイートルームだと言われているが、ドラリーニョにとって見れば、ふかふかなベッドであることの方が重要。

団子にした髪を解き、サラサラなストレートヘアのまま布団にダイブ。瞼を閉じれば今日の戦いを思い起こす。

爆風に飲まれる校舎に、光線と竜巻が舞う戦場。赤が少なかったのが、不服だが、仕方が無い。自分はそこまで突き進むことができなかったのだから。

邪魔をしたのは未来から来た道具の使い手たち。戦に馴れているのか、原住の輩にも苦戦した。悔しいといえば悔しいが、それ以上にドキドキする。

困難な皆ほど潰し概があるから。

それに、今日はビック・ザ・ドラに褒められた。

「実験は成功したと、ビック・ザ・ドラ様は喜んでいらつしやったし」

イメージを現実世界にエネルギー体として形成させる玩具。

たしかに想像するだけで瞬時に願ったものができることは便利だ。乗っ取った天空世界の技術を使用し、二十一世紀で生産するのだからバグがないか不安だったが、ドラリーニョが使用したものは完璧だった。何も不都合なものは無かった。

ただ、彼女が未来で何度も使ったことがあるシステムなので難なく

イメージを掴んだものに過ぎない。

今、人間マリオネットによって操っている天空人たちに搭載してもうまく使いこなせるとは思えないけど。

（次はどんな面白いことするかな）

ドラリーニヨはふと、このことについて深く考えるのをやめた。

自分はそんな深く考えずに、ただビック・ザ・ドラのいうとおり町や世界を破壊すればいい。身体を動かすだけで十分だから。

あの、緑の魔術師と戦うのが何よりも楽しみなのだから。

褐色の肌に飛び散る細い線、血吹雪。

きれいだな、と思った。

野獣のようにさわしなく動く月の瞳を持つ狼の鋭い爪との交戦もちろん好きだが、ピンク色の長い髪を惜しげもなく風になびかせる姿は人間たちの空想で言う精霊そのものである。ぞくぞくしてくる。

「ドラメット三世……この僕が痛めつけるから！」

ドラリーニヨは枕を握り締め、うつとりと微笑んだ。語る内容とは裏腹に、その表情は恋人のことを語るように甘い。

それこそ絶対忠誠を誓わされたビック・ザ・ドラといえども自分とドラメットの戦いだけは干渉させない。おそらく今のドラリーニヨにとって破壊衝動を満たす上位の存在がドラメットなのだ。

狂わされた感情は親友を傷つけることに躊躇を無くすどころか、快感を与えている。

これが戦闘兵器の……あるべき姿。

命令に率直に従いすればいい。

そう結論づけ、明日に備えてドラリーニヨは寝ることにした。

明日はこの天空世界でまだ操られていない住民たちを、隠れている

人々を見つけ出せ、と命令された。

それができたらまた緑色の魔術師と戦っていいともいわれた。

「さつてと、ドラメットをズタスタにして、ビク・ザ・ドラ様に
今度こそ献上しよう」

すでに天空人の捕縛は当たり前前田のクッサー前提。そんな簡単な
任務なんか時間をかけずに終わる。

ドラメットの再選の方がドラリーニヨには重要で……その無邪気さ
は雨天で延期した遠足を楽しみにしている小学生のようであった。

ドラリーニヨはうつうつとした時、肩がとっても熱いと感じた。

その熱はドラリーニヨの意識が遠のくまで続く。

「なんだろ……」

そういえば今日の戦い、ビク・ザ・ドラから出撃を許可され、思
いっきり暴れたのは覚えているのだが……緑色の魔術師が自分の後
ろに飛びかかり、背中の飛行ユニット兼イメージ増幅器を壊されて
……それ以降が思い出せない。

気がついたら、ドラリーニヨはビク・ザ・ドラの膝許に拠りかか
っていた。

ビク・ザ・ドラが微笑んでいたその嬉しさで忘れていたけど
……ま、忘れていたらそれでいい……戦っている最中にもドラメ
ットに聞くから……。

優しい、ドラメットなら……。

ムニャ……。

月光浴を楽しんでのび太の部屋に戻ってきたドラニコフが見たのはかなり異常な光景だった。

鼻血を噴出しながら布団に寝ているのび太と、なんかぴくぴくと動いている橙色の団子虫……王ドラの三つ編みだろう。王ドラは髪だけを外にさらし、体全体を毛布にもぐりこませ、相対性理論をなぜか唱えている。

「がう？」

本当に何が起こったのだろうか。

「あ、おかえり、ニコフ」

ドラえもんの声。

廊下から聞こえてくる。

どうやら、一階で何かをとりにいったのだろう。

言葉が通じそうな状態ではないのび太と王ドラから聞き出せないが、

ドラえもんならニコフが思った疑問に答えてくれそうだ。
期待の目を向けて、足跡のするほうに目を向けた。

「……」

そしてニコフはドラえもんの姿を見るなり、妙に納得した。
どうやらドラえもんは未だに今の姿に自覚が無いみたいだ。

氷嚢をもっているのはび太のことを考えてだろう　しかも、間
を措かずに用意して　それこそ着替える時間がおしいとさえ、思
ったのだろう。

だが、それでも……。

「がう、がうう」

いったんのび太の看病は自分に任せてくれと、ドラえもんに言った。

「で、でも……」

何が原因なのかまで知らないが、ドラえもんが戸惑っている。

でも、このままの艶姿のドラえもんで看病する方が問題だ。

ドラえもんが風邪ひいたらいけないだろうとドラえもんを部屋から
退場するよう言い聞かせる。

「じゃあ、任せたよ、ドラニコフ」

正当な理由にドラえもんは文句を言わずにドラニコフに持ってきた
看病セットを手渡し、ふすまを閉めた。

「す、すみません……ドラニコフ」

音を聞いて、王ドラが顔を出す。

うん、王ドラが顔出せなかったのはわかっている。

だって、女の子に免疫ないんだものね。

白いバスタオルを巻いただけのドラえもんを直視できないのは当然
だよ。

「そうニコフがいうならば……あ、ドラメット、下りてきても大丈

夫ですよ」

傷ついた身体を見せなくなかったので咄嗟に天井に隠れたのはいいが、下りるタイミングがつかめなかったドラメットだった。

太陽の光を反射し、月が隠者たちの後ろを照らした。

彼女の名はリルル。

前の時代ではスパイとして戦闘能力を重視した頑なな残酷な人形。そして今は、時空を越え歴史を改竄したことによってもとの妖精とも天使とも通じるような可憐な少女として生まれ変わった少女である。

彼女は今暖かさも冷たさも併せ持つ漆黒の宇宙　怖がる人は多くとも、耐性のある彼女にとって見ればどうってことはない　闇に浮かぶ星、緑と青の惑星を見つめていた。

太陽という恒星の光を恩恵として受け取る地球という優しい大地に暮らす、自分に思いやりという温かい感情を回路から引き出してくれた優しい人がいる星。

「しずか、さん……」

生まれ変わったのはいいが、リリムはしずかには会うことはできない。

気恥ずかしいというのもあるが、運命によって妨げられている。

今のリリムが地球でドラえもんたちと出会うことはタブーなのだ。

それは、ロボット惑星メカトピアの歴史を変えたことによる、そして生まれ変わった代償。

禁忌については生まれ変わった瞬間に理解できた。

メカトピアと地球での戦いをなかったこと　パラレルにしたこと　によって、その原因となったりリリムとドラえもんたちにあうことはタイムパラドックスを起こしかねない危険なものになってしまったのだと。

（一目見えただけでも……十分）

翡翠色の瞳が閉じられる。

たしかに正常ならばリリムはドラえもんたちをあつてはいけなかったが、時空が乱れたときの狭間の時間ならリリムがドラえもんたちとあつてもなんも問題はないという抜け道があった。

正常に動いていない時間はあらゆる禁忌が許される絶好の機会。

その僅かな時間を感じし、地球に下りてのび太に手を振った。
リリムは僅かな時間でも、喜んでくれたのび太を見て、胸に温かい
ものを感じた。

時空が乱れることは、現在を生きている自分たちにとって好ましい
といえはしないが、でも……もしそんな時間が着たら迷わず日本に
下りて、今度はしずかに会いたかった。

言葉を交わせなくても……。

自分が無事にこの時代を生きていることをアピールしたい。

人知れず、宇宙の漂いながらも。

「ねえ、あなたもそう思うからこそ教えてくれたのでしょうか」

リリムはその裏技を教えた、《彼》に向かって声をかけた。

今はノイズだらけで聞き取れないだろうが《彼》はリリムのすぐ近
くにいる。

《彼》は肉体を数百年前に失ったため肉眼では確認できないだろう
が、アンドロイドであるリリムにはわかる。

《彼》はサイバー生命体。

人間で言うならば靈魂と言えいいだろう。

アンドロイドやロボットはデータがあれば何度でも再生が利く。

しかし、内部の特に人間で言う脳や心を示すCPUやOSが破損す
ればもとの人格には戻れない。ただ、一部の例外を除いて。

それは全人格を電子化してしまうことである。

人間のような肉体に縛られていないプログラムだけの存在だからで
きること。

プログラムだけの健在なシグナルをサイバー生命体とリリムの世界
では称している。

聞くところによると《彼》はもともとあるゲームのプログラムとし
てこの世に生を受けたという。

実体化モジュールを使用し、人間の姿に変わった。
丁寧にあんぱく質で構成した肉体を作り出して。

彼の母体でもあるゲーム機はある事故で破損、起動が不可能となった。ゲームの世界には戻れなくなり、時が流れ、《彼》の肉体が死滅。その時、死ぬと……存在が消滅すると思っていたが、《彼》はもともとプログラム。

たまたま死滅した環境によってプログラムが誤作動を起こし、偶然にも宇宙の大気に溶け込むプログラムDNAが設定されたという。それによって《彼》の思考は実質上この宇宙を消滅しない限りは永遠に眠りにつくことはなくなった。

その間、世界の運命についていろいろな知識を得たという。

無限に等しい宇宙の力を僅かに感知する力も習得。実体化ができなくとも《彼》は空気の振動を利用して脳波に直接語りかけるような『会話』ができるようになったのも最近だと言っていた。

リリムは《彼》に感謝している。

たしかに《彼》は不思議な存在だ。不気味だとか、恐怖もあった。でも……《彼》はドラえもんたちのことを知っている……自分と同じく、心を教えてもらった恩義がある人物であるという。

ドラえもんたちに会えない運命を受け入れるしかないとき涙を流したりリリムに見かねてアドバイスを送った優しい《彼》。

「あなたも、のび太さんに会えるようになったらいいのにね」
現実世界で。

今の科学力では無理。ゲームのモンスターを実体化するシステムが構築されていないから。

PCに乗り移ってメッセージを送るとしても《彼》の容量が重すぎ

てすぐにショートしてしまっし、ウィルスと同じく本来は意図して送り込まれたものではないのでファイヤーウォールで妨げられてしまうという。

《私は夢の中で交信しただけでも、十分ですよ》

けて私の存在が認識されなくても。

この時空で……頑張っている姿を拝見するだけでもいい。
だから……。

《彼》はもしこの時間内でドラえもんたちと再会できたとしたら、それは、けしていいものではないことをうすうす感じていた。

二十二世紀で生まれる、はずの機械ができるということは……しかもあまりにもリアルすぎて後に発売禁止になってしまうゲームによって生み出された自分だから。

でも《彼》の、平和を念じる想いは……あまりにも無力だった。

地球で起こっていることを知らずにいる少女の桃色の髪が漆黒の海に浮遊する。

モフモフとしたふんわり柔らかボディの丸っこい兎は王宮をヒョコヒョコと飛んでいた。

「では、ここは日本ではないのですか」

ここは至って平和なマヤナ国。

「そうだ。それにしてもお前も面妖な生き物だな」

青い古狸、もといネコ型のドラえもんのことを指しているのだろう。

「この姿はサービスでございますから」

子どもにうけるための。

現に街中ではもみくちやにされてしまった。

その姿を見て、ティオはさすがにこのままタップを街にいさせるのは辞めたほうがいいと王宮に客人として招いた。

「タップとやら、のび太はお前のところではどんなことをしたのだ？」

のび太や日本のことを知っているのだから、彼らの友人である可能性があるし、タップが彼らとの冒険話にも興味があった。

「えっと、ですね……」

タップもののび太と同じ顔をしているこの王子に興味を持っていた。サピオの元に戻る前に、ティオやこのマヤナ国のことを土産話にもつていこうと思った。

（ブリキンには連絡ついておいたし）

なぜか今、チャモチャ星に戻る時空が繋がらなくなってしまったらしい。連絡を取り合うぐらいなら簡単に出来たのでそんなに慌てない、タップだった。

「話が長くなりますが、よろしいですか。それとティオ王子様のほうはどんな冒険でしたか？」

「話の交換か……面白い。夜明けまでは、じっくり話し合おうか」王子といえども人の子。子どもらしい無邪気な顔でタップと向き合う。

「しっかし、そうなれば長くなるな……何か食べ物を持ってこさせるか？」

「いえいえ。夜食はこちらで用意させてもらいます」

タップは口を大きく開ける。

異空間に繋がっている　ドラえもんという四次元ポケットと同じでいろいろと詰め込むことができる。

取り出したのはウルトラマンが地球で活動できる時間でできる文明の機器、世界が誇る日本の発明……カップラーメンだった。チャモチャ星ではどこが発明したか、知らないけどね。

「お湯もありますので」

「なんとも素晴らしい」

再びこの味に合えるとは思えなかったティオは満足げに頷いた。

赤毛の髪の乙女は宙を見ていた。

濁った眼でも月はその美しさを変えることなく深々と淡い光を放す。その落ち着いた情景に彼女は我慢できなかった。

「ビク・ザ・ドラ様……明日の月を赤くしてもかまわねえか？」
エル・マタドーラの邪悪な瞳が一段と輝く。

力を使い、未来と今の時間を狂わせていたものの……そろそろ体が疼くのだろう。

ビク・ザ・ドラはひとつ間を置き、にやりと笑う。

「いいだろう……たまにはお前も動かないとドラリーニヨまでとはいえないが不満なのであろう」

「まあな。ふふ……明日、天上界の奴らを掃除する楽しみができたぜ」

いやらしく笑う、エル。

「いい忘れたが、科学者だけは使つなよ。まだ、アレが有効なのかわからんのだからな」

実験は成功したが。

「わかつているって、ビック・ザ・ドラ様。だからこそ、アレでこの夜を彩りたいんだよ」

楽しみだな、と悪女はビック・ザ・ドラのいるこのリビングに翳された水晶を見る。

水晶に写し出せられている校舎。復元光線でせつせとドラパンが内装を修復している、のび太の通っている学校だった。

第十三話 Xファイル「月はでているか！」（後書き）

ジャイアンの回想シーンのみで終わらずに、「のび太と鉄人兵団」はじめました。（中華料理店風に）

でも冷やし中華って日本でできたのですけどね。

ドラパン、ひとりでこそそと修復作業に勤しんでいます。理由は女の子に真夜中まで外にいるのは危ないからという、紳士的発想です。

そして終わったら、ドラメットの微笑みと用意されたカマンベール入りドラ焼きとともに「ありがとう」でお腹いっぱいになります。次回書けなかった様にここでネタばらしします。

できれば上手く文章に出来るように努力はしますが……できなかったらごめんなさい。

そももってこの小説ののび太の倒れる回数が非常に多い。このままだとのび太が何回倒れるのか……では、そういうことで次回に続く！

その間に何かに（ドラズ以外の何か）浮気しそうな気がしないでも……（意志弱！）

第十四話 元気はつつ、カマンベールD！（前書き）

Dはドラ焼きのD！

第十四話 元気はつらつ、カマンベールD！

ロボット養成学校、制御室。

ガラス張りのモデルハウスのように清潔で綺麗な大広間。

学校の生徒たちが気楽に立ち寄る、学校のすべてを指揮する人気者が中央にいる。

白いいかのボディー、電子頭脳は二つあるメインモニター。

かつて七不思議を組織し、学園を混乱に招いた男性型。

優しいお母さんを模したしっかりもので温かい女性型。

一見二体の異なった性質のものであるが、二人の愛の力（暫定）で学園の平和は守られているのだが、予期せぬ事体のため……。

「おーいつ、おーいいいつ、ぐぼおおあ！」

「おちついてダディ十三号」

緑色の画面映像が取り乱している。

ドラミは言葉をかけるが、そんなうわべだけの言葉でダディ十三号が落ち着くわけがないだろう。最愛のマミー十四号がウイルスに、その命が蝕まれているというのに。

ドラミたちを制御室にいかせないと警備ロボはマミー十四号の指示
いや、正確にはビック・ザ・ドラの指示によって内部にもぐりこんでいた彼の手下によるクラッキングによりコードを、電子頭脳を侵されたものであった。

共用しているダディ十三号は電子の海に閉じ込められていたが、制御室にはいったドラミの手によって表面に起き上がる。

そして同時にマミー十四号が今どれほど危険な状態なのかわかったのだ。

号泣するダディ十三号。

なまじ優秀なために絶望的なこの状況を理解してしまう。

「ど、どうしよう……キッド……」

ドラミは後ろに控えている金髪美女に声をかける。

いつ、敵が襲ってきてもいいようにと、扉に神経を集中させていたキッドではあったが、ドラミや泣き崩れているダディ十三号に思うところがある。

「エド、すまねえが……ちょい、気張ってくれねえ？」

「あんさん……ま、しかたがないわ」

ダディが正常に作動しているので急に敵が出てくるわけがないと思うのだが……いかんせん彼はあんな精神状態だ。それに戦いの最中であれば主砲が他のところに気を使うことは避けたいもの。だがこの中ではダディとのいろいろと面識がある方にあたる、キッドにしかダディを抑えることはできない気がエドは感じていた。

くせのある金髪を掻き揚げ、キッドはダディ十三号のまん前に歩み寄る。

「よ、ダディ十三号。いい加減おちつかねえか？ このままじゃ、学園や世界がやばいってこともわかってるだろ？」

どこにいるかわからない、ビック・ザ・ドラの手先によって 学園は、そして 。

「でも、ハニーが、ハニーが……」

「お、おま、マミー十四号のこと、そういつているのかよ！ 恥ずかしくないのか！」

キッド、思わず赤面。

「愛を語るのに恥ずかしい言葉なんか存在せん！ ハニーというのは俺しかないのがいいって……ハニーが言っていたし！」

「無駄に男らしいな、おい！」
バカップルの近状を聞くとなんで、だろう……こつちまで熱くなるのは。

「愛しているのね……マミー十四号のこと」

「当たり前だ、ドラミ。それなのに……ハニーが……」
沈んでしまった。

0と1の数字の羅列のロボだから。不躰で野蛮なクラッキングのせいで修復不能までマミー十四号のデータを食いちぎっていく　ワクチンを投与しても、自我といわれているコアデータにさえ手を伸ばしてしまったウィルス。もはや　。

「失ったデータまでは……戻らないというのに！」

バックアップしているものがあっても……コアまで干渉されてしまった今ではマミー十四号だったものは同じマミー十四号として元通りに機能だけは元に戻っても、けして同じマミー十四号にはなれない……可能性が高い。

ダディは速攻で作ったワクチンプログラムをマミーにインストールしている中、その最悪な結果を考えては涙する。

「くっ……なんで、俺ではなく、ハニーを……」

同じ、学園の制御を司るのなら　型の古い自分の方を狙うのではないか。

そんなダディを碧眼が一笑する。

「いや、俺がもし敵だったら、やはりマミーのほうを使う、な……そりゃ、お前はたしかに型が古いが、経験が豊富だから。対処されると思われる。たとえクラッキングされようと……それを上回る何かを仕出かすのではないかと。なんたってダディは俺らドラズ在校生のメインだったからな」

「……そうかも、な」

「？」

キッドのいった言葉でダディの表情が変わった。

さっきまでの悲しみに打ち砕かれた目から……温度が絶対零度まで下がったように冷たいなにかが流れている。

「そうそう、その目。やっぱ、ダディ十三号だな……」

「ふん、キッド、俺を過大評価してくれるのはうれしいが、お前こそ、大丈夫なのだろうな……」

キッドはにやりと勝気に笑う。さらしで隠している豊満な胸が揺らし、左手に持つ空気砲をダディ十三号に向ける。

「愚問、だぜ。それじゃ、今から、俺たちでそんな敵たちの期待に応えてメイクミラクルと洒落こもうぜ」

……いやな運命を断ち切って見せるぜ。

俺の力で……マミー十四号が、また彼女自身として蘇るという奇跡を！

キッドの親友テレカがわずかに光った。

「動き出すか、運命の裁断者が……」

学園のある倉庫にいる黒い影が呟く。

「余の姿を見て……驚くだろうな」

人の憎しみや嫉妬、争いによる悲しみを養分としていき、成長し続ける妖怪である自分。

人が生きているうちは消えることが許されない絶対悪
百目王は
重い腰を上げた。

「さて、そろそろ本腰入れて彼らのキーを……」
ドラえもんの青いキーは自分たちをこの世に呼び起こした礼として
ビック・ザ・ドラに献上した。だが、他のドラズのは彼の手の
中にはない。

だいたいこんな広い学園内をランダムに飛び散った小さなキーを探
し出すのには一苦労する。ドラえもんのだけは見つけ出せといわれ
たので百の目もある自分の力をフルに使用して探し出したものの
疲れた。

はつきり言っただるい。

少しの間眠ることにし、部下に任せていた。

百目王はキーを奪い去るために着たのではない　　そもそも百目王
がここに来た理由には繋がらない。

彼はビック・ザ・ドラに加担した。だが、彼にしてみればただビッ
ク・ザ・ドラが撒いた祭り騒ぎに乗じて、この世界で一暴れしよう
と考えただけ。

ドラえもんズを憎いという考えはないわけではないが　それは彼
らに敗れた『前任者』の話であって、今の自分の考えではない。

（まあ、ドラえもんズが悪に染まって世界を混乱させるのを見るの
はまた一興なのだが……）
それ以上に知りたい何か。

（どちらに転ぶかな……ドラ・ザ・キッド……）

妖怪である自分だからこそ、興味を注がれるキッドの過去。

彼はおそらく悩むだろう　その悩みの中で、自分たち妖怪たちと
手を組むという未来を選んだとしたら　嬉しいものはない。

実に愉快だ。

わざわざマミー十四号をハッキングした手間を無駄にしないために
も。

百目王の目がギラリと光った。

八時過ぎ　やつのことで学校修復＆学校で起きた戦闘の記憶を人々から消したドラパンがのび太家に帰宅した時間である。のび太の部屋の窓をそつと開け、畳のある部屋に降り立つ。

「おかえりで、ある」

ドラメット三世が長い髪を揺らし、ドラパンを出迎える。

他の皆は風呂か、テレビを見ているのか丁度二人しかいなかった。

「ああ、ただいま」

他人の家で、出迎えの挨拶とはと苦笑するが、褐色の肌がもっているドラ焼きがドラパンの目に飛び込む。

「あ、それ……」

「今晚、玉子殿に台所を借りて作ったのである。少々で気が悪いかもしれないであるが、具はカマンベールにしたからドラパン専用である」

ジェドローラほど器用でなくも、好物ぐらいなら作れる、ということか。

「ありがとう、ドラメット」

ドラ焼きは出来立てらしく、程よい温かさが感じられる。

その温かいものはそのまま口に入り、ふんわりと滑らかな舌触りにカマンベールの高貴な匂いと味が一緒になってドラパンの味覚センサーを刺激する。

「うまいな」

「口にあつてよかったである」

紫水晶の瞳が微笑む。

一服し終わり、ドラ焼きの養分が全身くまなく回ってきたのか、疲労した身体を癒し、ドラパンの頭が回転する。

聞きたいと思っていたこと、不思議に思ったことが脳に噴水のごとく湧き上がり、一句一句が文章としてまとまってきた。

「そういえば、親友テレカを使わなかったのは……なぜだ」

気になっていた。ドラメットはたしかにドラリーニヨの前にいったと思っていたのに　砂煙で詳しくは見られなかったが　すぐ側に来たならばあの無限の力で、ドラリーニヨの洗脳をとけばよかったのに！

ドラメットの瞳が揺らぐ。

「ダディ十三号のときとは大きな違いがアルである」

言いなりアンテナはたしかに強力ではあるが親友テレカと熱い友情

の前ではオーバーヒートし、粉々になった。

「ドラリーニヨ、エル・マタドーラには我々が友だったという記憶がないのであるからな……」

消されている、から。

手駒にされると……あいつはいいように操るために、要らない感情や情報を消去させられている。

「やつから受けた洗脳では……親友テレカの力が利かないのである。だから、ゆるせないである……」

そう、戦って、相手がある程度弱られてからではないと……。

かつてドラえもんとのび太と戦った自分だからこそ、よくわかる。

「でも、我輩は……」

ドラリーニヨを目の前にして……飛行ユニットを破壊することをしたが……自分に果たしていざ友を殴る勇気があっただろうか？抱きついて涙をこぼした自分に？

……前は王ドラと組んでドラリーニヨの洗脳をといた。そのとき、自分は後衛支援に回って 結局、拳を交えたのは王ドラ。自分は結局仲間に手を上げることなどできるのか？

「ドラメット……そういえば聞いてみたいことがあるのだが……いいか？」

「なんであるか、ドラパン。我輩に答えられることならば、なんでもきくであるぞ」

「お前たちのことを調べていたときから気にはなっていたのだが……」

……
アチモフの姦計により、ドラえもんズと戦うことになったドラパン。その時ももちろんドラえもんズのことを調べた お人よしでマヌケな奴ら しかし、在学中、表でも裏でも学校が何回も襲撃されているのに……誰一人犠牲も出さずに撃退し、解決している。

伝説の秘密道具親友テレカの力だと、されてはいるが。

「親友テレカを獲得する前から、学校は襲撃されていたよな……なぜだ、そしてどうやって撃退していたのだ？」

「そ、それは……」

「お前たちの強さは親友テレカによるものだけではないのだから？」
たしかに、それはそうだが、それを説明していいのだろうか

……。

「あ、それ僕も聞きたーい」

「の、のび太殿！」

部屋の主がなぜか現われた。

「テレビが面白くなかったからに決まっているよ」

「決まっているのであるか？」

ドラえもと王ドラは興味津々だけど、とのび太は付け加える。

ちなみにこの時の番組のタイトルは【子どもの心と身体は硝子のようである 現代の子どもとあなたはちゃんと付き合っていますか】
だったり、する。

…… たしかにそれはお子様にはちよつと重い内容であろう。

「ドラメットの話って面白いし。僕もちよつと興味あるよ。ドラえもんズの強さの秘訣っていうか」

それだけでなくドラえもんズの皆は個性派ぞろい。

「それにさ、ドラメットの魔法みたいに道具が出せるのってカッコイイよね」

「あ、あのキーワード操作か…… たしかに」

特化型ネコ型ロボとして知る人は知るドラメットの特殊機能。

お手伝いロボとして、呪文を唱えれば道具が出てくるなんてもう夢がいっぱい詰まっているよ、子供たちの年代はもう、イチコロ
大きなお友達の中でも大人気

のび太が魅了されるのはもとより、ドラパンもドラメットにつけられている特化プログラムには羨望のまなざしがある。

ドラパンにはキンキンステッキがあるが、あれはミミミから譲ってもらった物質変換装置を先端につけているという　早い話、自身に備え付けられたものではない。

ネコ型ロボットとしてならばそれでも構わないのだが　しかし目の前にもすごいものをプログラミングされているロボットがいたらやはり心持が違うというもの。

仕事（泥棒）をするときにあったらいいなあとか、思ってしまう。

「まだ一般普及していないのが真に残念な機能だな……」
率直に思う。

「それは、まだ我輩がたいした成果を出していないからであるよ」「生産コストを上回る、成果のこと。」

「それに我輩の機能を目につけられて、不埒輩らに狙われることも多いでござるよ」

デメリットばかりが目立つといわんばかりに苦笑いする、ドラメット三世。

「え、それって……じゃあ、生まれてからずっとなんじゃ……」
「あ……」

今日ののび太は二回も気絶したためか頭がすっきりと整理され、いつもより感が冴える少年になっていた。

ドラメットも失言したと後悔しても遅い。

ドラメットの特化プログラムは兵器、暗殺　裏業界では使い勝手のいいものではないかということとでドラメットの機能を狙い、学校が襲撃されたことがあったのだ。

それが、親友テレカを獲得する前の話で　。

（ドラリーニヨと、我輩が友として出会ったきっかけであったであ

る……)

さあ、話てしまおうか　ドラえもんがまだ生まれていなかった
ロボット養成学校がもつとも裏の社会から狙われた時代の幕開け
となった襲撃を　。

ダディ十三号だけが学園の制御を司っていた時代。

正確な時間は覚えていないが、太陽が燦々と輝いていて　学校全
体が一望できる景色のいい築山の木陰にドラメット三世は一人、壺
を地面に置き、笛を吹いていた。

壺は自分に備え付けられている特化プログラムを効率よく動かすた
めの練習装置。

笛の音色　プログラムを展開させている証　が大気を振動させ
ることによって、壺の中の蛇たち　実践では道具　が操られる
ようになるという。

「はあ、はあ……」

笛を吹いているのだから息は切れる。

あれこれ二十分訓練したが、まだ蛇たちが集団冬眠しているがごとく一匹も応えてはくれない。

「まだまだであるな……」

自分としてはこつというか、何か手ごたえみたいなものを感じるのではあるが、うまくいっていない。前例のないロボットに備え付けられたプログラムだから、誰かを参考にするわけにもいかないのが難しいだろうと言われ、コントロールが上手くいかなくても大目に見てもらえる。

だが、ドラメットはこの状況に甘んじるつもりはこれっぽっちもない。

学校のカリキュラムにと併用して自身の能力を高めるのは簡単なことではないのは知っている。しかし存在意義 自分は魔法を使うように道具を出すロボットである ということを誇りに思っている。

今のところ、笛の音色にあわせて出てくるのは……四次元ランプにしまっている自分の大好物のドラ焼きのみ！

……自分に正直すぎる……ちょっと泣けてきた。

ドラメットはごしごしと目をこする。そう、彼には悲しんでいる暇はない、そんな時間があつたならば練習あるのみ。涙を拭い去り、壺に神経を集中させる。

笛を口元に当てて……吹こうとしたときだった。

黒い丸い影が、ドラメットの眼界にまっすぐ、猛スピードでやってきたのは！

「へぷしー！」

アメリカがうんだ炭酸飲料を連想するメイカーの名のような謎の叫び声を上げながらドラメットの背中では地面に激突、顔にめり込むのはサッカーボール。

「ごめん」

サッカーボールを蹴り上げた張本人だろう……心底申し訳なさそうな声がドラメットの耳に入ってくる。

特別クラスでいつもニコニコ笑う、無邪気な子どものような声、声音データからするとドラリーニョだ。

クラスメイトとしての出会いはそっけなく、意識を持つときは最悪な状況。

でも、それがドラメット三世とドラリーニョの友情が目覚める日になるとは……。

太陽を背に巨大でまがましい邪気を放つ飛行物体が彼らの頭上をよぎったのはまもなくであった。

第十四話 元気はつらつ、カマンベールD！（後書き）

次回はネコ型ロボットの姿でお送りします。

黄色いドラえもんは登場しません。

ロボット養成学校時代のドラえもんズも可愛いですよ。学生らしさの青らしさというか、心の葛藤……青春です。

そして、懲りずに捏造です。そもそもそついう主旨なのだから仕方がないといえば、それまでなのですが……お付き合いお願いします。

第十五話 たまにはネコ型に戻ってもいいじゃない？（前書き）

PVの累計、一万、超えました！ アクセスしていただき、ありがとうございます！

第十五話 たまにはネコ型に戻ってもいいじゃない？

人工的に、悪意の満ちた曇天は彼らを拉致するために造られた。

当時の警備に一役かっている戦闘用の在校生一同が瞬時に赤い目を顕にした。

「がああああああ！」

その中にいるのか、一体の茶色の狼が吼えた。

その声音 暗号化された、緊急事態だという知らせ を聞き入れたダディ十三号はバリアーを学校内に張り巡らすが、敵の対処が早かった。

敵はわずかにまだ張り終えていない所、通称孔をこじ開け、国際警備隊が来る時間前まで狙った生徒たちを出来るだけ多く攫おうとする。そのリフトの中にドラメット三世の顔写真があった……。

「なんであるか！」

赤いランプの点滅とけたたましいブザーの音。平穏な学校ではあるまじき、緊急事態だということは予測できるが……許容できるかということに対しては別問題である。

「ん、なんだろう、ね」

一方ドラリーニョはマイペースであった。

いつもの呑気な調子でドラメットの顔から離れ、地面に転がっているサッカーボールを両手で持ち上げ、自身の四次元ポケットに入れる。

「とにかく危ない、みたいだから、僕と一緒に避難ゲートに行こ

う、えっと……」

「我輩の名はドラメット三世である、ドラリーニョ……」

「うん、ドラメット三世!」

無邪気な笑顔が向けられる。

ドラメットはドラリーニョがどういう経歴の持ち主か知っていた

自分と同じく、特化されたロボット。主に身体能力の向上。

そしてその力が発揮できるのはサッカーのみに対してであり、製作スタッフのミスかあまりにも出来のいいものでは人から反感されるのを恐れた利益主義的な考えかどうか知らないが、ドラリーニョの電子頭脳の記憶装置に重大な欠陥がある。ロボットにしては珍しい記憶力の低さ。

自分も特化プログラムを積んでいるので、それによってかなりの容量をくわれているのは事実だが、一度記録に登録したものの名前を忘れることはない。

しかしドラリーニョは記憶の媒体が少ないのか……人の名前を忘れる。それに、この緊迫した校内であろうと……。

「あれ、僕たちどうするんだっけ?」

「……避難ゲートに向かうであるよ」

何をするのだったかすぐに忘れていた。

「あ、そうだね。僕、ドラメットといっしょに避難ゲートに行くんだよね」

サッカーボールをぶつけられたけれども、ドラメットはドラリーニョが嫌いではない。それは自分と同じく製作者に人類の希望として特化されたプログラミングをされている仲間。そして何より同じクラスメイトだ。

けして一人で逃げ出さず、ドラリーニョの手をとり、一緒に避難ゲートへと向かった。

一步、二歩……そんなに長い距離を移動しきれないうちに、小型の飛行ユニットのモーターの音が彼らの頭上で不気味に鳴り響く。
「……」

学校の所持しているものとは明らかに違う　ドラメットの警告アラームが鳴り響く　あれは裏ルートでしか手に入らない、違法小型円盤。マシンガンにマイクロミサイル搭載で、秘密道具を使いこなせない自分にとって撃退はまず不可能。
逃げることに専念するしかない。

短い足を細やかに動かし、その円盤から遠ざかろうと、必死になって走る。

「ドラメット」

ドラリーニョも同じ判断をしたのか、彼もまた走り出す。
そのスピードは早く、ドラメットの足が縛れる。

「あ」

終には、ドラメットの身体が浮いた　すかさず黄緑色の身体が彼の身体を背中に引き寄せ、肩車。

「ドラリーニョ……」

「一緒に避難ゲートに向かおう、ドラメット三世」

僕の足、速いからすぐにでもいけるよ、と無邪気な笑みが語る。

爆音が、彼らがいた地面を削り取るまでは　。

特別クラスに編入している、お堅い優等生ロボとしか俺の中で認識されていなかった。

まさか、あの、きりつとした眼に赤い色が混じるとは思っていなかったから。

そう、赤だ。

紅玉のように美しい赤ではない。
俺のような情熱的な赤でもない。

それは血の色。俺たちのオイル循環液の色。
どろりと澱んだ、暗い赤。

その不吉な色の瞳で、両手のネンチャクでおよびではない不審な飛行物体やらロボットをなぎ倒していく姿は　もし地獄があつたとしたら　あれは現世で悪事を働いた悪者を殺すための……悪鬼だ。

この光景が、俺が目のメンテナンスをサボっていたためにおきた幻であってくれたらどんなによかったのだろう……明日あたりに速攻で眼科に駆け込むことができるのだから。

最悪電子頭脳にウイルスが入り込んできたといってもいい。

だからこんな悪夢だ、これは想像上のもので実際の人物と地名、団体などはまったく関係ありませんと液晶モニター画面の下のほうに小さく、白い字で書かれてくれ！

でも、これは現実。哀しいけど。

「もう、終わりですか……この私を狙ったわりには……拍子抜けですね」

信じられないような冷たい声。

俺たちとかわらない、ただ、扱う人間が違っただけで……主に順応な

だけのロボットの無数のコードを惨たらしく、ネンチャクを持つ手で引き千切っていく。

バチバチと悲鳴を上げるように鳴り響く電子回路。

明るい橙色のボディはどす黒い赤で塗装されなおされている。

そして、彼の……いつも授業などでシヤスタしている不真面目な生徒代表の俺にも向けていたきつめだけど　ものすごく優しい瞳が、今はどうだろう。

その、瞳を見て俺は、叫んだ。

「王ドラ！　も、もういいだろ！」

悲鳴、に近かった。

俺の目じりに熱い、冷却剤として役割を果たさないものまで流れていた。

「エル・マタドーラ……」

名を叫ばれ、正氣に戻ったのだろうか……赤いその瞳の中ではあるものの光が出た気がした。

いつもの優等生らしい、王ドラの光が。

だが、その光は……無残にも、心無い人間の手によって消え去った。

世間や常識に囚われない、そんな俺だからこそ、不良というレッテルが貼られるのは時間の問題ではあった。

黄色いネコ型ロボットは子守のエリートとして生産されるのが常なのだが、ドラ・ザ・キッドには当てはまらなかった。特別クラスに編入したが、個性が生かしきれるので、結構気に入っていた。まあ、相変わらず、人付き合いの悪さがあったものの、特別クラスの名前も伊達ではなく、同じネコ型ロボットのエル・マタドーラとは気が合うほうだ。王ドラ、ドラメット三世、ドラリーニヨもクラスメイ
トして接してきた。

ただ、無口なドラニコフは除いて。

俺が空気砲を持ってピンを打ち抜く姿を見て、皆、凄いとかが、やるな〜と賞賛するのにこいつだけ、なぜか知らないが……悲しそうな目をしていた。

それが氣にくわなかった。

多少進む道を違えてももと子守り用ロボットゆえ、人の表情を見て心を読み取るのは苦手ではない。むしろ得意な方に分類させる。だからこそ、ドラニコフの態度が氣に食わなかった。

「ドラニコフ？」

キッドは啞然としていた。

たまたま一人で射撃の特訓しようと、学校の裏、人があまりこないところにいたのは……まずかったのかもしれない。

丸いものを見ることを極力抑えているのは狼に変身してしまうから、とニコフ自身がクラスに来たときに言っていた。本人の自らの意思で変身する姿をキッドは始めて見た。しかも、赤い瞳に変わっていた。

そもそも戦闘用は高度な赤外線センサーなどといった目につけられたプログラムは可視光線以外にも様々な電磁波を感知できる。だが、全てを一々処理しては大変なので、必要に応じて認識する波長を制御している。瞬時波長を切り替えるために要らないデータはす

ぐにカットさせるといわけだ。その一つが目の色素。

はたから見ると循環のオイルと同じ目の色に変わってしまうので不吉にしか見えない。

「がう……」

ニコフの顔が曇った。

級友に見せたくない、姿。

ニコフの周りに無残にも散らばっている焼け焦げた後がある螺旋やコード。

「ニコフ、お前……」

キッドはツバを飲み込んだ。

これらをやった時のニコフはまさに鬼神。

唐辛子を飲み込み、遠くの敵を燃やし尽くし、その辺に落ちていた木の枝を片手で握り締め、近くにいたものを突き刺してスクラップの山を築いていた。

校長によって造られた一品と公式データには書かれているが……あなたのお茶目な校長がこんな恐ろしい戦闘兵器を作り出したとは到底思えない。

しかもこんな惨状を作り出しても正気を失っていない　明らかに戦いなれている。

製造、稼働時間もキッドと大差なかったはずなのに。

「キッド、僕は見ての通り……戦闘用だった」

翻訳こんにやくを使ったのか、ドラニコフは普通に喋りだす。

マフラーで隠されている口も狼の口になってから顕わになっているのも驚いたが、消えるような小さな声ではなすニコフにはもっと驚かされる。

「だった、だと……」

「うん。それと、僕の製造年月日と稼働時間は……偽りだから。キ

ツドが気にすることは何もないよ」

学校に入学しているところを見ると、校長の心添えであることは確かだろう。

無口で謎が多いロボとして有名であっても……ここまで偽っていたのか。

「キッド、僕のこと快く思っていないだろうけど、僕はこの学校を守るのだけは本心だし、裏切る気はない……今までどおりでいてとは言わないよ……でも、僕が戦闘用の力を持っていることだけは他の皆には内緒にしている……」

こんな、破壊人形がクラスにいるというのは嫌だと思う。

それでなくても心優しきロボットが薄汚い破壊者と一緒なんて耐えられないよね……。

（なんていう目をしている……）

赤い目の中に浮かび上がってくる、そんな感情。

「ニコフ……」

この時キッドは自分がどんな表情をしていたのか、わからない。

突然、ニコフの耳の通信機から漏れた校長先生の声によって話が中断されてしまったし。

挟れた、湿っぽい茶色の上にピンク色と黄緑色のタヌキ……もといネコ型ロボットが倒れこんでいた。

「いたいで、ある……」

起き上がるのが早かったのはドラメット三世だった。

爆風にあおられたものの……電子頭脳への損傷が少なかったからだ。ドラメットを担いだドラリーニョのほうは、そうではなかった。

「ド、ドラリーニョ！」

顔は土に埋め込まれていた。おおよそ頭が重いから爆風によって打ちあがったときに頭から落ちたのだろっ。

それについてはネコ型ロボットというこの身体タイプを作った製作者に文句をいいたくなる。

それよりもドラメットが目にしたのはドラリーニョの服。サッカーユニフォームがあちこち焼け焦げていた。

緑の法衣服は土汚れだけだというのに、だ。

「こちらに来てもらえますか、ドラメット三世」

無機物の感情の込められていない機械音が、ドラメットの耳に届く。不審な飛行物体から白い大きなハンドアームが出てくる。これに捕まえられろというのか。

「……」

はつきりいつて嫌すぎる。

これほどまで色気も何もない、誘いなどに応える異常な精神を持つてはいない。

「早く来ないと、お隣のお友達をもっと痛めつけようか」

「……」

「お前は大切な商品だから傷つけるわけにはいかないが、そっちの坊主はリフトの中には載っていないからな……」

ああ、そうか。

ドラメットは理解した。

裏ルートで売りさばける商品は極力傷つけない。自分にかんりの高値をつけさせるためであり、けして自分を労わる感情ではない。「一つ、質問、いいであるか……我輩がおとなしく捕まれば、学校

やドラリーニヨを……」

「これ以上騒ぎを起こさないさ。なんたつて獲物を早く持ち帰らないと、な……」

たしかに警備隊やらがきたらまずいだろう。

ウィルスを撒いてはいるようだが、このダディ十三号にすぐワクチンプログラムを作りそうだし……そんなに時間を稼げないのだろう。

ならば、とドラメットは白い手に自ら身を寄せた。

これでいい。

学校の混乱が収まるし、ドラリーニヨも我輩のことなぞすぐに忘れるだろう。我輩一人いなくなったところで悲しむものは……特化プログラムを自分に積んだ製作スタッフか、その関係者ぐらい。でもノウハウがあるし、すぐに出来のいい新しいロボットができるはずである。

警察関係者が有能であることをあとは願って、助けを待つしかなくとも。

もしかしたら二度と平和なこの学校に戻れなくても、傷つくものが少ない方をとれば、いいのだ。

諦めに似た境地でただ黙ってつかまれた。

ぼじっ。

軽快な音を出しながら、ドラリーニヨの顔は地面から出てきた。

「あれ？」

何で僕、土に埋まっていたのかな……。

それと焼けちゃったのか、服もボロボロ……。

「ん」

考えても、考えても答えが出てこない。

「それに僕、大切なことをしていた気がする」

こんな、怪我にもなっていないものを気にする時間がないくらい。ぼやばやしている暇はないだろう。

「うん、僕やらないといけないことあった！」

そしてそれは僕の手を握った。ピンク色の僕と同系ロボットと一緒にないと、できないこと。

ドラリーニヨは体を軽くするためと動かしやすするために土を払うと走り出した。

運動神経が特化されたドラリーニヨの目の視力はよすぎた。

ニコフが校長の緊急事態を聞き入れたとき、顔が青くなった。キッドもまた、同じくらい青くなったと思う。だって、そうだろう……。

サッカーボールを蹴っている黄緑色のロボットが、今回強襲してき

た敵の親玉が乗っている飛行ユニットに向かっていると聞いたら。

第十五話 たまにはネコ型に戻ってもいいじゃない？（後書き）

結局今回で終わらず、次回も過去話となりました。

作者としてはこの一話で終わらせる気だったのに、気がついたら…
…文章が増えてる！

最近こんなパターンが多い気が……実、言つと結構予定よりも長くなっている、この乙女ドラえもんズ。

でもネタがせつかく出たのだからと貧乏性の作者は乗せる気満々です。

お付き合いお願いします。

あと、感想もお願いします。

第十六話 世界に一つだけの花火（前書き）

ドラえもんが来るまでのドラえもんズの面々の過去話、後半戦キック・オフです。

第十六話 世界に一つだけの花火

どろりとした循環液にその身を染めてしまったネコ型ロボットの目が、細かな数字が羅列している。

コンピュータウィルスにやられている、と誰でもわかる。

「王ドラ……？」

大丈夫か、と聞いたところで大丈夫なわけがない。

エル・マタドーラに返されたのは、王ドラの拳だった。

「くっ！」

動体視力がいいエルだから避けられたものの、彼がいた場所の後ろにあった学校の備品の電灯がみしみしといやな音を立てて 倒れた。

その音が合図だ。

王ドラの拳が、蹴りが、彼のもてるすべての力がエルに向けられたのは。

「ヒラリマント！」

闘牛士になることを夢見ているエル・マタドーラは日頃から鍛錬だけは欠かしていない。目の前に居る優等生に何度嫌味ったらしく、勉強もこれぐらい熱心になさっていたら赤点なんか取らないのでしようがね、といわれたぐらいだ。

王ドラの放つ拳法の動きを巧みに読みとり、受け流す。

それに、エルのほうに分があった。

「正直、先ほどのほうがやばかったぜ……」

戦闘用としての本性をフルに出して、学校内に潜んでいたロボットを叩いていた王ドラよりはマシ。ウィルスにやられている電子頭脳では、負荷がかかっているらしく、一つ一つの動きが鈍い。

「ぎ、ぎ……」

王ドラの口が動き出す。

「私には、無理なんでしょうか……」

「？」

自嘲するように呟く。

エルは自身に備え付けられている王ドラの声音データと今の状況から察すると……今の王ドラは極度のマイナス思考に陥っている、おそらくはウィルスのせい……普段の王ドラからでは想像できないくらい、弱々しい姿。

繰り広げられる、エルに向けられるものの動作は変わらなくても。

「おいおい、そんなので……」

弱々しい姿を見せて心を持つロボット生徒を精神的に追い詰めるといふ腹なのか、このウィルス。たしかに運動能力が低下しているならこういう計略があってもしかたがないのかも。

内心呆れつつも、けして手を緩めない王ドラの動きを追い、赤いヒラリマントは優美に、敏捷に踊るように翻る。

そんな中で王ドラの唇が、また動き出す。

「だめ、に決まっていたのでしょうね……本来の、戦闘用としての活躍場を失ってしまった私には！」

王ドラは冷却水を流しにしながら吼えた。

「なに、言っただ？」

平常ではないとわかりつつも、あまりの王ドラの変わりようにはエル・マタドローは驚く。

それに、戦闘用としての活躍場を失ったって……。

「そう、私は……戦うために、鬼畜敵国を抹殺するために作られました。しかし、私が完成する前に、敵国との和睦が成立。以来私は

誰にも知られず、保存液の中で眠っていました……」

誰からも祝福されることはない、行き場を失った戦闘兵器。

そういえば、校長はそんなロボットに新たな道を目指してもらえようにと学校に通わせているという教育方針があったよう……その一体が王ドラなのか。

「私を起動させてくれた、校長……そして私に生きる喜びを与えてくれた学校のためにも……私は、私は、学校を守ります!」

どうやら、王ドラの目の中では俺は敵に見えるってことか。

ウィルスにやられているから仕方がないけど。

複雑な思いがする。

でも……。

「その想いなら、俺だって負けねえよ!」

俺だって、この学校がすきなからだから。

「今言っても意味がないだろうけどよ……」

ウィルスにいかれた電子頭脳では聞き入れてもらえるかどうかなんてわかりきっていることだけど、でも言いたかった。

「夢を見せて、追いかける手助けをしてくれる、このこと……仲間を絶対守ってみせる! もちろん王ドラ、お前も、だ!」

陳腐でくさい台詞だけど。

なんか、鬱憤が一気に出て行っちゃったぜ。

お堅い優等生にガッソンといえたのにもちよつと我ながら感動したし。戦闘用の機能が健在でも、それを駆使して学校を守ろうとしたのは賞賛に値するつてもものだ。もう、あんたをあんな……目では見ねえし、悲鳴も上げねえ。

だって、王ドラ、あんたは立派な仲間だから。

「……エル……?」

王ドラのお腹に隙ができています。王ドラらしくねえ……もしかしてこれは王ドラの残った意思なのか！

「上等。ちよつとばかり、眠ってくれよ、王ドラ！」

エル・マタドローは渾身の一撃を王ドラの腹に決めた。

膝を折り、地面に伏す、王ドラ　目を閉じて、幸せそうに眠っていた。

この二人が互いにちょうどいい練習相手として武芸を切磋琢磨したしたのはまもなくである。

ダディ十三世が作り出したワクチンが来るまで後三分。

黄緑色のネコ型ロボットは小さい体を細かに動かし、信じられないくらいの猛スピードで追っかける。

「ドラメット〜！」

なんだか知らないけど、ドラメット三世を捕まえているのは先ほどボクラに襲い掛かってきた嫌なもの。

そんないやなものにつかまっちゃったら、僕、嫌だ。

なら、ドラメットも嫌に決まっている。

「ドラリーニヨ、来ちゃだめであるう！」

なんで？

あ、そうか。

降り注ぐミサイルと爆撃で、頭の悪い僕だって理解できた。
ホント、嫌なもの。

四方八方からくるけど、僕の速さなら……。

爆風のが、ドラリーニヨを高く、空中で回転する。彼を学校に備え付けられている電柱に足から激突させる。

「ん！」

ドラリーニヨは体のバネを利用して運動エネルギーをほとんど電柱に逃がした後、粉碎させ、電柱を真つ二つに折りながら次くるミサイルに意識をあわせる。

「僕、こんなものに後れをとらないから！」

ドラリーニヨは電柱を蹴りつけて空中を飛んだ。その足でミサイルに飛び掛るとんでもない速度で大気を切り裂く　ミサイルが点火し、爆発する前に攻撃範囲から逃れているのだ。

加速装置でも積まれているのではないかと疑ってしまうぐらいの、ドラリーニヨの身体能力。

敵はその奇妙な黄緑色のロボットを打ち抜こうとミサイルの数を多く乱射してきたのだが、皮肉にもミサイルの数が多ければ多いほど、飛び移って追いかけるドラリーニヨには好都合。

足場にならないミサイルは勝手に爆発するし、空中に逃げている飛行ユニットにドラリーニヨは着々と近づいていく。

「ドラリーニヨ！」

ドラメットの声。

先ほどより、幾分か悲鳴から遠ざかった。

少しホツとする。でも、これからどうしよう？　白いハンドパーツにつかまれているドラメットをあんな嫌なものから外すには。

見たところ、ガッチリつかまれている。僕一人の力では外せない。ならガッチリつかまらせなければいいよね……力を無くすには、エ

ネルギーを断つ。

エネルギーを断つには、動かしているモニターを壊す！

ドラリーニヨはポケットの中から【友達】を取り出す。

先ほどドラメットの顔を赤くしてしまったけど、今度は彼を助けるために、力を貸してね。

「僕、なんとか、する！」

ドラリーニヨが蹴り上げ、宙をくるくる回るサッカーボール。

目標はあのドラメットをつかんでいる嫌な飛行ユニット！

「トツテパーノニヤンコロ……シューーーーーー！トオオオオオオオオオオオオ！」

でかい花火が打ち上げられた。

「すげえ……」

校長の知らせを聞いて走ったドラニコフを追って、キッドはファンタジスタ顔負けのドラリーニヨ氏による今夏の偶然に作られた撃退花火。

「がう……」

隣に居合わせる形になっているドラニコフも驚いている。

無邪気な瞳が空中で緑魔術師の格好をしたクラスメイトをキャッチ、そのまま……丁度よく広げられていた陸上部のマットに埋まる。あれならばもう大丈夫だろう。

「特別クラスってそんな凄いやつらばかりなのかよ」

「それは、学校の皆に言えること。だって……校長先生は、みんな、一人一人凄い力を持っているって言うていた」

「なんだよ、それ」

「僕、キッドにも驚いているよ」

この学校に着てから戦場から遠ざかったとはいえ、ドラニコフの足に追いついてきたキッド。
それに。

「ドラリーニョがかわしきれないと推測されるミサイルすべて、打ち抜いていたの、キッドだ、もん……」

「そりゃ、お前……」

百発百中の腕はたしかだ。

危ないと、判断したものを的確に狙いを定め、手にもつ空気砲で撃ち貫く。ドラリーニョはこんな影役者を知らないだろうけど。ニコフは見ていた。

目元が、緩み自然と笑顔になった。

キッドはそれを見て、ニツと笑い返す。

「ドラニコフ、やっと笑ったな」

「？」

「お前、気がついていないと思うけど、クラスでも笑った顔していなかったんだぜ。それに……俺が空気砲を見るたびにいやな顔していたし、な」

「ええ、ええ！」

「戦闘用だったというのを隠しているところも見ると、大体想像が

つくけど……」

無知な子どもではない、この世が御伽噺のように綺麗ごとだらけではないことを稼動してそんなに月日がたっていないなくてもキッドは知っていた。

「まあ、お前が隠したいことがあるなら隠し通してみろ。でも話したいなら聞いてもいいぜ」

「それって……」

ドラニコフの戦っているシーンを見て、なんとなくではあるが、気付かされた。

アイツは、戦う力があっても戦いたくはない、心優しいロボットだっことを。

「ああ？ 友の相談にのるのも友だって言うだろうが。校長先生の言葉の受け売りだけど、よ」

「僕のこと、怖くないの……」

子守り用のロボだった俺がその適性がなかったように、ニコフもまた戦闘用としての適性がないのだろう。

主に精神面で。

不意な事故でニコフが狼に変身しているときはそんなの微塵も感じなかったが 己の意志で変身したニコフは平常だ。理性も残っている。

その理性で、統率の取れた無駄のない戦闘が可能になるみたいだが、その表情は苦いものだった。

「怖かったとかそんなの関係ない。俺は振り向くよりも前に進む男だぜ。男はそんな昔何があったとかそんなみみっちいことを気にしねえ。上手く言えていねえが、今が大切なことから！」

「キッド……」

「今のお前は、俺のクラスメイトなんだよ……もっとは笑った顔、見せろってんだ。せつかく綺麗な顔でうまれてきたんだから、な、

ドラニコフ」

後に映画スターとして名を馳せるドラニコフ。

このキッドの言葉が無口だけど、気のいいドラニコフが形作られていく始めの一步だったのかもしれない。

マツトに沈んだ身体。

しばしの沈黙。

よくもまあ、怪我也故障もなく無事に居られるものだ。

改めて自身の頑丈なネコ型ロボットの身体には驚かされる。

「ドラメット、平気、怪我不い？」

無邪気な目がドラメットの瞳に映し出される。

冷静に見れば今の体制……ドラリーニョの身体がドラメットに抱きかかっている。

ドラメットが空中でキャッチされた瞬間ドラリーニョは意識を手放していた　キッドの援護射撃があつても、高速に身体を動かしたせいで一時ドラリーニョのCPUが処理しきれず、ダウン寸前、ドラメットを救い出したという安心感で一気に疲労がなくなつて
気の緩んだとき、電子頭脳はここで処理おちしても大丈夫だと誤信してしまつたのだ。

気がついたドラメットはすぐに、怪力で白いハンドパーツを引きちぎり、ドラリーニョを抱きかかえ、無防備な彼が地面に叩きつかれ

ないように守っていた。

上手い具合マツトに沈めたのも幸運だったけど。

「ドラリーニヨ……我輩は大丈夫であるよ。それにありがとう」
強がってもいない。

だつて、ドラリーニヨがちゃんと我輩を救ってくれたのだから。
感謝の言葉もすぐに言えた。

「んじゃ、一緒に避難ゲート行けるね」

「へ？」

警報のアラームがなり終わっているというのに、何で。

「僕、ドラメツトといくつて決めたから」

「……」

ぷうっと思わず噴出した。

どこまで一途なのだろう。

「そうであつたな」

「うん、じゃ、急ごう」

もう避難しなくてもいいけど……でも、ドラメツトは差し出せられ
た手を握る。

「あ、その前にドラリーニヨ、お礼に我輩の魔術、見せてあげるで
ある」

自身の四次元ランプに保存しているものを、言霊で取り出してみよ
う。

「？」

「えい！」

一つのドラ焼きがドラリーニヨの真上にゆっくりと降りてくる。
何もなかった空間からドラメツト三世の言葉に反応して出てきたよ
うにしか見えないそれは……お子様の目を輝かせるのに十分だった。

「これ？」

「ふふふ……」

「わー、ありがとう、ドラメツト。ソンでもってかつこいいー！」

「そ、そうであるか」

「うん。また、やってよ！ 絶対だよ！ んで、今度はサッカーボールだして」

「やってみるである」

ドラリーニョと一緒に避難ゲートに向かう間、二人の手が離れることはなかった。

そして、ドラメットがサッカーボールを出せるようになったのも、そんなに時間がかからなかった……その過程できちんとしたコツをつかめたドラメットは魔術がミルミルと上達する。

ちよつとしたわだかまりや……偏見。拭いきれたわけではないけど……でもたしかに僕らは動き出していた……。

でも俺たち個性が強くて……なかなか素直にもなれなくて、よ。

でも その、想いが完全に形付けられる決定的な人物が我輩たちのクラスに編入してくる。

気弱な、でも彼がいたからこそ、私たちはまとまったのです。

「僕、ドラえもんです。よろしくお願いします」

ここから僕達の伝説が始まったね

そつ、俺たち七人の友情伝説が。

「……ということがあったのであるな」

紫水晶の瞳はさびしく微笑む。

「ドラメット三世」

のび太にはこの時、彼女の頭上にひっそりと輝く月もまた同じような表情になっていたように見えた。

思案が交差する中で、時間は残酷にも過ぎていく。でも……僕らはたしかに……掴んだのだ。それを信じて前に進めばいい！

第十六話 世界に一つだけの花火（後書き）

王ドラが戦闘用という設定はパーフェクトに捏造です。（いまさらですけど）

春崎やよいさん、感想ありがとうございます。

面白いといわれた凄く、嬉しいです。

次はのび太サイドは夜が明けて、また学校に皆が通いにいきます。学校生活はどうなるのか？ 敵の出方は？ さてさて……次回を待て、です！

第十七話 御ネコ様が見ている〜赤薔薇は戦場の華〜（前書き）

ドラえもんズの過去話が終わり現在に元通り〜。世間は夏休みなのに、設定の都合のため、まだのび太たちは学校に通学しています。

第十七話 御ネコ様が見ている〜赤薔薇は戦場の華〜

チュンチュンとすずめの鳴く声がする。ねぎを切っているのか、包丁とまな板の小気味のいい音。そして分厚いカーテンの隙間からもれる朝日が瞼に注がれる。

「ふああ〜」

すらりとした手を伸ばし、覚醒したのは王ドラだった。

ネコミミをぴくぴくさせ、全身の神経を少しずつ解していく。

のび太の机の上で。

スモールライトで女の子の着せ替え人形サイズになって寝るようになってから今日で四回目。寝ぼけることもなく、淡い色のパジャマ姿の王ドラはまず、通り抜けフープでふすまを抜けのび太の部屋から出た。

あたりを見渡し、自分が元のサイズに戻っても破損するものがないと確認してからビックライトを全身に浴びる。

三つ編みを結っていない橙色の髪が、サラサラと風に靡く。

「今日も異常はありませんね」

体調に問題がないということを感じたら、素早く髪を整え、朝の挨拶をするために一階に下りるのだった。

「おはようございます。玉子さん」

台所からお味噌汁のいい香りがする。

「あら、おはよう。王ちゃん」

王ドラが日本に来てつけられたあだ名。

ちなみにドラメット三世は【三ちゃん】。ドラニコフは【ニコちゃん】である。【どらちゃん】が三人も増えたら、ややっこしいのでできるだけ被らないようにという配慮の元でそうなった。

犬型ロボットにろくな思い出がない、王ドラは当初このあだ名に戸惑いを隠せなかったが、慣れてみればたいしたことはない。

「ではそろそろ台所をお借りしますね」

「いつもありがとね、王ちゃん」

「いいえ、こちらこそ皆で無理言って押しかけて。これぐらいはしないとバチが当たります」

ドラえもんズは朝夕のオカズの一品提供している。

当番制ではなく、だいたいは気がむいた、暇だというか気分転換もかねて誰かが作っている。今日の朝は王ドラ。

朝から脂っこいものは胃もたれするということで中華ドレッシングをあえた野菜サラダを作る。材料は昨日のうちに近くのスーパーで買ってきたものでいたってフレッシュである。

「お、はよう……」

既に小学生の姿に変えている、ドラニコフが台所にやってきた。匂いからしてもう王ドラが何か作ってしまったのだらうと判断したニコフは学校に行く準備を済ませていた。

「おはようである」

ドラメットは体型を小学生にしているがまだ髪を整えていない。これから起きるドラえもんと一緒になって今日もあの三つ編み団子スパシャルを作るのだらう。日にちがたつにつれて作業時間は日々短縮記録を塗り替えているがそれでも三十分は過ぎてしまう。

「おはよう、ママさん」

青い髪を雅結いにしたドラえもんも台所に集まる。

せっせとテーブルを拭いたり、おかずを並べたりと朝の食事の準備ができていく。朝のおかず一品を作り終えた王ドラはその間に小学生へと変貌。

可愛い女の子四人が短い手足をせっせと動かして玉子のお手伝いを積極的にこなしていた。

「ふふふ」

玉子は御機嫌である。

ドラえもんズが押しかけ、しかも女体化したとか何とかで戸惑ったのび太家であつたが、こう華のある、少女たちと一緒にいるのは楽しくて仕方がないのだ。

家事の手伝いもしてくれるし。

玉子とて女の子が欲しいと思ったことがないわけがない。だけどこれは天からのお召し物。上手くいくとは限らないのである。

「後何日あるのかしら、ね……」

「ええつと……もう少し待ってください。迷惑かもしれませんが、これは……」

「迷惑とかではないわ。ただね、随分未来の学校は面白い課題を出すのねって……」

ドラえもんズはここに滞在している本当の理由を玉子には教えていない。

皆口裏合わせて、お手伝いロボの性別が変わっても変わらず家業ができるかという課題があるため、協力してくださいと頼み込んだのだ。

しかも学校に通うなども必須だとか何とかで……うんぬんと誤魔化している。

昨日の学校のあの爆音についてはさすがにいいアイデアが浮かばなかったため（映画の撮影という案があつたが、流石にそれだと嘘だつてばれないかというので却下。また没案の中にはドッ○リカ○ラもあつたがもう放送してないし、学校でする意味がないので大嘘である）とばれるのではないかというのもある。）記憶を操作したけれど。

「いつそのままでもママはいいわよ」

「玉子殿」

苦笑い。

ちよつとした冗談が飛び交う。

「嫁にでもきてもいいくらいの可愛らしさよ、みんな」

「そうですか。校長には好評だったと報告しますね」

翡翠の目が微笑む。

「う、上手い切り替えしだね、王ドラ」

「がっ」

ドラえもとドラニコフもまた笑う。

「で、ドラちゃんたちに折り入ってお願いしたいことがあるのだけ
どいいかしら」

「え、なにママ？」

「我輩たちにできることならば何でもいいつけて欲しいである」

「女の子がいたらやってみたかったことなのけど……」

ママのちよつとしたお願い。王ドラも小学生に変身したとき、実行
した。

その内容は可愛いお願いといったところ。苦痛でもなく、王ドラは
ちよつと恥ずかしがったが……布地が増えるだけではないかという
ので案外あっさり承諾。

玉子のちよつとした願いは叶い。微笑みあう。

こんなかなで地上はなんだかかんだって平和です。

一方平和ではない天上世界。

中央州を乗っ取り、次に狙うのはエネルギー州。

牛の角を生やした赤髪の女性が一輪の自身の髪と同じ色の薔薇の薔を右手携えていた。

「さああつて、ビツク・ザ・ドラ様から頂戴した玩具を使ってみるか」

いつもの闘牛士の格好から真紅のドレスに着替えたマタドーラ。

この服は彼女の美貌を限界まで引き出しているかのように、柔らかな胸を締め付けずにスッポリと収め、細いウエストをぬるめることもなくエルの妖艶な体のラインを忠実に再現していた。

「わあ、よくにあっているよ、エル・マタドーラ」

いつものサッカーユニフォーム姿のドラリーニョ。

「くっ、嫌味にしか聞こえねえよ、ドラリーニョ。大体なんでポーカーして負けたほうがお国の伝統ある服を着なきゃいけないんだよ」

エルの着ているのは情熱のスペインならではの踊り子の服である。

上半身はまだいいが、下半身がひらひらしていて動きづらい。

「ん、僕は別にサンバの服着てもよかったけど……エルがその服着ているところ見たかったから、勝ちたかった。」

幼児体型の自分よりも妖艶なほうがいいといわんばかりだ。

「何が、勝ちたかった　だよ、そんな謙虚な気持ちでロイヤルス
トレートフラッシュを出せるのか、お前は！」

確率649740分の1の最強のカード。

かろうじてワンペアだったエル・マタドーラにしてみれば本当に嫌味としかいいようがない。

「ビック・ザ・ドラ様もこれぐらいのお戯れがないと華がなくていけないって言っていたジャン。」

「華か……まあ、それには賛同するがよ……」

新たな世界を作り出すというからにはビック・ザ・ドラが欲したのは……美しくも残酷な女神たちだった。

しかも頑丈ではなく、脆い硝子のような淡い身体であること。これはビック・ザ・ドラに絶対服従である証と征服力を高める細工。

ビック・ザ・ドラに変えられた身体と心。

最高傑作として迎えられ、寵愛を受けるものとして立場になってしまったのである彼女たちにしてみれば彼の望む姿形をすることも仕事の一つである。

だが、着慣れぬものを着て戦場に立つことはあまりにも無謀である。もしものことを考えて、どちらか一方が用意されていた女物の豪華な服を着ることにした。負けたほうが着ることになったのも、不慣れな格好では撃破数が　楽しい、楽しい血なまぐさいショーを存分に味わえなくなるかもしれないという危惧からきている。

「ふん、ようは慣れてしまえばいいのだから、な！」

エル・マタドーラの持つ蕾がバチバチと火花が散る。

散りゆくように、ぱつと広がった紅の花びら一枚一枚が、円を描きながら手の周りを包みだす。

そして固まりになった火の花びらは、すべてを焼き尽くす炎となる。

「美しいだろう……この華は」

紅の炎で包まれる。だけど熱さを感じることは無い。

炎の照り返しによってエルの顔が輝く。無表情ながら、それはとても美しく、一種の芸術品を思わせるようで。

赤いフラメンコの服が劫火を呼び起こす。

この技術は先日のドラリーニョの羽と同じく、エル・マタドーラの想いによって自由自在に動くエネルギーの塊を生み出している。赤い踊り子は天上世界に立ち並ぶ建物に向かって赤い軌跡を描きながら、赤薔薇を、炎を舞い躍らせる。

炎は貪るように建築物を焼き払い、倒壊の音に併せて旋律を奏でる。雲の上に居る市民たちはわらわらと逃げ出し、そしてその凶音は人口に作られた地下に居る者たちにも聞こえてきた。

「……どうやら敵は本格的に動き出したというわけか」

隠し通路を進み、今使われていない、地下鉄のようなところで一夜を過ごしたバンホーは研ぎ澄まされた感覚から相手が襲撃したことがわかる。

泣きつかれたのか、未だ眠り続けるパルパルを抱え、もと来た道を逆戻りする。

敵は連邦本部を占拠していることもあり、そのほうがまだ安全だと考えて、だ。

（なんとしても本国に連絡できないだろうか……）

連絡する手段はあの馬鹿でかいタヌキによつて天上世界一帯をジャミングされているために使えない。使ったところで居場所がばれてしまう可能性もある。

そう判断するのは、あのボディを見て。

ビック・ザ・ドラが摩訶不思議な術を使うのはここ天上世界の中心部を占拠した直後からあのドラえもん君と変わらない力を持っているということとは容易に想像つく。

地下恐竜帝国を創造した神に匹敵する、力だ。

（この天上世界の現状を知ると……天罰、だと司祭様は言うだろうな……）

つい最近天上世界のことを知り、我々地帝国は交流を持つことにした。地球で住む仲間であり、他の星との交流が盛んなのも尊敬に値していた。

だが、その尊敬も揺るいだ。地上の動植物と、のび太君たち、地上人をあらかじめ天上界に避難させ、大洪水で地上文明を洗い流して破壊するという計画があったことを聞いたときだ。

偶然、ハチ型の 異星人らしいが、緑色のドラえもん君によく似たロボットを連れた少年が叫んだことで、だ。
叫んでいたところはトイレであった。

彼は要人の息子として天上世界に招待されている立場なので大きく

おそろしい計画があったことに対して非難できない立場だった。でも怒りは抑えきれずに水に流そうとそのままトイレに駆け込んだらしい。

相方のロボットは宥めながら、まあまあ、過ぎたことだし……とはいうものの、少年が叫んだ言葉は私も共感した。

「でも、もしその計画が実行されていたら僕らが生まれなくなっちゃうところだったのだぞ！」

ドラえもんが誕生しなければ 我々は存在できない。

のび太と出会い、未来の道具を使っていなければ 神の気まぐれ、悪戯、慈悲 我々の世界によっては様々に言われている創造の過程が確立されなくなってしまう。

天上世界は宇宙からの彗星の特殊なガスで固まった雲に乗れることを発見した古代の高地にいた人々が、雲上に移住したのが起源。我々とは違い、ドラえもん君の恩恵によってできた世界ではないのだから知らなくても仕方がないのかもしれない。しかし……。

たしかにこのクリーンエネルギーの技術は正直凄いと思う。

異星と交流も、絶滅した動物、および絶滅危惧種の動物を集め、保護しているなどといった立派な活動もしている。

だが、そんな惨い計画があったことに私は怒りを感じた。

少年の方は相方のロボットに宥められて呼吸を落ち着かせていったが……。

どんな言葉で説得したのだろう 少し気になるところだ。

ノア計画を実行しようとした天上世界に対してまだ心の奥でどす黒い感情で睨んでいる私には……。

あのハチ型の少年たちの星は今、全員帰星しているので天上世界の

惨状は知らないだろう。

知っていたな、なんと思うだろうか……。
手を差し伸べるだろうか……。

私はいい。騎士は女性、異形のものであっても守らなければならぬ
立場だから抑えられるのだ、この怒りの感情を。

たまたま中央州に絶滅動物保護州の今年度の予算案についての報告
をしにきたパルパルを救ったのだった。

迷いが、若き騎士に付きまとっていた。

「のび太くん、朝だよ、起きてよー！」
このままじゃ遅刻だよ、と必死になってのび太の身体を揺さぶる、

ドラえもん。

「ん、あと、十分……」

いつもの朝の願い。ドラえもんだけだったら仕方がないな、と甘く言ってくれたのかもしれないが……。

「だ、め、ご飯食べる時間がなくなりますよ、のび太君」

「そうである。朝ごはんはしっかりとるであるよ、のび太殿」

「食べよ……のび太、君」

居候している三人も美少女にも願われてしまった。

今日に限って。

男として、ここは目にわさびを塗ってでも起きなければならないシユチュレーションである。

「……起きるよ、起きればいいんでしょ」

3の目を擦り、眼鏡装着。

完全覚醒した、つもりだったが……もう一度のび太は眼鏡を外し、目をこする。

からしが必要だったか？

あ、涙で余計視界がぼやけるか。

眼球の傷は普段は見えないけど、網膜が剥がれる、などといったことで見えるように……飛蚊病だっけ？僕はまだ若いから関係ないと思っていたけどちょっと今日は目に白いふわふわしたものが見える。

落ち着いて、また見えたら眼科に行かないと。

再び眼鏡を装着する元祖めがね君（ため属性）

「……」

のび太が目にした光景は一切変わらなかった。

「ドラえもん、僕の目が悪いようなんだけど……道具の中に目の病が治るものない？」

「えっ！」

オニキスの瞳が揺らぐ。

「それなら、私が診ますよ。ところでどういった病状なのですか」
医師の心得がある王ドラ。

「あ、うん、とね……みんなが白いフリフリのエプロンを着ているように見える」

今時こんなエプロンがうつているのかも不思議であった。

「……」

ドラニコフはいつものことながら、ドラえもん、王ドラも絶句。

落ち着いて話し出すのは大人（見た目は子ども）のドラメット三世。
「そんなに、驚くことであるであろうか。我輩はいけると思ったのだが」

たしかに似合いすぎて見惚れてしまうけど……朝からもうエロ小学生レベルが上がる嬉しいことしないでよ、ドラえもんズ。

装備名：フリフリの白いエプロン

効果：防御力+15 乙女度はアップするが、あまりの男が困惑する効果がある。

由来：のび太の母が可愛い女の子に着せたかったナンバーワンのも
の聞き入れ、着せ替えカメラで装着。

ちなみに今日の朝の食卓にはドラパンが用意した、一輪の赤い薔薇がテーブルの中央に飾られていたそう。

のび太は遅刻せずに余裕を持って学校に着くという記録もまた増えたりする。

第十七話 御ネコ様が見ている〜赤薔薇は戦場の華〜（後書き）

ちよつとプライベートで引越していたために、忙しくて更新が遅くなりました。けして浮気していたわけでは……でも、また何か短編が書きたい。（懲りてません）

あゝ、ドラえもんズ復活しないのでしょうか。いい動画があつてエネルギー補給していましたが……テレビで、リアルタイムで見たいです。映画ならよりオツケーです。では、次回に続く〜（夏の暑さで少し……どころではありませんがテンションがボケてます）

第十八話 オリンピックに魔物がすんでいる

それってどこの会場でも一緒だ

先週、夏コミ行ってきました。楽しかったです。おかげで、財布ピンチです。（実話）

一応行ったのは二日目です。帰るとき雨が降ったのは悲しかったですが、親切な新宿滞在の台湾女性の傘に入れてもらいました。（デコに傘が当たった縁で）おかげで風邪を引かずにすみ、私は元気です。（実話）

以上。夏コミの一思い出。私的にありがたい話でした
本当に人情っていいですね。

第十八話 オリンピックに魔物がすんでいる

それってどこの会場でも一緒だ

調理室に立ち込められる白い湯気。

換気扇が回ってはいようが、出来立ての白いお米はプックラと柔らかい肌を惜しげもなく晒しだし、温かさを象徴するオプションである湯気を発していた。

給食のない日に行われる調理実習。

今日作るのは日本独特のご飯と味噌汁。

ご飯は炊飯器を使わないで、時計と教科書を見ながら時間とお米の調子に合わせて炊く。

なにぶん初めてなこともあり、上手くいかなくて芯が硬いものや、もうほとんどおかゆ、食べられるだけまだまし【こいつらおこげ百パーセント伝説】（もうこれご飯じゃない炭だよ）のなどといったデンジャラスなものになってしまった人も多いとおもう。

大体教科書に載っているのはわかりやすく、透明な容器で作られているというのに、僕らが使っているのはアルミの銀色の光沢が周りを被っている一般的なもの。蓋が透明なわけもなく、こちらもギンギンに銀色に輝いている。そんなので一度もやったこともない炊飯をするのだから、失敗しろといわんばかりだ。

僕らはその期待を見事に裏切った。

のび太と一緒に調理班であるジャイアンもガッツポーズをとった。

僕らは、姑息な教科書選定の奴らに勝ったのだ！

たしかに失敗すれば、炊飯器の偉大さを改めて知ることができる……だが、先人たちの失敗例が数多に存在し、ついこの間別のクラスでも同じような失敗がある中では既に失敗が前提やんけ、なら努力しても無駄じゃん、と考える教科書の狙い通り、努力すれば何とかなる、希望を捨てずに頑張ろうという思考することをととの昔に破棄してしまっている子が出てくるのではないか。

それでも、小学五年生。

熟すのが早い子は反抗期に突入している。

ホクホクの戦利品をおわんにのせて、食べる。

「うまい、炊飯器よりもおいしくご飯が炊けているよ！」

炊飯器はほとんど、日本で一番売れているブランドコシ〇カリを推奨品としているので他のブランドの場合水を少なめ、または多めに調節しないとおいしいお米が炊けないのだ！

教科書と同じ分量ならなおさら、硬くなるのだよ。（こっちもどうやら百パーセント基準はコ〇ヒカリだ！）

その他のブランド米もって来た生徒にはかわいそうな結果が待っているのである。

お米にだって一つ一つの個性があるのだから。

だけど、のび太の班にはドラニコフがいた。

彼女は各家庭から違うブランド米（中には海外娘もいたというのに）が入っているというのに……その難解を見事にクリアし、おいしいお米を炊き上げたのだ。

「一体どうすればこんないいご飯になるんだ」
「ジャイアンも納得のこの味。」

「ん……なべのなかの稼動音」
それで温度やタイミングを調節すればいいのか……って。

「んな、器用なことできるわけがないよ、ニコフ」
できるのはドラニコフだけじゃないかと、のび太。
ドラえもん、王ドラ、ドラメットとは調理班では別れてしまっているの、確認はしていない。だが、遠めで見ればドラえもんは味噌汁を作っているし、王ドラ、ドラメットは食器の片付けと。飯の炊き出しは班のメンバーに任せている。

「でも……味噌汁を作る、のをみんなに任せたし……精度は赤外線のほうが上だし……」
赤外線センサーによる厳密な温度管理ならもつと楽だったのにと、苦い顔。

人間の女の子の体には備え付けているわけがない。
とにかくその後は箸が進み、うまうまと、ご飯を一粒残さず平らげる、のび太の班だった。

「ん、味噌はこんなものでいいかな……」
白味噌をかき混ぜ出来上がった煮干だしのお味噌汁。
腸と頭を取り除く細かい作業を嬉々とこなして、問題のない味となつてホツとするドラえもん。

今日作った白いエプロンでは目の保養にはなるがそこまで落ち着いて見られるまでまだ精神が発達していない大人の階段昇っている少年たちが多いこともあり、質素な水色のエプロンにした。だが、普通、でも平凡でも着る人が可愛い女子であつたならば……発達途上の青い果実の胸のラインが男心をくすぐる。

結論素材が一番のオシャレなのですよ。

「ドラちゃん、こつちもできたわよ」

しずかはお飯をよそう。

ピンク色の彼女エプロン姿もまた可憐である。

ドラえもんよりも小ぶりではあるものの平均的な小学生といった瑞々しい乙女の体。ピンクというしずかちゃんらしい心にも目にも優しいふんわりとした色は彼女の白い肌をより引き立てる。

流石は王道ヒロイン。

「……あの、今調理実習ですよ……なんか関係ないコメント多くないですか」

王ドラのツッコミもさながら。

紫水晶の瞳は調理実習の間、まったく違うことを考えていた。

それでも時は動いている。至極平和は時間の中でも、それはここだけの話であり、視線と場面を変えると悲惨な時間もまた……。

（ドラパン……）

天上世界に単身忍び込んだ怪盗を待つのはドラメット。

決して無理はしない、お前たちが学校にいる間だけ偵察してくると、ドラメット三世の話を聞いた昨日の夜に行ってしまったらしい。

らしいと、いうのは彼から直接聞いたからではないから。ドラリーニョから預かっているミニドラの一体からドラパンが寄越したメモと一輪の薔薇のなかにあったから。

（無事に帰ってくるのであるよ……）

泡立つ白いシャボンだけが彼女の不安をみていた。

漆黒のマントを羽のようににはばたかせ、ドラパンは天上世界の様子を見ていた。

いくらなんでも命知らずではないので現地にはいけないが、スパイ衛星のぎりぎりの範囲で近くに待機している。

「どらら」

ドラパンの黒いハットから兎よろしくミニドラ一体が潜んでいる。

ドラリーニョのことが心配だからと、一体ついてきたのだ。伝言渡す代わりにどうしてもつれてって、つれてって、コールに破れ、一体だけならば、真夜中ジャンケン大会によって選ばれた強運のミニドラである。

「静かにしろ」

ここでも完全に安全というわけではないのだ。

（それにしても……）

エル・マタドーラにドラリーニョ……強力な力を繰り出しているというのに、眉一つ動かさず、汗も流さずにこなしている。

人間の姿に変わってしまったというのに。

（何か秘密があるのか？）

ドラメットはあんなに傷ついて戻ってきたのに、ドラリーニョには

その気配がまったくくない。

《それは……ドラリーニヨには回復能力が備わっているからですよ》
「……！！」

電子頭脳に直接響く少年の声。

ドラパンの記憶の中では聞いたことがない声。

《すみません、驚かせてしまつて。でも……あなたにも、知ってもらわないといけないと思ひまして。ドラえもんズ的能力について》

「お前は、誰だ？　そしてなぜ姿を現さない？」

《今、出ますよ……作られていますから。でも出てしまう前にどうしてもあなたに知ってもらいたいです。肉体を持ってしまうたらこの力を封印しないといけませんから》

焦燥しきつた少年の声。

彼が嘘でドラパンたちを騙すようには思えなかった。

「ふゝん。胡散臭いが……少しでも情報が欲しかったからいいぞ」
怪盗ゆえに直観力も長けているドラパンゆえにそう判断したのだ。

「どらら！（僕も）」

この判断は、結果から言えば英断だった。

だが、それに匹敵する苦悩もまた後日彼らに襲い掛かってくるのだ
が……。

所変わって宇宙。

翡翠の瞳がふせている。

「そう、だったのね……」

リルルは《彼》との最後の交信に涙する。

《彼》はまもなく現世に肉体を宿し、復活する……しかし、祝福されるものではない。

何より《彼》は嫌がっていた。

肉体が蘇っている間、彼の能力がまっているのに何で喜ばなかったのを理解したりリムは《彼》のこれからの運命の非情さに感情が高ぶる。

ゲーム機のキャラクターは……自由意志を、もてないという……。

今まではゲーム機が壊れて、エネルギー体として気ままな意思を持っていたのに、肉体の復活イコールゲームキャラとしての本能も復活することにより《彼》の心は支配されると。

「わかったわ、私はあなたの意志どおりに……」

《彼》との約束を守る。

世界が、時空が揺れる、その時に。

「って、何で、お前たちが!!」

金髪碧眼の美女が愕然としていた。

「くくく……妖怪に死があるとお思いですか？」

「やだね、思い込みって奴は。我々は蘇るものなのさ、身体に見合った闇のエネルギーがあれば、簡単に。あ、今、しつこいと思っただろ」

百目王の部下、韋駄天とさとりがドラ・ザ・キッドの前に立ちはだかる。

「くそ……」

あの時は仲間がいたし、大体こんな柔な身体ではなかった。一体だけならまだしも、二人がかり……荷が重過ぎる……勝気なキッドではあるが流石に冷や汗は隠しきれない。

「さて、お主がこのまま投降するのもよし。それとも我らにたてついて……その柔肌を血で染め上げ我らの復活の手助けをしたビック・ザ・ドラ殿の供物となるか？」

韋駄天がいやらしい目つきで舌なめずりする。

「け、素直に投降したところで結果が変わると思えないぜ」

どうせ、俺の身体をいためつけるには変わらない。

恋人を失った直後の、放心した心に付けいれられたキッドだからこそわかる。ビック・ザ・ドラは俺たちにあの時と同じように心が傷ついた状態にすること……。

人は辛い現実から逃れるために、嘘をつく。

それは心を壊れないように。心の自己防衛システムが偽りの夢を見させるのだ。

そんな哀しい性を利用するのはビック・ザ・ドラ。辛い現実を見せつけそのショックから逃げ出すため、記憶を改竄しようとする心の隙間を狙って、己の都合がいいようにドラえもんズの記憶を操作した。

当時はチップを埋め込まれたのだが、人間の今の体ではどうなのだろう。

わざわざこんな身体にさせたくらいだ。やることといったら……大体想像がつく。

キッドとて初な子どもではないのだから。

世界の拷問百選ぐらいのことはさせられるだろうと考えがつく。

それに……。

「キッド……」

守り抜くって決めた女が側にいる。

「負けられねえよ」

たとえ形勢が不利であろうと。

負けるわけにはいかない！

赤いリボンでしばった金色の髪が揺れるのが合図、キッドの空気砲が輝く。

暗くて怖い夢を見せてあげよう。

恐怖に心を凍らせて、泣き止まない涙は我々のエネルギーと変換される。

「フ、ハハハハハハハッハアアハハハ！」

巨体のネコ型ロボットの身体を揺らし、彼は笑い転げていた。

エネルギー州を手に入れ、ついに、彼は成功したのだ……闇のエネルギーを絶えず供給するシステムを構築するのに。

主の喜ぶ顔を見て、邪悪に微笑むのは妖艶な紅い踊り子と暗黒のリーストライカー。

かつて学校の七不思議事件の社会科教室を思い起こされる　あの時はロボットたちが詰められていたが　。

「ひゅー、絶景だねえー」

いやらしく口を歪ませ、エル・マタドローは戦利品を眺める。

捕まえた人間たちを彼らは無人飛空艇の燃料にしていた。

効率のよく燃料にするために人間のホルマリン漬けみたいなものになってもらった。ホルマリン漬けと違うのはまず色、赤い液。沈むのは老若男女問わず。科学者以外の人間は必要ない。食わせるだけ面倒だと、この中にぶち込んだ。

人工的に作り出される液胞が皮膚に直接入り込み、人間に酸素と栄養素を供給するので彼らは窒息死と餓死は免れるだろうが、人間としての尊厳は皆無。彼らはただ、絶えず残酷な映像を脳に直接送りつけられ、負の感情を引き出される。

「これで、あの装置が復活できるのですね　」
恍惚の表情でドラリーニョは眺める。

クリーンエネルギーではまだまだ出力が足りなくて、涙を呑んだあの機材が使える。妖怪たちを復活させるぐらいの強力なそれは、クリーンエネルギーよりもはるかに使い勝手がよく、人々の苦痛の表情にくるっている彼らは歓喜する。

「ああ。これでエル、お前の望む赤い月を出現させるがいい」

「ありがとうございます、ビック・ザ・ドラ様」

今日の夜が楽しみだぜ。

舌なめずりをし、闇の力がもっとも活発になる夜を、羊を数えながら待つことにしよう。

第十八話 オリンピックに魔物がすんでいる

それってどこの会場でも一緒だ

次回、エル・マタドーラとドラリーニョがのび太たちに襲い掛かる。
エルのいう赤い月とは！

そして赤い月の伝説に導かれ、あの人も参戦！

と、次回予告っぽいコメントにしてみました。何を書くのかさっぱりわかりませんね、これじゃ。とにかくバトルは避けられないというか、戦闘シーンが書きたくてやり始めたこのシリーズに平和的な解決は無に等しいです。

ところで、ギャク要素（と思っている）と戦闘モード（稚拙だけだね、本人は頑張っています）、どっちの方が好きな人が多いのでしょうか？ 基本的に雪子は自身が書きたいタイミングに入れ込んでいるので……気分気のまままで通ちゃってます。

薫乃さん、評価&感想ありがとうございます

これからもおもしろくなるよう頑張りますp（

）q

第十九話 何度でも巡りあうレッドムーンライト伝説

(前書き)

とりあえず伝説つくやつがネタにしようとしたらこんなことに……。
本当に読み手の年齢を考えないネタが多くてごめんなさい。
月の光に導かれたいです。信じてます、ミラクルロマンス。いつそ
セーラー服を着せたらわかりやすいのでは。

第十九話 何度でも巡りあうレッドムーンライト伝説

出会いたくはなかったな……お前には……。

でも、同じ【死】を経験し、時空の、世界の、歪みから発生した私たちはいわば兄弟みたいなものでしょうけど……。

肉体があつたときと変わらない忠実に再現された新たな身体をゆつくりと動かし《彼》は目覚めた。

翡翠の瞳を動かし、赤い水溶液にはいる人間たちを見て、何も感じられなくなつた心を確認する。

「……これが、本来の私、ですか」

あの方たちに出会っていなければ……優しいあの人と旅をしなければ……そもそもあの命令を受けていなければ……。

その大切な想い出も……体が馴染むにつれて輝きを失っていく。

無価値なモノに変わっていつてしまう……そう書き換わっていく自分に嫌悪を覚える。

抗っても侵攻する、不快な闇の念。

残るのは、私が幽鬼となり、この世に彷徨つたすえにたどり力だろ
う。

「ねえ、ビツク・ザ・ドラ……君が望むのは……」

肉体を蘇がえさせられたサイバー生命体は残酷な【弟】を見て、書き加えられた破壊衝動にとっては心地よい快感に期待する感情に苦悶の表情を浮かべながらうつすらと笑った。

夜が来る。

のび太の家の屋根でドラニコフはじつと丸い月を見ていた。

昔の僕ならば……こんな、光の見える闇は侵入するのが不便だとよく愚痴をこぼしていた。

でも、今は……好き。

優しい光が僕達を包んでくれそうだから。

ねえ、僕ともう一人の僕。

だから、協力して……。

アイスグリーンの、月のようなその瞳で夜空を眺める、茶色のセミロングの乙女。

でもその表情は険しい。

……今日の月はまだ白いままでいて欲しかったな、準備が整っていないから。

……いよいよ、来るか。持っていたぜ。

二つの思考が同時にドラニコフに流れ出でる。

「がう……」

ドラメットと同じく、変身　ドラニコフにとっては狼　できない。

人間の女の子の体になったから？

いや、校長先生によって付け加えられた【あの機能】がない身体ならばどちらにしろ、狼にはならない。

なれないのではなく、ならない。

でも、戦える。

いや、戦うために造られた。

冷酷な心と焼残な心。

二つの相違はつねにニコフの心の中に住んでいる。

ドラニコフの目の色が変わる。

目の色素がもともと少ないため、興奮するとどうやら色が拡散して、体内の中の血の色が滲むように出てきたから？

それとも、これは……赤い月にした邪悪な存在の者たちのせいなのかな？

赤く染められた月が地上を照らす。

ピンクの長い髪が揺れる。

風呂場を後にし、洗面所にドラメットはいる。

彼女は沐浴を済まし、滴る水滴を白いタオルでふき取っていた。

「……いよいよきたであるか」

はつきりいつて怖い。

友と戦うこと。

友を傷つけること。

今にでも折れそうな心に歯を食いしばって耐える。

友情を取り戻すために。

まだ細かい傷の残る褐色の肌を緑の法衣で隠し、ドラメット三世の
紫水晶の眼光が研ぎ澄まされていく。

台所。

王ドラは冷蔵庫に下味をつけた材料を入れている。

「これで明日は大丈夫ですね」

疲れきって、起きにくくなっている。

玉子さんが楽に朝食を作れる環境を提供できる。

本当に、いままでありがとうございます。

大人数で我々が押し寄せてきたときはさぞかしびっくりしたでしょ

う。

でも、まだまだ驚くことがこれからやってきてしまいます。
すみません……私の修行不足で。

翡翠の瞳から水滴が溢れ、零れ落ちる。

居間。

丁度テレビでアニメが放送されている時間。

今日はパパの好きな野球中継がないので思う存分テレビが見られる日である。

のび太君は派手な演出の、努力、友情、勝利の三本柱の典型的な熱血アニメに興奮している。

セワシ君の願いで僕は来たけど……思えば僕もののび太君に助けられ、成長していったね。

瞼を閉じれば……ガキ大将のジャイアンに立ち向かっていくのび太君を思い出した。

僕が未来に帰らなければならなくなって……。

僕がいなくてものび太君はのび太君で、一人で立ち上がって歩くことの出来る強さを証明するためにジャイアンと喧嘩した。

ジャイアンにしてみれば迷惑だったろうけど、今までの行いからすれば当然。おつりが欲しいぐらい。一矢報いる奮闘でジャイアンに立ち向かった。

僕、涙が止まらなかったよ。

またのび太君を暮らせるようになって、本当に楽しい日々だよ。
だからこそ、守りたい。

そしてそれを友に伝えたい。

「あれ、ドラえもんどうしたの、まだ途中だよ」

「んー、ちよっとトイレ」

長くなるけど、いいよね。

のび太の家から四人の乙女が月夜の影にまぎれて学校の裏山に集結するのはまもなくであった。

静寂な林に入った四つの影を舌なめずりする闘牛士。

「来たか」

「あれ、エル、着替えちゃったの」

赤いドレスから、いつもの服に替わっている。

「リーニヨ……あのな、あんなだけ動いたんだぜ、汗かいてべとべとになったにきまつているだろ……それに」

冷たい剣がエル・マタドーラの手にはえられる。

「王ドラと戦うなら、この勝負服に決まっているだろ！」
歓喜する。

細胞の一つ一つがまるで意思を持っているかのごとく、動き出す。

「そうだね」

リーニヨも納得する。

「僕だって、ドラメットの……暖かい血が見たい」

うつとりと、残酷な言葉を躊躇いもなく口にする。

「ならば……私は……他の二名を相手取っていいでしょうか」

エルとリーニヨの後ろに控える、新たな黒子。

大きさといえはのび太と同じぐらいの形だった。

「ああ」

「まあ、それがビツク・ザ・ドラ様の意志なら仕方がないし」

少しあの月の瞳の狼を対決できないのは残念だが、この獲物だけは譲れないと言い切っている。

「しかし、お前みたいになちっこののが、ビツク・ザ・ドラ様の【兄】とはな」

大女と言えはしないが、そこら辺のグラビアアイドルのボディラインとモデルのような長身をもつエル・マタドーラにしてはこの小学生高学年と大差のない《彼》に驚いた。

「私とビツク・ザ・ドラは同じような存在から生まれ出たようなものですから、便宜上そう位置づけているだけです。それに私はこの体が一番しっくりきますから。小回りが利きますし」

「僕は、君の父とプログラムされているアレを見ればなんとなくわかる気がする」

「あ、あれは規格外だろ」

《彼》が生まれたゲーム世界での設定された、父。巨大にて凶悪な妖怪。

「でもエル、少しは戦ってみたい気はしたでしょ」

「まあ、な……」

妖艶で残酷な笑いが思わず出てきてしまう。

「父と戦うよりも目の前のご馳走の方を逃がさないでくださいね、

エル・マタドーラ」

「逃がさねえって。俺にはそういう力があるし、な」

「そろそろ、迎え撃とうよ、あ、僕もうガマンできないから、行ってくるね」

まるで遊園地に行くかのように気楽に、リーニョの俊足がドラメツト三世のほうに向けられる。

「あ、待て、リーニョ！」

「仕方がありませんね。私がちゃんと囲いを作ってからと申したのに……いいでしょう。今から速攻で造りますから。少し雑になりますが、あなた方には問題がないでしょう」

「すまねえな」

「いえいえ。では……」

《彼》は怪しげな呪文を唱え始める。

時空を、分断させる……禁呪。

世界のプログラムが《彼》の言霊通りに書き換えられていく。

邪悪な意志を引き継ぐ霧が裏山を覆う。

「な、なんであるか！」

紫水晶の瞳が異変を察知したところにはもう遅かった。

「王、ニコフ、ドラえもん！」

仲間の名を叫ぶが返事がない。この霧が、音声をすべて遮断しているから。

ただ、一つ、例外がある。

「ドラメット」

妖精が、闇に魂を飲まれてしまった……邪悪な存在。

「り、リーニョ！」

ドラメットはタロットカードをきる。

「逢いたかったよ、それこそ……ん〜と、なんだっけ」
間。

「自分でいいたいことを忘れるな、である！」

「あ、思い出した、思い出した」

虚ろな瞳に宿るのは狂気。

「君の血を貪る夢を何度も見るぐらいに……ね」

突進したのは、ほぼ同時。

ぶつかり合うのも、またほぼ同じ。

ドラリーニョの蹴りが、ドラメット三世の剣のカードが。

一撃一撃が、渾身。互いの攻撃が互いの体のそれぞれの部位にうちこめられ、火花が立つ。

「さすが、だね、ドラメット！」

「まだまだ、これからである！」

地面が、風が、《彼》が作り出した霧が。

切り裂かれ、必死になって彼女たちの猛攻に耐える。

素早さ活かし、接近と、禍々しいオーラを放つエネルギー球を駆使するのはリーニョ。

たいして詠唱によつてどうしてもロスがあるが己の頭脳で、カードで罠を瞬時に張り巡らせ多様な術を魅せるドラメット。

「てい！」

蹴りが、カードから飛び出る葦、絡みつく草木をなぎ払う。
面白いな。

テラリンがドラメットに授けたタロットカードは他にどんな機能が
ついているのか。

それを彼女はどんな策をもって、どのタイミングで作動させるのか。
僕がボールを作り出す時？

この羽根を転回させる時？

それとも、今キックしている、まさにその瞬間！？

「ドラメーディア タロートーリア マハーラージャ……」

普段は落ち着いた、優しい声が……僕のために真剣にも、苦痛にも
とれる音階となってこの空間に響く。

ときどきする。

なんでここまで君は僕をドキドキさせるの。

その、ドキドキさせるのは、僕のため？

それだけでは足りない！

これだけだったらこんな素晴らしい音を出さない。

だって、君には戦う、以外にも占めている何かがあるから！

だから僕を楽しませてくれる！

自分の口から溢れ出す痛み。

滴る血は、僕にもある。

「く、はっ！」

闘士のカードによる拳がリーニヨの腹に打ち込まれる。あばらが折
れそうだった。ドラメットも無数のサッカーボールに体が打ちつけ
られている。

でも、ドラメットは倒れない。

弱々しい女性の身体で。

己の強靱な精神を奮い起こし、身体を支えているのだ。

耐えている。

傷だらけなのに、打撲は数え切れないくらいあるのに。今だって叩
き突かれているのに。

紫水晶の瞳の生気は消えない。

赤い月。

このおぞましく、不吉な月は　この世界の並行世界、いわゆるパラレルワールドにも光臨していた。
なぜ。

それはけしてこの魔法世界にも少なからず影響を及ぼしているから。
大魔王デモオンの時と同じく。

「のび太、さん……」

違う世界から来たといっていた少年がふと思い浮かぶ。

満月美夜子がその名を呟いた刹那、父が水晶玉を持って大慌てで来た。

緊急事態ならば仕方がない。

だが、乙女の、年頃の娘の部屋にノックをせずにやってきたのもだから満月博士が実の娘に白い目で見られたのはいうまでもない。

第十九話 何度でも巡りあうレッドムーンライト伝説

（後書き）

『ドラえもん・のび太の魔界大冒険』（1984年公開）も参戦させます。

この作品好きなんですよ。ジャイアンの活躍に。いろいろと教訓があつて（例：説明書は最後まで読みましょう、など）

美代子さん、ネコにされてもめげずに戦っている姿や、のび太を逃がすために自らおとりになるシーン。

もちろん、話の途中で終わりという斬新なネタも。（ぜんぜん解決してないので意味がないっていうおちも）

一応七人の魔法使いの設定……ネタバレしてみていない方にはすみませんが、メジューサと美代子との関係は取り入れたいと思います。個人的には去年の……大冒険なのに大冒険してないと、つつこんだタイプです。

カテゴリーに冒険というのがあるのに、まだ冒険部分にいけない自分にも。

では、次回に続きます。

第二十話 フリーザ様より僕は先にポロリを思い出す（前書き）

今回のお題はエル・マタドーラの声優ネタ（劇場版第二段からの）。ポロリって誰って言う人に、昔のNOK教育の『おか さんといっしょ』にでてきたマスコットキャラにそういう名前のネズミがいたのです。

そのまえにフリーザ様って誰っていう人がいたらどうしよう……いないと思いたいけどドラゴン「ピー」のキャラですよ。（あ、ピーの意味がない気がする）

蛇足 ピッコロといえばポロリと同様にペンギンの女の子の方が先に私の脳内検索にヒットします。

じゃじゃ丸はライオン、もしくは『おか さんといっしょ』の三人組です。

P・S 王ドラ、毒舌です。 マニアックなネタが普段の三倍（当社比）です。（こっちの方が重要な注意書きじゃないか！）

第二十話 フリーザ様より僕は先にポロリを思い出す

「この霧は悪意に満ちていますね、今のあなたみたいに」

「お前腹黒いな」

王ドラとエル・マタドーラとの対峙。

冷静沈着な翡翠の瞳と邪悪な瞳が交叉する。

「ドラリーニヨが来たと着てつきり貴方も学校に襲撃してくると思
ったのですが……なんですか、昼寝をしていて寝過ごしたのですか」
半分は正解。

「それだけではちがうな。リーニヨ一人だけがくるって言う、サー
ビス期間が終わったということさ」

「本当に馬鹿ですね。そんな変な期間なんて作るなんて。まあ、私
たちには都合がよかったですけど」

「それは、どうか……今のお前、力を使いすぎて集中力が散漫に
なってねえか」

「それはあなただって言えることでしょ。それに、私はリミッター
を解除しますから……実質の戦闘能力差は五分五分ではありません
か？」

人間の女の体となっても、王ドラの戦闘能力は色あせていなかった。
そして、力を引き出すのも。

変身は出来なくても、起動したときからあったデータやプログラム
には支障はない。

おかしいことだが、ビク・ザ・ドラはこのように自分たちの身体
を設定創造したのだから。

リミッターの存在もあり、解除も できる。

沸き上がる、戦慄の気迫。

瞳が翡翠のままなのは、王ドラの瞳はニコフよりも色素がはっきり
しているためであろう。

（これだけは、いいのですがね……）
赤くならない瞳。

どろりとしたオイルの色がそのまま反映された瞳ではない、緑のまのソレ。

懂れていた。ずっと普通のロボットであることを。でも、自分が自分らしい限り、自分の過去を、製造目的を変えることはできない。戦場に出されたことも人を殺めたこともないのに赤くなるそれ。

王ドラは嫌だった。瞳の色が変わったら、役に立たなかった殺戮人形だと知られてしまうから。

敵のビック・ザ・ドラによるものであるのがこの瞳は気に入っていた。

（でも……）
そんな小さなコンプレックスを……受け入れてくれる本当の親友をあいつにいいようにされたくはない！

「さすがは戦闘用だな。桁が違うね」
エル・マタドーラは銜えていた真紅の薔薇を右手に持ち替える。

「褒め言葉と受け取っておきましょう」
王ドラも構える。

赤い花びらが妖月の光を吸い込み、禍々しい光を発する。

ぱらぱらと宙を舞おうとする、より先に。

王ドラの右足が、地面を後ろに蹴る。

そして、左足が、チャイナ服のスリットから滑らかに出て蹴り上げられる。

「たあああつ、ああああ！」

気合の一閃、王ドラの左足がエル・マタドーラの手首を鮮やかに捉える。

一輪の薔薇が空中に向かって飛び出し、霧の中に吸い込まれるよう

に飛んでいく。

「くっ」

エルは思わず手首を押さえる。

「この私があるのに付属された凶器に気がつかないと思いましたか？
あなたの考えることはすべてスリットお見通しです！」

ドラパンの情報から、知ったことでもあるが。

「慣れないことはしないほうがいいですよ……それに単細胞のあなたにイメージを反映させる道具が使いこなせるとは思いませぬね」
「なんだと……」

「薔薇の花びらが襲い掛かるなんて……あなたはどこかのチェーンをはじめてしまったために本気の技をくらって死んでしまい、冥界編では第一宮でリタイヤした……魚座ですか！」
連想クイズをお楽しみください。

「それは、美の女神と同じ名の奴のことか！」

「ええ。しかも昭和時代のアニメオリジナル劇場バージョンでは某シルバー聖闘士と被る全裸シーンを見せたことで有名(?)な方ですね」

「聖衣の兜がサ エさんに見えるとかでも、か」
話が進むにつれ、どんどんデュープなものになっていくことを深くお詫びします。

それにあちらの方は炎にならないから、ネタは参考していてもまるつきりパクッタわけではありません。この話には白薔薇、出てこないし。

「だが、いいのか……俺の剣を出させて」

慣れた手つきで脇にかけていた剣を抜く。

迷いのない動きで王ドラに向かって横なぎに切りつけようとする。

「ふん、それならば私に接近戦を挑んでくるのもそうとう無謀です

！」

素早く、剣の間合いから身体を放す。

「クツ、あたりさえ、すれば……」

歯軋り。

「当ててみせてください……この馬鹿牛が！」

あざ笑う。

どちらが悪役かわからないぐらいの白熱した格闘と言葉と戦いが始まった。

戦うということは、奇麗事だけではすまされないのだから。

「大体胸の塊が大きいために死角だらけになったあなたに私の攻撃を避けられるのですか！」

王ドラの拳がエルのヒラリマントに当たる。

「お前こそ、鈍いぜ。どうやら胸で上手く腕が振るえないらしいな」

「胸のリスクはどちらにもあるということですか……ならば、この長くなった足で！」

だから傷つく。

だから傷つける。

「ところでなんでお前、スパッツの方じゃないのだ？」

四次元袖はわかるが、黒いチャイナドレスのままである。

瞬間王ドラが赤くなる。

「こ、これは……たまたま持っていたのはこれだったからです……」

「ブツ、もしかしてお前女装趣味とかあったのか！」

「んなわけないでしょ！ あのネコ型ロボットの体型では無理があります！ 土産です。ミニコさんの！」

何の因果か、王ドラの今の体格は自分の彼女とまるつきり同じサイズなのである。

「最初はこの姿になって驚きましたよ、それに……」
裾が足りなくて……。

「あゝ、思い出すだけ腹が立ちます。あやつく学校の怪異を解決する鬼の手持った先生に出て来る登場人物と勘違いされるところでしたよ！」

たしかにあれば下手なエロマンガよりもエロかった。

ジャプのシンボルマークももっとも多量に出てきたマンガでもあった。

「髭親父のマークが危ない部分につくところですよ、本当」

「あれ？ 俺たちの場合はコ　コ　だから爆弾では？」

「それはボ　ボ　のシンボルマークです！」

しかも初期。そして休刊。

気になる方はウィキ　ディアで確認お願いします。かつてはコ　コ　とライバル誌として有名。

「そっか、王冠被った恐竜……」

「それもボ　ボ　。それをいうならば、テントウムシでしょ！」

「え、鳳凰じゃないのか」

「ケ　ケ　エースです、それ！」

意外とある児童漫画。

マニアなのは当然のこと、『ザ・ドラえもんズ』が終了してからまともにコ　コ　を読んでないこともばれるぞ。

「このままボケるとボ　ボ　の後世誌や他の児童誌が出てきますね」
「後世誌や他の児童誌って……素で名前を忘れてないか？」

今、鬼　郎が連載されているだろ、後世誌。

怪傑ゾ　リの漫画化したものが載っていたのに、ポ　ラ社のそれ。

作者からのお詫び：　が多くて読みにくい話になってしまっって申し

訳ございません。

話のネタもかなりマニアックになってしまっている点も深くお詫びします。

「好きなものや話のネタ、目玉になる漫画が掲載されていない、月刊誌のことなどどうでもいいことです！」

「王ドラ、結構酷いぞ、その意見」

それでも編集者や漫画家はいい機関誌を作るために日々努力している。

「今、私たちがすべきことよりも、です」

必死に緩和させています。

「そう……私には私が信じる正義があります。私は、人々の平和と笑顔を守りたいと願っています。少し複雑ですが私は戦闘用として生を受けています。が、けして戦争を望むものではありません。たしかに私が作られた意義として損失したことはロボットである私に辛いものがあります。しかし、あえて私をこんな機械仕掛けの人形としたのはきつと天の神のおぼしめし。ならばこの力を、人や友の幸せを守るために使えないでしょうか。私の力はおぞましい、でも友は私に守ることの大切さとそんな信念に賛同してくれました。そして新たな使命を、私に与えてくれました。幸せを守る、という、私の心と合致する理です。だからこそ私はあなたと闘わなければならない。そして勝たなければならない。それが人々の幸せを守れる手段である限り」

王ドラのピンク色の唇が締まる。

「私達の友情を取り戻すために」

彼女は敢然と言い放った。

「私はそのためならば、忌まわしい力を解放します。それが正しいと思うから。私が私である限り。そう、王ドラだから！」
そして。

「エル、あなたをビック・ザ・ドラの呪縛から解放す！」

王ドラが突進してくる。場に飲まれていた。エル・マタドーラは完全に気おされていた。翡翠の瞳は真剣だった。

「な、なんだと」

エルはすぐにわれに戻る。これはビック・ザ・ドラに都合よく書き換えられた性質だが。

「ビック・ザ・ドラ様に楯突くのがいけないんだよおお、おおおおお！」

ばつと、ヒラリマントを構える。

「うわあああ、あああああああ！！！」

王ドラの怒濤の攻撃が始まる。

右の手刀、左の拳、左足のキック、回って右の旋脚。

閃光のように中国五千年の歴史の中で生まれた様々な拳法が、エルに打ち込まれていく。

跳ね回り、回転アッパー、正拳突き、あらゆる暴力が渦となり、嵐となって、揺れる乳にも関わらず、みごとに連鎖する。

「くうううう！」

そんな桁外れの連撃にも、弾き飛ばす、耐える。

エルの口に、赤いものが滴る。

「でややややああつああああ！」

王ドラはとまらない。

見れば彼女の拳も脚も赤く腫れている。

当然だ。

彼女の肉体もまた、繰り広げている暴力に悲鳴をあげているのだ。

いくら王ドラが優れた拳法使いであろうと、まったくの無傷というわけにはいかない。

拳の重みが、破壊力が彼女にも押し掛かってくる。

ましては今……弱々しい身体にされてしまったのに。力を拡散し切れるぐらいの鋼鉄の身体ではない。

秀才の王ドラが、気がつかないわけがない。

でも、わかっていても、とめない。

はっ。

こんな『熱い奴』なんだよな、王ドラは。
普段はお高く、すました優等生なのに……。

「手加減はしませんよ！」

自分が正しいと思うことに愚直であろうと突き進む。

「ああ、今日は燃えるぜ！」

ヒラリマンと、剣がエル・マタドーラの手から離れた。

虚ろだった瞳から光が燈る。

だってそうだと。

こんな美しい翡翠の目をにこった、死んだような魚の目でいつまでも見ねえよ。

拳が重なり合う。

熱い汗、血が、互いの身体に噴きかかってくる。

「エル・マタドーラ！」

揺らめき、押され、押し返し、打ちのめし、されながらも圧力が、前に進む力を維持し続ける。余人には介入する隙間も与えはしない、まさに二人だけの闘い。

「王ドラ！」

凄絶な、荘厳な空間。

もてる力すべてを組み合わせ、立ち向かいあう。

王ドラの、時空を閉じる力が。

エル・マタドーラの時間軸を操作する力が。

二人を、想像を絶する異次元の世界で殴りあいさせる。

霧など、関係なかった。

ビク・ザ・ドラの無粋な介入もなかった。

転送装置といわれたものは王ドラの拳で既に壊れてしまっている。

泥にまみれていた、エルの瞳。

炎のようなきらめきを宿す、紅玉として磨かれていく。

純粹に赤い色だけがその名を語ることが許される、ルビーの瞳。

情熱的で。

もっともエル・マタドーラにあう、その色が。

輝きだした。

「俺の拳、随分……」

裏山の、鎮魂し、静寂な森で。

「長い間使っていなかったようだね」

翡翠の瞳に、エルのルビーのそれが映される。

鏡のように。

そしてエルはこう呟く。

「
友の
ため
に」

第二十話 フリーザ様より僕は先にポロリを思い出す（後書き）

やっつと、エルの瞳の色を決めた！

実は最後の最後まで悩んでいました。赤髪なのはボディ（アニメ）の色であつさりと決めていたのですが、瞳の色はドラズそれぞれのイメージで考えようと思いました。

それが……案外きつかった。

まず、その色がすぐにわかる色なのか。

例として

王ドラ、知的なイメージで緑＝翡翠。

ドラメット三世。呪い、神秘的で紫＝紫水晶（別名アジメスト）

ドラえもんの黒はすんなりとイメージできたのですが、オニキスにたどり着くまでは時間がかかりました。

だいたいオニキスといわれてすぐにパツとイメージが出てくるのかも選考中悩みました。

でも、癒し系である黒としてはこれ以上あうものが考えられなかったので、オニキスに。

で、エルのほうは、まず、イメージ色。当初は赤だと髪と被るのでやめようかと思ったのですが……黄色、黒、茶色系だといまいち、エルのイメージにじっくりとしたものがなかったので赤にしました。

そして……赤い宝石って多かった。

他のところでガーネット、ピジョンブラッド（ルビーの一種）を使っているのはじつはエルの眼の選考から……エルのイメージとは違うという理由で外したものです。

でもしっかりと意味を調べ、由来的に気に入ってしまったので乙女ドラえもんズでは出せないだろうけれど違う作品では使おうと（貧

乏性) 思いました。

と、そんな個人的な作品の想いはここまでにして……次回、ドラえもん&ドラニコフ視点に切り替えます。そろそろ謎の少年も名前を出したほうがいいと。

そして、わからない、年代的に見てないよこの映画と思われるであろうが……確認はお近くのレンタルビデオか、行きつけの動画サイトをお願いします。

って、まだ出してないよ、《彼》の名前！

第二十一話 秋だ 芸術だ ドラえもん歴代映画鑑賞会 (前書き)

この季節誰もが通る道の一つです。

さあ、二十四時間耐久感動超作アニメ観賞のためハンカチ三枚用意してテレビにスタンバイしましょう。ちなみに私がドラえもん歴代映画を見るようにしたのは、小学生高学年。レンタルビデオで制覇。その後、受験勉強やらで、春に見逃して抜けている年がありますが、動画サイトで見られるものばかりなのでどうってことはありませんでした。

しかし、大画面で見られることに越したことはありません。映画館は苦手でも、自分のペースで、家族や友と語り合いながらみるドラえもん映画は最高です。

さあ、つづきはレンタルビデオショップで！

夢と冒険の世界があなたを待っています！

けしてレンタルビデオを推進しているわけではありません。むしろ、製造元の東 様からしたら、DVD購入の方が喜ばれると思います。

第二十一話 秋だ 芸術だ ドラえもん歴代映画鑑賞会

虫の羽音さえ聞こえなくなった、霧の中。

不気味な静けさはドラニコフの野生の感を高める。

それはかつて彼が、戦場の中でしか生きられないと愚直にも信じていた時代の……哀しくも最強の力を引き出そうとする。

「み、みんなが……」

オニキスの瞳が震えている。

「がう……」

名刀電光丸を抜き戦闘体制に入っているもののもとは気の弱いこの友に、口下手な僕では元氣付ける言葉が思いつかない。

「あ、ごめん。ドラニコフも不安だよ……」

しよげた顔ではかえって友の心を追い詰めてしまう。

てもつ、アイスクローでとにかくこの危機を脱することを考えようと僕は考えを改めた。

言葉に上手く伝えられなくても、行動で示せば、わかってもらえると思ったから。

闇の力を使った術者が現われるのはすぐだった。

深い影を身に纏った、少年。

のび太と同じ年だろうか、背丈は小学生のものと変わらないが……目を凝らさずとも感じる、強大な力を見るものすべてを萎縮させるだろう。

「初めまして、ドラえもんズのドラえもん様、ドラニコフ様」
柔らかく丁寧な口調。

唯一肌色を覗かせる場違いなほどにあどけない唇が大人びた言葉を話す。

「この度は、弟のビック・ザ・ドラの策によって大変迷惑をおかけしました」

「お、おとうと！」

こんな小さい少年が！

ドラえもんの目が見開く。

「あ、いえ……血が繋がっているわけではありませんが……運命が繋がっているといえ……解りませんか。ドラニコフ様なら、その意味がよくお分かりだと思いますよ」

「ぐ……」

運命を繋ぐ力を持つドラニコフならば、たしかに詠めた。

だが、それを説明するのは……。

ちらり、とドラえもんを見る。

「ふふふ。ご安心を。この程度でしたら、ドラえもん様に付けられている【戒め】は反応しませんよ。それに私はそんな姑息な手段であなたたちを貶める気はありませんから」

少年の口元が、優美に動く。

この少年は只者ではない。ドラえもんにつけられている強制記憶喪失装置の存在を知っておきながら、その装置の反応するキーワードをすべて把握している。

どこまで、僕たちの力を知っているのか……。

どこまで僕たちにつけられているリミッターの存在を知っているのか……。

ドラニコフの二つの電子頭脳が謎を持ちかけてくる。

その謎を半ば予想していたのか、闇の少年がごく自然にドラニコフに身体をむけ、こう答えた。

「両方。知っていますよ……ドラニコフ様……いえ、【銀河の断罪者】か【冷烈の破壊者】どちらの古き、栄光ある二つ名で呼びましょうか」

ニコフの目の前が今度こそ、暗くなった気がした。

赤い月の瞳がこの少年は、間違いなく 敵、と認識した。

ドラえもんズにとって、それとも。

あの恩人にとって。

青い冷徹な爪が閃光となって少年に無慈悲に振り落とされた。

「へっくしょん！」

大魔王、つぼの中からぼわっと、いんちきおじさん、登場

「なんか、微妙に二曲を足している歌詞が出てきたような……」

エネルギーを吸い取り、目の前のミニドラをスリープモードに強制
執行した赤い瞳の五月人形、もといバンパイアサイボーグが鼻紙を

用意しながら、つつこむ。

「ふぁー、ありがとう、バンパイア」

鼻紙を受け取り、強制的に話をずらす校長。

「しかし、校長。あなたも随分お茶目な人ですよ」

ドラえもんズとのび太少年の類まらない努力と友情によってやさしい心を持つことができたとはいえ、もとは廃棄処分とされた凶悪な兵器。時空法さえも改変しようとした犯罪者だというのに……この校長は笑って学校に迎えてくれた。

「そうかの」

自慢の白髭を触りながらとぼけた表情ではあるが、眼光はけして隠せない。

「製造元はすでに私の存在を抹消したからと、あなたの作ったロボ
といて政府に申請してくださる方なんてめったにいませんよ」

校長は確かにロボット技師でもある。

世界的に有名な方で屈指の実力をもち、ロボット工学会といえ
この人、名顧問。

そしてロボットたちの権力を上昇させたロボットの救い主とも言
われている。かつては彼を祭ったロボット宗教というものもあった、
というか今の活動中。

ロボット制作記念日（未来の日本の憲法がさだめた休日）には毎
街頭で、大文字レタリングと飾りでゴテゴテしたキャンピングカー
とともにマイクを持ってこの団体が校長のことを賛辞している。

やがては神になるね、確実に。

某死神のノートなくてもワシにもなれた！

「そう褒めなくても」

にやけた顔からけて悪い気分ではない。

「それに、おぬしが初めではないんじゃないよ。わしが造ったってこと

にしたのは……ここだけの話じゃが、ドラニコフはな……落ちていたものを改造してわしの名で登録したんじゃない」

「へ？」

バンパイアの目が丸くなる。

校長のアイデアや名プロジェクトに参加し、作り上げたロボットたちも数多いが、校長自身が趣味と実績をかねて一個人で制作したものもある。

校長が独自に作ったとされるロボットの中でも有名なのが、ドラえもんの妹として誕生させたドラミちゃんと……ドラニコフ。

ドラニコフといえば映画の俳優としても、高い戦闘能力には裏世界でも名を轟かせている。

元のスペックがどんなものか知らないが、神の手によってカスタマイズされると性能もだんちになるというのだろうか。

「ん、ニコフの場合は……」

改良ではなく、改造。

世界征服を狙っている団体のごとく逆に欠陥を与えてしまった（例：蟬を混合させた 寿命まで一週間になっちゃった。強力な技が使えるようになった 肉体が耐え切れず破損が止まらなくなっちゃった 爆死）点もある。

それにニコフの本当の戦闘力は……。

こんなちっけなものではない。

影は青い閃光に切り裂かれた、と思った。

「ドラニコフ様ならやはりそうくると思っていましたよ」
少年の口元はあくまでも柔らかくおちついていていた。
そう、だって。

「だからこそ、私もそれ相応のことをします」
少年の闇の衣が、赤く、色づく。

「三昧神火！」

猛火が、ドラニコフに襲い掛かった。

「が、あ、あ！」

「ドラニコフ！」

炎が、二人の乙女を飲み込もうとする。

「ははっははは……」

もし、ドラニコフとドラえもんが少年を見る余力があったとしたら……気がついていただろうか。闇の衣の奥に緑色の中華風の服を着ていたと。

ドラえもんズがそれぞれの対戦相手に血で血を争う戦いを強いられる状態のとき、至極一般家庭でテレビを見ていた小学生にもある危機的状况に陥っていた。

たとえるならばそう……川の氾濫を食い止めるとか、ダムが決壊を
かろうじて抑えているというところだろう。

（ドラえもんがまだ、帰ってきてないんだぞ……）
イコール、まだその時ではないのだ。

だから小さな体のある器官に脳は絶えずガマンするように命令。
大量のアドレナインも分泌していただろう。

（クールになれ、僕）

彼は、見ていたアニメのかつこいい系の主人公と同じ台詞を何度も
何度も呪文のように呟いていた。

しかし、もう、だめば……。

廊下を疾風のごとく駆け、走り、向かう先は彼の要求に応える唯一
の理想郷であり楽園でもある場所。
楽園の扉をものすごい形相でのび太は猛打した。

「ドラえもん！ こんなこと女性にいうのは失礼だと思うけど、
いくら、いくら大でも遅すぎるよー！」

……。

……。

……。

……。

……健気にも のび太はドラえもんの嘘を信じていた。
トイレに行ってくるという。

返事がない、どうやら空いているようだ。

トイレに入りますか。

はい

いいえ

一瞬どうして、と考えたが 膀胱をせき止めていたダムが陥落する
のは秒読み状態。

もう尿意に耐え切れず、 のび太はトイレに入った。

ジョボボボラァーラァー

ただいまの心理状態【極限の緊張状態から脱却しさわやかな金木犀
の香りが疲れた身体を癒す】

しばらく、お待ちください。

「はひ」

そこにいたのは試練に耐え切った勇者の顔だった。
最終ボスよりも強い中ボスを倒した感じの。

トイレをガマンしすぎると膀胱炎になる可能性が高くなるので、
良識のある、身体に優しい健康生活を送ろうとする方はここまで無駄にガマンせずにこまめにトイレに行きましょう。

「それにしてもドラえもんはどこにいったのかな」
アニメも終わり、一人部屋に戻るのび太。
ここにも皆が居ない。

急に不安になる。

いつもは閉じている、押入れを思いっきり開いた。
プライバシーの侵害だ、とかドラえもんにも怒られてもいい。

ドラえもんズの皆がいると安心できたら……でもいるのはドラリー
ニョのチームメイトのミニドラがすやすやと寝ているだけだった。
「……………」

本当にドラえもんたちはどこにいったのだろう。

「どららー！」

急に押入れの上のほうにいていたダンボールがのび太の頭に直撃した。

「へぶっ！」

お星様、きらきら金銀きらり。

「いったいなも〜」

日々の気絶の賜物か、頭が固くなったらしい。
この程度では意識が吹っ飛ぶことはない。

「どらら」

上目遣いでダンボールからおろおろと出てくるミニドラ。

（か、かわいい…………）

のび太の目を見てぺこりとお詫びのつもりなのだろう。頭を下げて腰の前にまげる。

「あ、いいよ、いいよ。僕って結構丈夫だから」

あのドラえもんを抱えられるぐらいだし。

石になった自分だって持ち上げられるぐらい体力あるし。

よくよく考えてみれば、普通の小学生よりも基礎的な体力はあるような気がしないでもないし。

「それにしてもこのダンボールは？」

中を覗いてみると、生い茂った木の葉に見立てたものが全身に散りばめられた衣装が出てきた。

「あ、これは……」

たしか三年前の学芸会の草その3の衣装。

ほかにも、松の木をイメージした、【浦島太郎が爺さんになるときにたたずむ木】の衣装。

平凡な村人その1、その2、その他モノもの。

脇役人生を物語る衣装の数々。

「こんなところにしまっていたっけ」

懐かしくも、台詞がないただ突っ立っている。

あ、なんか涙出てきた。いやだな、埃のせいかな……。

涙腺が緩んだのはけしてそんなもののせいだけではないのだが。

僕だって、カッコイイ役どころだったことだって…… あったような……。

ふと、赤い衣装が目にとまる。

「あれ、これは…… 金色の環もある。あ！ 西遊記のだ」

役どころは毎度おなじみ村人その1だけど、この衣装は学校の発表のものではない。

「懐かしいな……これを着て、斉天大聖、孫悟空様だ、とかいって

さ」

ちよつとした見栄が始まりだった、あの冒険。
ヒーローマシんで孫悟空になって……ゲームの中の妖怪たちを解放してしまった。

ママたちが妖怪になってしまふ世界を変えるため、三蔵様を妖怪から救ったな。

金閣、銀閣を戦って……牛魔王を倒して……。

「リンレイ、元気でいるかな……」

砂漠で倒れた彼を介抱したのが出会いだった。法師の元にスパイとして送り込まれた、少年。

ヒーローマシンが壊れてしまったのでゲームの中に戻すことが出来なくなつて……三蔵法師に引き取られた少年。

「ええ……私は、今、とても元気ですよ……悟空様」

燃え口盛る豪火を従えた少年……リンレイと名乗っていた紅孩児は誰に聞かせるでもなく、のび太の言霊を紡ぐ。

第二十一話 秋だ 芸術だ ドラえもん歴代映画鑑賞会 (後書き)

ドラえもん のび太のパラレル西遊記(1988年公開)から。

次回、まだまだ続くよ、裏山の大決戦。

未来のドラ・ザ・キッド側のつづきもそろそろ出てきそうな……すべては、私の文章力にかかっています(汗)。

第二十二話　せめて某バラエティーでの企画でできた声優部よりは成長して欲

『青い涙』を見ての感想。で、一番強烈に思ったこと。

第二十二話　せめて某バラエティーでの企画でできた声優部よりは成長して欲

「ていやー!!!!!!!!!!!!!!」

白い硝煙がドラ・ザ・キッドの周りを色づく。

金色の髪をなびかせ、碧眼が高速に動く韋駄天を捉える。

「俺は、一度勝った奴に負ける気はないんだよ」

空気砲を韋駄天の腹に押し当てる。

「ふん、拙者はいつまでも勝てると思っている天狗に負ける気がないが……な」

ククククとあざ笑う声がキッドの耳に届く。

「減らず口を！」

空気砲が唸る。

残像ではない、それはたしかに生暖かいものが宙を飛び散る。

「ぐほっ」

衝撃で、肺に血が上ってきたらしく、韋駄天の口からも人にはありえない青い血が滴る。

「自然発火させないでやったんだ、こいつで成仏しな」

かつては王ドラの奇策によって炎の中に消えた、韋駄天。大量の脂汗をかき、瞳孔が開きつつあった　　が。

「何で俺もいつしか、考えねえのか？」
サトリ。

のっそりとした毛むくじやらの妖怪が何かを取り出し、韋駄天に投げつけた。

黒い闇が、韋駄天を瞬時に癒す。

「な！」

「闇の力さえ俺たち妖怪は永遠に倒せない……最初に言わなかったか？ つまり、この闇の力が絶えず供給されている間は、無敵状態なんだよ」

くそ、このままじゃただのやられイベントじゃないか？

「それでも……おとなしくつかまる気はないんでね！」

つかまればただで済むわけがない。

己も、このへちゃむくれも。

親友のドラえものの妹を利用しないわけがないだろう……やはり……。

俺の力を解放するしかないか。

はつきりいつて自分に宿ったこの力は使いどころに悩む。プロテクトのせいで。

無害だと思われて制約がメンバー中少ないドラリーニョがうらやましい。連続使用が可能ならどんなに楽なのだろうか……。

泣き言を言ってもやるしかねえ！

碧眼がゆっくりと閉じられる。

親友テレカと自分の間に繋がっている一つの糸がキッドに結びつく。常人には見えないそれは力を結びつけた証。そして……。
今、キッドの持つ空気砲にその力がリンクした。

「ドラミ、エド、俺の身体につかまれ！」

「ええ」

「ほいな」

疑問を持つことはない。

これが最善の方法なのだ。

胸のさらし以外はネコ型ロボットのサイズに合わせた服のため、ミニで白くすりりとした手と足をさらすお色気カウガールの衣装になっ
てしまい、より強調されるのは、豊満な乳、尻、ふともも、そして必要最低限の筋肉しかついてないのではないかと錯覚してしまう
ぐらいのモデル並のほそい腰。
くびれているそれにドラミはガツチリと腕をまわし、きつく、しが
みついた。

「ああ。これで、いけるぜ……空、高く、な！」

イエロータイフーンが吹き乱れる。

「待っているよ、百目王！」

「ふむ。余に会いに来る気になったか」

ロボット学校の一室。新たに見つけたキーを持つ妖怪、百目王は感
じ取っていた。

百の目の中にはいつのころからだろうか世界が愛した、七の者たち

に羨望をもつ目がでてきたのは。

それは、過去に破れた怨念ではない。

邪悪だけを糧にしてきた万の目の中では異端なのだが……。

（余もまたこの世界から生まれたものということなのか）

運命を量的に調節している存在である世界からすれば、百目王はなくてならない存在である。人が、憎しみがある限り。

負の力を一身に受ける、闇の者たちが。

そうしなくては勝手に大気に無数に散らばった負の毒素がより深い負を生み出してしまう。

世界を守るための裏のカード。

表に変わることも出来る、それ。

しかし……。

見極めるには現世の百目王は未熟である。

そして。

女神たちも。

紅い妖月が漆黒に塗り固められた少年にも光を浴びせている。

「さてさて……」

己の必殺技である三昧神火があっさりと決まり少々物足りなさど、
久しぶりに使った妖術に加減がわからずついやり過ぎてしまった
かなと自己反省していた。

漆黒の霧を用いたのはこの霧の中ではあらゆる攻撃が不必要に干渉
しないようにするいわゆる決闘用の結界術だから。

戦闘狂となったとはいえ、個人戦に集中したいと願うのは別段おか
しくはない。むしろ相手の悲鳴や血肉を思う存分貪りたくて仕方が
ないのだろう。

（私にはそういう趣向がわかってはいますけどね……）

もともと敵キャラとしてプレイヤーキャラにやられる役割を持つ、

紅孩児。

牛魔王と羅刹女の息子。

西遊記の中の話では孫悟空を一度破っているほどの実力者。

ヒーローマシンでは改心してしまうイベントが用意されていたとは
いえ、そのデータを書き換えられた今は最強の妖怪としてこの世に
蘇った。

のび太たちとの出会いも客観的な、あたかも本で知った知識のよう
になってしまった。

心動かすこともない。

ただのつまらない知識として。

「ドラえもん様のプロテクトの数ともとのスペックからしてそんなに楽しめるとは思えませんでした。ドラニコフ様ならもしかして、と思いましたのに」

拍子抜け、でした。

彼女とはまだ楽しめたのかもしれないのに。

それともこのビック・ザ・ドラにもらった漆黒のローブがいけないのか。

高いステルス性を誇りまた見た目とは裏腹に高い防御力を持った逸品。

ドラニコフの爪からの一撃からも無傷に、この身を守った防具。少々破れてしまっているが防具の役割をちゃんと守っている。

本来のニコフの力ではこれでも耐えられるかどうか危ういと思っていたが。

「それとも……」

この、小学生とかわからない自分の姿にまだ上手く判断しきっていないかったのか？

まあ、それはないと思う。あの緋色の瞳から発せられた眼光は鋭い。ならば……。

三昧神火は紅孩児の周りを守るように円陣に発せられている。だが、真後ろから新たな火柱が闇の衣を引き裂かんと放たれる。

「くっ」

歪む少年の口元。

「がう」

火を放った直線に唐辛子ソースを片手に持つドラニコフが、いた。

「ふふ……油断、していましたよ」

勝利を掴んだと思った瞬間が一番隙だらけになるという。

彼女はその瞬間を待っていただけなのだ。

焦げて、漆黒のローブの後ろは失った。

「これからが、本番というわけですね」
「がう」

互いの直接攻撃で。
雌雄をつける。

「三昧神火！」

拳から放つのは黒炎。

「がうああああ！」

氷の爪がなぎ払おうとニコフが構えたが、切り裂く瞬間、黒炎が意思を持ったかのように、彼女の爪の間をすり抜ける。

黒い閃光が、四方で輝く。

「がう！」

後ろに廻った黒炎がニコフを背中から無数に突き刺した。

それをみて、少年には笑みもなくただ無表情で眺めていた。

「また、ですか……」

紅孩児はため息をつく。

そう、彼女はまた紅孩児の後ろに廻っていた。

「レポートマシンの使い方……タイミングを、僕が……まちがえるわけがないから、ね」

先ほどの黒い炎に貫かれたのは残像。

「私も得意な得物を出すとしますか」

ニコフの爪と紅孩児の空間を割り瞬時に取り出した錫杖が火花を散らして交叉する。

「久しぶりに現世で使うので自信がありませんが……」

シャランと錫杖の頭につく六個の金属環を振り鳴らし、リング状に形式をとった赤く 高温によって黒く変色した炎が、大量に、ニコフを覆う。

ニコフは狼のようなネコ耳を動かし、音を正確に読み取る。

「邪魔……」

寡黙に。

牙を剥き、炎を正確に放つ。

爆炎と閃光。

相殺。

四散した炎のエネルギーだけが少し肌を焦がす。

「さすがですね。音を頼りに相手の攻撃を先読みするという噂は聞いていましたが……」

信じるとは、別次元の話。

ニコフが無口の理由の一つには、その音を聞き逃さないために自身の出す音を最小限にしようとしたから。

「巨大なエネルギーを使えば使うほど……間が長くなるし、そのぶん音も長引くから……ね……」

「それだけではないのでしょうけど。しかし、親友テレカを使ってもないのにこの力とは……やはりもう一人のあなたもまた随分張り切っていますね」

ドラニコフにある二つの心。

「それは……君が、強いから……」

興奮する。

抑えていた、感情。

もともと二つの人格を用いていたのは、あるシステムを簡単に起動させないための処置。

敵陣に突っ込むときならばいざ知らず、味方のベース上で、メンテナンス時に戦闘モードに移行されてはニコフの戦闘能力では壊滅してしまうためであった。

ただ、軽くスプーンを握ることもできない強靱な殺戮メカ、ドラニコフ。

それを阻止するために二つに分かれた人格。

破壊者としてのシステムと創造者としてのシステム。

ボーとしている、優しいニコフは創造者としてのシステムがメインとなつて起動している証。

戦闘時、狂った野獣のように敵を切り倒し、炎を撒き散らすニコフは破壊者としてのシステムがメインとなつて起動している証。

そして今の女体化したドラニコフは両方の特性を併せ持っている。まるで二つの人格が右脳と左脳に分かれただけみたい。

そりゃ、任意で変身するときはこの二つのシステムを同時に起動させ、戦っていた。

破壊者としてのシステムだけではただ暴れるだけで仲間のことや周りのことを考えられなくなるからで、二つ併せるからこそ道具を自ら使う冷静さを持ち、みんなとの連携も取れるのだ。

でも、戦いが終わったときすぐにでも破壊者としてのシステムを停めている。それはあまりにも破壊者としてのシステムの『我』が強いから。

奇襲から爆撃まであらゆる用途に使用できる多目的戦略兵器として最適化されたシステムはニコフの精神プログラムにものを破壊する時の、おぞましいほどの高揚感を与え続ける。それは麻薬のようで、ちよつと気を許すと破壊に酔いしれたいと願ってしまう危険なもの。

「君が強いから……僕もまた……」

その力を思う存分振り回したくなる。

妖月が残酷に微笑んだ。

「ぐうぐう」

身体にかぶさっていた掛け布団を足蹴にし、腹を出して寝ているジヤイアン。

彼は今日おいしいご飯も食べられて幸せいっぱいだった。

それにドラニコフという今は可愛い美少女が作ったものである。幸せでなくてどうだろう？

たしかにドラえもんたちと同じく今は少女だが、もとはあのタヌキ……もといネコ型ロボットではある。しかし、今の見た目が偽りだろうと嬉しいことには変わらない。

いっそ、あのままならいいな、とか邪な想いもある。

ジヤイアンには珍しくつけられている熊さんの絆創膏。

それをつけてもらったとき、そのときほどその邪な想いが膨れ上がってしまった。

恥じるべきことだが。

でも……。

そんないつもなら考えられない心の葛藤がジャイアンの頭を刺激し、かおを赤くしながら通常の三倍ぐらい頭脳を回転、悩みを駆け巡る。

知恵熱がでそうだった。

いや、知恵熱はあった。

それを沈静化させたときにはもう、疲労がいつきにジャイアンを襲い……現代にいたる。

通常よりも早い眠りだが、不思議と妙に心地いい。

そしていい夢を……見てしまう。

起きたたくなるような、そんな夢。でも、自己嫌悪に陥るようなもの。

だって……。

一方、のび太はいうと。

「あうふ〜」

トイレにまた駆け込んでいた。

どうやら、ガマンしていたため毒素が十分に出されていなかったた

めか……随分と短い間で用をたすはめになっていた。
精神衛生のため、薔薇の花と噴水をイメージしてください。

第二十二話　せめて某バラエティーでの企画でできた声優部よりは成長して欲

今回の題名のネタは、ドラミちゃんの今の声の人ネタ。

久しぶりにスペシャルで聞いたので。

別に、人物の区別が出来るならば今の人の声でも文句いいません…
…それに歌手だった人が声優していても独特のはっきりボイスなら
苦情はいいません。

だいたい見た目は子ども、頭脳は大人の探偵さんの声の人だって歌
手で、ガン　ムWでは主題歌を歌っていたし。

黒歴史とか何とか言われながらもアニソンやら劇場版で脇役の声を
やってのけた今は眼鏡をかけたおさげの極道な先生で有名な女優の
方だっていたわけだし。

故人だけど河馬みたい妖精さんの声の人だって……。

芸能人が別に声優していてもいいわけです。

ただ……。

ウリ　リ時代よりは……何年前だっけ？

とにかく千　さん、頑張ってください。

では、また次回につづく（懲りずに）

第二十三話 あ、すばらしいオチをもう一度（前書き）

ネタのためにコ コ しらべていたら、知ったこと。

小学生のとき爆笑した、今でも私の心の中では伝説、神化している
あのお方のよくやっていたオチ……。

あ、追記しておくけど、ドラえもんの作者はガチ。

じゃないと家にある同作者による本数に説得力がない。ほとんど親
の所有物だけ。

第二十三話 あ、すばらしいオチをもう一度

「ふ」

のび太はトイレから帰還。再び階段を登り、自分の部屋に入った。
「どらら」

西遊記の孫悟空の衣装が気になるのか、しきりに見つけたミニドラは胴衣のなかをくぐっては出て、くぐっては出て、を繰り返していた。

きゅん。

（か、可愛い）

小さいモノがちょこまかと動いている姿にのび太は微笑む。
マイナスイオンが部屋全体にふんわりと漂う。

ジリリリリリリリリリリ。

一階の黒電話の音がするまでは。

「ん、なんだろう？」

パパかママが受話器を取ったのだからそんなに長い間聞いた音ではない。

でも、なぜか気になった。

ジーコジーコ。

ママがどうやらどこかに電話をかけようとする音。

それは三回繰り返していた。

この電話が学校からの連絡網だと知るのはあと数分後。

赤い月が狂わせる、運命。

邪悪な霧と炎が裏山を焦がしたのはその妖気に心を狂わされたものの仕業か。

「炎で、僕が負けるわけがない！」

空に大地に黒い炎の塊が飛来しようと、彼女の野性的感とテレポー

ト能力の前では無残に四散する。

「そんなことは私を立ち退かせてから言ってください」
瞳が、表情が見えない紅孩児なのだが、心が、躍る。

驚愕。

歓喜。

憤り。

不も正も溶け込むように交じり合う。

「でも、いいですね……」

己の技が紙切れのようにかわされている。

かろうじて接近したとしても、ニコフの氷河の爪で切り裂かれ、相殺される邪炎。かかかかと閃光が輝いて爆音が起こる。

それを恍惚に感じる。

少年はさらに深く、感じたくてうずうずしてくる。

「戦闘狂としてプログラムは組まれていない筈なのですが……せつかく現世に蘇ったのですから……」

黒い衣が動き出す。

不意打ちでやられ、後ろの部分が左右に大きく切り裂かれていたソレが少年の動きによって出来た風によって靡く。

それは、黒い、本当に黒い……漆黒の翼のように。

黒い天使が女子高生の間合いに飛び込んできた。

「えー!」

赤い月の瞳が大きく、開く。

「大変申し訳ございませんが、私も、もう少し直に楽しみたいと思います……」

右手に握る錫杖が、ニコフの心臓部めがけて左右に振り翳される。勢いあまって黒い羽根も空気の壁の前に散る。

「があっ！」

重い一撃が、空気の壁がニコフにぶち当たってくる。

「素早いですね」

紅孩児の狙っていた心臓には直接当たりはしなかったが、彼の作った風の衝撃波はニコフの関節に悲鳴をあげさせる。

「く……」

ここで初めて、ドラニコフはよろけた。

軋みが生じる。

歯を食いしばり、耐える。

こんなところで、負けるわけにはいかない。

みんなを、友を助けなければ……。

邪悪な霧を発生させた目の前の術者を倒さないと……。
ぐはっ。

思っていたよりも、この身体は弱かった。

血が口内から溢れてきた。

気をつけないといけないな、と口元に流れた血を拭いながら思う。

でも、それを苦しむという感情は……不思議となかった。

破壊を司るプログラムのせいなのか。

もともと備わっていたニコフ自身の……。

「まだまだ眠る時間では……ない！」

「本当に楽しませてくれますね、ドラニコフ様！」

絶対零度の爪は赤い月の妖光で輝き、狼はしっぽを立てる。

黒い天使となった少年を食い荒らすために。

獣たちの戦いが、ヒートアップする。

咆哮が、裏山を制圧する。

視界をさえぎる霧の中、袴姿の青髪の乙女は、孤立していた。

「ドラニコフ〜！」

聴覚を圧する、爆音だけが友がいるという証。

そんな危機迫ったものが唯一友の生存を意味するものとはなんとも皮肉なものだろう。

ドラえもんは唇を噛む。

ドラニコフが単体であの黒いマントの少年と戦っていることを知っている。

だって、僕をここに隠すように置いていったのだから。去り際に借りたヒラリマントはドラえもんを守りに徹しさせようとする、ニコフの考えから。

そりゃ、いくら名刀電光丸で力をつけようと……戦闘力が桁違いのニコフの足手まといになるのは当然である。

しかたがないといっってはそれまでだが……それを言っちゃあ、おしまいさ。

ああ、おしまいさ、おしまいさ。

自然とため息も漏れてくる。

あまりにも、ヒーツとアップする炎使いたちによって、霧で立ち込められた結界術も、限界を迎えていたのだった。

[illegible]

秘密道具を使うにしても、炎を消す道具がポケットの中にあっただろうか？

○

小さな雨雲をいくつも発生させ、小型の雨雲を形成し、雨を降らせる機械で……いかにも頼りないとか言われて　小さな雨雲たちは炎に飲み込まれた、ものの見事に頼りなかった、ある意味で期待を裏切らなかつた秘密道具。

いや、待て……たしか煙突が2本になったことで、短時間で大きな雨雲を形成することができるようになった。アップした雨雲製造機があった！

こちらは改良前と比べてものすごく役に立った。

雲製造機と雨雲製造機フラネットのことは詳しくはそれぞれ【パラレル西遊記】、【アニマル惑星】で確認してね。

それと、雨雲製造機は漫画に登場していないので注意。（パラレル西遊記自体原作漫画ないけどね）

でも、四次元ポケットには……何もない。敵になってしまったドラリーニョとエル・マタドーラに悪用されないようにと、この時代に残った僕らはドラパンに預けた。
使いたときに使える道具がない。

焦燥する。

僕に力があれば……。

紅孩児の放った炎に身を焦がしながら、ドラえもんは自分の無力さに涙する。
ドクン。

心臓の音。

ドクツドク。

高まる。

力が欲しいのなら手を伸ばせ。
我らの力とつながれ。

ドラえもんの胸の中に隠し持っている親友テレカがうつすらと淡い光を発した。

「あれ？」

「んぬ？」

闇に落とされた妖精と、緑の風の魔術師のふと疑問を口にする。同時に感じ取ったそれは、多分同じもの。

多分ではない、確信になる。

だって、互いに持っていた親友テレカが光ったのだから。

「この感じ、もしかして！」

「待ってください、ドラえもん！」

闘牛士と拳闘士は慌てていた。

「まだ、私たちはここからでていないのですよ！」

王ドラは悲鳴をあげていた。

実は彼女たちは大変な目にあっていた。

いや、彼女たち自体にはなんも問題はないのだが……。

数分前。

「困ったことになってしまいました……」

「ああ、まさか、俺達の力が交じりつてしまうとこんなことになるとは、な……」

「加減を知らないのですか、馬鹿牛！」

「お前こそリミッターを取っ払ったらどうなるか予測できなかったのかよ！」

二人は完全に途方にくれていた。

くれていたが、まだ体力が残っているのか、互いの顔をつねりだす。実は、彼女たちは孤立を余儀なくされていた。

彼女たちが死力を尽くし戦いをした結果偶然出来てしまったのは、絶対防壁結界というものだった。

命名は、暇だから、とか他に考えるものなかったからと率直に考えて出来たのだが……そんな状況を説明するには事足りない。

とにかく、王ドラとエル・マタドーラの力が偶然にも交じり合った結果できた暴走の果ての檻に二人を閉じ込められてしまったのだ。

「しかし、結界なんて作り出せたということは解くこともできるんじゃない？」

「ええ。理論上は出来ますよ。きっと。しかし、私たちは解くまでのエネルギーまでなくなってしまったようですからね……」

親友テレカの力を受信できるまで体力は戻っていない。

「もしものときはすべての運命を切りはなす、キッドがいれば何とかなるのですが……」

「じゃ、なければドラえもんだな。あいつの力は強力だし……」
ごろん、と転がる、エル・マタドーラ。

「そうですね……って、それがまずいんじゃないですか!」

「あ」

うなずいてからの訂正。

「ドラえもん、早まらないでください!」

王ドラの願いはむなく結界に阻まれる。

運命を量的に、調整する。

世界の定理とかはよくわかんねえが、一つの願いが叶うときいつでもいくつかの願いがはかなく散っていく。

「ド、ドラえもん……」

ドラえもんの力は、時空を超えてでも感知できる。

キッドは泣きそうな顔で力を今まさに使おうとする友の名を呟いた。

キッドたちは空気砲の煙と放射によって韋駄天とサトリから逃げたというのに……いや、その運命しか残らないようにキッドは他の可

可能性を切り捨てていた。

捕まるといふものや、倒せるという可能性の運命を。

一番、ベストなのは倒す。

だが、そんな奇跡を一度に起こしてしまうと体の負担は……。

そう、ただ運命を切っていてはだめなのだ。切った分だけ、世界に負担をかけさせる。

世界にいくら愛されているとはいえ、強引にそれだけを求めるのはなんらかしらの負の影響を残してしまう。だからこそ、ドラメットとドラニコフがいなければならないのだ。

世界の運命の糸を読み取る能力者が。

そして、運命を導かせるために何をすればいいのか答えられる糸を紡ぐ者が！

どんなに困難でも持っている《全ての力》を引き出せば願いは叶う。その、タイミングを間違えてはいけないのだから！

それを理解する可能性を、奪った、失わせた、愚かな者たちがいたのが……《不幸》だった。

でも、しかたがないよ、ね……。

諦めに近い気持ちで。

僕たちロボットは、人間を大切にしなければならないから。

人間の都合で作られたのだもの。

僕らの存在意義のため。

でも、そんなのって、納得できるものなのかな？

運命を見る限りは……それが一番皆と一緒にいられる時間が多かった。

傷つくことがあっても、悲しみにくれることがあっても……僕らの大切に行っている友情は壊れなかった。だから、偽りがあっても、幸せだった。

百パーセントの真実なんかないこの世界だから、丁度よかったのかもしれない。

付けられたリミッターにそつと触れながら、そのときは納得した。正しいと思いたかったのかもしれない。

自己暗示に近いものだった。

創造のプログラムが結論付けた……そう勝手に結論付けて、僕は……ただボーっと時を過ごしていたのかもしれない。

雨が降り注ぎ、黒い炎を消し去ったときまでは。

「ま、まさか……」

ドラニコフは震えた。

雨が冷たくて、凍えたものではない。

うつすらと輝く親友テレカは彼女が思ったことが事実だと証明する。

「ついに覚醒しましたね」

待っていましたと紅孩児の口元がほくそ笑む。

「そんな……、そんなのって……」

紅い瞳の震えも、とまらない。

恐れていた運命が結び繋ごうとしているのが、見えてしまった。

ドラニコフの慟哭によつて紅孩児はビツク・ザ・ドラが狙つて運命に導いたと確信する。

なら、私がとるべき行動は唯一つ。

「少々名残惜しいですが、今日はここまでということとで退場しましょう。ドラリーニヨを連れ帰るのには一苦労しますが、まあ、彼女なら何とかなるでしょう」

買い物を終えた主婦のごとくあっさりと引く。

「……」

すっかり戦意を失つたニコフはただただ呆然と黒い天使を見ていた。

「あ、そうそう」

忘れ物があつたのか、紅孩児はニコフに近づく。

紅孩児にも殺意がないということもあり、ニコフは爪を振り下ろす気もなかった。

ゆつくりと、時が止まつたかのように……黒天使はニコフに告げる。

「では後ほど、その時は」

「

耳元でささやかれる言葉。

スツと血の気がさがる。

「ど、どこまで……知っている！」

「貴女方と変わらない、ぐらいでしょうかね……」

「それならば……僕のとる行動ぐらい……」

「いえいえ。まだ運命は一本に決まっていますから。……しかし、避けられるとお思いではないでしょう？」

「……」

「貴方様の親友が大切ならば自ずと答えは導かれると思いますよ。では再見」

黒天使が、備え付けられている強制転送装置によつて、すべてが何事もなかったようにもとの静寂な森へと戻る。

裏山に立ち込められた霧もこの一瞬で消え去った。

だが、代わりに、裏山からそれほど遠くはないところを中心に強烈な光が放たれた。

「ええー！ 本当なの、ママ！」
所変わってのび太宅。

のび太は思わず夜中だというのに大声を上げていた。
だって、学校の調理室がガス爆発を起こし、炎上する騒ぎになるなんて！

とりあえず 臨時休校、決定。

宿題をしていない僕を含めた生徒は喜ぶだろうけどさ。
かわりに土曜、学校行かなければならないので素直には喜べないのだった。

第二十三話 あ、すばらしいオチをもう一度（後書き）

玉 た し先生……亡くなっていたのですね……。俺の年代的にはショックを隠し切れなかったといわざるおえない。ウル ラ怪獣かつと ランド、好きでした。コココの中ではベスト3に入るくらいに。

多分、彼の作品がコココ 中一番私的に笑えた。

子どもの年齢にあわせたギャク（シモネタとか、当時の流行にあわせたもの）は最高でした!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

で、本編の話題に。学校をエンジョイし、炎上したので、第二部、「学校編」終了。

次回から第三部「ノア編」に突入します。

更新スピードがおくれているのは別に、ロツ マン9（ここ、限定）をやっているからとか、ジャナイデスヨ（汗）。任天堂ゲーム機、ファ コンしかもっていないので。（しかも未だに一軍。テレビにつけっぱなしなので、P 2よりも活躍していたりする）

……D、PS『ピー』に手を着けるのは時間の問題ですけどね。

で、更新が遅れている理由は……実は少し、同人誌活動しようかな、とか考えて……そっちの創作に時間を割り当てている、からです。まだ会場押さえていないので詳しくはいえませんが、決まったら書き込むかもしれません。

では「ノア編」で。お楽しみに

黒井蝶さん、感想ありがとうございます。これからも一話、一話大事にしていきますので……多少時間がかかっても見捨てないでくだ

さい。雪子からの願いです。

第二十四話 無理と諦めたら終わりである！（前書き）

ノア編、スタートします。お題から想像ついた方もいらっしやると
思うネタバレ寸前の第三部。

今月二十三日の同人誌即売会の作品作りに追われつつもちょっと一
段落したので思い切って更新します。

第二十四話 無理と諦めたら終わりである！

「どうして、こんなことに……」

チャイナ服の乙女が呟いた。

目を何度こすっただろうか。

何回見ても、何回見ても、眼下に広がるのは幻ではないということを見せ付けられる。

冷たい雨が全身に降り注がれているのだが、それよりも今の悲惨な状況にただ呆然としていた。

まるでそれはドラ○エ5の主人公の父親が天に召されるシーン……同ソフトシリーズ3の非情にもゲームデータが消えた音が聞こえてきたものを連想……って表現安いな、おい。そうだ……そういえば、攻略本かわずにプレイしたドラ○エ2で正規ルートに沿わずに町一個とばした（船だとかよく攻略推奨レベルに達していない大陸に上がることで多くね？）ために教会で聞いた復活の呪文をちゃんとミスらずに書きとめたというのにパスワードが違っってロードできなかったことあるんだよね……自分（当時小学生）。俺の五時間返せ（合計。なんだかんだといっって三回ぐらい同じこと繰り返しました。仕方がなく攻略本を古本屋で購入）！！！！

まったく関係ない、ドラ○エの話はここまでにして 追記すれば、太陽だったかの紋章があるところを見つけれなくてコントローラを投げたけど、ドラ○エ2 翡翠の瞳は瞬きせずに、この状況を見ていた。

「俺にもわからないが……」

ルビー色の瞳もまた困惑を隠しきれずにいた。

どうしてこうなったのなんていう理由なんか知らない。

だが、この光景を目の前にしているという事実は疑いようのないものだ。

「ビツク・ザ・ドラの仕業だということには変わらねえだろうな」

自分たちが偶然作り出した空間からでられたのはいいが、眼下に広がるのは異常な光景。

見ている自分たちでさえ、現実ではない何か映画の中にもいるみたいなかんじだった。

嘘のような、大気が、暴風が肌に当たる感覚はむしろ清しい。たとえ、その雨が周りの建物を容赦なく飲み込まれていく、荒れ狂う黒い竜の原材料だとしても。

町が、暴風雨に完全に喰われていたのだ。

「だって、私たちがこの世界にいたときはまだ……」

赤い月ではあるが、空は雲ひとつなく澄み切っていた。

「けどよ、俺の能力も加わっていたんだぜ、あの檻には。何日現実世界ではたつたのかわからねえ……」

エルに雨とはちがう音が流れた。

木の葉がきしむ音。

「ちよい、王ドラ」

「え」

誰かの足音だということだけはわかった。

だが、敵か味方かまでは……判断はできない。困惑している自分たちではもしものこともあり、迎えうつにしてもここはいったん木陰に忍び様子を見たほうがいい。

状況がよく飲み込めていない王ドラに説明するのは面倒だったエル・マタドローは己が力で無理矢理王ドラを引っ張り込む形で丁度いい

緑の影に回りこむ。

「エ、エル！」

「しっ」

エルは人誘い指を口元に当てて、王ドラを諭す。

強烈な違和感で、狸か狐に化かされているような顔をしたものの、もともと感もよく、頭の回転が速い王ドラ。

すぐに気がつき、石のように静かになった。

ザーザーと降る雨に紛れてきたのは二つの異形の者。

全体的に中国風の武人の格好であった。とがった耳に鋭い牙から人間ではないのは一目瞭然。

小さく声を出したのはエルだった。

「金角、銀角……じゃないか」

「え」

西遊記の登場人物ですか？

そういえば前、ドラえもんが話していたことがありましたね……なんでもヒーローマシンを中国の当の時代……玄奘法師がまさに天竺を目指して旅をしている最中の時に使って散々な目にあつたと。

あのあと数カ月後にヒーローマシン自体に問題があることが発覚して回収騒ぎにもなった。なんでもゲーム上の登場キャラが実体化し、現実の人を襲うという。プログラムとしてはあっている行動ではあるが、商品としては間違っている。

至極当然といえば当然であつた。

「ビック・ザ・ドラはヒーローマシンを復元していたということですか」

「ああ。あれほどいい兵器はないといっていたからな。やつらの特性上使い勝手よかったから……」

一時的にここで撃退できたとしても、プログラムゆえに本体であるヒーローマシンが壊されないかぎり彼らは完全に消えることはない。

現に軍事産業がそれに目をつけているといううわさはあった。だが、確かそれには大きな問題があつて凍結したという噂も……。

「なあ、兄貴」

青い鬼…… よろいの中央にある銀という文字から銀角が口を開く。

「ここらへんに本当にあの化け物女たちの仲間がいるって言うのは間違いないのか？」

あれこれ二時間探したのに。

舌打ちするのは仕方がないのだが。

（誰が化け物女ですか！）

（てか、化け物はおまえらだろうが）

静かなる激情が二人の乙女の心に宿るのだった。

「間違いはねえって。あの方がそういつてらっしゃるのだから……

キッド殿の力で開放はされたのだからな」

キッドの力で。

たしかにすべてを断ち切る力を持つキッドならば私達の力も打破できる。

いえ、それよりも…… キッド、殿？

「兄貴、やけにキッドの姐さんには頭上がないな。まだ引きずっているのかあのときの戦い？」

「ふん。俺はキッド殿のあの戦う勇姿は忘れられないんだよ。ビツク・ザ・ドラ様の女だろうと心から想うのはまた別の話だろ」

「へいへい。ではキッド姐さんの笑顔のために頑張ろうかね、兄貴」

「話がわかる弟で助かるよ、銀」

妖怪たちがげらげらと笑っている。

その会話にシヨックを受けるのは、王ドラとエル・マタドーラ。

「あの……まさか……」

「う、嘘だろ……」

あのキッドが敵側に！

自分たちがいるのをわかってそんな芝居をしたのか。だが、芝居をしているような気がしない。

動揺をする心を抑え、隠れ続ける二人。

ふわっと、なにか音がする。

空に浮かんでいたのは、魔法の絨毯。

下りてくるのはいかにもアイシャドウにマントという古代文明の魔女といったイメージがある妙齡の女性と……ドラメット三世！

「まだ見つけてないであるか」

水が苦手なドラメットにはこんなにも雨が降っているのに……一滴も彼女の周りにはついていない。

「すみません、ドラメット様」

「まあ、我輩がこれから占ってでも……」

ドラメットが紫の水晶を取り出そうとすると、魔女がそれを停止する。

「ドラメット様。お体に触ります」

「しかし……レディナ……王ドラだけでは……」

「いえ、もしまだ万が一に彼女に戦う力が残っているのならばドラメット様の軟肌に傷がつく可能性があります。ここは我らに任せ、計画の最終段階である、ドラえもん様の力を解放するほうに……」

「その鍵をエルが持っているのである」

（あ……）

そういえば、俺、身に付けたままだったな……ドラえもんのキーを胸元に隠し持つようにエルに装着されている一見するとペンダントのそれ。

エルは力を出しやすくするためとビク・ザ・ドラから譲り受けたものである。それにそのときはあっち側にいたし……。

「手負いである筈の王ドラ様のみであれば我らで事が片付きますから」

「レディナがそこまでいうならば……我輩はここから去るであるよ。いくらレディナに気象をコントロールしてもらっていてもどうも雨の中にいるという感覚は好きではないからでござる」

絨毯に飛び乗るドラメット三世。

魔法の絨毯が空高く、遠くに向かっていく姿を見送ってから魔女はぎろりと二人の兄弟妖怪を睨む。

「お前たちがばやばやしているから、いけないだよ。高貴なドラメット様がこんな野暮なところに行くといったとき私がどんな思いをしたか……」

「すみません」

「謝るぐらいならそこら辺のクソガキでも出来ることだよ。わかったらとっとと見つけるよ」

ヒステックに叫ぶ魔女になすすべなく謝罪すると、彼女とともに裏山探索を再開するのだった。

もつとも、本来の目的である王ドラたちの場所とは逆方向であったが。

「い、いったいどうなっているんだ……」

会話の流れからすると、エルが正気に戻ったことを知らないようだが。それよりも……。

「わ、私だけ……なんですか……」

ビク・ザ・ドラに操られていないのは。

しかも偶然とはいえできた絶対結界を打ち壊す力があるキッド……
どうやらプロテクトは解除されていると考えていいだろう。
ならば、プロテクトが解除されていない王ドラとエルでは勝ち目がない。

「どうしたら……いいのでしょうか」

翡翠の瞳が潤んでいるのはけして雨のせいだけではない。
絶望。

「このままおとなしくビツク・ザ・ドラに投降する気はないんだろ？」

「そりゃ、そうですけど……」

「なら、やることは決まっているだろ？」

アイツの野望を挫くために、戦うって。

「不幸中の幸いにドラえもんの能力はまだ使い勝手が悪いままだ。
その隙をどうつくか、だよな……」

こういう知略を必要とするのは王ドラのほうが長ける。

今はショックが強いだろうが、落ち着いたら、一緒に敵陣に乗り込んでやるよ。

覚悟を決めた真顔でエルはただ思う。

「ならば、その決意、私とともに歩みませんか」

女の子の声！

振り返るとピンク色の長い髪の乙女がいた。

王ドラと同じ翡翠の瞳をした、アンドロイドの少女。一目で機械人形だとわかったのは稼動音。未だに戦闘モードを解かしていない王ドラと、周りに耳を集中していたエルならば聞き取れる範囲のものだった。

「あ、あなたは」

「私の名はリルル。お願いです、のび太さんを、助けるために！」
「のび太の知り合いなのか！」

「ええ。さあこっちへきてください……そしてこれから私が言う時代と場所に行きましょう……未来のために！」

天使のような少女の翡翠の瞳に強い光が見えた。

リルルという少女と出会い、王ドラとエルは裏山から降りた。
目指すはのび太の家。まだタイムトンネルが開いている机の引き出し。

そう、彼女たちはこの現在を変えるために過去へと旅立ったのだ。

自分たちが閉じこもっていた時間を変革する。

鎮魂の森の中の一軒家。

かつて大魔王デマオンの手下によって木っ端微塵になった家ではあったが今ではすっかり復元されている。

西洋の荘厳な彫刻をあしらった白柱、大理石の壁、銀色に輝くシャンデリア。玄関ホールには、おそらく聖書の一場面を描いたのであるステンドグラス。

その七色に輝く窓には特殊な魔力により亜空間となっており、ある種の術を知っているなら自由に出入りできるようになっている。

屋敷内の同じように特殊加工された鏡の中ならば。

もちろん美代子の部屋にも備え付けられている。

それでも、でもでも、である……いくら焦っていても、父親でも、いきなり乙女の部屋にやってきたのだから右目の周りに青痣が出来ても仕方がない。

「グーで殴らなくてもいいじゃないか、美代子……うつつ……」

せめて、頬に赤い手形にしてほしかった満月博士だった。天国にいったママ、美代子は気の強い女の子になってしまいました、ぐすん。男手一つで育てた結果、ママみたいな女性らしいおしとやかな淑女に出来なくなっただけでござんない。

「で、どうしたの、パパ？」

亜麻色の髪を肩にまでかかるぐらいに伸ばした美代子。

昔のショートカットよりは幾分女の子らしい見た目ではあるが、相

変わらず夢はレーザーなので、邪魔にならないようにと銀色の三日月形のバレットで後ろにひとまとめにしている。

「そうじゃ、大変なのじゃよ。新たに発掘した古文書によると、な……」

世界の命運をにぎる七色は赤い月に狂わされる。

一色が血を流し臥せるとともに再び魔王が蘇らん。

銀の弾丸をはじき返す一色を携え、再び地球へとその牙を向ける。

（古代語なんでも翻訳ソフト

ト エキライト仕様）

「しかもこの書によると異世界で魔王デマオンが蘇るとこのじゃ……それに数々の闇の眷属たちも……」
なんとも不吉な預言書であつた。

「じゃが……前回のこともあるし……」

満月博士はかつて魔界が本格的な地球侵略を企てるという「魔界接近説」を唱えたが、悪魔たちは既に滅び去つたと信じる世間の人々にはほとんど信じられていなく、相手にされなかつた過去がある。

「ああ、でも……」

その結果青いタヌキと小学生を巻き込んで宇宙に出て悪魔たちと戦い、地球の危機を救うこととなつたのだが……いくら水晶に映し出された選ばれし魔法使いであろうともあのときのように本来は守るべき少年少女たちを危険な目にあわせてしまった。

その負い目がないわけではない。

「わかつているわ、パパ。私、頑張るわ」

のび太さんはいない世界でも、私たちはここで生きている。

なら、私たちが戦わないでどうするのよ。

「美代子……うん、美代子ならそういつてくれると思つていた」
満月博士は懐から一本のペンを取り出す。

「このペンは時空をこえることができる魔方陣を書くことが出来る不思議なペンじゃ。これから美代子……お前を魔王デマオンが復活するという異世界に飛ばす。じゃが……ワシの魔力を込めても三回しか使えない。しかも魔力の消費が激しくて当分ワシは動けなくなる。すまんが、美代子、一人で行ってくれるか。ペンの使い方や魔法陣についてはこのノートにいろいろと書いてあるから、この通りに書いて戻ってきてくれ」

「うん」

「頼んだぞ、美代子」

満月博士がペンとノートを愛娘に手渡すと呪文を唱える。

この話をする前に一度試しに魔方陣を書いていたのだろう　屋敷
が青い光を発し、美代子を異世界へと旅立たせる。

美代子が、旅立ったのは、ちょうど……のび太たちの学校が炎
上したときだった。

第二十四話 無理と諦めたら終わりである！（後書き）

バットエンディングからの脱却、を目指して。

さあつて、時間軸がのび太の学校炎上からに戻ります。えっと、ところで王ドラとエル・マタドーラがどのくらい閉じこもっていたかについては……続きであきらかになるのでこれ以上のネタバレを減らすためにあえてコメントしません。
続きをお楽しみに

ところでここから私事ですが、11月23日（日）東京ビックサイ
トの『COMIC CITY 東京120』に参加します！

配置は 東1ホール C12a

感のいい人ならば分かると思いますが……ジャンルはドラえもんで
はありません。どちらかというと、少年漫画…… 銀魂 です。一
応、雪子は小説書きました。

サークル名は「ファンブル - fumble -」

雪子の名に苗字もつきます。

当日暇でしたら、遊びに来てください。

では、次回でまたお会いしましょう。アディオス！

第二十五話 偉大なる先人は述べた、生で食べられなければ卵じゃない、と。

学校炎上からすぐ、に時間軸を戻しました。

第二十五話 偉大なる先人は述べた、生で食べられなければ卵じゃない、と。

親友テレカが光を放ったが彼女たちの戦いは止まることはなかった。テレカが光ったという疑問に、なぜ、どうして？ と考える時間を彼女たちは自身にも今対面している相手にも与えなかったのだからうすうす、否、知っていても手を緩めはしなかっただろう。それほど彼女たちはこの戦いに集中していたのだ。

「ゼーゼー……」

気がついたら、双方肩で息をしていた。

「さ、さすがはドラメット、だよね……」

ドラリーニョ。顔は残酷に、薄気味悪く笑っているが、流れ落ちる汗と血は拭いきれていない。

「そ、それは……こつちも同じである……」

全身を緑色の法衣で被ってはいるものの脱いだらきつと赤や青の痣だらけであろう、ドラメット三世。

体力はとうに限界。生も根も尽きてしまいそう。でも、紫水晶の瞳の輝きはけして消えはしない。

「まだまだ、いくである！」

テラリンの授けたタロットカードを一枚抜き取る。

呪文を唱える集中力が、残っている、残っている筈なのである。

喉は渴き、痛みを発しているようが　カードを持つ右手が震えているようが　足が重く、まるで自分の足ではないような奇妙な感覚に陥っているようが　ドラメットは世界に響く言霊を駆使しようとした。

その時だった。

ザーッとドラメットにとっては不吉な音が鳴ったのは。

降りかかる雨もとい、水。

「ぎゃああああああ！ 水うううつつ、こわああああああ！」
訳：水、怖。

「ド、ドラメット！」

まさかの豹変。

たしか、今日は雨が降らないはずなのに……。

天上世界を支配したビク・ザ・ドラ様はそういうふうに天候を設定した筈だ。

僕とドラメットが十分に戦えるようにと。

なのに、どうして……雨なんかが降るんだよ！

「は、そんなこと……」

考える、場合じゃない。

これは好機だ。

今なら、ドラメットは隙だらけ。

どんな攻撃でも、確実に当たる。

あの褐色の肌をたやすく血まみれに出来る。

吹き零れる、赤い、綺麗な、綺麗な鮮血を思っ存分見られる。

でも……。

この時ドラリーニヨは自分が、自分自身がどうしてもこのように動いたかまったくわからなかった。

後ろに備えついている、思い通りの形態を取ることが出来る、エネ

ルギーの塊で。

リーニヨは、大きな傘のようなものをイメージし、作る。

そしてそれを雨に濡れて自棄放棄しているメットの周りに置く。

彼女の嫌いな水がもう降り注がないように。

まだドラメットは体が濡れているのでパニックに陥っているが、まあ、これでそのうち正気に戻るだろう。

「……………」

なんで、僕……ドラメットのためにこんなことしているんだろう？

そりゃ…………ドラメットが僕だけを見ていない…………水に当たってギャー

ギャー騒いでいる姿は僕の気分に水を差している。

今のドラメットを傷つけてもなんの高揚も得られないくらい。

気分が乗らないから、戦うのも、やめたいくらい。

僕、疲れたし。

通信機から撤退の指令が出たとき、すんなりとドラリーニヨは受け入れた。

「ドラメット、また、遊ぼう、ね」

まだ水に怯えているピンクの髪の精霊に一言。

他にもいいことあったのかもしれないけど…………リーニヨは腕の

ミサンガに取り付けられた強制転送装置のボタンを押した。

ちよっと、肩が熱くなっていたのを感じながら。

出来事、というのは本当に急で、いつも驚かされる。

自慢の耳でもこの状態になる音を一瞬しか聞き取れなかったのです。光が、先なのは当然だが……でも音だってそんなに遅くはないはずでした。

そしておどけた顔をしてはいるものの、自分の反応速度はそんなに悪いわけではない。

だって、ナポギストラー一世が操る軍隊から逃れるために危険察知能力を極限までに高められていた。超最新というわけではないが、当時の最先端技術が備わっている、耳。

人間はもとより、未来から来たとかいつていたドラえもん様でさえ感知しきれない小さな音を自分は聞き取れるのです。

でもいくら凄い聴力を持つていようと自分は話の中心にいない限り、力の持ち腐れ、なのかもしれない。サピオ様のお父上、ガリオ

ン侯爵様がナポギストラ―一世のどす黒い野望を当初は私に話してはくれなかった。サピオ様の友達代わりとして作られた私、だからそりゃ、ブリキンと比べると……私は頼りないです。

私のこの耳の性能を引き伸ばしたときも万が一のためで、そしてサピオ様の護衛に就けさせるため。結果は役に立つことになるけど……サピオ様とともにチャモチャ星を救ってくれる人を探すことになるまで、残念なことに私はこんな大事なことは一つも聞かされていなかったのです。

別に不満があるわけではないけど……でも、サピオ様のこと私は守りたいから……どんな些細なことでもサピオ様に危害が及ぶかもしれないのなら……聞き逃したくないのです！
事前に……知りたかった……知りたかったのですよ！
だから、私は……。

「えっと、これはどういうことなのでしょうか」

まず口を開いたのはピンクの丸っこいボールのような兎……タップであった。

マヤナ国に来て早二日。ブリキンからの連絡はまだないこともあり、街に聳え立っているチャモチャ星では拝見できなかった石造りの建築物にこの国の王子の好意によって滞在している、ブリキのロボット。

つい数分前、タップは見た　ピンク色の花様な美しい衣を着たこの乙女がこの月の夜、天に落ちてきたかのように舞い落ちてきたのを。

どきっと、大きな音をたてて。

この国の王子のティオがいうことには丁度藁が敷き詰められている

場所だつたらしく……城の者に見てくるように命令してもよかつたのだが、すぐ隣にいたペットのポポルがしきりに音がなった方に行こうよといわんばかりに鳴いたのでタップがティオとポポルを肩車してすぐさま現場に下りたのだ。

そういうわけで今は藁いっぱいに敷き詰められたクッションの上にいるわけで……。

「いたた……今度から、魔法の絨毯に乗ってから魔方陣に乗っからないと……」

まったく主旨が飲み込めない独り言を呟いた乙女。

頭の上にクエッションマークが浮かんだが、すぐにビックリマークになる。

「の、のび太さん！」

ティオを見ての第一声。

デジャヴを感じる。

「のび太の、知り合いか？」

王子はもう慣れたものだつた。

のび太の知り合いは、急に現われるという法則でもあるのだろう。

実際のび太自身も急に森に現われたくらいだ。

のび太の世界から行き来する方法はもうないと神官たちは言っていたが……。

（我らの世界からはいけなくても、お前たちの世界からは行けそうだな）

圧倒的な魔術の力の差。

科学といていたような気がするが、我の世界ではよくわからん。だから、魔術。

他国が自分たちの技術よりも優れているという事実は少々緯に障るものだが、こんなことで卑屈になっているようでは次期王として民を惹きつける魅力が損なわれる。

威風堂々と構えていればよい。

「のび太さんではないの？」

「我名はティオ。このマヤナ国の王子で王位第一継承者だ。のび太とは友達だ」

そう、友達。

のび太と出会い、友になったことを誇りに思っている。

目の前の女はのび太と我を言ったとき安心した目をしていた……ということはのび太と友である可能性が高い。タップはお客様とか、己の主サピオの友だと言ってはいるが、のび太のことを想い、お客様と呼ぶとき安心した、優しい色を瞳に宿している。

……我も人のことは言えぬが、な。

我もその名を呼ぶとそういう顔になるからこそ、のび太と間違えられても次の時には……。

「私の名は、満月美代子」

微笑み。

「あ、私の名はタップです。で、この子はポポル」
「ポッポコッ！」

微笑が、初めて出会う友の「友」に伝染する。

かつてわが国を恐怖で縛り上げたレディナのように怪しげな魔術により惑わせたわけでもないのに……素直に、正直に、名を答えてしまふ。

我々の、魔術の世界では名を教えるのはけしていい傾向ではない。名は、自身を証明するもので、その名は魔術の世界では絶対的なもの。名を読み上げられ、呪いをかけられたら解くことは難しい。

現に昔、母上がレディナに呪いをかけられ、眠りについたのもこのことが起因している。

呪うには必要な道具一式をそろえることも大事だが、母の名をあのおぞましく凍りついた唇で唱えたとき、呪が発動した。

真名にはそれほどの力があるのだ。

魔女と悪魔といった悪い輩に名を名乗っていけないのはそのため。

だから、初対面の者にも警戒して真名をけして口にはしないのだが……早い話気持ちと和らいでいるからこそ警戒心がポロリと抜け落ちる。

のび太、と彼を想う心で。

まったく、不思議なものだ。

でも、嫌な気がしない。

それほど我ものび太を信じているということなのだから。

美代子、タップ、ティオが想像もできなかった出会いをしてから数分後、城内が騒ぎ出した。

「何事だ！」

ティオが声を上げる。

「こう大騒ぎをしているのは客人に不快な思いをさせてしまうではないか！」

理由はなんだ？

美代子が急に空から降ってきたことか？ 我が部屋から抜け出たことに気がついたか？

しかし、城内が騒いだ本当の理由は……その二つはまったく当てはまらなかった……。

「ん？」

タップもまた何かを感じていた。

「ん〜、どうしてこのタイミングなんだろう、ブリキン……」
耳に、チャモチャ星から通信が来たのだ。

やっと、時空の歪みが消えた、ということなのだろうか……これでお客様の下に行けるといふことなのか。

しかし、この通信もそういつた理由からのものではなかった……。

「もしかして……」

美代子の顔が曇る。

「そんなわけ、ないわよね……そう思いたいけど……」
脳が覚えている、パパからきいた預言書の一説。

あまりにも不吉で、つい頭の奥にしまいこんでしまった、いやあまりにも不吉だからこそ忘れてしまいたくなったのだろうか。

しかし、忘れてはいなかった。ちゃんと覚えていたのだ、この世界に來た理由を……。

「ところでどうして僕は今こんなことになっているんだろう……」

「どらら〜（汗）」

のび太は、またまたトイレに駆け込んでいた。

「やっぱり……卵かけご飯が悪かったのかな……黄身が潰れていたし」

ドラえもんからもこれはまずいって、止められたのに、気にせずに醤油をかけて食べた。

賞味期限が切れた卵を。

「でも、消費期限は切れていないよね……」

もし、のび太がアニメを見ていたテレビの画面を見続けていたならば知っていただろう。

五分間のショートニュースで、丁度のび太が生で食べていた卵を提供している養鶏所が不正に賞味期限を偽っていたことを……。

第二十五話 偉大なる先人は述べた、生で食べられなければ卵じゃない、と。

早い話がのび太が食べた生卵は完全に……。

このネット小説を食事に見る人はいないと思いますが……いる可能性も否定できないのも事実で……食事中の方、すみませんでした。

食の安全を守りましょう。守り抜きましょうというのが今回のオチでした

お腹を壊したのび太君ですが、明日の朝には治ります。ただの腹痛なんてそんなものです。

でも、マジでやばいこともあるので、やはり食には気をつけたいものです。

って……ドラえもん、関係ない！

ではこれからは関係あるコメントで 前回、王ドラ以外が皆敵の手に堕ちた、未来を書きました。ううん……やはり各ドラえもんズファンを敵にまわしてしまったような感が……。雪奈 さんにもショックだったと感想が……。

不快に思った方、申し訳ありませんでした。

だいたいドラリーニョファンにもかなり申し訳ない状態なのに……文章が増えたとか、で、まだ、敵サイド。

純粋な性格ゆえに、ビツク・ザ・ドラに危険視されたために……こんな長々と……。

しかも、更新スピードが遅いの……。

次回、早めにアップするように頑張ります。

でも、そのまえに完結させたいモノもあるわけで……。

同人誌活動にいったんケリがついたのでここ二ヶ月よりは早くなると思います（笑）。

P・S やっぱり（笑）ではありませんね、はい。
とにかく次回もお楽しみに。

第二十六話 アイテム二号が犬が欲しくなる(前書き)

気球でも、アローでもいい……ガッツ足りないから不安定な足場に泣いている今日ごろごろ。(BYロッ○マンロッ○マン・PS“ピ
ー”)

本当に、読む方の年齢の考えてないネタですね、はい。

茸食べて大きくなる赤い帽子のおっさんネタならまだわかってもらえる可能性高いのに……任○堂だとい、ジョ○メカファ○トが傑作だといってしまうタイプなので。

私はロボットが好きなんですよね。好きなゲーム作品はほとんどロボットがいるし。

なくて好きだというのは……あれ、あつたっけ？

友情伝説も、タヌキ……もといネコ型ロボットが七体も登場しているのが気に入っているわけだし。

ゴーレムがロボットに入らないっていうならまだ……何とかあるっぽい、うん。でも、キラー、マ・シーンと出会うためにドラ○エ2買った気が……。

第二十六話 アイテム二号が犬が欲しくなる

天上世界に帰還して、ドラリーニヨはスポーツドリンクの口を開いた。

傷ついた身体はすべての傷を癒すことが出来る己の能力で跡形もなく消え去っている。ビツク・ザ・ドラに与えられたスイートルームの冷蔵庫に入っている少し甘い水は少女のピンク色の唇が触れ、飲みつくされていく。

「ぷはっ！」

息継ぎのために離されたソレはすでに三分の二の水を失っていた。

「水分補給はこれぐらいにして……」

ドラリーニヨは風呂場へと向かう。

戦いで汗と急な雨で濡れたユニフォームを洗濯機につっこみ、ボタンを押す。

地上の世界よりも科学力が発達しているこの世界ではこれだけで数分すれば温かくて柔らかい服に洗いなおしてくれるだろう。

その間ドラリーニヨはのんびりと温かいお湯に浸かり、水の感触を楽しむ。

冷たい雨によつて寒く冷えきった華奢な身体にじんわりと熱が全身に広がって気持ちいい。あんなに震えていた足の指先までに血が巡っていく感覚も出てくる。

「はうーん、いい湯だな」

ちよつと身体も温めすぎたかな、と、湯から足だけを出す。

ドラリーニヨは少年のような両脚だが、ちゃんと女らしいまろやかなラインを描いている。大人の脚線美にはない、少女ならではの青いセクシーな足をおしげもなく大理石の風呂場に絡ませる。

「ふうふうん」

気持ちよくてこのまま眠りについてしまいそうだった。

風呂場に備え付けられている、通信機が音を出さなかったら。

ビコーン、ビコーン。

なんも変哲もなさそうに偽造された、うさちゃんシャンプー（ピンク色の液状で、フローレンスの香りがします）の目が赤く不気味に点滅する。

「あう、ビック・ザ・ドラ様？」

「いえ。私です、紅孩児です」

ボーイソプラノ。たしかにビック・ザ・ドラの声とはまったくちがう。

「ん、僕に何か用があるの？」

「……忘れっぽいとは聞いていましたが……これから儀式をする、といいましたよ」

闇の力を手にし、ヒーローマシンのゲームの世界を現実世界に融合するという一大プロジェクトの話だっけ？

「そのために私はあれから時空を超えて必要なものを集めてきたというのに……」

「紅孩児ちゃんてタフだね。僕、ドラメッドと戦って結構疲れたというのに」

紅孩児はプログラムから出来たとはいえ、今彼を構成している肉体はタンパク質である。

疲れによって筋肉のあちこちが痛む筈である。

しかもつい数時間前に肉体を得たばかりだというのに、めまいや吐き気などといった拒絶反応を訴えず、肉体を使いこなす　随分早い適応である。

「私はあなた方とは違い、その昔血の通ったこの身体と同じ姿で長

い旅をしましたからね……筋肉が硬直するといった事態は何度も経験しています」

それでも前に進まなければ生きていけない、過酷な旅。

血に餓えた獣に襲われたり、小金目当ての盗賊、山賊と戦ったり

無慈悲な草木のない砂漠の大地も足で横断した。

特殊能力を世界にリンクさせる技術がなかったあの頃。

「まあ、私の昔話を聞いたところで面白くはないでしょう。それよりももう少しで彼らが復活しますので、ポイント0 - 830に来てくださいね」

「はい！」

そろそろ服も乾いているだろうし。

えいっと、勢いよくドラリーニヨは浴槽から出る。

緩やかに丸みを帯びた胸、ウエストは細いがくびれは控えめ、尻は男の子っぽい、子どもの肉体が女らしさを獲得し始めたときの、他にはない魅力の体が湯気を掻き分けて、洗面所に備え付けられた白いバスタオルを獲得する。

たいまつを振りかざし、騒ぎ立てる城中の衛兵たちを落ち着かせることが先決と、ティオたちは広場へと向かった。

「どうした、騒がしいぞ」

毅然とした態度。

のび太と同じ姿をしているが、ここで格の違いが明らかになる。

ジャランと金色のアクセサリを鳴らし、オブシディアンの瞳を向け、慌て蠢く兵に一喝する姿　次期王として、感情のバランスを保ち、希望が持てると同時に積極性が発揮させるよう導く力を持つ者の威厳と気品が、彼には備わっている。

「か、かつこいい」

主サピオとは違う、非常に鋭い視線にタップは思わずそれを言葉にした。

美代子は口にはしないが、タップの言ったことを同じことを思っていた。正直、それ以外の言葉が今のティオを見る限り生まれはしない。

「申し訳ありません、王子。実は大変なことが起きたので……」

「大変なことだと……ならば謝罪よりも言い訳よりも先にその大変な事態を言え！」

「は、はあ！」

おずおずと一人の兵士がティオに報告する。

「実は、レディナの遺品の、ネックレスが盗まれたのです！」

「レディナ、の、だと……」

かつてマヤナ国の征服を企んだ、不気味な魔女。

彼女は太陽の光とともに消滅したが、彼女の家には多くの禍々しくも魔術の世界においては最高級品が残っていた。神官だったこともある、魔女レディナの遺品……これらを捨て去ることは呪術的にも文化的にも出来ず国が保管することにした。

「そうか。だが、それならばすぐに……」

警備体制を整えれば賊を見つけることも捕まえることもたやすいのではないか。

「そ、それが…… ネックレスを取った賊がなんとも奇怪な者で……
一見王子と同年ぐらいの少年でしたが、黒いマントで全身を覆い隠し……」

「あれ、それって…… 黒い炎を操っていたとか言わないよね？」
伝達する言葉をさえぎって発言したのはタップだった。

本来はマナー違反なのだが、彼の顔が青く、縦線が出ている。

「ええ、まさにタップさんが言うとおり…… それはまるで漆黒の墮天使のようで」

「マヤナ国にも出るなんて…… 信じたくないけど」

「ん、話が読めぬぞ。タップ」

「すみません、王子。あ、その兵士さんちよつとよけてくださいませんか」

白っぽい石壁を空けさせ、タップは目を光らせ その光は映写機のような仕組みらしく、映像が出てくる 先ほどのプリキンから届いた映像をそのまま映し出す。

映像は、何かの研究施設を写しているようで色様々なコードにつながれた得体の知れない硝子のカプセルが何十も連なっている。そんな科学的なものから一際異質な存在が映っていた。

黒い、背中が大きく開いた檻褸切れのようなマントを着た、少年。

少年は虹色に輝く、円盤 ディスクを立派な施錠がなされた金庫から引きぬいていた。

「これは……」

「僕の生まれ育ったチャモチャ星でも同じように盗まれたのです……ナポギストラー一世の設計図が！」

「な、あのナポギストラー一世の、か！」

タップの星の征服をたくらんで、ひ弱となった人間相手に反乱を起こし、チャモチャ星を支配する独裁者となったロボット。

そのロボットを倒すため、のび太たちと先祖代々のラビリンスに挑み、目的のコンピュータウイルスをゲットし、独裁者を倒したという。

その独裁者の名は昨日聞いたから間違えるわけもない。

ナポギストラー一世。

「どうして……彼は私達の世界の悪人の遺品や設計図を盗むのですようか」

この黒マントの少年が異次元を移動できる技術を持っているのはわかったが、目的がわからない。

世界の命運をにぎる七色は赤い月に狂わされる。

一色が血を流し臥せるとともに再び魔王が蘇らん。

銀の弾丸をはじき返す一色を携え、再び地球へとその牙を向ける。

「「え？」」

ハスキーボイスから美代子が喋ったこと、だと理解は出来た。

「私が、のび太さんに会おうとする理由……私の世界で赤い月を地球にぶつけ、人類を滅亡させようとした魔王がいるの。もちろん、倒したわ、のび太さん、ドラえもんさんたちのおかげで……」

「それは……、まさか！」

「私たちと同じですか！」

通りすがりの正義の味方です。

かつてタップが聞いた、あの言葉が蘇る。

今でも鮮明に覚えている。サントさんからもらったプレゼントを有効活用して敵陣に踏み込む前の彼らが言った言葉。

今始まったことじゃないよ。

まあ、俺たちこんな展開なれてっから。

頼ってもいいんだよ。

幾多の星の中でもチャモチャ星を無償で救ってくれる人間は……彼らしか居ないとコンピュータは弾き出したが、実際目にして、私たちに空想でも仮想でもなく、現実世界で手を差し伸べてくれた方々。一度は強制的に地球に返したというのに……それでも私たちの星を救うために戻ってきてくれた。

そんな彼らがいる地球が、魔王とかいう人に狙われているのですか。

「それにこの予言には続きがあるの、数々の闇の眷属たち同時に復活すると……そうか、わかったわ。つまり、悪人たちの遺品がなくなっているのは彼らを復活させる何者かがいるかもしれないってことよ！」

美代子の周りに中心線が！

「……なんだってー（ポッポコオオオオオ）！」「」

王子、ロボット、ペットの顔が一時劇画調になりました。

脳内イメージはキバ○シ風に想像してください。

……って、マガ○ンネタじゃないか！ しかも連載終わっているよ！（でも時々復活しているツポイ） 金田○少年が絶好調に連載していたときだよ（90年後半ぐらい？）今の若い子わかるのか！

漆黒の闇を駆け、跳ぶ白い馬。

「いけっええああええええ！ エド！」

追いかける魑魅から逃れるのは、黄色い風。

韋駄天とサトリから逃れたものの、妖怪たちの追跡がなくなったわけでもない。

夜の闇にまぎれた、黒い物体。

邪悪な気配をそのまま身体に染み込ませ、体現した闇の者。

それらの体には頭があり、二本、三本……モノによっては両手で数えるのは面倒な脚をもつ。中には人間の造詣に近いものもいるが、ねじれてたわんだ四肢と、全身のバランスが不自然に崩れている化物たちばかりだ。

「しつこいんだよ!」

油污れを洗い流そうと躍起になる主婦のごとく血走った碧眼ではあるものの、精密に、正確に空気砲の照準を妖怪たちに合わせ、貫いていく。

「ところでホンマこの道でいいのか、あんさん!」

粗くなつていく息。エドはキッドの言われたとおりに学校の……視聴覚室に向かつていた。

「いいから俺を信じろ。ま、何とかなるからよ!」

「何とかって、かなりアバウトや」

エドは目じりに涙を流しつつも、結局は走るしかない。

もとい、走る選択肢しかこの地獄の一丁目から逃れる術がないのだ。

「でも、エドさん、キッドいうことも一理あるわ」

「お、わかっているじゃねえか、ドラミ」

「だって……ガサツ君が私たちを諭すような気の利いた理論的なことと言えるわけがないもの」

キッドの頭に石がぶつかった。

おそらく、妖怪たちが落としたものだろうが、ドラミの一言のほう
がキッド（主に心）には痛かったのはいうまでも無い。

（あゝ、そうだよ、俺は気が利いたこと言えねえよ!）

キッドとて何も考えなしで視聴覚室にエドに方向指定している訳ではない。

彼女が使った力から感じ取れるのだ。そこに間違いなく、この妖怪たちを学校から退去させることが出来るものがでてくるのだと。

なんで?

どうして?

という疑問には、ニコフやメッドなら答えられるが、キッドにはそ

ここに行けば解決する、としかわからない。

5 W 1 Hの中で、どこで（Where）どうなるの（How）しか彼女の能力の範囲では見当がつかないのだ。なんか試練的なものがあるかもしれないが、踏ん張れ！ とかしかキッドは言えないのはそのためだ。運命を断ち切る、キッドだから。

（ま、どんな運命だろうと……）

嫌な運命なら断ち切ってみせる！

（それまで、もってくれよ……俺の……）

赤いリボンで縛った金髪が風に靡く。

もしドラミとエドがキッドの方を振り向いていたらわかっただろう……キッドの口元に赤い液体が滴り落ちていたことを。

昔の特撮ヒーローものでは、悪の幹部たちは薄暗く、赤いランプが燈っただけの部屋にいた。不気味で、いかもの普通とは考えられない異質の空間。

今にでも、奇怪なものが飛び掛ってきてしまうのではないかと錯覚してしまつぐらいの恐怖心を見る側に与えてきた。そういった意味ではここもそう変わらないだろう。

黒いマントを着こなす、紅孩児は薄く笑った。

様々な時空を超え、手にした悪人たちの遺品。【弟】の技術を見た
くて、奪い取った。

そして、【弟】は今、儀式を始めている。

まだ、この世に怨み、妬み、負の感情を抱ける、愚かにも率直な純
粋たる悪。どこか壊れた、かつてこの世の住民。再びこの世に赤い、
壊れた道を作ってくれる同志。

彼らを呼び出すのは難しいのではないでしょうか。

いえいえ……。

かつて人間どもを想っていた自分とは違い、楽だよと、【弟】は
邪悪に笑っていました。

その【弟】は今、うきうきとコードを繋げています。

魔界、霊界……地獄……既存している言葉で表すのならば、これら
しか思い浮かびません。そこで蹲っている魂にアクセスし、こちら
側に引き込むのが今、行われている業です。

空気の流れがより心地よく黒く歪む。

今、どうやら完了したらしいです。

卑しく、ビク・ザ・ドラは《復活の間》で叫ぶ。

「深き眠りから、目覚めるがいい……我が同胞たちよ！」

第二十六話 アイテム二号が犬が欲しくなる（後書き）

久しぶりにキッド登場です！

次回はキッドの方をメインに一話こしらえる予定です（あくまで予定）。

……ドラパンはもう少し待ってください。

只今、アンパンもとい、カマンベールチーズパン片手に牛乳を飲んでいます。

つれのミニドラといっしょに（なぜ！）。

早い話、今、彼の状況はこういうカンジなのです。

とにかく、今までのキッドの出番の少なさの鬱憤を次回に思いっきりぶつけます。

ようさん、たつのおとしごさん、感想ありがとうございますううう！
p（ ）q

では、次回をお楽しみに

第二十七話 学校の七不思議ってたいてい三つしかない（前書き）

ちなみに私の学校では一つしかなかったです。

あるだけましなのか……あ、ちなみにうちの学校の怪談に出てくる妖怪（幽霊？）の名は「逆さピエロ」といいます。

第二十七話 学校の七不思議 調べていたい三つしかない

真夜中の学校。

鳴り響くのは、かさかさという不気味な音に、空気砲の弾の発射音。

つい数分前のやり取りが懐かしく感じてしまう。

タイムマシンで学校に帰って、校長室でお茶を何杯も飲んでいたらいつの間にか、こんな時間になっていた。あ、何杯も飲んでいたらそんな時間か？

ともかく、そんなかなで授業なんかとくに終わり、部活動だつて下校時間のチャイムとともに撤収。生徒たちは皆、下校している。だから今、思いつきり暴れられるのが不幸中の幸いで……いや、その表現は違うな。

邪魔者がいない広い校舎で暴れるために配慮した、ということか。

（まったく、俺たちのためによくこんな舞台まで整えやがって）

軋む、胸の鼓動。

もしニコフの奴がいたら、気がついていただろうな。

俺の、心臓の音の異常に。

「シャカカアアガカアアエウネイエイエイエエツエエエエ！」

前方から、黒い拉げた四肢をバネのように曲げて、勢いづけて、身体からキッドたちに向かってくる妖怪たち。

こんな奇怪なやからがひつきりなしにやつてくる今、余計なこと考える時間は与えねえか？

ならば……。

「命知らずは俺がうち貫いてやる、ドカン、どかああああんうううううう！」

キッドの掛け声とともに発射される空気砲。一発の黄色の竜巻が悪霊に命中するごとに、風に巻き込まれた黒い塊は無に還る。

「ふう……」

赤いリボンでしばった金髪が風に靡く。

絶えず、向かって来る雑魚敵。

エドは走ることをやめず、どんどん進んでいく。ん、こんなシュチュエーションどっかで見たような……。画面が強制的に一方方向に進むやつ、よくシューティングで見る、強制スクロールみたいだよな……。

金髪碧眼の美女カウガールが親友の妹のナビ、相棒エドとともに妖怪たちが巣くった学園に黄色の突風を靡かせる。

走りきれ！

アイテムをとってパワーアップせよ！

親友テレカを七色に光らせた、ハイパーボム！

仲間のキーを拾うことにプレイヤーキャラが増える！

通常七人＋シークレットで……。あのキャラも使える！

まさか、まさかの展開。君はついてこられる、か……。このドラマに！友の祈りと、友情が今！

さあ、君のテクニカル操作で怒涛の嵐を呼び起こし、画面に埋もれる魑魅魍魎どもを吹き飛ばせ！

真夜中の学校怪談番外編スペシャル！「白馬に乗って駆け抜ける！IN2009」

ジャンル：シューティング 対応機種PS“ピー” マルチエンディング

店頭推奨価格3980円。指定：全年齢
五月上旬発売予定。

……しません（TOT）

「でりやあああっあっああー！」

本編のキッドが頑張っているので話を戻します。

エドは高速で廊下を飛び交い、キッドが目障りな黒い妖怪たちを片っ端から撃破しながらドラミのナビによって精確に視聴覚室を指す。

「エドさん、この曲がり角を右に……これが最後よ！」

黄色の聲が、白馬を導く。

「ほいな！」

エドの蹄が壁をけり、一直線に視聴覚室へと飛び込んだ。

反応した視聴覚室のセンサーはシャッター音を鳴らしながら、白馬を出迎える。至極あっさりと。

そして扉のすぐ側にスタンバイしていた大きな暗闇のカーテンが三体に包み込む。

「いたた……」

視聴覚室に入り込んだその瞬間視界をさえぎられたために、キッドはエドの手綱を思いっきり引っ張った。みんなが、ばらばらにならないように。

ちゃんと、自分はドラミもエドも離してはいない、はず。

なのに……。

「なんで、お前と俺しかいないんだよ」

キッドは齒嚙みする。

睨む視線の先にいるのは……数多の目を持つ妖怪王、百目王。

「ふふふ。まあ、そうかわい顔で見詰められるというのは悪い気はせん。それにしてもセクシーだな」

豊満な胸をさらして隠すぐらいで、あとの装飾品、衣服はネコ型のときを同じもののため、すらりとした手と足が、ザ　世界　まるみえ　テレビ。

女の子に免疫がない男子高の一生徒ならばクラリと悩殺　パラダイス。

青年誌などが巻頭カラーでこさえる、80年代の水着アイドルの煽りキャッチフレーズが出てくるよ。

「俺は好きでこういう身体になったんじゃない！」

つつか、ドラズみんなそうなのだけど。

キッドの空気砲が唸り、黄色い風が百目王の目に向かって一斉に弾丸となって、降り注ぐ。

「ふむ」

対して百目王は冷静だった。

風の弾が一直線に向かっているのに、だ。

「先代のメモリー通り、落ち着きがなく攻撃的なのは可愛くなっても変わらぬというのか」

だから、かわいいなんていうんじゃない！

込みあがる吐き気を抑えながら、キッドは怒鳴りたかった。

しかし、そんな暇を与えてくれるような生半可な敵ではないのが、

百目王だ。

強敵なのだ、彼は。

それは間違いない。

だから……。

「だからつても……」

キッドは苦笑する。

あんなに猛烈な風が百目王に届かなかったのだ。

どんなマジックをつかったのかわからないが、妖怪王に当たろうかとした刹那、風はすべて消え去った。

まるで最初っからそんな風がなかったのかのように。

音も何らかしらの派手なアクションがあつたわけもなく……弾丸のすべてがテレビの主電源を消し、画面が消えるがごとく。

「これはいくらなんでも反則じゃねえか……」

飄々としたいかにも余裕たつぷりの表情の妖怪王に今の自分の技が通じきれるとは思えない。それに、龍神の爺さんの力もねえし、だいたい百目王を倒す、あの剣が今手元にもねえ。

そんな悪状況でどうやってたらいいんだよ……ふ、きまってるあ、力をつかってやりやいいんだよ！

キッドは目を閉じ、集中しだす。

親友テレカの力が、自分にリンクする。

百目王はそれをやれやれとした表情で見ていた。

「ま、あ、そんなに慌てなくても……それにここではどちらにしても倒せないぞ」

「？」

もつともその言葉の意味を彼女が知るには力を解放したときだろうが。

百目王はただ静かに、彼女が理解するのを待った。

「これは一体どういうことなの」

視聴覚室に飛び込んだのまではよかった。

黒いカーテンみたいなものに体が包まれたと思ったが、なんらかしらの影響はドラミとエドにはなかった。ただ、キッドだけが……眠っているというぐらい。

同じように対面している目がたくさんある、妖怪も眠っていた。

無防備に。

余裕？

韋駄天とサトリを携えている者の。

「くくく……」

「ヒュッ、また遭ったな」

二体の妖怪たちはいやらしく笑う。

この二体がここにいる。上手く撒いたと思ったが、行き先を知っていたらしく先回りされた。

（でも、キッドが視聴覚室を目指すって言ってきたのは、サトリから逃げ出したときなのに……）

ドラミの顔が強張る。四次元ポケットに入る片手をそのままにして硬直していた。

キッドが動けない今、どう考えても不利なのは自分たち。

ドラミのもつ秘密道具だけでは最強クラスのこの妖怪たちを相手するのは至難。

逆に妖怪たちにしてみれば絶好の機会である。
なのに、彼らはけして仕掛けては来なかった。

何かを思案し終えたのか、韋駄天の耳まで裂けた口が動き出す。

「ふん、ここは我らが妖怪王の顔に免じて一時休戦といこう」
前に振りかざす鎌を後ろに引く。

「そうだな。大将が話している最中に周りをうるさくしたら興が削がれるだろうし……。あ、今キッド、気がついたな。そりゃそうさ。夢の中でいきり立つてもなんもいいことねえって、あ、でも……。あ、単細胞はそっちでいくか」

サトリも戦闘態勢を解除する意志を表示し、ドシンと大きな毛むくじやらの身体を地べたにねっころがせ、完全に電波の観客状態だ。

「何を言っているンヤ」

エドが素直に疑問に思ったことを述べる。

韋駄天が胸糞悪そうな顔でギロリと見てきたが、サトリがにやにやとエドの質問に答える。

「ん、今な……。うちの大將とその金髪少女が夢の中でどんぱちしている。心を読み取れるワシなら見る事ができるが……。こいつは見る能力がないんで面白くないのさ」

こんな話を聞いたことはないだろうか。

脳の活動はアセチルコリンら脳内信号伝達物質が基底の周波数で振動を伝えることで成り立っている。

しかしある種の電磁波はそのアセチルコリンの振動と共鳴したり阻害したりしてその伝達物質が持っている情報を書き換えてしまう。その結果幻覚を見たり想像したモノが実際にそこにあるように感じてしまったりするという話を！

「で、脳内アルファ電磁波によって人間は“化け物”を見るとい

話だ」

「サトリはん、随分博学やな」

「まあ、うちの大將の場合その電磁波をそこで寝ているキッドにかダイレクトに与えていないというだけだ」

キッドはエドの背中に乗ったまま、百目王によって見せられている悪夢に荒い息を吐いている。

「より高度にリアルに見せるように今の百目王様を見ての通り、一般的には“夢”と言われるフィールドでキッドと“お話”をしているわけだ」

皮肉めいた、口調。

話が見えないことに韋駄天は怒りを隠しきれずにいる。

「俺でよかつたら実況中継してやるよ」

「いらん。どこかの厨房みたいになるのはオチだ。せつかく22世紀にいるのに百目王様の力が強すぎて貧弱な秘密道具ときでは覗けんし……こうならば待つ楽しみを味わうしかないだろ」

味わう気はないだろう。じっとすることがあまり好きではない最速の妖怪がよく言う。

これは自分に言い聞かせて待っているのかもしれないが。

サトリは腹の内を明かさな一癖ある同僚を冷ややかに見る。

すべては“夢”の中でしか繰り広げられていない、幻の対面。

の、はずですが。

びくくうううういいいつ。

キッドのしなやかな体が茹で上がった海老のように曲がった。

「な、何が起きているの!」

ドラミの悲痛な声。

先ほどからキッドの額から汗がにじみ出ている。

ただの“夢”なのに……。

「まあ、“夢”なのはたしかや。でも、“悪夢”というのは変わら

んな……」

いやらしく邪悪な顔を嬉しそうに目を歪めるサトリ。

サトリにとって今見ているカードは愉快で仕方がない。

（さあって、キッド。お前はどのカードを引き抜くのだろうな……）

我々、百目王に仕える妖怪は人類には“ジョーカー”。

今のキッドは人類にとって何のカードになるか試されている。

我々の妖怪王がディーラーを務めて。

一人にやけている、サトリを後目に、ドラミはポケットに入れている手をつめていた。

「キッド……」

ドラミの右手を強く握られたキッドの左手。

守ってみせると誓った、キッドの熱がたとえ“悪夢”を見せられていても変わっていなかった。

“夢”の中でも黄色い竜巻は吹き乱れていた。

「てめえは許せねえ、絶対に、だ！」

キッドは百目王に怒りを顕わにしている。

もともとドラズの中で沸点が低く、キレやすい、単純王ではあるものの、百目王に向ける眼光には怒りとともに違う色が混じっていた。それは過去の懺悔。

過去への執着。

過去の……嘆き。

プロテクトを施されたことによって、出来なかった……一人の女性の命を救うこと。

「そう、怒るな。と、いつでも貴女の逆鱗にわざと触れた世が言うのもなんだな……」

キッドの負の感情がここまで心地良いのかと思うと、百目王は愉快だった。

彼女の心の闇……妖怪たちにとって華美なる果実。

（世もここまですごいとは予想はしなかったが、な……）

ビク・ザ・ドラに教えてもらった、キッドの逆鱗。

それを言霊にしたら、キッドはここまで発狂するとは……。

（それほど、愛していたのだな……）

そう、愛していた。

何人にも換えられないぐらいに。

この下にある言霊はキッドが《力》を結びつけたときに放ったもの。

「くくく……これほどの力があるというのに……愚かな人間にいたために、救えなかったのだよな……キャサリンという女性を！」

空気の流れが、鋭い、棘に変わった。

相手はもちろん、己も傷つく、最悪の流れに。

キッドの身体に醜くも哀しい目を覆いたくなるような傷が引つ切り無しに刻まれていく。

古傷が、まだ癒えていないソレも相乗し、キッドの心を抉る。

血がそこかしこからどくと垂れ流れている。

“悪夢”は真つ赤な、真つ赤な華を一輪、我が物にしようとその不気味な残酷な手を伸ばす。

第二十七話 学校の七不思議ってたいてい三つしかない（後書き）

あけましておめでとうございます！（いまさら）

今年も、乙女ドラえもんズと、雪子をよろしくお願いします。（つて、書き始めたのって昨年からじゃ……）

正月にアップするつもりが、ネーム描くのになんて夢中になって小説までに手が回せませんでした。

今、着々とこの小説の漫画化（今回感想をいただいたマミムメモさんや、当初から多くの方から言われ続け、皆さんの希望に応える為）に向けて主に相方のブルーが頑張っています。雪子は原案だけ。もしかししたら背景描くかも、ていうぐらいですね、後は。ページ数は今の予定では44と、微妙に縁起悪い数字 でもほとんどダイジヤストで、厳選した結果がソレなので。もし、出来上がったらご諒承ください。（今のところ白紙に限りなく近いんで）

と、これからの同人誌活動はここまでにして、キッドが今までの出番のなさをカバーするかのごとく頑張っています。もともとこのシナリオは当初から考えてはいたものの、なかなか物語が進まなかったために今になってやっと出せました。

第三部はだいたいこんな感じで第二部で昇華しきれなかった謎やネタを一つ一つ挙げていくつもりです。次回も、キッドの活躍のほうが目立ってしましますが……雪子的にはやっと出せたよ、ヤッフー！ な・の・で自重は一切しません。

時呉夾さん、ドラえもん映画ネタは少し待っていてください。ちゃんと、ありますので安心してください。

では次回もお楽しみに

第二十八話 誰にだって忘れられないくらい記憶がある（前書き）

嬉しかった、楽しかった時間があれば……悲しいとき辛くなります。
流石にキャサリンでっ誰？ とかはナイデスヨね……（おどおど）

第二十八話 誰にだって忘れられないくらい記憶がある

俺は、確かにその事実の辛い事実を受け入れた……だけど、そういったことによつてマグマのように沸きいでる、怒りというものは普段、心の奥底に閉まつている。

嚴重に鎖で封じこめられた、箱。

色なんてどうでもいいことだが、名前だつて本当はなんだつていいのだが……俺はあえてそれに黒色と決め、名をブラックボックスと名づけた。

そうすることでイメージに鮮明にすることで、より強固に、そしてめつたなことで飛び出てこないように……深い、深い意識へと怒りを封じた箱を追いやれた。

愛用のカウチに寝そべっていた昼下がりに。

暖かい太陽の熱に心地よいそよ風がキッドの頬をくすぐっていた。こんないい日に外に出ずに昼寝をするとはいいい身分であるが、それには一つ理由があつた。

「いてて……」

黄色いネコ型ロボットの腰に巻かれているのはロボット用の冷シツプ。

昨日彼にこんなことが起きていた。

野党に襲われたという知らせを受けすぐさま現場に直行。現場は谷

間でいつ岩が転げ起こるかわからない要注意ポイント。そんな難所でも悪党どもを蹴散らしたのは良いが、たまたまへボ敵ガンマンが外した弾が岩にあたり、転がり落ちてきた。

キッドであればらくらく避けられるタイミングではあったが襲われていた民間人では話が違う。

キッドは、その人を守るためにあえて腰を岩に当てさせ、岩の軌道を変え、自慢の空気砲で木っ端微塵にした。

「もうちよつとスマートに救助できていたらよかったにな……」

まだまだ俺の修行不足というものか。

腰の怪我也有り、今日はゆっくり休んでいると上官に言われこう賢沢にも寝っ転がってはいるものの……もともと落ち着くという言葉をとっさに置いてきてしまったキッド。うずうずと何か……とくに射撃の練習がしたくて、体が疼く。

「あー、もうガマンできねえ！」

キッドがカウチから出ようとしたときだった、

「だめじゃない、キッド。今日は絶対安静よ」

雲雀のような美声がキッドを制止する。

「キャ、キャサリン……」

彼女の長いしなやかな手足が、キッドをすぐ捕らえ、カウチに強制的に連行する。

「もう。私が目を放すとすぐこれだわ……」

大きな瞳に、調ったプロポーションが魅力的な美猫口ポが口を尖らせて言う。

「いい、キッド、今日特別休みになったわけがわかる？ あなたがいつも仕事でも、訓練でも無茶して怪我をするから、その無茶をしないように、ってあえて仕事から遠ざけたのよ」

「わかっているって、わかって……」

「全然わかってない！」

キャサリンはキッドの上にその魅力的な身体を押し付ける。

「わあ、わあ」

二体のネコ型ロボットが仲良く一つのカウチに身を寄せている。互いの動力炉の音が耳のセンサーに響く。

「ねえ、キッド……あまり無茶しないでよ……私、すごく心配したのよ。キッドが瀕死の状態でして帰ってきたと聞いて」

「ありや……」

岩にぶつかった あの素早いキッドが……！ なら、それはものすごく大きな岩に違いない そんな大きな岩と衝突したらキッドの鋼鉄の身体でも……ぐしゃつと…… トマトジュース（イメージです） 瀕死

という伝言ゲームでキッドがいつの間にか生死を輪迷っているというデマがキャサリンの耳に入ってきたのだ。

「俺はいたって頑丈に出来ているんだ。あんなことで死ぬわけがないだろう、キャサリン」

現に腰を痛めたただけだしな。

「でもね、キッド……あなたは本当に注意力が無いの、身体は鋼鉄でも……こんな無茶苦茶なことばかりしていたらいつか故障するわよ。そしたら……私……生きていけない……」

「キャサリン……」

心配かけてすまなかったな。抱擁する。

硝子細工の人形を手にするかのように優しく、繊細に……いくらがさつといえども愛する人は別物。キッドはキャサリンの毛を撫でる。

「ん……キッド……好き……」

ギュッと彼を抱きしめた。猫がやるような愛情と親愛に満ちた動作。彼の胸に頬をスリスリ。

甘い、甘い空間がカウチで展開していた。

「じゃあ、キッド、おとなしくしていてね」

愛らしい笑顔でキャサリンがそういつて扉の向こうに行った。

「ああ……」

恋人にここまで言われたら、いくら何でも今日はおとなしくしないと、な……。

これからおいしいものを作ってあげると買い物に出かける彼女に軽く手を振るとキッドはうつうつととしてきた。

何でこんなに眠いのか。

よくよく考えたら最近事件が多すぎてこんなにゆっくりした時間がなかったな。

それに力も使いすぎていたな……最悪な運命を切り去る能力。恋愛ゲームではないがフラグが立つことによってそのままいくとバツな運命に向かってしまう……昨日の岩もそうだ。俺が避けたら下にいた民間人Aが下敷きになってしまう。しかも、避けなかった、だけでは俺の身体に当たった岩が軌道を変えて民間人Bに当たってしまうという……運命の糸を《視た》。

だからこそそれを回避できる糸だけを残して他の糸は切り裂いたのだが……キッドの身体を酷使用する糸に繋がってしまった。

それはキッドに科せられたプロテクトのせいである。

本来ならば、キッドも無傷に済む糸もあったはずなのだが、その糸がどれなのかはつきりと《視え》ない。いや、《視させられない》様にしている。

それは運命の意図を《見る》視力がプロテクトによって著しく低下させられているから。

射撃だけで変えることができない運命。

だが、それを回避するとき、彼は自分の身体になんらかしらのダメージを負うことが多くなった。

でも、まあ、リーニョがいるし……運命を《視れ》る能力が在るメッドかニコフがそばにいれば何とかなるし……仲間が側にいないとき人間にとって恐れられている《力》を使っている自分の不注意

で、問題はそこである。

俺にプロテクトを施すようにした、人間のせいではねえ。

そう、自分に……言い聞かせてきた。

愛用のギターの弦が前触れもなく切れた、そのときまで……。

キャサリンが、交通事故で即死した。

友がいつしよに泣いてくれたのかもしれない。

友が励ましてくれたのかもしれない。

しかし、弦が切れた先のことは真っ暗に塗りつぶされている。

何があったのか、何をしていたのか……とりあえず休暇届を出した

というのは確か、らしい。事件後、職場にあっさりと戻れたのは、

いままでの有給休暇を消化するという内容をその休暇届に留めてい

たから……そういうところはちゃっかりしていた、な……。

しかしキャサリンが死んだという、つらい現実から逃げていた弱さがビク・ザ・ドラに……。

「わからんな……」

百目王は呟く。

空気砲から放たれる弾は夢でもそれなりに痛い。

痛いといっても、肉体には一切影響はない。しいて言うならば……心、か？

妖怪王として妖気を吸収した今はそれほど心が動くことはないのだが。キッドから放たれる風は、鋭く、棘のように突き刺される。

「んな、おかしいことだってんじゃね！」

「おかしいというのか？ たしかに、人間を全否定した先代の百目王はお前たちに滅ぼされたらしいが、な」

「……先代、だと」

「そうだ。今の我は、新たな百目王。そもそも人がいる限り恨みが消えぬわけがなかるう……」

人々の心の闇を暗い、生き続ける妖怪。

確実な、死などはない。

「だから、か。学校を、俺たちを狙っているのか！」

マミー十四号にクラッキングした、憎い敵。だが……なぜだ。

不気味な静けさが、キッドの心の中の傷を抉るようにはいつてくる気がする。

「まあまあ。そう力むな。我はもともと先代と違っておぬしらと直で戦う愚公などせぬ」

運命に守られ、世界に愛される、七色。

世界という大地から摘み取るのは、無謀というもの。

少し心変わりはある、お前たちに喧嘩売りも人類滅亡というものにも我は興味がないのでな。ただ、我の興味がお前たちドラえもんズのことだ。

「なぜ、人間に力を制限されてまで飼われている？」

「ああ、何を、いつてやがる！」

キッドの風が自身の頬を傷付けるとともに百目王にも向かってくる。これは完全にコントロールが上手くいつていない証拠である。今のキッドは、いけ好かない百目王から恐れている言葉を言わせないために、必死だった。

自分が傷ついても、いわせたくない言葉。

今でも心にちくりとくる、悩み。

悩みを閉じ込めているブラックボックスが開かれる言葉を聞きたくないから。

茨の竜巻が《夢》一面に荒れ狂う。

さすがの百目王でも顔が渋る、棘。

でも、百目王の言葉は終わらない。

「話しは最後まで聞いて欲しいものだ。お前たちの数々の活躍：

…この目で見てきたのだが、ほとんどお前たちの、親友テレカの力が制限なく使えたら、あそこまで傷つかずにすんだのではないか」

「何がいいたい」

言うなよ、言わないでくれよ……。

「そう、例えば……お前の、かつての恋人キャサリンを失わずにすんだのではないか」

「！」

考えたことがなかったとは言えない……キヤサリンを交通事故で失う運命を変えられたとしたら、と。

本当は、できたのに。

抑えられた、あの時まだ馴れていない制御がされていたから……。

心の奥にしまいこんでいたブラックボックスが開き、赤いリボンに結びつけた金髪の美貌のカウガールが叫ぶ！

「なんだって、てめえが……ふざけんな！」

碧眼が、数多の目を睨む。

「そんなに怒り狂うというのか、キヤサリンという名を我が口にするだけで……」

妖怪はいやらしく不気味に幾千、万もある目を細める。

「うるさい、うるさい、うるさい、うるさい、うるさい！」

茨の竜巻が大量発生する。

風が！

プロテクトをかけられていなければ確実にキヤサリンという恋人の危機と死を免れる運命に繋がたというのに。

嵐が！

ロボットだから、また同じもの、キヤサリンと同系のロボットを作ってやるうかといった心無い人間もいたというのに。

キッドを中心に暴風となってすべてを荒らす。

本当にここが《夢》であってよかったな。

現実だったら……もっと傷付いていただろう。お前の愛する学校も、そしておまえ自身も。

百年の眠りから覚めぬ茨の城が《夢》を覆いつくそうと、触手を四方八方に残忍に伸ばしていく。

（それほど憎んでいるのにも……）

茨の棘によって自分も傷ついているのに。

（そんなに、強いのか……）

生みの親、人間の愛着？

それとも……。

（確かめてみるか……）

百目王の指から黄色のスティックが出る。

己の目で探し出した、ドラ・ザ・キッドのプロテクトを解除するキ
ー。

キッドは知らないだろうが、キーの情報を妖術に変換し押し込めば、
一時的に夢の中でもキッドの力が完全に覚醒する。

ここが夢の中だから消滅させられることはまずないだろうし……何
より、好奇心が溢れていた。

どちらの運命の手綱を今の彼女が選ぶのか。

ドラえもんが覚醒した、今……。

（フッフ……何を我は臆しているのか？）

キッドの心の迷いを好機と思わなければならぬ、妖怪。なにより、
妖怪王。

人間の心の負を糧にする、卑しく、醜い怪物よ。

だがな……世界は闇を持たないといけない。

そして、その闇をより深く、闇へと導くのが我使命。

闇とともに我らと同じ道を歩む可能性が出てきた世界に愛された乙
女を取り込もうとしないでどうする？

黒い、黒い邪悪な妖術がキッドの眼下に放たれた……。

キーがキッドに掛けられている《力》を解放する。

完全に。

完璧に。

「うつ！」

百目王の言霊によってブラックボックスが開かれ……自然と息をす
るかのように怒りの感情もまた同時にキッドに蘇っている。

創造主……人間に対するロボットたちに向けられる不公平な摂理が、
俺たちの自由を奪う。生命だって奪っているときもある。それでも
人間のいうことはロボットにとっては絶対。

だって、ロボットは人間に仕えることが至上の喜びだから……否そ
んなもの人間によって身勝手に付けられただけだ。

人間に代わって万物の長にしないため？

俺たちは決してそんなつもりはなかった。なのに……人間たちは俺
たちを信じてもくれない。

自分たちのことは絶対的に、盲目的に信じさせようとするのに。

差別だ！

俺たちは、《力》を人の役に立つように身を粉にしても使ってきた
のに……しかし、キャサリンを失うという俺にとって……。

つらい、苦しい、そして悲しい運命に繋がったのは……他でもねえ、
俺たちロボットを信じねえ、人間どものせいだあああああああ
!!!!!!

「うわわあつあつああああああああ!!!!!!」

「うわわあつあつああああああ！！！」
キッドに負けないくらいの声のび太の家でも響いていた。

新しい朝が来る。希望の朝が、ふふふんふふん（鼻唄でアレンジ！と、言い張る）太陽の空に（だったはず）すこやかかなむねを（で、よかったような……）ふふふふふ、ふふふふふふんのふ（もうなにがなんだか）それイチ、二のサン（歌詞覚えていないのをいままさら痛感しています）

まともに覚えていない朝の定番メロディーはここまでにして、とにかく、ドラえもんが大声で叫んでいた。

朝から、近所迷惑も考えないワンシーン。

ネズミがいるわけでもないのに、ドラえもんは自分の髪の色と同じ色に顔色を変えていた。

「あゝ、もうこんな時間、ドラメッド、起きてよ、君の髪を整える時間があゝ！」

あの長いピンク色の髪を整えるのは骨折るのだから、とドラえもんは涙目でドラメッドが眠っている布団を小さな身体で揺らす。

随分前の話のことと忘れてしまった方のために説明するならば、ドラメッドの髪は彼女が立ったときで地面すれの長さ……膝を折るなら確実に地面につき、風が吹けば、よほど離れていないメッドの髪に埋もれてしまうのである。

現に一度ドラえもんは、メッドの背後にいたために突風に煽られたピンクの髪に吞まれてしまった。そのときの感想は、一言。

髪のもつて、女の武器になるよ、うん……。

窒息寸前になった、顔の穴という穴にピンクの悪魔が入り込んだものにしかわからない体験談である。

メッドは極力身体を動かさないようにゆっくりと顔をドラえもんに向ける。

「ドラえもん、落ち着くでござる。今日、学校はお休みであゝる」「あ……！」

学校が炎上したから、修理と安全確認が終わるまでの間は、学校がお休みになったんだっけ……。

昨日、のび太君のママが僕らにも教えてくれたこと。

「それにしてもガス爆発とは、世の中物騒だね」

施設の老朽化が進む昨今。

特にあなたの地域の学校の耐震構造は大丈夫ですか？

そういえば、火災報知器、一般家庭でも取り付けるように法律変わったよね。

家庭で出来ることとして、もしもの時の避難リュックもちゃんとありますか？

最後に1月17日を、忘れずに！

…… って本編からかけ離れているぞ！ ドラえもん！

第二十八話 誰にだって忘れられないつらい記憶がある（後書き）

ところで……1月17日に阪神・淡路大震災があつたこと、覚えて
いますか？ 知っていますか？

雪子は京都より西に行ったことではないのでその地震があつた現場に
いたわけではないのですが……日付だけは、なんとなく覚えていま
す。

と、冬でも気をつけよう、地震と火事の話はここまでにして、キッ
ドたち、未来待機組みの話は次回、決着をつける予定です。

それまでしばらくお待ちください。

ケンちゃん、一応プロローグだけでも直してみなした。焼け石に
水かもしれないけど（汗）

大幅修正よりもつい、新しいものが書きたくなってしまう意志の弱
い私を許してください。多分、この話が完結したら、そのときこ
そ！

完結できるんかい、というツツコミはなしよ、です。

第二十九話 試練は乗り越えられない人に襲いかかりはしない（前書き）

この題名出しくて悪戦苦闘した日々……やっとだせた。よかった
ちなみに、どこぞのゲーム主題歌のサビを引用しました。わかった
人は心の友です（´、`）ノ

わからない人も歌詞が凄く良いのでお勧めです。さあ、レッツ検索
（サビだけで探し出せるかぁ！）

第二十九話 試練は乗り越えられない人に襲いかかりはしない

百目野朗から放たれたのは、たしかに邪悪な陰の気であったが……なんでだ、心地が良いのか、うとうとしてしまう……ゆらゆらと深海に漂うクラゲになってしまったかのように……ん、これ、どっかで……感じたことがあるな……ん、あ、俺たちが在校中に受けた最後の襲撃時に……。

ドクン。

ドクン。

キッドが目を瞑ると同時にこの棘の森で、目にも鮮やかな黄色いリボンが彼女の華奢な肉体を包み込む。

あ、この感覚は、間違いなく、親友テレカの力が俺に結びついた時のものだ。

キッドは理解した。

リミッターをつけられた身体では十分に与えられなかった力。

運命を切り裂く能力が、完全に、完璧に自分の細胞一つ一つに染み込んでいく。

親友テレカに蓄積されていた力が重くなっている。

長い間全力で使えなかったためか無造作にエネルギーが増えていったのか？

あるいは鋼鉄の身体ではない、柔らかく、弱々しいこの身体だからか？

百目王によって引き出されている夢の中では数分しか使えないけど。十分だ。キッドの意志を確定するのには。

「……」

流れてくる。流水のように……知りたかったこと、変えてしまえたはずの運命、そして。

「まじ、かよ……」

キッドの顔が渋る。

今見たすべての運命の記憶は夢の中のもの。目が覚めた瞬間シャボン玉が空に消えるかのごとくなくなってしまうが……。

「ひでえな……」

あまりにも理不尽だった。

自分たちに科せられる運命が……。

「ふふふ、そうであろう……」

頭に響く、妖怪王の声。

何、勝手に入ってくるんだよ、俺の意識に。

「今の我はお主の考えを読み取れるぞ。我が作った夢の中であるからな」

へー、へー。そうかよ

いつそ、《視た》運命も百目王が勝手に捏造したものならよかったのに。

でも、それはありえない。皮肉にもそれは自分の力が教えてくれる。運命を切る力には、切ってはいけない運命を見ることが出来る、精密な《眼》が付いてくる。運命を捏造などといったそんな姑息な手なんか一発で見破れる。

抑えられた力を解放したことによって気持ちにゆとりができ、先ほどまでの荒れ狂った風塵は一気にクールダウンしていた。

冷静に、ガサツといわれている自分にしてはかなり深長に、妖怪王の声に耳を傾ける。

「どうだ。ソレがお主たちの作り出した人間の答えだ」

縁起悪すぎる、未来。

遠い、遠い未来でおこるかも知れない最悪な結末。
なあ……でも、今じゃないんだろ……だったら……。

「そうやって先に延ばすか、答えを……だから、お主たちは付け上がらせるのだ、愚かな人間どもを！ ソレがこの結果よ……お主たちから自由な四肢も、意志を奪い、己の欲望だけを充たす道具としてこの世に残す……笑わせるではないか……」

某ロボットアニメにあつたかの有名なロボット三原則よりもひでえ、縛りだな。

ちよいマニアックな話して良いならば……マインドコントロールによつて自由意志を剥奪させられている、戦闘人形。
あ、それはドラニコフか。

ドラリーニヨは高級官僚専用の病院に閉じ込められ、ドラえもんは腐った政府の中心部に飾られた銅像。
ドラメッド三世なんか完全に道具じゃないか……各地転々と売りさばかれている。

王ドラ、エル・マタドーラは行方知れず。
そして……俺もまた……。

「お主の力が《安定》を望む人間にしてみれば一番厄介だからな。
だれの手にも渡さないように深い眠りに就けさせるだろう……宇宙の深淵、ブラックホールの渦に、な」
それが望みなのかよ……人間の……。

「しかし、これだけ好き勝手にやっておったら、滅びも早いだろうよ……。気付いたときには終わる。なあ、キッドよ……。お主はこのまま世界を滅ぼしたいのか？ 愚かな人間どもに蹂躪されていく世界を黙ってみているのか？」

！

「お主たちを愛している世界をこんな終わり方をさせて良いのか？ ん？」

たしかに、このままいけば……。

こんな結末になるくらいなら……。

「共に、人間を滅ぼそうではないか、ドラ・ザ・キッドオオオオオ！」

闇からの、悪魔が囁く誘惑はどうしていつも正しく聞こえてくるのだろうか……。

「キッド、キッド！」

ドラミは必死になってキッドを揺さぶっていた。

呼吸は荒く、今にでもほっておいたら大変なことになりそうなキッドの身体。

なにより、あの大きく背中がのけぞったときに出たものがドラミを不安にさせていた。

血が、出たのだ。

赤い液体が口の中から。

ソレがということなのか……キッドに問い詰めたい。

「まあ、無駄だ。嬢ちゃん」

やれやれと呆れたように、暇で仕方がない鎌を持つ妖怪、韋駄天が答えた。

「術が解けないうちは、夢の中。いくら外の世界で呼び掛けたって今のこいつには馬の耳に念仏。ビクリとしねえよ」

妖怪王の力を見くびってもらっても困るし、な。

けして親切心では動かないものなのだ、我らは。

「で、でも……」

血が出ている。しつこいようだが、キッドの柔らかな唇から血が出ているのだ。

あの、勝気で身勝手に、がさつなキッドから……あまりにも不自然で、不気味だ。

嫌な予感がして仕方がない。

「まあ、その赤いのが気になっているならソレの答えを教えてやっても良いぜ」

ドラえもんの妹ということもあるし、ある程度は優しくしても良いだろう。

「キッドが俺たちから逃れる、運命以外を断ち切った、リスクだ」

……え……。

ドラミの心の中の動揺を他所に韋駄天の賤しい口の動きはまだ止ま

らない。

「こいつは親友テレカの力を使うとなんらかしらの身体の異常が出るようになってる。近くにすべての傷を癒すドラーニヨがいれば瞬時に回復するとはいえな……タヌキ型ロボットのときも随分無茶をしていたな。しかもドラーニヨがいなくても力を使っでは身体をガタガタにしていた。まったく、馬鹿な者だ。そんなリスクを負うように仕向けた人間のために力を使うなど……」

初耳。

知らないことたくさんありすぎるわ。

ドラミはキッドが握っている手をよくみる。

「人間の小娘の体になっても無茶したからな。おそらくこの臭いからして心臓をやられているな……お医者さんカバンごときでは治しきれない重傷だな」

それでも、キッドは……。

「私たちのために、戦ってくれるっていうの……」

ドラミは強くキッドの手を握る。

視聴覚室に飛び込む瞬間、強く握ったその手を。

祈るように、感謝するように。

いつだって、無茶ばかりして、私を怒らせて、心配させて……でも、みんなを、私を助けてくれるキッド。

妖怪王がどんな夢を貴方に見せているのかわからないけど……キッド、貴方は……そんなことで倒れたり、心が折れたりしないわよね。

「だって、私たちの……ドラ・ザ・キッドだから、なのね」
傷ついても。

貴方は自分が信じた道をひたむきにやや暴走してでも突き進む。

ああ、そうだな……。

「ああ。だってよ……」

赤いリボンが、キッドの髪といつしよに靡く。

「約束したじゃないか……お前を守ってみせるって……」

たしかに、このままでは辛い運命しか残されていないのかもしれない。

でも……。

「まだ、確定していないんだよね……」

少しでも可能性が残っているなら。

ひまわりのような笑顔を見せるドラミのために戦っても良いじゃないか？

辛い未来の中に、ドラミの姿が見えねえ……どうやら、俺の《視》る力自体が完璧ではないんだろぅな……だって、守るっていう奴がどんなめにあっているのかわからないなんて……闇に堕ちたら、も

つと《視》えなかったし……。それで、意味ねえよな、守りたいもの守っているかなんてわかんねえの。

キッドは闇から伸びる手を振り払った。

「やつぱ、俺、駄目みたいだ……。お前らと手を組むなんて、こと、な！」

現実ではドラミの暖かい手が握ったキッドの手から漲るのは、《希望》。

沸き上がる。

力が。

空気砲が、金色に輝きだす。

驚くのは百目王。

まさか、ここまで痛んでいる心で闇を拒むとは思わなかった。

「く、まだ、希望があるのか。あるわけがないだろうが！ ほら、《視》よ、この娘を！」

青白い光とともに出てくるのは一体のネコ型ロボット。

華奢で美しいフォームの女性型。

だが、赤いオイルを流し、真っ青の肌が異常だった。

「キャ、キャサリン！」

綺麗な顔はそのままなのに、冷たくなった恋人……。事故直後の、キャサリンその人だ。

「キッド……」

二度と聞くことがないと思っていた雲雀のような声がキッドの耳に入る。

見ると、キャサリンの手が、キッドを招くように、誘うようにしな

やかに動く。

あの昼下がりの時のように。
動きは……。
忠実だった……。

「悲しいな……」
金色に輝く、空気砲を携えたキッドは呟く。

「キッド……」
かつての恋人もまた、キッドの言葉に反応し、知ることになる。
いや、恋人だったから、もうわかっていたことなのだ。
キッドの選ぶ道を……。

「悪いな、キャサリン……俺にはもう守らなければならない大切なもの、まだできちまったから……」
もうお前の思い出と共に闇に堕ちるわけにはいかねえ……。
どんな、ことがあっても。
たとえお前に誘われても。

「迷いなんてねえよ。恨んでもいいねえよ。ただ、目の前の大切なものを守るだけでも大変なんでね、俺には、過去を振り返る余裕なんてねえよ！」
怒りに吞まれる、暇もなかったんだ、俺は。
ブラック・ボックスに隠しておいた、溜め込んだ怒りもすべて昇華

させてくれる……コレから……いや、これからも守るやつのために！

棘は既に影さえも消えていた。

疾風が、生命力溢れる黄色い閃光が、金髪を靡かせるカウガールに集まってくる。

彼女は太陽のように上空で留まり、左手にする愛用の道具に祈りを込める。

左手に集まっていく、強大な光を邪悪な妖怪に向けて構える。

黄金に輝く空気砲から膨大なエネルギーが放たれた。

「どつかああああああああああああんうううんんん
！」

光の中に浄化しようとするのは過去の恋人。

ただどその顔はけして苦痛ではなく、穏やかだった。

キヤサリンの唇が、ゆっくりと動く。

「そう、キッドは……私の愛したキッドのままね。よかった……」

本当に。
心から。

「すまねえ」

「謝らないで。過ちではないもの、キッド。こういうとき、私が最も喜ぶ至上の言葉が、あったでしょ」

ね、キッド……私ね、どうしても聞きたい言葉、あるのよ。

こんな温かい光の中でどうしても聞きたかったの。ねえ。

「愛して、るぜ……」

これから、ずっと……。

お前のことは忘れられそうも、ないしな……。

「うん。私も。ドラミちゃんに少し妬けるけど……彼女のことも大切にするのよ、キッド。じゃあ、ね」

「ああ、ありがとう、キャサリン」

ロボット学校から金色の光が雄叫びを上げる。

夢と現実を貫いて。

悪夢が、光と共に覚めていく。

希望と、願い……。

赤いリボンを振り翳した金髪碧眼の乙女が黄色いロボットを抱え、
起き上がった。

第二十九話 試練は乗り越えられない人に襲いかかりはしない（後書き）

さよならするのは辛いけど、どんな夢でもいつかは覚めるものだよ
（コレも一応どこぞの歌詞から引用。古すぎるのとマニアック
なため知る人ぞ知るで終わらせます。とりあえず、アニソン）

キッドと百目王との対峙はコレに終了。

次回は誰の視点からにしようかな。主役一号ののび太かも……。

泉さん感想ありがとうございます。

小説希望の方がいて雪子的に嬉しいです。小説にするとしても今の
状態……誤字に脱字に文章ミス、が多いので……当面は、ちょっと
……前向きに検討ということで（逃）

では次回もお楽しみに、ね

第三十話 満月大根斬りはもつくとアウト……ていうか無理難題？（前書き）

お待たせしました。やっと……やっとキャラが固定しました。

このこがどんな活躍をするのかは今後の展開に期待して欲しいです、うん。

ではどうぞ。

和さん、美夢さん、そして心温かい読書者のみなさん……大変長らくお待たせしました。

そして不思議な剣さん、前回のお題のネタをわかってくれてありがとう

第三十話 満月大根斬りはもつくとアウト……ていうか無理難題？

「涙が出る装置が欲シイ……」

そう嘆いたのは、ボクの直結の最古参ナンバー。

スネ吉という何代か前の総製作者、早い話がえらい人が造ったとされる、ラジコンロボット・ミクロスにもっとも強烈に残っている会話ログである。

そしてその会話ログが出る直前の映像記録には、二人の少女が互いに涙を流していた。

慈愛の少女と消えゆく天使。

アダムとイブと名づけられたロボットと創造主の老人の前にかかる、神話。

時代が流れようと、何代と作り出されようとボクらの……『ミクロス・シリーズ』に焼き付けられ、受け継がれているメモリー。

人間で言うならば記憶の引継ぎなのか？ いや、ロボットである僕らには1個体というものの定義はあやふやで……それに、僕は特に初代ミクロスのデータの全てを受け継いでいるので『ミクロス』そのものといってもいいかもしれない。

それにしても……何で今日そのビジョンをふと思い出したか、わからない……でも……。

「この光があまりにも似ているカラナノカ、な……」

ロボット学校を中心に光る金色の光。

あの天使の色とは違うが……ボクの核は熱いし、動力炉は早鐘を打っているし、四肢に送られる電子の量は半端なく、機体が震える。

あれは、己の意志を引き出したときに出てくる光。

ボクらのシリーズはいつもその光を見ては……ミクロスとしてやりたかったことが出てきてしまう。

未来になって、性能が向上してボクの二つの眼から涙が溢れ出す。変なのって言われてもいい……それがボクらのシリーズの特徴であり、誇りである。

ルームメイトのバンパイアサイボーグはボクの溢れる涙を見て、少し羨ましいともいつてくれた、誇り。

校長室に呼ばれてから帰って来ていないということは何かあったと思っていたけど……この光りが出るような事件が起きたのだね。それじゃ、帰ってこれないだろうな……。

でも、彼がいるならこの学校は大丈夫だ。だから。

「ボク、イカナケレバならない……ご先祖様の遣り残したこと……いやボク自身の決着をツケルために」

『ミクロス』がそうつと寮を抜け出したのはこの言葉を述べてから数分後のことだった。

青い空、白い雲……そして青天の霹靂……て。

「何で僕、ジャイアンに追いかけられるシーンから始まっているの！」

逃げ足は通常の三倍になるのび太。

いじめられっこの悲しい性であり、身を守るといった人間の防衛本能に素直な行動である。

「そりゃ、お前がミスしたからだろうが！」

空き地に転がるバットとボール……つい先野球をしていたのは確かだ。

そう、野球をしていた……目も回して倒れているドラえもんを抱えているドラニコフは木陰にいる。

「がう……」

のび太たちが空き地で野球をしようとジャイアンに誘われたのは数分前。

せっかくだから……というか暴君に逆らうのは今後ののび太の快適な学校生活を送る上で障害になりそうだからという打算的な意味合いが八割、後の二割は気分転換……というわけでジャイアンの誘いにのつてのび太、ドラえもん、ドラニコフが空き地へと召集された。

で、のび太はもののみごとに失敗した。

たしかにジャイアンの剛速球に対応するためにバットをすばやくスイングしたのはいい判断だった。

しかし、のび太の運動能力でジャイアンの球に対応するにはバットを短く持つべきだった。フルスイングは絶対無理だったのだ。そして、なにより……バットは強く握るものなのだ。

でなければすっぱ抜けて……バットがよくわからない方向に投げてしまುತ್ತて事にならなかったはずだ。
ピッチャーに当たりそうになったが、そこは我らのガキ大将、かの有名な琴ノ若の現役時代の華麗なる跳びを連想する動きで、見事に回避。

しかし、ちょうど後ろに 雷親父の窓にボールが飛び掛らないようにセカンドを守っていたドラえもんにはそんな運動神経は持ち合われていなかった。

で……現在に至る。

「もう少しで俺に当たるところだったんだぞー！」

「わー、助けてドラえもん」

だから……頼みの綱のドラえもんは今君のせいで気絶中。
助けられるわけがない。

ニコフはちよつと呆れながらも、頭に大きなたんこぶをこさえてしまったドラえもんをみる。

目をグルグルと回す親友に負担がかからないように、たんこぶを上にして膝で枕を作り、休ませている。

そういえば……学生時代もそんなことあったよね……あれはたしか……君のかわいい後輩がドッチボールの弾に当たりそうだったので、危ないっていつて頭突きで後輩を弾の起動から避けさせたのは良かったけど……代わりに君がボールに当たって……。

みんなから、「結局意味ないよ、点とられたし」と言われ、助

けた後輩からも「先輩、先輩の方が体、小さいから……まだ時間まで避けられたのでは……」と、結局違う弾に当たって外野に向かつて、さ……。

僕は丸いものが駄目だったからその時、ベンチで休んでいたけど。

後輩の身体を頭で押し出した君はふらふらして……見るからに危なかったから、僕、慌てたよ。

案の定倒れてさ、僕の膝枕で休んだよね、ドラえもん。

ニコフはドラえもんの青い髪を撫でる。

痛い、痛い、向こうの山に飛んでいけ、とかちよつとしたお呪いもこめて。

優しく、優しく……丁寧に。

さらさらと、この空のように綺麗な青をニコフの手に梳く。

白くて、透き通っているのではないかと錯覚してしまいそうな繊細な手の感触はくすぐつたい。

嫌な感じではない……うん、だってニコフの穏やかな心も溢れているから。

ジンジンと痛かった頭のこぶも納まっていく。

ドラえもんは意識を取り戻す。

気持ちよくて、つい顔がにやつく。

「相変わらず……ニコフの膝枕ってひんやりしていて気持ちいいな……」

親友になってから……球技で倒れたときいつもドラえもんを介抱していたのはベンチで休んでいたドラニコフだった。

抜群の運動神経を持つが、丸いものを見ると狼になってしまう特性から球技は休んで、後日レポートを出して単位をとっていた友。

「ドラえもん……なんか、言い方がいやらしいんだけど……」

ニコフ、困り顔。

「フフフ。事実だから仕方がないんじゃないか」

まだのび太とジャイアンのフルマラソンが実施されている空き地ではあるものの、木陰の方は涼しい風が吹いていた。

ずっと、こんな穏やかな日が続いていたらいいのに、な……。

でも……それはものすごく贅沢な願い。

だって……もう……。

なぜかニコフは一滴の涙を流すことをこの時止めることができなかった。

天上世界のターミナルを占領して数日……科学者と大統領を脅して、白状させて得た情報をたよりに搜索はしたけれどなかなか尻尾がでなかつた『鍵』。

だけど、強運の持ち主はどこの世界にもいるものである。

科学が進んだこの世界でも、カンといった曖昧なものは探し物を引きだすには有効であるという結果が実績の中で出来るものである。

「ん、やっとここでの本命にあえたってカンジかな」

無邪気で残酷な妖精は獲物を見つけて目をギラギラと輝かせていた。妖精の視界にいるのは二つの異形。

それは、彼女がサッカーのユニフォームを着ているぐらいしか特に変わったところは地球の、地上人では、考えられないから。

「くっ」

兜で素顔が見えないが、明らかに男性型は通路に立ちふさがった黄緑色の団子ヘアーの少女・ドラリーニヨを警戒している。正しい判断だ。

リーニヨはあの、禍々しく、大きなタヌキ型ロボットの先兵としてこの天上世界に降り立った邪悪な存在なのだから。

華奢で、少年のような体つきの美少女だか見た目に反して彼女は恐ろしい戦闘能力が備わっていたのだ……彼女のしなやかな身体から繰り出される蹴りは、球は、天上世界の発展と象徴した建築物を砂で造られた城のように粉碎してきたのだ。

冷静に考えて……戦ったら、どちらが破れるか一目瞭然だ。

幸なのはここが狭い地下であるということ。

あの蹴り技が容易に出さないはず……。

それは相手が王ドラだったら……硬直状態が続いただろうが、相手はドラリーニヨであった。そこが判断ミスである。

リーニヨが何も、たいして考えず、敵がいたら速決闘へと持ち込むタイプであることまでは見切れていなかったのだ。

「シュート!」

予想に反して、リーニヨはすぐに蹴ってきた。

「!?!?!?!」

仰天する。

だが、騎士として鍛え抜かれた自分もけして弱者ではない。騎士は白いマントを靡かせた。

「えっ!」

マントが、リーニヨの視界を覆う。

でも、こんなものただの布。僕の蹴りを封じる手立てではない！
恐れも何もないはず。

軌道を変えることもなくそのまま突進　この狭い地下通路で大技を繰り出したのだから待つていく結果が落盤だったことは言うまでもない。

ずどおおおおおおおおおつおおお。

築何十年のレンガが、杜撰な管理だけのせいではないそれが、リーニヨの体に降りかかってきたのだった。

「あ、危なかった、な」

マントを犠牲にしたが、難を逃れたのは騎士……バンホー。

「す、すみません、バンホーさん」

騎士の腕に抱えられるのはパルパル。

「パルパル、すまないが走れるか？」

「は、はい」

体重は平均とはいえ年頃のお嬢さん。重いに決まっているのにこの騎士はそれを顔に現さず、優しく声を掛けてくれる。

「本当になんとお礼をいつたらしいの……」

「それは無事、になってからでいい」

そうまだ危険なのは変わらない。

彼らは捕まるわけにはいかないのだ　大統領から預かった『鍵』を守り抜くまで……『ノア計画』を実行させないためにも……。

まだ、夜だというのに金色の日が昇っているような明るさだった。

「キッド？」

「よ、へちやむくれ。ちょいつとばっかし気が抜けていてすまねえな。悪い夢から覚めるのに手間取っちまって」

過去の、囚われていた想いに決着をつけたキッドはすこし、照れながらもこれから守ってみせると誓ったドラミを腕に抱いていた。

少しは気恥ずかしいが、目の前の妖怪たちに対していつでも戦う姿勢をここで崩すわけにはいかない。

百目王はまだ眠っているようだが……二体の凶妖怪がまだこの場に残っている。

「ふん、まあ、やっぱしってカンジかね」

終始《視て》いたサトリは欠伸をかきながら、百目王の所に駆け寄ってこそそと王から何かを取り出した。

それをドラ・ザ・キッドに投げる。

「へ」

すんなりとゆるい、キャッチボール感覚で受け取ったキッド。

見るとそれは……黄色、黄緑、ピンクのキーだった。

「俺とリーニヨとメツドの、だと……」

「ん、それらはいらなくなったから、やる。つつか、邪魔だ」
ぼりぼりとけむくじやらの髪をかく。

本当に、これらに興味がないのか、死んだ魚のような目までしている。

「他のキーは全部ビック・ザ・ドラの旦那に頼まれたからやっちゃまったが、な……」

「な、なんだと！」

「まあ、信じる、信じないは勝手だけど……俺らはもうお前の学校を襲う気はしねえ。安心して過去に行けよ。じゃないと、のび太ってガキがどうなってもしらねえよ」

口元は笑っていたが、鋭い眼光はけて笑ってはいない。

邪悪な妖怪の言うことを鵜呑みにするのは怪しいが、しかし、一理ある。

「本当に、学校から立ち去るんだろうな……」

「モチコース。俺たちのここでの役目は終わったからな……ここでキッドを悪の道に引きずれなかったら次の機会を探るしかない。今のお前らと遊んでいてもホント、意味がないんだぜ」

人の心の闇がなくならない限りいつでも復活する彼らとやりあうよ

り、いち早くのび太のほうに加勢に行ったほうがたしかにこの状況の中では正しい。

「ドラミ、エド、のび太たちのところに行くぞ」

キッドは腹を決めた。

「あ、うん……でも、マミーとダディのことは……」

「キッド、ありがとう……!」

間入れずに、学校放送。

ダディ十三号の声だ。

マミー十四号とツーショットでビジョンまで現われてきた。

「礼はこれぐらいでいい。さっさとトオセンボウカバー解いて俺たちが過去にいけるようにしてくれね?」

「俺たちも学校から退却すつから」

「了解」

愛するハニーが無事に復活したことで機嫌がいいダディは素直にお願いどおりカバーを外す。

「じゃ」

百目王率いる妖怪たちは至極あっさりとなんとなくそうするのが礼儀のように、

「また今度」

そう言つて軽く手を上げ、一斉に黒い気体となって空のかなたへと消えていった。

キッド、ドラミ、エドはガックシと腰を落とし溜息をついた。あれ

だけ学校を騒がせた妖怪たちが退いたのはどちらかといえば嬉しいのだが……。

「なんか、納得いかねえんだけどな……」

でも、このまま待機しているわけにはいかねえ。

キーを手にした今、残りのキーをもつビック・ザ・ドラに焦点を絞らないと……。

キッドは、四次元ハットに手を伸ばした。

「まあ、あいつらの学校には用がなくなっただよな……」
サトリはにやける。

「ああ、そうだな」

最速の妖怪もまたサトリに同調するように賤しく笑う。

これから向かう先が、彼らにとっては本命だった。

キッドを誘いきれなかったのはたしかに残念だったが……しかし。

「フフフ……待っているがいい……首を洗って、な……」

百目王の目が光る。

手にしているのは……キー……。

すべてをビック・ザ・ドラに献上したわけではないし、ドラ・ザ・

キッドに返したわけではない。

この、世界では、まだ必要な……鍵だけを手元に残したのだ。
キッドの力を解放したことで生じたのは、マミー十四号だけに行き渡ったわけではない。

この時代のすべての楔が、すべてキッドの一撃によって解かれた。
幸か、不幸かわからない。

今、必死になって世界の気象状況を管理していたモニターを修復している管理室がたくさんある。秘密道具によって操れていた時空が、気象がちよつとの間へ切れた》。

トオセンボウカバーに何の影響がなかったのは、ただダディの腕のよさとマミーが危険な状態だったのが幸いし、マミーの記憶がのこるという運命以外を切り取るだけで終わっただけ。

「さあって、これからが我々の、本領発揮だな……」

第三十話 満月大根斬りはもつくとアウト……ていうか無理難題？（後書き）

インフルエンザの魔の手からは逃れたものの……更新していなかったらあんまり変わらないですよね。

しかも……今日は早めのアップという事で、実は……職場のパソコンで休み時間利用して投稿という荒業までしています（てへっ）

そろそろノア編らしく、天上世界の話をちらつかせて見ましたが、いかがでしたか。

色んな視点で話を進めていくつもりなのでアツとペツとにならないように、雪子は頑張ります。

では、また次回で御会いしましょう。

第三十一話 教科書にのっていないことを知っているのはプロかよっぽどの物好き

ちなみに雪子は物好きの方です。

第三十一話 教科書にのっていないことを知っているのはプロかよっぽどの物好き

腰まで伸びているオレンジ色の髪をかきあげ、太陽の恩恵によって温められたお湯のシャワーを浴びる。

「はう……」

王ドラがこの世界に着てすぐにしたのは浴槽に入ることだった。

あの冷たい雨にぬれたままでは風邪をひいてしまうのは今の体では当然であり、それを避けるためなら体を温めるしかない。

あの、不吉な未来を見ていた時からずっと強張っていた身がほぐされていく感じが正直心地よい。

「よ、気が晴れたか？」

「エル！」

エルもまた自分と同じくあの場にいたのだから濡れていたのは当然。闘牛士の衣装を脱ぎ、少々筋肉が付いているが女性らしい丸みは健全。むしろ筋肉が均等についているからこそ、引き締まった肉体が優美な曲線を描くことに成功したのであろう。

たわわに実った胸はタオルで隠されているとはいえ、その存在感をけして薄くすることはない。

「ちょっと、前を隠しているんでしょね！」

「お前、まだ女体に慣れていなかったのか？」

あきれつつも、くくくと笑う声をのどに抑えるので必死なエルだった。

「わ、笑わないでください、苦手なものは苦手なものですから！」

お堅い優等生は健在というわけで。

声がエルのままでかつ今は湯気でいっぱいだからこそかうじてあのもじもじダンスを耐えられるのであって、間近で見た日には……

すみません、ステージはどこですか？

路上でも、危機の時でも構わずするあの衝動はもうお約束である。

「しかし、でも、まあ……俺らが服着ている時、大事な部分が隠れていれば耐えられるようになったということでも大きな進歩だな」

ナイスバディのこの体。

振り向かない男がいるならそれは畑の産物か、度が適切ではない眼鏡をしているか。

今まで美少女、美女を見るだけでもじもじへらへらしていた王にしてみれば大した成長である。

「……私だって、今は可愛い女の子、なんですからね……」
認めたくないが。

客観的事実とか、世間的に考えれば致し方ない事実。

それに、ビク・ザ・ドラが自分たちの体をいじくった【力】が手下にしようとする者を中途半端に作り替えるとは思えない。

これから巨大の力な世界に見せつけるのならば……見た目を重視していてもおかしくはない。

分かつてはいるが。

「はあ……、元に戻りたいです」

足が短いだろうが、あの姿がなんだかんだといって落ち着いていた。鋼鉄のボディと衝撃を吸収する未来の羽根……戦うためだけに当初は作られていたので機能性がよかった。

それに、この姿のままだと……（以下略）。

未だに鏡を直視できない王ならではの悩みである。

「しかし、この世界はどこなんだ？」

不思議なピンク髪の少女型アンドロイドに連れられて来たものの……
外敵からの強襲がなく、お湯に浸かっている状態では安穩すぎて
不気味である。

いくらお気楽なエルでも、緊迫してしまう。

あの場にいるよりははるかにましだとはいえ、見えない計画に、ふ
つつと不安が湧き上がってくる。

「まあ、ここがどこだか私にはわかりませんが……」

「え、知っているのか？　じゃあ、教えろよ！」

「でも……解ったところで、何ができるわけでも……」

王はうつむく。

そう、彼女はここがどこだかは知っていた。

そしてこの世界がどういう運命を辿るのかも。

（だって、ここは……）

世界史の……教科書の後ろのページに記載されている、あの戦いの
……舞台。

「私の記憶が正しければ……二十一世紀後半の天上世界です」

この風呂のタイルの模様から推測される文化レベルとこの湯沸しの
科学力……教科書に載っていた通りの典型的な天上世界の文明。

「え、ここが……うゝうむ……」

いくら能天気なエルとはいえ、顔が渋りますよね……。

そう、ここはまもなく戦場になるのですよ……その戦いがあつたか
らこそ我々ロボットが、地球の科学力が、今の我々の世界のレベル
に進歩することに繋がるのです。

戦争があれば……技術が発達するっていう悲しい格言をこの戦いで
数ある歴史上の戦争と同じく証明してしまった。

もちろん、宇宙人が地球に来て、彼らは未知の文明を持っていて、
その技術を参考に地球の科学が爆発的に飛躍するということもある

のですが……ここでの戦争があったからこそ……地球の、地上は宇宙人とコンタクトをとることになったのです。

必要悪、欠かすことの出来ない悲劇。

そして、何より、この戦いがあったからこそ、私が生まれた。

戦闘用として構成された王ドラは複雑だった。
翡翠の目が下を向く。

一頻り悩むエル・マタドール。

ルビー色の瞳が、翡翠の瞳を映し出す。

「……ここでないにかあったけ？」

本気で忘れた目。

そうエルは覚えていなかった。

あの間は、なんだったんですかー！

王ドラがずっこけたのは言うまでもない。

この世界の顛末はテストに出てきましたよ、エル・マタドール……！！！！！！

「がう！」

ニコフの尻尾が立つ。

「！ 敵が、きたんだな！」

膝枕してもらっていたドラえもんは上体を起こす。

前回あまり表記していなかったが、今の二人は小学生サイズになっている。大きいままだと先生、親、従姉妹で年の離れたお姉さん……くらいの関係でないと空き地で現役小学生と遊ぶというのは世間も目が冷たいご時世。

白い目で見られないよう、間違っても警察に通報されないようにと細心の注意を払ってミニサイズで野球に出陣していたのだ。

「え！」

息絶え絶えとしたのび太が空を見る。

「ん！ なんだった！」

のび太をボコボコにするのは勘弁してやらなきゃいけなくなったな。ジャイアンもドラニコフが見るほうを見る。

現われたのは……随分と個人的で高透明度が期待できない皺くちな豆電球……牛乳瓶眼鏡に軍服、白いちよび髭がチャームポイント……。

「ナポギストラー一世！」

そんな馬鹿な、アイツは確か……ドラえもんがパチンコでウィルス

の入ったディスクを口に入れ込んで、ミニドラが直接ナポギストラー一世でそれを作動。

イメコンでロボットを操っていた親玉にウイルスに感染させたことよってチャモチャ星のロボット全員を一網打尽にした。

糸巻き巻き　糸ま、きま……き……で倒れた筈だ！

あ、これ会話ログからね。

直接ナポギストラー一世が倒れたシーンを確認していないけど……たしかに完全に壊れた。しかも丁寧にスクラップにし、完全沈黙した筈だ。劇場では（漫画でもありません）公開していないので知らない人が多いと思うけど（これは捏造です）、たしかにナポギストラー一世はこの世から完全に消滅した筈だった。

「ふはははっは！　たしかにワシは壊されたぞ。お前たちに！　だが、偉大なあのお方によつて再びこの世に戻ってきたのだ！　のう

……紅孩児殿！」

ナポギストラー一世の側から現われたのは黒い天使。

顔は見えないが、身長からしてのび太と大差はない。

「ええ。わが弟の野望のため。協力をお願いしますよ、ナポギストラー一世様」

口元が残酷に歪む。

そして後続に控えるのは天上世界の無人飛空艇。

「ワシは本来前線向きではないが……ワシの野望を壊したお前たちの直接苦しむ姿を見んことには蘇った楽しみがないというもの」

ナポギストラー一世の眼鏡が光る。

彼に内蔵している、またこの飛空艇に付け加えたチャモチャ星のイメコンが共鳴する合図だ。

「さあ、後悔しろ、ワシに楯突いたことを、な、愚かな人間どもよ！」

ナポギストラー一世が腕を振るい、のび太に向かって全機突撃する

ように命じる。

「がう！」

先に動いたのはドラニコフだった。

ナポギストラー一世の長い前置きのおかげですっかり、変貌した手足の長い体が、敵の攻撃を爪でなぎ倒す。

タバスコ炎を使わないのはのび太、ジャイアンが後ろにいるため。

誘爆に普通の人間を巻き込んでしまったら　だめ、命がとまる。

僕だったら、戦闘用として、そして戦いなれたアイツらの機械構造なら熟知している、僕なら！

爆風が空き地を覆い隠す。

「ふむ、一撃か……紅孩児殿と互角とは聞いてはいたが……」

「いえ、それだけではありませんよ。ニコフ様は、この玩具に熟知していますから。天上世界で作られた、道具、兵器は彼女にとって
は紙くず同然でしょう。少し前に学校を襲撃したときはまだ私の姿
はありませんでしたし、あの身体に不慣れでブランクもあったこと
ですから、少し動きが悪かったのみたいですが……」

今の彼女は完全に昔の二つ名を持っていたときと同等の判断力を持つていますよ。

戦闘マシンにとって経験こそが財産。

コンディションによって左右される力よりも、数ある訓練によって
戦いよって、培われる判断力こそが互角……強敵に勝つ術。

「彼女はけして高性能の戦闘ロボットではなかったのですよ。でも、
あの戦場では誰よりも臆病で狂気で……戦闘に酔いしれていたそう
ですね……」

兵だから感じる彼女の覇気。

「だからワシは前線が苦手だ」

そんな自分の頭脳ではかりきれない化け物に何も策もなしで立ち向かうのは愚かだから。

政治的手腕、頭脳戦にもちこんで相手を陥れるやり方を好む自分。

「しかし……貴方が側にいらっしやらなかったら私はニコフ様と一対一で戦えませんでしたよ……」
そして、本気の、貴女に。

「がっ……」

昨晚の赤い月が再び合いまみれる。

雨に濡れてしまったため衣装を変えた。とにかく動きやすい服ならなんでもよかった。

無防備になりやすい首を守るための首輪。

白いアイスクローは手の守りと攻撃を司る、手枷。

黒いワンピースドレスに、白いエプロン。

とどめは白いあのフリフリの頭のアレ

パーフェクトにメイド服です、ニコフさん！

空き地で遊ぶとき、どこでもドアを土管の後ろに隠していた。
のび太を先頭に、いや、敵はのび太を狙っているのだから、まずは
彼を移動させることを第一に考えるのは至極当然なことだ。

で、のび太は安心できるところと思い描くことも……予想できる範
囲だ。

「まあ、のび太らしいといえば、のび太らしいな」
お湯が滴るガキ大将。

まったくのデジャヴである。

湯気で覆っていた空間から逃げるように廊下に出た。

ドラえもんが家主から聞いて持ってくるのは白いタオル。これで濡
れた身体と床を拭けということだろう。

カンがいい人は気がついたと思います。がもうこれは第二話と構成が

同じです

配役がドラニコフからジャイアンに変わったところぐらいしかありませんでした。

美少女で起きたことをゴリラ……もとい、体格がいい小学生で表現しても需要がなさそうなのでカットします。

「しかし、何でしずかちゃんの家のお風呂場にお前は行くとするんだ！」

「不可抗力だよ、ジャイアン！」

「うわ、待って！ ジャイアンが怒るのは無理ないけど、まだ身体拭いてないから、あ、水が落ちる、落ちる〜！」

やりのび太はジャイアンに殴られる運命は変えられませんでしたと、さ。

カポーン。

「もう、のび太さんたら……」

しずかは真っ赤になって湯船の中で下を向く。

のび太が安心できるところということは、つまり……。

「~~~~~！」

今日はお湯の温度が高めらしい。

それにますます熱くなっていく……。

「のび太さんの、エッチ……」

そう呟いてはいるものの、なぜか、そんなに嫌な感じはしなかった。

薬用入浴剤のレモンの香りが浴場に漂っていた。

第三十一話 教科書にのっていないことを知っているのはプロかよっぱどの物好き

今回は風呂場で始まって風呂場で終わりました

前の戦いで服が濡れたのと、戦いが激しくなる（つもり）なので、衣装チェンジしてみました。けっして漫画を描いている相方^{ブル}から袴では戦闘シーンが描きにくいと言われただけではありませんよ！（20パーセントぐらい）

まあもともと第一部と第二部では衣装や髪型を変えたというキャラがいたわけだし、思い切って雨に濡れて乾かしきれてなかった方々は衣装を変えてしまおうと

書いている雪子は結構ノリノリです。

ところで、私事ですが……スパコミ、受かりました！

五月三日に東京ビックサイトにいつてきまゝす。

ジャンルは『ドラえもん』

今回はこの乙女ドラえもんズをメインにしていきます！

ここでは設定上惜しくも出番がなかったドラえもん映画キャラを出してみたいと思っています。車掌さん（銀河超特急）、出したいです！ 出します！

配置は東3ホール ム58a サークル名、ファンブル - f u m b
l e -

是非、遊びに来てください。よろしくお願いします>（――）<

そして、次回をお楽しみに〜！ 更新が遅くなる可能性が大ですけ

ど
〜
!

第三十二話 シールを買うつもれなくお菓子がついてくる……逆じゃん！（前書

しかし、シール目当てしかもコンプ目指している人がいる限り必ずしも逆とは言いがたい。て、いうか雪子もむしろシール目当てで買っている某ウエハースチョコがあるし。しかも今、大人買いしたチョコを黙々と食べている状態です。

第三十二話 シールを買うともれなくお菓子がついてくる……逆じゃん！

暗い地下道。申し訳ない程度にしか照明がないこの場所の瓦礫の中から出てくるのは、黄緑色の髪をお団子に結ったエースストライカー。

「いたたたた……」

狭いところで大技を使えば予想できた事態なのだが……散々探し回った重量な物を意外なところで見つけた嬉しい気持ちが冷静さを失わせていた。

「どらら」

チームメイトのミニドラたちが瓦礫に埋まったリーニヨを救い出そうと機敏に動く。

小さい体を必死になって動かすその姿は悪に堕ちようと可愛らしい。

「あ、みんなありがとう」

細かい傷があった体ではあるものの、すぐに癒し。平然とするリーニヨ。

しかし。

「あう。こんなに壊しちゃったから、怒るかな、ビク・ザ・ドラ様」

建物には、今のリーニヨの力が効かない。

プロテクターが施されて、その中に一定の知能をもつモノにしかリーニヨの力が作動しないようにされているから。建築物は範囲外なのでそのままにするしかないのだ。

「でも……別に困るわけではないって言っていたような？」

天上世界をめちゃくちやにしても別に構わないと。
どうしてかな？

ここ、本拠地でもないけど。
住んでいるから、あちこち壊しちゃうと駄目じゃないのかな？

ん〜、僕わからない。

壊し放題は楽しいからいいけど。

あれ、なんか、お腹が……。

グ~~~~~。

お腹の虫の音が盛大に鳴った。

「あ……」

興奮していてすっかりご飯食べるのを忘れていた。

「どらら〜!」

ミニドラの一体が自分のポケットからドラ焼を取り出す。

「え、いいの？」

「どら」

コクリとうなずく、ミニドラ。

「あ、ありがとう」

感謝の言葉が思わず出る。お腹がすきすぎたのかいつものおいしい味付けも忘れ、素のままドラ焼を一口。

ひんやりとしていて それは冷蔵庫辺りで冷やしていたようだ
でも、凄く暖かい味がする……僕、どこかでこんなおいしい味のドラ焼を食べたことがある。

どこで、食べたのか思い出せない。

できれば、いや、絶対思い出してみせる。

だって、これは……。

二口目はタバスコをかけ、普段通りにむしゃむしゃと食べる。
味わって。

思い出したくて。

でもなぜだろう。

黒い靄みたいなもので遮られて思い出せない。

ドラリーニョの肩がまた、熱くなった気がした。

歪んだ時計が幾多もある空間。

「ここか……。王ドラ、ご丁寧に結界を作ったから、俺が壊すのにどれだけ苦労すると思っているのか」

黄色のキーを胸に掲げ、キッドは時空の穴に立っていた。

「飲み込まないの、キッド？」

確か校長先生が、飲み込むだけで【力】が覚醒するって言っていたけど……。

ドラミの記憶力には間違いなかった。

エドも気付いたようでコクリと首を振り肯定する。

「ん、飲み込みしまったら、どうやらこの女の体に固定させられるみたいなんだよな……」

経緯や原理がどうなのかは知らないが、完全覚醒したとき姿が【素】と認識されるらしい。

そういえば、青ドラになったあとセワシを助けるため【力】を無理矢理ドラえもんは引き出した。親友テレカに青ドラ形体が映し出されたのも、ちょうどその頃だったな……。

（みなが賛同して変えた【運命】だったからこそ、絵柄が変わったのかもしれないが……）

万が一にも体が乙女に完全に固定される可能性があるのだから避けた方がいい。自分だけならとにかく、みんなも一生女体となってしまうという最悪なケースも想定される。

それに強力な力であるがゆえに自分一人が【覚醒】し、【力】が暴

走ってしまったら……ビック・ザ・ドラよりも被害が……。

想像してブルリと体が震える。

「まあ、今はこのキーを肌に離さずもっていればこれ以上体に負担はかけなくてすむし」

あっけらかんと、明るく。

「でも……キッドの心臓は……」

「ノープロブレム。俺だってこれ以上は無理はしねえって！」
守りたい奴が側にいる限り。

「そう。じゃ、ガサツ君、頑張つてね」

「おう。そこでじっと待っていな、ドラミ」

今、ここで倒れるわけにはいかねえ、踏ん張れ、この身体。

仮だろうが、幻だろうが、俺の身体であることは変わらねえ。なら、根性をみせな！

キッドの身体を淡い、黄色の光りが覆う。

「じゃあ、いくぜ……」

キッドの利き腕に備え付けられた空気砲が時空を振動させる。

のび太の時代から未来、自分たちの時代からは過去の地点の某風呂場にて。

「ん？　ということはこの天上世界が消えてなくなるってことか？」
「だから最初から言っているでしょ！」

「いや、お前直には言っていなかったぞ。ややっこしい表現使いやがってこのヤロー」

「あ、単細胞のあなたには無理でしたね、解釈」

「あゝ、でもよ」

エルが信じられないという顔で王ドラにせまる。

プルンと揺れるプリンプリンな胸はタオルに巻きついてはいるものの、風呂場というシチュエーションが王ドラをより真っ赤にさせる。しかも、エルはその豊満な柔らかい塊を王ドラに押し付けてきたのだ。

「あ、わりい！」

でかいから距離感をつい忘れて近づこうとするならば障害物に当たってしまう。

注意しないと、な、とは思っけど……。

プシュッ！

王ドラ、顔を真っ赤にして浴槽にて沈む。

「わー、王ドラ！」

氷だ、湯冷ましだ、扇風機はどこだ！

王ドラを抱え、エル・マタドーラは浴槽を後にし、床に、いや、洗面所のタイル張りのところだと身体が痛そうだからと、カーペット

のある場所にまで移動し、王ドラを寝かせる。

「あ、あの、のぼせたのですか!」

ピンク色の髪の乙女が咄嗟に水を用意する。

「ああ。俺たちまだよくこの身体がわからないからな」

ビク・ザ・ドラに帰られて数日は経ったとはいえ……戦っていたときにも感じた、みんなの不調。ロボットの鋼鉄の身体だったから、無茶が利いた戦い方は出来ないのに……。

象牙色の肌に残る、青痣。

湯に入ったことによつて血行がよくなったためか、今、より鮮明に赤くなっている。

「まったく、俺が上がるまで入っていることはなかったのによ」

こんな、のぼせるまで。

しかし、王ドラがこの状態になつてしまったのは湯当たりではなく、エルの牛乳がタオル越しとはいえあのプルプルな感触を押し当てしまったことにたいしての照れによるものである。

「それにしても、セニョリータ」

今は自分もセニョリータではあるものの、少女に声をかけるときの癖は直さない。

「この世界はもうすぐでなくなるって聞いたんだが」

「ええ、そうよ」

リルルはあっさりと肯定する。

「おいおいマジかよ」

「だからこそ、私たちがこの天上世界を……ね」

「……」

天使の微笑みは慈悲。

なぜ、天上世界が滅びるのか。地球にいるのか。そこから話を進めようか。

植物型宇宙人のところに移住したのは記憶に新しい。

だが、植物型宇宙人は　彼らは天上人を見ていなかった　彼らに育てられていた、自然公園にいる木々たちにしきりに声をかけては笑っていた。

そう、木。

木を《仲間》として受け入れていたのだ。

天上人のことについてはただ、《仲間》の世話役としか見ていない。キー坊は人間も、大切な客人だといってくれたが　地球という故郷を捨てたものに対して星人の反応は冷ややかだった。

地球を出た瞬間失われたのだ、天上人のアイデンティティが。

しかも、天上人は弁解するたびに、　留まって、自分たちの世界を、地球を守ろうとしていない、こし抜けども。

ただ、冷酷に、自分たちには関係ないと神になったかのように地上の人々を見下ろしていた傲慢な生物　と、認識されていた。

天上人の手腕が悪かったわけではない。

ただ、のび太という地球人のイメージが強かった。彼は、自分たち

の地球を守ろうと、震えるこの手で圧倒的な科学力を持つ我々と戦い、優しい心を持って我々を説得したというのに……そして地球で、よりよい世界にするためにがんばると強く主張したというのにこいつらはろくに話し合いもせず、協力する気もなく、ただ、環境が悪化したといって我々の星に逃げてきた。

露骨に拒否した方が多いのはこれらのイメージが多すぎたためだった。

そこで、天上人は一部を地球に帰還させ、自分たちが地球と宇宙との架け橋となると宣言した。

そこで地底人、海底人……そして、いろいろな形をした宇宙人とも積極的に地球で交渉するようになる。だが、ノア計画のことを話すと……剣呑な雰囲気になってしまっていた。主に、新たに地球に興味を持って交渉してきた宇宙人に。

小型やハチ型の宇宙人、彼らには特に不評だった。怒りを顕わにするものも多かった。

地底人もきつく睨む。

海底人に至っては 無言の拒絶。

そう、地上とまるで交渉しようとしない天上人が。

ただ、水で流してしまおうという考えがまだ残っている傲慢さが。

だからこそ、悲劇が起きてしまったのだ 地上がなくなれば、自分たち天上人にスポットを当てられると勘違いして。

同じ地球の地底、海底連盟は酷く抗議したのに……ノア計画のボタ

ンが押された。

だが、ノア計画は実行されなかった。なにやらピンクのふわふわしたモノがノア計画実行のための機材をすべて飲み込んだらしい。

どこの星の、何の目的があつてかは……今でもわからない。だいたいの国家機密のそのの、重要なものだけを狙って飲み込んだということ事態考えられない。

どこから来たのかわからない、それは去り際に　。

「私には、交渉とか、政治的意味合いはよくわからないけど……なくしたくないのです、この地上の人々を……強いて言うならば恩返しにきただけです」

その言葉だけを残しいずこへと消え去った。

ただ、今がチャンスだったということには変わらない。

ハチ型の宇宙人が地上人にコンタクトをとった。続いて、地球に、否、地上の人たちに友好的な宇宙人もこぞつて。

まるで、あのふわふわした生き物の言葉に共感するように。

もちろん、天上人のスポンサーもいた。だが、彼らは、ある程度戦わせてからすべて撤退。戦争はビジネスなのだ、悲しいけど。

勝ち負けがすべてではない。むしろ、儲かるか、儲からないかの問題。

天上人の戦略と報酬に魅力がなかったのだ。

戦場に天上軍に《英雄》がいなかったのだ。

無人の飛行船がフヨフヨしているのは映像的に面白くはない。むしろ、地上の、丸っこくて可愛いけど獰猛な狼　戦闘兵器をして生

み出されたあるロボットのほうに視聴者は釘づけになった。

繊細に動き、敵を確実に落とす冷徹さ、でもどこことなく愛嬌のある顔は悪人だろうと戦闘兵器だろうと守ってあげたくなるぐらいの可憐さがある。

対する地上軍の兵器のほうに感情流入するようになったスポンサーの顧客。

スポンサーがこぞって天上人を見捨て、地上の兵器の特集や自分たちの兵器を使ってもらったために交渉するようになったのは当然だった。

孤立無援。

四面楚歌。

そして、天上世界が……戦場となり、消えていったのは……世界の残酷な負の感情をなくすための生贄。

自分たちがあらわにした闇は自分たちの身を滅ぼすものだった。

「でも、私もこの天上世界を無くすまでのものではないと思うのですよ」

戦いの火種を燃え広がせたのは、彼らだとしても。

「まあ、そうだな」

無に帰したものは永遠に元に戻らない。

でも、歴史上天上世界は滅亡するのは必須では？

いえいえ。

22世紀に、姿を消した、だけです。

のび太のところにすぐにもかけ参じようとしたのはたしかだ。

ただのび太がどこにいるのか、何をしているのかまでは考えていなかっただけだ。

さらに、周りを確認せずに飛び込んだのは事実だ。

「だから、こうなるんだよな……」

ずぶぬれ金髪碧眼カウガールが出来たのが。

カポーン。

サラシが濡れてピンクの突起が見えそうで見えない星条旗ベストの中。見ほれてしまいそうだが、状況が状況なので困惑する一方だ。

「ごめんなさい、しずかさん」

ドラミも勢いあまって風呂場の湯に浸っていた。エドにいたってはすぐに風呂場から退散した。

見知った顔なので少ししずかは安堵するが、冷静になればなるほどもう起きたことに。

「~~~~~!」

声にならない叫びをあげるしかない。

どこの世界に入浴中、馬にまたがった知り合いと見しなぬ美女が入ってくると思像できるのか。

現実はいくとも酷で、そんなありえないことが起きてしまった。もう、なにがなんだか……そうよ、これは夢なのだわ。しずかは夢から覚めるために……気絶することにした。

「きゃー、しずかさ~~~~ん!」

ドラミの声が浴室によく響いたのだった。

しずか宅の賑やかなお風呂。

前回と同じオチ。

難儀です、しずかちゃん。

そして、キッドの衣装も少々変わります。

第三十二話 シールを買うともれなくお菓子がついてくる……逆じゃん！（後書

気がつけば、一年突破、このシリーズを連載してから。

ここまで続けられたのは、すべてこんなネット小説でも見てくださる方々のおかげです。更新スピードが遅くなっても。

本当に温かい声援は嬉しいです。

春野ユイさん、ほらさん、これからも応援よろしくお願いします。

では、最後に……五月三日 東京ビックサイト 配置は東3ホール

ム58a サークル名、ファンブル - fumble -

是非、遊びに来てください。よろしく願いします>（――）<

って、しつこくてすんません。

そして、次回もお楽しみにね

第三十三話 アニメじゃないってもろアニメの主題歌だったね、そういえば（前

作者は再放送で観ていました。

第三十三話 アニメじゃないつてもろアニメの主題歌だったね、そういえば

地面すれすれのピンクの長い髪はわずかな息遣いにさえ反応してサラサラと流れている。

「……」

ドラメッド三世はのび太の部屋の窓辺で腰を下ろしていた。

リーニョとの闘いによって体にはいたるところにダメージが蓄積されている。王ドラが前もって残してくれた中国五千年の英知の結晶、よくわからない薬草やら物体を混ぜた軟膏によってある程度軽減されたが……のび太たちとともに草野球するまで体力が戻っていなかったため、ここで静かに留守番となっていた。

「嫌な、予感がするである……」

彼女はすぐさま戦闘服へと着替える　これはドラパンが根性の連日徹夜作業で作った衣服。前にドラえもんズとの戦うためにと調査したデータと今の状況を的確に、個々の特色にそって出来た秀作。

王ドラのものは、今二対のミニドラがドララ、ドララ　とハンガーにかけている。

少々時間が惜しいということドラパンが仕事のため変装時に使った女性用の衣装をベースに、未来の技術によって強化された衣服は身体にシックリと馴染む。

メッドは占い師に化けた時に使ったものがベースとなっている。

元は客引き用をコンセプトにした衣装のためか前回の戦いで雨に濡れてしまった衣装よりもごわごわしているように見える。が、魔術師としての己の弱点を徹底的に解明し、サポートした作りは前の衣装より動きやすい。

シャラランと腕につけたリングがメッドの気合に応えるように鳴り、

ケープを抑える胸元のブローチ　ドラパンがメッドにお守り代わりだと渡した彼女と同じ瞳の色の紫水晶が偶然にもあしらっている
は持ち主の決意を反映させるがごとく、光沢を放つ。

「さて、我輩はどこに向かおう……」

異変が起きている空き地に向かうか、それともび太のところに向かうか……。

しかし、彼女はその二択は選ばなかった。

耳のピアス　小型のマイクが仕込まれたソレに、ドラパンから連絡が入ったのだから。

空き地。

さっきまで草野球をしていた至って平凡な風景は180度変わっていた。

わかりやすい間違え探しとみればいいのか、映画の撮影ならばちゃんと許可とっているのか、ゲームやアニメの見すぎでついに幻覚がさあ、あなたならどのボケで押し倒しますか？

「がああああああああ！」

狼の咆哮。

かつて戦闘兵器として名を轟かせたドラニコフの爪が、牙が、炎が黒翼の天使に襲い掛かる。この場の中で一番、厄介な敵に狙いを定めて。

「ナポギストラー一世様、やはり、といいますが、予定通り私が狙われましたね」

指名を受けてたとうとする、紅孩児。

瞬時に自分の愛用する得物を時空の裂け目から取り出し、うつとりと微笑む。

「ふむ」

「で、ナポギストラー一世様。計画通り、ここから動かないでくださいよ……下手に動かれてしまったら私といえども命の保障は出来ませんから」

この場を一步でも動けば彼の繰り出す黒炎の餌食になってしまうということを示唆していた。

ニコフの先ほどの動きにも驚かせられたのだが、この見た目は少年のほうも化け物である。

もちろん、彼が妖怪であることは既に聞かされてはいる。だが、次元が違う。

「三昧神火！」

「がああああうううあああ！」

黒いマグマと白い氷河が技を相殺しあう。

「ドラニコフ様、どうしても我々に楯突くのですか？」

強いものと戦うことこそが悦びとなってしまった悪鬼としては満足しているが、彼女はこのあとの「運命」を知るもの。無益とわかりつつも　なぜ？

「それでも、この時代を……君たちの好き勝手にさせたくないから……」

満足できる回答はしない。

だって、これが僕の精一杯の嫌がらせだから。

じたばただってしてやるさ、それしか方法がないのなら。

スカートを翻し、強烈な蹴りが、黒翼の天使の頬に一線を引く。

緑色の、それが。

妖怪の血の色。

「好機っ！」

ニコフの氷河の爪が即座に無数のツララを召喚し、黒天使に放り投げる。

タイミング的に避けきれないソレラは黒天使の肉体に打撃を加えた。

「ぐ……」

少年の、短い悲鳴。

「まだ、まだ！」

ニコフは容赦なく、巨大なツララを右腕から、幾本も少年に投げ、追い詰める。

なのに。

ニコフの野生のCANは警戒するようにと訴え続けてくる。

少年は意識が遠ざかっているのか、首が垂れてきた。

緑色の己の血が、黒いマントに滴り落ちている。

ぐさ……。

肉を切り裂く生々しい音。

ニコフの爪が直接紅孩児を刺し貫く。上から、下から、斜め×4、

8……緑色の血が噴水のように吹き上がる。紅孩児がビクンと身体を振るわせる。明らかに致命傷である。

緑色の血液がニコフの白い肌にも降りかかってくる。

足に、腕に、顔に……緋色の瞳が一瞬潤む。

炎によって乾いたので不意に流れたものなのか。

それとも、ニコフの慟哭か。

かつて、ニコフは……己の中の二つの意志で、兵器としての第一線を退いた。

もう、傷つけたくなかった。

味方も、敵も……。

高揚するがそれ以上に警告するのは心の痛み。

もう、戦場でいたくない。

創造者としてのシステムを尊重するようになったニコフ。

破壊者としてのシステムを自分の意思で停めるようにしたのはそのころからだった。

己の意志で破壊者としてのシステムを停止することが出来るようになった兵器に軍部は快く思うわけが無かった。そんな兵器は要らない。

いられなくなった兵器は処分されるのはわかっていた。でも……ニコフはその意志を変えることはしなかった。ほどなく処分が決まり、武装が解除されるなか、ニコフはある研究者によって命を救われることになる。

それが寺尾台校長との出会いだった。

兵器として生を受け、兵器として死ぬということがどんなに残酷なのかと、抗議しにニコフがそのときいた研究所に来ていた、寺尾台校長。生来の冒険心がくすぐり関係者立ち入り禁止だろうと我が物

顔で研究所を探索していた。そしてニコフがいた。

武装がすべて解除され白いベッドに横たわっているニコフを見るなり、寺尾台校長はとっさにニコフを抱え、車に押し込んで研究所から去っていった。

たぬき、もといネコ型ロボットの体格で敵陣に突っ込んでいたドラニコフはその手のところでは知らない人がいないくらい有名であったのだが、すでに処分されたと公式には記されていた。なのに、目の前にいる茶色いネコ型ロボットはどう見てもドラニコフ。

事務の手続きが早すぎたようで現実には武装を解除しただけ。ニコフのCPU、OSともに損傷もなにもないのが一目診ただけでわかったのだという。

寺尾台校長は一世一隅のチャンスといわんばかりに彼をそのまま連れ去る。完全な窃盗罪であったが、もうすでに無いものと扱っていた某軍事部にはなんのお咎めも無く、そのままニコフは学校の新入生として登録した。

心を持った戦闘兵器が一人前のお手伝いロボになるためにロボット養成学校に通うというおかしな出来事はこうして始まったのだ。

入級するに当たってニコフの破壊者としてのシステムは校長先生の手でプロテクトがなされた。だが、そのプロテクトはニコフが丸いものを見ると解けるといふ欠陥プロテクトになってしまっている。理由はそのプロテクトをニコフの電子頭脳にインプットしている最中に……ニコフが月光灯を浴びてしまったため。丸いものを見たら抑えていた破壊者としてのプログラムがでてきてしまうようになっ

てしまった。

でも校長は、これでわかりやすくなったじゃろっとなつて笑っていた。

たしかに破壊者としてのプログラムが起動している間、狼になればわかりやすいですよ、と恨めしく抗議しても……お、冗談も言えるようになったかと暢気に返された。

こうして新生ドラニコフは誕生。

特別クラスに入り、友達ができるにそれほど時間はかからなかった。兵器だったのに……。

いろいろ破壊した汚れた手なのに……。

でも……こんな暖かい場所にいられる幸せをニコフは噛み締めた。だから守りたいと自主的に思えるのだ。

かつて兵器だったときは命令だけを忠実に何も考えずに実行していたのに、心を、友を持ったことによって今までとは違う……破壊だけではない、仲間を助けるための戦いができることに、感謝した。求めていた潤いを手にすることができた、心はかつてのように荒れることは無くなった。

それなのに……ビク・ザ・ドラはそんなニコフの喜びを黒く塗りつぶした。

破壊者としてのプログラムだけを強制的に起動させ続けるチップを埋め込み、非常な殺し屋としてニコフを再び血なまぐさいだけの冷徹な世界に堕ちさせた。

だから許せない、許せない……許してやるか、馬鹿！

「だから、僕は、足掻くんだ……ビク・ザ・ドラには……そしてそれは彼を手助けする君だって例外ではない！」

たとえ、少年の姿でも。

ニコフの唇が動き、思いっきり息を吸い、赤い焰を放出する。完全に動きを止めていた紅孩児はまともにその炎に包まれる。ニコフの放った炎の中、彼はツララによって貫かれた身体で、焼き尽くされる。

首を垂れ、だらりと得物を持たない手は伸びきっていた。

「……」

紅孩児は一言も喋らず、じっと、ニコフを見つめているのだ。不気味で……それがニコフの野生の勘にプレッシャーを与えている。

それに、紅孩児の錫杖を持つ手はけして揺らぐことがなかった。それは破壊を司る狼の気質も恐れていた。

いや、違う、恐れていたんじゃないよ！

うずうずしているんだ。だって……。

「君の、力、こんなものではないんでしょう？」
狂気の微笑み。

ニコフと紅孩児は互いに同じ表情で相手を見つめた。

「ふふふ、わかりますか？」

紅孩児はうつむいたまま、静かに肩を震わせ、笑っていたのだ。あんなにツララで衝かれたのに、炎によって全身が爛れたというのに。

全身がゾクゾクさせて、彼は歓喜していた。

緑色の血が滴り落ちる唇がニツと不気味に歪んだ。

「やっと出会えたのですから……私が本気を出しても、壊れない……ドラニコフ様に」

傍観していたナポギストラー一世は震えた。

紅孩児のあの残酷な音声は、危機覚えがある。

それは復活した直後に聞いた。

ビック・ザ・ドラからこの世に呼び出された、あの時に。

「どらら、どらら」

二体のミニドラたちは走っていた。

急いではいるものの、車に轢かれないようにとちゃんと周りを確認しながら。

ドラメッドの託をのび太たちに知らせるために。

小さな身体を小刻みに動かしながら、二人が掲げて持っている紫色の風呂敷包みの中身をおとさないように　　なんとしても自分たちは風呂敷包みの中から光る、金色の輪をのび太に手渡さなければならぬのだ。

サッカーのチームメイトとして互いに鍛えた足が、呼吸が、一体となっていくかの家へと向かう。

第三十三話 アニメじゃないつてもろアニメの主題歌だったね、そういえば（後

ユイさん、竜さん、感想ありがとうございます

チャットですか……いいですね、他ジャンルには参加したことが一応あるのですが、ドラえもんズ、ドラえもんを語るチャットルームにはお邪魔したことがないんですねよ、雪子は。

理由は至極簡単、どこにいけば話せるのか、わからないからです。是非、チャット会場を教えてください。仕事があれば喜び勇んで参ります

（あと、ソフトやハードの問題がなければ。実は、雪子の使用しているパソコンは……保障期間（五年）が切れてしまったぐらい長い間愛用しているものなのによつては参加不可能のモノも……）

なんだかんだといって連載してから一年がすぎ……自分でもよくまあここまで続けられるのかと驚きです。それもこれも温かい目で見守ってくださる読書者様のおかげですが。

キャラを上手く動かせないときは他のジャンルで一度動作確認をしたり、日頃の鬱憤などでどうしても他のネタしか浮かばなかったときはいったんドラズの作業から外れたり、同人誌活動のため更新が遅れたりと思えばいろいろと回り道もしながらこのドラえもんズを続けてきたわけです。そして、欲深くも、ドラえもんズの魅力を語りつくすまでここを終わらせないと、さえ考えているわけです。

すべては、萌えのために！ そして、燃えも、ですよ、奥さん！

では、次回もお楽しみにね

第三十四話 怪我、火傷なんかしていない、血も出てないぜ、オンエアならない

体力ネタでのお笑い芸人の宿命。
でも、骨折はネタにされるよね。

東の空が赤く色づき始め、一番鳥が鳴いている。

「もう、朝ですか」

ピンク色のうさ耳ボール、もとい、タップは誰よりも早く鳥の鳴き声を聞いていた。

彼に内蔵されている聴覚センサーの賜物であるが、まあ、そんなことは今のところ役に立つようなものではない。

マヤナ国に滞在すること数日。突如として現われた満月美代子という乙女に自分たちの世界を混乱させた悪人たちが復活し、のび太のいる地球が危機迫っていることを聞いたのだが 驚く以外に自分たちが出来ることはなかったのであった。

美代子の持つ魔術瞬間移動ペン（説明書によるとこれが正式名称）では、発動者が一度行った場所じゃないと移動できない。美代子はパラレル世界（こちらの世界を本軸とするならば）の地球から来たため、のび太たちの居る地球にはいけない。

術のエネルギー消費もかなりあるが、発動させるにも一定の魔力がなくては魔方阵がかけないので、ブリキロボットのタップはもちろんのこと、ティオもまたそのペンと使えない。

「いつになったら……これ、使えるのでしょうか」

タップが見つめる、黒いトランク。これが、今唯一、地球へといけるゲート。

自分たちが行ってあの巨大な敵たちに打ち勝てるかといわれると、難ではあるが……タップは亜空間につながる口から一枚のフロップィーディスクを取り出す。かつてナポギストラー一世を葬ったウィルスと同等のモノがこの中に閉じ込められている。復活したことから

セキュリティーに関してバージョンアップしたと思われるが……ないよりはマシ。

それに、美代子さんのところの魔王は銀のダーツを心臓部に投げつけるしか倒せないという制約がある。

……。

追い詰められていませんか、のび太様たち……。

……。

朝の爽やかさなんてなく。

ただただ早くしないとまずいではありませんか、本当。タップの全身から冷や汗が。

早く、直って、ゲートオオオオオ！

タップ、心の叫び。

太陽が真南で燦々と輝くまでその叫びはタップの電子頭脳のほとんどを占めるのであった。

嵐の前ってどうしてあんなにも静かなもののだろうか。

草野球をして。

雷おじさんも出ずに、ほんとうにのんびりしていたんだよ、ついさつきまでは。

ニコフの狼の尻尾が震えていた。

それは獣としての、本能なのか。それとも。

緋色の瞳が笑っている。

「ふふふふふふ」

緑色の血で全身を色づけた妖怪もまた不気味に笑う。

ぬるりと傷口から血が溢れるのを気にせず、錫杖を持つ手を天に掲げ、妖気を噴出。その勢いによって彼の身体から、氷柱が押し出してくる。

目を見開く、ナポギストラー一世。

さらに、彼の妖気……黒き炎によって見る見ると細くなっていき、

蒸発。ぽっかりと空いていた孔もまた邪気が癒していく。

「流石はドラニコフ様。回復するまで時間がかかりましたよ」

一瞬で完全回復できないぐらいの強打を与えるのは滅多にいませんから。

「ふうん。結構余裕じゃないか」

ああ、やっぱり、狼はたいして驚くこともなくみていた。

味方であるはずのナポギストラー一世は青ざめているというのに。

兵たちの余裕。

デモンストレーション。

「私も、本気にならせていただきますよ……せつかく血を流したのですから」

あれで、本気ではないというのか！

ますますナポギストラー一世の顔が青くなっていく。いや、もう白になりかけている。

ガチガチと震える、歯。

気絶しないのは、彼もまたかつて霸王として君臨したときがある経歴から。

王として名を轟かせたことがある者がこんなところで気を失うというのはプライドが許さない。

目の前の妖怪、紅孩児に出会ったのは昨夜。
野太い、闇の声からだった。

「深き眠りから、目覚めるがいい……我が同胞たちよ！」

地下の祭壇。

天上世界にもこんなオカルトじみたところがあるのかというと、一個人の、それも悪趣味な者はどの世界にも、時代にも一人二人はいるものである。

その間違いを乗り越えて正していく。

それが、歴史。

そして、人は忘れないようにと、辛い記憶だろうとその象徴する負の遺物を残す。

血塗られた歴史を繰り返させないために。

蠢く闇が集まりやすいところであろうと。

「ん……ここは……」

「はて？」

誰が先に言葉を発したのか……電子頭脳を持つナポギストラー一世でなかったら記憶していないだろう。

第一声は、銀角という妖怪で、第二声の女性はレディナ。

ドラえもんという小ざかしいタヌキ型ロボットによって栄光を失いし、闇の住人たちがぞろぞろと起き上がっていた。

「くくく、ようこそ、我が城へ同胞たちよ」

ビック・ザ・ドラと名乗るあの忌々しいタヌキ型であるものの凶悪な邪気で膨れ上がった巨漢には畏怖があるが好感度が持てた。

一度死という闇の中で滞っている者は闇のカリスマの前には否応なしとも惚れ込んでしまうという。それはまるで刷り込みのように。

無条件に。

だが、一人だけ、違うものがいた。

「ふむ。すさまじい妖力よ。我とて人間に敗れ去ったとはいえ、魔王だったもの。そうやすやすとおぬしのいうことを聞くとは思わない事だな」

黒い人影。鋭い赤い瞳は恐怖。袖の長く黒く光る導師風の服を着ていた。だが、服は鋼鉄の肉体を持つ彼の威圧を隠すこともない。魔王として恐れられていた怪物。

星を支配し、紅い月を出現させ、地球をも飲み込もうとした　この復活した悪人の中では一番の実力者であったであろう。

「ならば、この私が相手をしてあげましょうか」

「えゝ、ずるいよゝ」

ビク・ザ・ドラのすぐ側に待機していた黒いボロボロのマントをした少年が前に出る。

サッカーのユニフォームをきた乙女が口をとんがらせて抗議するが、しかし　。

「んゝ、メッドと戦ったし……今日はこれぐらいでいいかな。下手に雑魚相手に体動かしても面白くなって熟睡できなくなるかもしれないしゝ」

飛びつきのデザートを食べ終えたばかりだからと考えを改め、まあ、頑張つてねゝとやる気のない応援をした。

雑魚、だと。

魔王のプライドが傷つく。

「あ、申し訳ありませんが、今はこちらの都合であなたの心臓は通常の場所においていますから。少し、注意してくださいね」

死なないようにと。

「まあ、力及ばずにお亡くなりになっても、今ならビク・ザ・ドラが再び呼び戻します。けど、エネルギーの無駄遣いは極力避けたいのですよ。節約的な意味で、ですが」

悪夢を見せることによって得られる強力なエネルギーでも。尽きるとか、そういうわけでもないけれど。

「楽しいショーを始めるにはエネルギーが不足していますので」

につこりと口元を歪ませる、黒天使。手にする錫杖が黒く、光る。

「え、その声は……紅孩児、様？」

金角が少年の名を言う。

信じられない、という目で。

そう、かつての三蔵法師のスパイとして送り込まれた少年は……。

「後悔するが言い、この魔王に楯突いたことを！」

「楽しませて、いただきますよ……」

魔王に一人で立ち迎えられるほどの魔力を持つ妖怪へと変貌していたのだから。

星を稻妻に換えて襲わせるという魔術を駆使する魔王ではあるものの、地下祭壇ではそんな大技が使えるわけもない。それゆえ、必然的に互いが手加減することになったと後に怪物二体は語る、手合わせ。

闇は、苛烈さに歓喜した。

魔王の振り翳した拳が、黒翼天使の頭上に落ちようとしたのが見えた、が、少年は軽快なステップを踏んで、かわす。

ジュウウウウウウ。

巻き上がるのは砂塵　祭壇に使用されていたレンガだったものの成れの果て。

クレーター一つが出来た。

「素晴らしい攻撃力ですが、当たらなければ意味がありませんよ、魔王……」

平然と、彼は言つてのけていた。

常人ではおそらく、痛いという感覚もなく一瞬で散るその拳を。

「ふん。大口を叩くなら……これぐらいの技能がなくては我とて不満だ」

魔王とてこの一撃にすべてを賭けているわけではない。そう、これは小手調べだ。

古来より、魔王というものは肉体だけが取り柄ではない。

頭脳にそして魔力。

寧猛な殺戮者ではなく、冷酷な分析も出来るものでなくては勤まらない。

「石よ、稲妻になれ！」

呪文の詠唱。

魔王の言霊によって稲妻に姿に換えたのは 先ほど生み出された
レンガの粒たちだった。

小石なので大きくはないものの無数の稲妻が一斉に紅孩児の身体を貫く。

閃光が、走った。

「ひゅー、魔王やるねえ」

口笛を吹いて感嘆する、エースストライカー。

人知を超える戦いに呆然とする中で、彼女だけが声を出していた。
ビク・ザ・ドラは寡黙のためか、声は出していなかったが笑っていた。

それはまるで素敵なショーを見ている観客のように。

稲妻の光が、四散した刹那、パチパチと拍手する音が聞こえる。

「ぬ……」

魔王の眉間に皺がよる。

「驚きました。流石は魔王ですね」

紅孩児は平然と、何事もなかったかのように立っていた。そして彼が拍手をしていたのだ。

相手を賞賛して。

「無傷、だと」

「いえいえ。ちゃんと傷つきましたよ、ほら証拠に」

漆黒のケープに新たに刻まれ、緑色の液体が付着していた。

「この緑は私の血ですから」

まざまざと見せ付ける異質の存在。

「ただ、私の回復力が速かっただけですよ……目にも止まらずに、ね」

それはナポギストラー一世のアイカメラでスロー再生してみても、とわかったことだった。

確かに、魔王の言霊に反応していた数多の稲妻は彼の体を直撃した。プスプスと焼ける映像、煙も彼の体から出ていた。だが、彼の唇は嬉々としてゆがむ。

笑っていた。

遊園地の絶叫系の乗り物で叫びながらも楽しむ客のように。辛い山道乗り越えたばかりの登山者のように。

脳内麻薬が苦痛を上まわる快感を与えていたのだ。さらに邪悪な妖気もまた脳内麻薬と同じように彼の体を急速に駆け巡り苦痛をこれから届けようとする傷をすべて癒していく。

その間、0・07秒。

コンマ二桁の素早さ。

「では、私からも……三昧神火」

漆黒の炎が魔王の周りを囲むのは、すぐだった。

「ぬ！」

「あ、炎だけにとらわれていると隙だらけになりますよ……」

己の放った炎を避けもせず、突っ込んでくる……確実に彼の肌もチリチリになっているのだが、それを気にせず、に。

むしろ、無邪気に喜んでいる見た目の歳相応の子どもだった。

だけど、子どもと違うのは計算された残忍さ。錫杖が無慈悲に高速に振り回され、風を切る衝撃波が魔王の両腕に容赦なく襲い掛かってきた。

「くっ！」

自然と出る、短い慟哭。

返り血を浴びるのは趣味ではないのか、紅孩児は地面に触れた足で思いつきり跳躍。魔王からいったん距離を置く。

「ね、隙だらけになるでしょ……」

噴出される、魔王の血。

皮一枚で繋がっている右腕、そして完全に対処が遅れた左腕は紅孩児が握っていた。

太く、立派な腕は圧倒的な力をもつ者が戦利品代わりに採ったのだ。

うっつりと、幾多の悪魔と人間を葬ってきた魔王の腕を見る。

まだ燃え続ける三昧神火が紅孩児の得た戦利品を輝く宝石に幻想的に照らしていた。

心臓を銀のダーツで打ち抜かない限りは死なないという制約があったからこそ、魔王は両腕を失いながらもミディウムになるだけなんだ。

きれいな、稲妻見せてもらったからと、のほほんと、癒す。能天気ではあるものの奥底にある力は本物。そして我々を復活された者に控える彼らもまた脅威の化けものどもだと再確認した。

「目覚めたばかりですから、こうなるのです。あなた方が眠っている最中世界は結構動いたのですから。本調子でもないあなた方では…… お互いのプライドが傷つくだけでしょ」

戦利品もちやんと返し、少し残念そうな顔であったが、これからの楽しいイベントに心震わせている妖怪はもっと大切なことがある。

「こちら側としては今ならもれなく客将として扱わせて頂きますが」

そう、パーティーへの招待者を集わなければならない。

これからもっと、もっとと愉快なことが起こるのだから。

ビック・ザ・ドラが司会進行を勤める、イベントをより盛り上げるためにも……。

邪悪な笑みもまた感染する。

「ふはははは。面白い。ならばここに滞在しようか」

魔王の高笑い。

その一言によって蘇った悪人たちすべてがこのゲームに参加することにもなった。

復讐とかつての栄光を取り戻すための策にスポンサーの獲得……なにより、再びこの世に蘇ったのだから　　愉しまなければ損である。

筋肉馬鹿とはいわないが、こつも好戦的な輩と一緒にいると心臓部に悪いな。
稼動音から急速に動いていることを確信しながらナポギストラー一世はあさつての方向を見る。

いっそ、ワシもあつちのほうに行けばよかったのでは……。
リベンジャーになるきはないが……。

「くくく……こんどこそ青ダヌキを溶かしてくれる」

瓢箪を持った妖怪が静かに動き始めていた。

「まあ、俺もあんなやられ方したから……この役だけは譲る気ねえな……」

頭の差だよ、と言った、あの憎たらしい青ダヌキ。

ゲームの中に意識が沈むときにかすかに聞こえたアイツの台詞は忘れたことがない。

空き地から出てきた暗雲が東京都全体に立ちこめるまで そう時
間がかからないであろう。

第三十四話 怪我、火傷なんかしていない、血も出てないぜ、オンエアならない

李緒さん、メールありがとう！

先生って呼ばれるの……結構恥ずかしいけど、嬉しいかったです。
きゃ！

で、次回はリベンジャーとの対決です（予定）。

どうする、ドラえもん！　ところでわかった人はとりあえず黙っていてね。

わからない人は……更新を待つか、ドラえもん映画で確認を。
レンタルビデオが君を待っている！（またそれか！）

では、次回もお楽しみにね

第三十五話 初対面時のイメージは付きまとうものである（前書き）

では前回の敵の答えです。

第三十五話 初対面時のイメージは付きまとうものである

「すまん、後は任せた、ドラミ」

「ええ。任せて」

しずかの着替えは風呂場に出たすぐ見つかった。というか、小学生がシャネルの五番なんてベタネタをしているわけがないのだから、ちゃんとした衣服が当然のようにたたまれ置いてある。

女体に抵抗があるキッドとどう見ても牡馬のエドは気絶したしずかの着替えを同性のドラミに任せ、そうそうと風呂場を後にし、勝手に拝借したタオルで床が汚れないようにと軽く水を拭き、

「なんだ、ドラえもん？」

「あ、キッド」

ジャイアンにボコ殴りにされるのび太とおろしているドラえもんとの再会。

「て、お前らどこから来たんだ！」

「どららった」

どらら、どらら、と玄関のチャイムを鳴らせなかったのかドラリーニョのチームメイトが開いている窓から不法侵入……急いでいるからといってやっていいことと悪いことが……でも、着替えは助かった。

メットなら俺がこの時代に来たことも感知できるだろうし、おそろくのび太のところに真っ先に向かうと踏んだのだろうな。で、ネコ型ロボットの服は……時間移動する前妖怪たちと戦っていたから、ボロボロだった。

ダダドーラの竜巻で吹き飛ぶ衣装なので強度はもともと当てにした

ものではないけれど、これからビク・ザ・ドラと対決するとなつたら……確実にスッポンポンになるところだったに違いない。

そつなつたら乳も尻も禁断の“ピー”（放送禁止用語）も丸見えだっただろう。さすがに“ピー”（放送禁止用語）はやばいだろ、“ピー”（放送禁止用語）は。入浴シーンでも“ピー”（放送禁止用語）の表現だけは避けていたのに。

と、この乙女ドラえもんズの作者の都合も含めキッドはしずかの部屋で着替えたのであった。

「ん」

キッドの顔が赤る。

美少女の今、悪くはないが、もったいない。

ミニドラたちがもってきたこの服は王ドラ用に調節されたものらしく、動きをスムーズにするための工夫が施されている。少々胸がきついが、ウエストは緩いぐらいだ。

「だけど、な……」

開襟ブラウスに真紅のスーツ。膝丈のスカートから伸びる足には黒いストッキングが被う。

「で、パンプスは黒かよ！」

室内なので足元のオシャレは只今自重中。

「あ、でもこの靴新品だから履いても大丈夫だと思っけど……」

「論点ちげえよ、ドラえもん！ これどこのバリキヤリ？」

只今のキッドの衣装。秘書風。

ドラパンの変装セットの中でもイロモノ（ただいま確認済みなのはニコフ メイド服。メッド 占い師）としては薄いほうだからまだマシだろうが、キッドにしてみれば股がスカートでスースーしているのが気に入らないらしい。今まで短パンだったくせに妙なところでこたわるものである。

「表現古くないかな？」

「それにドラえもん、ここ日本だろ。俺の国だったら俺も堂々と履いているって。つつかドラえもん縮んでね？」

空き地で草野球していたため、ドラえもんのサイズは小学生。

しかも、騒ぎを消化するのが精一杯だったのでまだ変身をといていなかったりする。

未確認飛行物体。

それは、確認できなければ、なんだってU F Oになれるという可能性まではいつているあやふやな言葉でもある。

そう、正体があの日その時わからなければ……たとえば、風船でも、鳥でも飛行機でもそういう呼称を受けるのである。そういう風に行ってしまうと夢、なくす、よね。

「で、ミクロスもそういうふうにしとけばいいじゃないか……」
高級一軒住宅で狐顔の少年は呟いていた。

「スミマセン。ビルの屋上をトビマワツテシマツテ」

ところどころカタカナ表記になっているのはこれでも最近のOSを組み込んだため少し悠長に喋れるようになった。緑色の空飛ぶラジコンロボット、ミクロスである。

スネ吉によって造られ、ドラえもんによる手心で拙いながらも心をもつラジコン。

彼が逆光で上手く撮られてはいないが、某オカルトサイエンス雑誌（全国区に発売）の読書者投稿ページに記載されたのはつい数日前。「まあ、起きてしまったことは仕方がないけどさ」

いつもだったら自慢しようと空き地でお披露目するのだが、隠し通せと託されているため、家で一人の時のいい話し相手にしかならない。

田舎町の住所（スネ夫の基準で）のためか騒ぎが大きくなってしまった、ミクロス自身がわが社の秘密事業に携わっているらしく、存在を隠さないといけないと急遽スネ夫宅に匿うことになったのは昨日。

ダンボールに詰められたミクロスが家に届いたときは　かなり吃驚した。

しかし、ドラえもんたちが乙女になってしまったよりはインパクト薄い。

ちよつと悔しい気がする。

「ボクに構わず、友達と遊びにイッテモいいのでは？」

「しっかしな……」

ミクロスを一人にしていくほうが危ない。

そこでスネ夫は考えた。

別に、ミクロスだと、思われなければいいのではないかと。

「たしか、ミクロスって全身布に覆われていてもオーバーヒートしないように改良したんだよね……スネ吉兄さん」

ダララララーラッララ。

ミクロス、いやロボットに人一倍情熱を傾けるようになった従兄弟はいろいろ庶民でも楽しめるようにとアイデアを出している。いくつかの案のうちに着せ替え人形みたいに服を着せ替えするのは楽しくないかと、考え早速ミクロスで実行。

当初は、冷却装置が布に覆われ上手く換気できずに熱が籠って、約二十分で強制シャウトダウンしたという。

だが、男たちは諦めなかった。

ロボット用に服を作る、と言うことも考えたが、それでは気楽に服を着せ替えられないという欠点が浮上。

換気する場所を変えてみるとか、布に絡まらないような風の送り方、布地で覆うときだけに変わるプログラム。寝る間を惜しみ、男たちは戦った。

人類の夢と希望を、叶えるロボットを作り出そうと、男たちは頑張った。

数々の試行段階を経た結果、ミクロスは服を着ても三十時間正常に稼働できるようになったのだった。

やった。

やったぞ。

男たちの顔に笑みが浮かんだ。

プロジェクト（再放送）から引用

「？ ソウデスガ？」

「なら、大丈夫だな。後それから……」

昨年の仮装パーティーで着せられた、あの衣装どこにしまっていたっけ、とスネ夫はガサこそと部屋に備え付けられているクローゼットの中を探し始めた。

スネ夫がミクロスをどのようにアレンジするかはさておき。

風呂敷に入っていた貴金属もすべて身に付けるのだろうと思っていたのだから……一つだけ、道みてもこの秘書服のものではないものが混じっていた。

「この金の環は何だ？」

キッドは円形をもつて呟く。頭にかけるものなのか？

しかし、キッドがつけようとした瞬間それはすぐに腕に戻ってしまう。着装拒否しているのだ。

「ん、どう見てもこの衣装の装束品とは思えないけど……たぶん、何かに必要なんじゃないかな？」

「何かつて何だよ……」

メッドのことだから考えはあると思うが、せめて手紙も添えてほしかった。

天上世界のことを気にするのは分かるが。

ずっとドラミからもらった赤いリボンで結わえた金髪がゆれ、ドアの向こうに待機している男たちに声をかける。

「まあ、ぶつくさ文句を言ってもしょうもないことだし、おい、エド、着替え終わったからさっさと来い！」

「あんさん、馬使いあらいわ」

エドの手にはお前が持っている半分開し付けられた元の衣装と空気砲。

「いいだろ、このぐらい。ハンガー代わりにしたのは悪かったとは思うけど」

「悪いと思うなら、しないではなかったわあ」

ぶつぶつと小言を言いながらもなんだかってエドはキッドに甘い。

それが彼の不遇の元凶でもあるのだが……まあ、本人が納得しているのだから……何も言わないでおこうとドラえもんは思ったのであったという。

「のび太君、ジャイアンもきていいよ」

「「どらら」」

「あ、ミニドラもいいけど」

「こんにちは、キッド」

「よう、のび太元氣そうで何よりだ」

「あ、あの」

流石のガキ大将も、きつめの碧眼金髪美少女相手では下手に出る。

「あ、のび太を追っかけていたやつ」

「キッド、それ失礼だよ！」

ドラえもん、慌ててフオロー。

「そうか？」

工作上、西部の荒くれ者を相手に銃撃戦を行っているキッドは一ガキ大将ごときでは臆するわけがない。

むしろ今までの撃破数のため兵ドラ・ザ・キッドのオーラがひしひしと感じられる。

ガサツのキッドはニコフと違いまったく隠すことのないそのオーラ。ガキ大将を萎縮させるには十分である。

（ジャイベイに似ているからもう少しつかかってくれと思ったんだけどな）

学友のジャイベイとはまだそんなオーラなんかなかっただけです。

「ん、まあ。のび太から聞いていると思うけど、俺の名はドラ・ザ・キッド。よろしく、少年……いや、ここはフレンドリーにジャイアンって呼んでいいか」

「お、おう」

ガサツだが、気さくな人柄。

キッドもまたあの一癖二癖あるドラえもんズの一人なのだ。

王ドラ、ドラメッド三世、ドラニコフと出会い、補助的ではあるが、学校襲撃のさい彼女たちと共に戦ったから……大丈夫。怖がらなくても。

直感的にキッドもまたかなりの力量があるとわかったけど、こんな楽しい雰囲気なやつなら……。

キッドの差し出した手でジャイアンは軽く握手した。

金髪、そして美貌の持ち主は星の保安官バッチのついたスカーフを首に巻く。

「これがないと首元がスースーしてなあ」

空気砲も受け取り、コレでいつでも戦闘オッケーである。

「あんさん四次元ハットのほうはどうしまっか？」

エルとリーニヨが敵側という情報があったのでいびつな時計がくるくるしている時空にいる間、ドラミにキッドのポケットの中身をす

べて預けた。恋人とはいえ女の子に己のすべての秘密道具を渡すときはものすごく恥ずかしかった。

そこらへんは読書様方の豊かな想像力に任せてしまいたい。つうか、キッド的にそんな回想シーンを入れたくない。出演者の文章化断固拒否の為、シーン82赤面必須　どきどきポケットの中へ今女体化しているけど……それでも俺、男だからへはカットさせていただきます。

「ん、こいつもないと……」

秘密道具がなくても悪い電波を妨害する効果がある。
被ったぼうがいいよなと思った、その瞬間だった。

バリッ！

「な、なんだ！」

「うわ、ガラス窓が壊された……！」

「のび太君、驚くところ違う……！」

そう、ドラえもんというとおり。窓ガラスを割って入ってきた突然の闖入者に着目すべきだ。

尖った耳に、耳元まで裂けた口に赤と青の鬼で、中国風の武人の格好……。腹のところには金と銀の文字マークが！

「もしかして、金角、銀角！」

「知り合いか、のび太！」

「いや、知り合いついてっても知りたくなかったというか……ほら、前に僕、キッドたちに話したことあるよね……唐の時代でヒーロー

マシンの妖怪から三蔵法師を助けると言う……」

「くくく……その通り。この青ダヌキが！」

「弟よ……恨みを持っているのはわかるが、今はタヌキに見えねえよ……」

金角、ごもつともな意見。

日本人形のように愛らしい小学生へと変貌しているドラえもんは、タヌキ、はないだろう。

元を知らなければまずそんな単語が思いつかない。

瓢箪を持つ赤い鬼、金角はとりあえず弟にツッコミを入れるのであった。

第三十五話 初対面時のイメージは付きまとうものである（後書き）

む、夏コミ落ちました。

少し残念のような、まあ、落ちてしまったからには仕方がないので
ここの更新を頑張ります。

さあて、復活した悪人たちをどう動かしていこうかと今はどきどき
しながら書いています。

そして天上世界のこと……。

では次回もお楽しみに、ね

第三十六話 発売延期は名作ゲームシリーズのステータスだ、むしろ（前書き）

ゲーム誌を購入し続けていたあの時代……発売延期になるたびに枕が濡れていたあの時代……いっそ、君が出てくるなんて知らなかったらどんなに幸せだったのだろうと思ってしまうこともあった。現に今は好評発売中でないと見向きしなくなったけど。

でも、あのころの何度も塗り変わる発売日まで……ドキドキした思いは乾ききった今だって忘れない、そして君に熱中し、解体新書（早い話攻略本）も購入するまでやりこんだことも忘れない。

……という時代もあったな……サ シリーズ（スク○ア ニックスから）

ドラ エじゃないのかって？

D ないし。

それに私、ゲームは大画面でするほうが好きだし（PS“ピー”はテレビに繋げることも可能だから購入）

と、今となっては大日 ソフト系のほうに突っ走るというある種ではお約束なゲーマーです、雪子は。

第三十六話 発売延期は名作ゲームシリーズのステータスだ、むしろ

不思議な思いを感じたドラ焼きを頬張ってから黄緑色の猫耳が揺れる。

歓喜だ。

僕の欲しいものがここに来たのだと心が躍る。

「ドラメッド三世」

どこにいるのか知らないけど。

僕の近くにいる。

ミニドラたちも、みんな喜んでいる。

あの、ピンクの髪の長い魔術師は僕たちを……あれ？

黒い靄が頭を過ぎる。

ドラメッド三世がきたことは確かなのに、それで喜んでいるのも確かなのに、何かを塗り替えられている、感じがした。

それはなんだったのだろうか……。

メッドのあの紫水晶の瞳が涙で潤み、真っ赤な、鮮血があの褐色の肌に流れ落ちたら……最高の気分になる、気がする……いや、なるのだ。

だって、ビク・ザ・ドラ様に喜ばれるのだよ。

これ以上の幸せ、ないよ。

……。

…… たぶん。

なぜか温かい肩に触れながらも、ドラリーニョはただただ天上世界に降り立った魔術師に心躍らす。

ノア計画の鍵を持つ少女のことをよりも、彼女にとって見れば大切

なこと。

取り巻くミニドラたちもそんな彼女をサポートするようにあるものは受話器を取り出し、ドラドラと、ビク・ザ・ドラに共感した再生魔人たちに連絡する。

メッドと決着をつけたいと。

邪魔をしないでよと、見つけたらちゃんと報告するようにと。

そしてその中の一体だけがなぜか眉を顰め、泣きそうな目で仲間たちを見るミニドラがいた。もし、その子にみなが目を見ていたら、気がついていただろう……この子はさきほど、ドラリーニョにドラ焼きを手渡していた子だったということ。

紅孩児とドラニコフはぶるぶると震えていた。

それは大望の新作が、発売延期になり……長く辛い数ヶ月間を乗り越え、やっと出たよ、神様ありがとうと嬉々としてコンビ二予約。そして遂に学校が終わって……親との約束でランドセルを家に置いてきてやっとなゲームを手にした子どものようにであった。あとは指の皮がむけるまで堪能しつくすまでである。

「間接、攻撃では君を倒せない、のはわかった……」

「そうですね。瞬時に、回復しますからね、私は」
妖怪であるがゆえに。

プログラムであるがゆえに。

彼の体を構成しているのは確かに柔らかいたんぱく質だ。だが、これは塊にすぎない。

そしてそこにとらわれているサイバー体に合わせられているだけのもの。

ビク・ザ・ドラの力によってこの世に存在している彼には身体内部にある『依代』を壊されない限り再生が可能。

そう、レディナをこちらの世界に呼び戻すためマヤナ国に向かったのは、彼女の愛用していたものを『依代』にするため。

他の悪人たちの『依代』も回収したが。

皆の『依代』を把握しているのはビク・ザ・ドラ。

「私でもわからないのですよ……この体のどこにそれが埋め込まれているのか……」

ふと、苦々しく秀麗の顔が歪む。

本当はこんなことをしたくはないのに。

しかし、その正気は絶えず流れてくるビク・ザ・ドラの悪意によって妨げられる。

「君も、また……」

「おしゃべりは終わりです。さあ、ニコフ様。我々とともに歩もうではありませんか……わが弟の霸道に」

そうか……正気を失った目を見せないために黒いケープで君は隠していたんだね。

同情してしまう。

でも、僕は僕でしなくてはならないことがあるんだ！

「あの未来を……思い出して下さい、ニコフ様。苦しんでください。そして嘆き、恨んでください。そうすればこの楽しい時間にあなを誘えます」

「ぐ……まだ、だよ……」

振り絞る、言葉。

僕の、いやドラえもんズの未来を知っているからって……。

「まだ、僕たちは……正気なのだから！」

今、僕の目の前でおいしい獲物を逃すわけがねえよ！

今、僕の目の前で敵として現われている君に従うわけがない！

二つの心。

少々考えが違うが、紅孩児と戦う意志は変わらない。

狼の彷徨に烈火の牙が、氷河の爪が狂喜乱舞する。

「ふ」

紅孩児もまた笑っていた。

元始時に放たれたような炎により身を焦がし、氷の牢獄に閉じ込められようと。

「三昧神火！」

錫杖の頭につく六個の金属環を振り鳴らし、黒い地獄の炎が消し去ってしまふ。

しかし、視界が晴れることはない。氷の蒸気が妖怪の目を曇らせた。刹那、緋月の瞳に住まう炎と氷が 本来は相反するモノが 共存し、反発し、巨大なエネルギーを生み出してきた。

「があああああああああ！」

ニコフの野獣が完全に覚醒する。

スカートが、銀の手枷の鎖が小刻みに動き出す。苛烈に、従順に華奢な肢体のメイドが掃除しようとしているのだ、悪を。

ドラえもんズとのび太に仇しようとする輩を！

容赦なく、紅孩児は足に、胸に強烈な打撃が叩き込まれ、鋭い爪で切り刻まれ、肉のきれる鈍い音が聞こえる 野獣の本能がなす業のはずなのに死のダンスを舞っているようだった。

銀色の鎖が弧を描くダンススタジオで、可憐な白亜の踊子ではあるものの狙った相手の命を搾取しようとする姿が妖怪の目に映る。

それでも、妖怪も負けてはいない。

彼もまた、強者なのだから。

人類の夢や希望を担ったカラクリ人形ごときに後れをとるのは、恐怖の象徴として生み出された己のアイデンティティに拘る。

視界の悪い、ワンテンポ遅れた動きであったものの、ニコフの舞う死のダンスに対応しようと、己の旋律をもこの場に披露しようと彼もまた舞う。

迅速に。

優雅に。

そして、残酷に。

紫の死枯れた豆電球の前で、一見すると情熱的なダンスをした。

バシユ。

銀の鎖と金の輪に火花が散ったとき、猛攻が止む。

当たり前のように、自然と。

「は、はあ……さすがですね」

重傷だと素人目でもわかる傷を負いながらも、切れる息で黒翼の天使は笑っていた。

「君、も、ね……」

ニコフのメイド服にある、赤い血　ぽたぽたと口元流れるそれは、肺から湧き上がって出たもの。

彼女もまた傷ついていた。内臓を掻き乱されたのではないかと思うぐらいの強烈な一撃を受けていたのだ。

あの黒い炎を操る錫杖が突いてくるとは……。

「あ、ニコフ様泣いているのですか」

ニコフの充血した緋月に涙目。

興奮している証である。だが、灼熱の中ではその清さは瞬く間に蒸発し、まるで最初からなかったようになるのに。

フツと、ニコフは短く笑う。

「何年ぶり……だろうね……苦戦をこんなに愉しむのは……」

戦うことでしか存在を表現し切れなかった時代、たしかに僕は涙を流し続けていた。生理的なのか、感情的なものかわからない、それでも、今のようにすぐに消えてなくなってしまう。

気がつかない敵が多いけど、気がついた敵も気がついた瞬間、なく

なっていた。もし、僕のこの涙を見たものがいたとしたら……そしてまだ地にひれ伏していなかったら。

「やっぱり……紅孩児、君は強いんだね……」

がくがくと身体が震える。

こんな戦い、永久に続いて欲しいと願っている……破壊の本能がニコフの身体を駆けているから。

強く、強く望んでいた。

平和な時代では、想像の産物で終わってしまうのに。

それは俗世とは縁を切った僧ではあるものの肉の食感を忘れられず、精進料理に齒ごたえのあるものを構想するのに似ていた。二度と口にすることもない、穢れているがおいしいと感じていたそれを消えることのない記憶を元に紛い物ではなるが再現する。

難儀な作業。

知らなかったら、そんな苦勞をしなくても良かったのに、知ってしまったからこそ求めてしまう……それはどんなに醜くてもその世界に生きていた証でもあり、また、業なのだ。

禁断の果実を食べてしまったそのときからの。

食べさせられた、ものでも。

口から吹き出た己の血を白い手で拭いながらも、口の中から溢れ出す鉄の味は甘美だった。

「さあ、もつと死合おうか……」

紅孩児の前に今まで訳があって禁じられた懐かしいお気に入りの玩

具を手にした子どもがいた。

子どもと違うのは純粹ではなく、欲望のために動こうとする野獣だということ。

少女の姿からは想像できない凶悪な緋はどろりとした血液へと堕ちようとしていく。

「そうですね、ニコフ様」

闇が笑おうとしていた。

……もう少して笑えたのだ。

「あぶないーい！」

ピンクのボールが蹴り上げられていなかったら。

「げふっ！」

豆電球は割れる音は出さなかったけれども、オイルが滴り落ちるぐらいのダメージを受けたのだった。

「はっ」

ニコフの緋色の瞳の色に光りが差す。

「僕は、いたい……」

狂気に心から踊り、求めていた……異常なぐらいに。

そりゃ、破壊を司る人格が表立っているけれど、ここまで陶醉するのも尋常ではない。

「ぶ、無事で何よりです」

喋るピンクのもこもこボール……と思っていたら、彼はファンシーなブリキロボットだった。

ニコフのよく知る友と同じく可愛い声で、子ども受けすること混じりけなしの100パーセントなひょうきんな顔の兎型の。

「お、お前は……」

「ナポギストラー一世、どういうわけかよくわからないけど、お前の好き勝手にはさせないです！」

私の目が黒いうちは。

「こんな綺麗な人に不正プログラムを流そうだなんて……いつからメイド萌えになったのですか！」

「タップ、多分それ違うと思う」

かなり長距離からタップを蹴り上げたのか、シュートした人物はまだ姿を見せず。声だけをお楽しみください。

「……そうか」

やっと、ニコフもわかった。

身体についていた不協和音を奏でていた小さなアンテナを握り締めて。

バキッ。

バラバラと粉々に砕けたものはイメコンであった。

紅孩児との戦いの中でいつ着けられたのかわからないが……ナポギストラー一世はイメコンの端末からドラニコフの電子頭脳に不正アクセスし、不正プログラムを送り出していたのだ。

タップの体当たり攻撃の振動によって強制的に乗っ取りが中断。
ニコフの冷静さ、内蔵しているワクチンが勢いよく侵入してきたウ
イルスの動きが鈍らせる。

「ばれてしまいましたか」

紅孩児は酷く残念そうに肩を落とす。

こちらはせっかくテレビゲームで盛り上がってきたのに、音量がで
かい、声がでかい、宿題はやったのかと問答無用でゲームの電源を
消された子どもようだった。

どこまでも子どもの純粹だった記憶を忘れないで委員会からの提供
でした。

「まったく無粋ですね……ピンクのボール」

「ボールではありません、私はタップと申します!」

ナポギストラー一世のデータを盗み出した黒翼の天使。

先ほどのメイドとの戦いを見てからにして自分では太刀打ちが出来
ないのは明白。

しかし、ナポギストラー一世とつるむところからも彼は敵に違いな
い。

臆するわけにはいかない。

だって、私は、のび太様に害する輩と立ち向かうために地球に来た

のですから。

今にでも足の震えで動けなくなってしまいそうですが……。

「……」

ふと思案が纏まったのか、ニコフは自分の恩人のタップを抱きかかえる。

「え？」

「僕の名前は、ドラニコフ。さっきは……ありがとう、タップ」
タップがいなかったら酔っていただろう、殺戮に。

正気ではないのに正気だと勘違いして、大事な人を平気で傷付ける
操り人形にさせられていたところだろう……あの、未来のように。

「でも……」

紅孩児とレベルが違いすぎる。

戦う力のない、チャモチャ星のロボットには荷が重過ぎる。

「のび太が……無事、逃げたし……」

いったんここは退いたほうがいい。

「ふふ……」

紅孩児はニコフが何を思ったのか大体見当がついた。

「逃がす、とお思いですか？」

作戦が失敗しても次の罠にかければいい。

それにニコフの電子頭脳はいまだウイルスに犯されている。

ワクチンプログラムが機能していようとナポギストラー一世の作り
出した寄生型増幅ウイルスもまた強化成長をしている。

対抗しきれるものではないだろう。

とくにこのビック・ザ・ドラによって劣化させられた今では。

「さあ、少しでも……侵食を早めてあげましょうか」
紅孩児の持つ錫杖が不気味に音を鳴らす。

「く……」

額から汗がにじみ出る。

電脳に巣くうウィルスに、現実には強敵。

先ほどの戦闘でレポートマシンのエネルギーが切れてしまっている……移動系の秘密道具のない今、どうしろと……。

「こちらに……乗って！」

ソプラノ声。

地面すれすれに、高速で移動してきた影が、タップを抱きかかえるニコフもろとも引き上げた。

「な！」

紅孩児もあまりのことで対応が遅れた。

まだお星様がきらきらと頭の周りを廻っている豆電球はこのターンはもともと戦力外。

魔法の絨毯が太陽を背に駆けていたら、人間の目では怯まずにいられない。

「大丈夫か、タップ！」

今度は、ボーイソプラノ……そして、ニコフの目の前にはのび太……

……いや、違うか？

「今は逃げましょう」

懇談会を開くには不適切。

絨毯を操る魔法使いの少女の気迫により、空高く、光となって
空き地から脱出したのだった。

「ふう。何とか逃げ出せたな」

レディナの遺産がこんなところで役に立つとは思わなかったが。
少し複雑な顔で当面の危機から逃れたメンバーはほっとため息をつ
いた。

それにしても……。

「悟空、様……」

ただ……ティオは少し黒翼の天使の口元が優しく笑っていたのだけ
は気になっていた。

第三十六話 発売延期は名作ゲームシリーズのステータスだ、むしろ（後書き）

空き地での戦闘はこれにて終了。

次回は天上世界のほうをメインにしようかなとか考えています。
て、しずか宅ののび太＆ドラえもんはどうしよう……それでなくてもドラえもんの新しいコスチューム披露してないじゃん！

一人突っ込みもこれぐらいにしておいて、次回もお楽しみに、ネ

第三十七話 プレイヤーにダイレクトアタック！（前書き）

ドラズが映画で干されてから気がついたら七年たっていたという事実を再確認してきました、夏コミで。

ドラえもんアニメ、30年の歴史から考えればドラえもんズは長くとも短くとも言い切れない今の状態……いや、まだまだ終わらんと、誰か言ってください。

ドラえもんズはちゃんと生きている俺たちの心（幻想）の中でとか、そういうネタはなしよ。

第三十七話 プレイヤーにダイレクトアタック！

狐顔で有名な金持ち少年が三角お耳のもこもこしたふさふさの白い毛と黄色の尻尾をもつ 狐の着ぐるみだろつか、をきた彼と同じ等身のものを外に連れ出していた。

「スネ夫、コンなんでイイノデスカ」

ミクロスの合成音。

「最低でもあのサイエンス雑誌に載ったロボットには見えないから、大丈夫だよ」

たしかにこのふかふかの狐が雑誌の投稿者ページの黒い影とは思わない。

ご丁寧に頭の上に葉っぱまで乗せているし。

「ん〜、それよりも。可愛いな〜、これ」

自分が着ていたときは可愛い、可愛いと言われても胸の奥がむしろくしゃしていたものだが。

他者を着せ替えるというのは楽しいものである。

しかも、出来栄がいいとなおさら。

「しずかちゃんぐドラえもんとかコフを着せ替え人形にしていた気持ち少しわかるよ」

うん。

マジで可愛い。

製作費十五万かけて特注で造ったこのコスプレ衣装（ハローウィン限定）。狐のつぶらな瞳の頭部のフードが特に。

足を動かすたびに前もって内蔵されたミクロスのデータによってポフポフと音が出てくるし。

「GJ」。スネ吉兄さん！」

空に浮かぶ、スネ吉。

死んでいない人でも感謝する心さえあれば浮かび上がってくるのさ、天に。

その天で死闘が繰り広げられているとはまだ夢にも思っていなかったけど。

光を求めて彷徨う闇の迷宮。それでも出口の見えない闇の中でただひたすら全速前進。

何もせずにただ終わるのだけは申し訳ないような気がしたからなのか。

それはこの命が……神の恩恵によって得られた命なのだから、粗末にしたくない。

そう、我々は太古のあの水色の光の中で消滅する筈だったのだ
あの一言がなければ。

死が運命だと思っていたあの時。

滅びが、宿命だと涙した時。

そんなの、間違っています。

我々の心を奮わせた。

その一言で救われたのだ、我々は。

地上の光から遠ざかることになるが、我々は繁栄していく。

むしろ……我々の体に合っていたようだ、我ふるさとの大地が。

謎は解け、恨みではなくむしろ感謝するべきあの真実が。

恐竜と恐竜人が暮らす広大な地底の空洞世界として誇りをより強固
にした6500万年前「聖域」での出来事。

運だけで逃げられるのなら……苦勞はしないということか。

「また、女か……」

サッカーユニフォームの乙女から逃れたものの、次に現われたのは
年上だが、はつきりとした年齢はわからない。年齢不詳の大人の美
女がいた。

「フフフ。つれぬ、な……。爬虫類は嫌いではないが……。むしろ好感を持てるもののに、そなたにはまったく触手が動かぬ」

それは我と相反する心を持つているからなのだろうな。

レディナは目を細めた。

「同感だな。私もあなたのようなタイプを好かん」

バンホーには。

元の素材はいいのだが禍々しいオーラのため、彼女のような奸邪は騎士の目には醜悪に映る。

「……」

後ろに下がらせているのはノア計画を発動させるために必要な鍵を大統領から託された少女、パルパル。

「ほお。御互い嫌いなタイプか……。ならば、偉大なるビク・ザ・ドラ殿のお言葉に従い、そなたらを妾が消し去ってくれよう」

妾たちの覇道を邪魔するものを。

端正なレディナの顔にゾツとするような歪んだ笑みが浮かぶ。

彼女の手にある水晶が怪しい光を発し、銀色の水が溢れ出でる。

絶えることもなく流れ出でるそれは地下水道のレンガいっぱいに広がっていく。

「くっ」

水系ということは電磁ランスでは放電してしまう可能性がある。

竜騎士のアーマーならば対処できるが、天上世界の服……。絶滅動物保護州管理員という職業上一般的なもの比べると丈夫に作られているだろうが我々の戦闘服と比べると劣化している。

光のない常世の闇に等しい深海の膨大な水圧を騎士は本能で察知する。

バンホーの臆せぬ姿に魔女は感心する。

「ふむ。そなたは感が鋭いようね……真に惜しい。妾たちのもとに来ればいいもの。そなたほどの力の持ち主なら喜んで受け入れてくれようものを。何もこんな役に立つどころか足手まといの厄介者などに義理立てするなどと……」

「昔の、私ならそう判断したかもしれないな……」
憎む敵は地上の人間だと教え込まされたあの時の自分だったら。
しかし。

「地上を愛する少女を守るのもまた騎士として役目……法皇様が私をここに遣わせた運命ならば、それに従うのみ」
手にする、電磁ランスが唸る。

水の流れをよく見る。

ただの液体の状態では攻撃できないらしく、形をとろうとしている。
銀色の身体は、頭があり、二本の腕の二本の脚があった。

二本の脚で立っている姿から人間に近い……が、ポタポタと元は水故か流動し、滴る全身。ゆっくりと流れ落ち、脚の水に戻っていく。

歪なそれは、命をもたぬ怪物。

ただただ術者の命令に従って、破壊することだけを考えればいい
憎悪の塊だった。

「天上の民とやらの……嘆きの涙の渦に飲み込まれるがいい！」

レディナの邪悪な意志に従うだけの仮初の肉体を持つ怪物たちが襲い掛かる。

「させるか！」

背後に控えされている天上の少女の前に立ち、怪物たちに向けてランスを突き立てる。

バシユ。

水を切る、音。

「ぬ！」

手ごたえなんかない。

突きつけられた鋭利な物体に怪物は平然としていることから、思っていた通り物理的な攻撃は無意味なのがある。

怪物の魔手がランスを掴んだ。歪な身体では想像もつかない強い力がランスに伝わり、柄をもつバンホーの身体まで押し倒されてしまっ
いそうだった。

この銀色の水の底に。

「すごい、力だな……」

こちらの物理攻撃は無効化できるくせに、怪物たちはこちらに強力な力を押し付ける。

「これが妾の魔術。人が水を切れぬは、道理。そして人が水压に耐えられぬもまた道理。それを可能にしているのは妾によって供物にされしものたちの涙……」

魔術を発動させるには“代償”が必要である。

自然のエネルギーを、“気”を消費することによって、術が使用できるのだ。いうならば、あちこちに電池が落ちている状態。だが、電池にもいろいろな種類があるように、術を使うにしてもそれに合った“贄”を必要とする。

“贄”とは足りなくなったら供給し、変換する能力のことを指している。百目王や紅孩児のような妖怪ならばもとが自然のエネルギーから構成され、仮初の肉体によって実体化していることもあり、元の才能から自身のエネルギーをそのまま使い、高度な魔術もらくらく使える。美夜子の世界ならば進んだ魔法世界ゆえに自然のエネルギーを変換する技術が来ている。

マヤナ国は上記の二つとは違っていた。だが、彼らと同じような高度な魔法を使える。それは魔術変換能力が低くてもそれ相応の“贄”を使っているからである。

そう、それでレディナは……。

「……だから、天上人の涙ということか……」

悪夢を見せられ、邪悪なエネルギーを排出するようにと赤い液体のカプセルに閉じ込められている人々の涙だけを集めた卑劣な魔術。

「妾の魔術は魂が無垢で純粋な者が“贄”であればあるほど力が増す……世の不純を知らぬ幼き者こそ妾の術には最適……」

ぎらぎらとした邪悪な瞳。

雨を降らせるために生贄を捧げよと命じたとき以上に今興奮していた。

戦いとはこんなにも愉しいものなのかと。

「フハッアハハハハハハハ」

強大な力で力の無いものを驚愕させ、絶望の渦に飲み込ませる。王族や神官だけに絞り力を行使していたあのときでは考えられないく

らの快感を得ていた。

だから、足元まで見る余裕がなかったのかも知れぬ。

竜騎士はそれに気がついた。

「……」

下の水はパルパルには届いていない。

ならば電磁ランスの力を一点集中すれば……。

ブルツと身体が震える。

「……そうか。ならば私は容赦するわけにはいかないな」
女性といえども。

かの者を野晴らしにするわけにはいかない。

「電磁ランス、最大出力！」

ランスの中に埋め込まれている電子が持ち主の魂に鼓動するかのように、瞬時に反応する。

邪悪な存在を一掃せんと電子たちは踊り狂う。そのエネルギーは稲妻と姿を換え、銀色の水に伝達する。

全身を、全貌を、蒼き稲妻は駆け巡る。

「な！」

レディナの短い悲鳴。

銀色の水を出す水晶にも電撃がきたのだ。咄嗟に水晶を手放したが、走り出した正義の雷が魔女に裁きの一撃を与える。

「きゃああああああつあああああああ！」

皮膚が焦げ、血液が噴出し、黒ずむ。

爛れた両手がプスプスと音を立て、煙をまく。

「く……」

震える体。

痛みからではない、怒りからだ。

まさかこの手を使つてくるとは思わなかった　ビク・ザ・ドラ
によつて強化された体に、未来の科学力によつてある程度のダメー
ジを吸収する装飾品がなかったら、恐竜を追いつ返すほどの電力を持
つ電磁ランスに敵わなかっただろう。

だが、耐えられたのだ、レディナは。

水晶を手放したことによつて、水を新たに呼び出すことは出来な
なくなつたがこれだけの手勢がいるならば二人ぐらい難ともない。

「妾の魔力がある限りは消えぬ、からな……」

銀色の水がまた人の型をとり、魔女の命令を待つ。

そう、あとは彼女の言霊さえあればいいのだ。呪われた、あの言葉
だけが。

「ヤレ。肉塊も残すな。そう妾の両手を癒す血の風呂場を用意せよ
！」

冷酷な命令が下つた。

銀色の水の人型は再び前進する。

主の願いを叶える為だけに存在することが許されるものだから。忠
実に、愚直に聞き入れるだけ。

ねつとりとした不気味な怪物の魔手が竜騎士を掴もうとした。

「キンキンステッキ！」

下水道に響く、甲高い声。

男のものだとはわかるが、お子様に受け入れられやすくするためか、はたまた悪人を欺くためか。

ブロックの中から急に生えてきた、金色のステッキから繰り出す光線を怪物たちに一体も残さずに浴びせる。

「君は！」

「そんなこと後でもいいだろ。騎士さん」

金色の光りが収まり、ファンシーな姿が顕わになる。漆黒のマントを靡かせた、シルクハットのドラえもん君と同じ形のロボットに紫の猫耳が揺れる。

「ウオオオオオオオオオオオオ……」

水の流れが変わったためか、不気味な音を出す。まるで怪物たちの叫び声のようだった。そして、氷のような力チコチした物体へと変化していく。

「な……。だが、全身は止まらぬ！」

その言葉どおり怪物たちは今には襲いかかろうと拳を上げ標準をあわせる。

の
だ
が
……。

「ドrameーディア
タロートーリア
マハーラージャ……」

聞きなれないメロディに乗せた言葉を唱えるのもまた癖があるものの、妙に甲高い。

シルクハットの怪盗のすぐ側に緑色の鮮やかな光沢を放つケープを着込んだ乙女の声だろうか。

彼女のブックラとしたピンクの唇が流暢に動く。

「敵を貫くカードよ……」

メッドの胸に仕込まれたカードたちが一斉に飛び交い、魔方陣を描き、剣が描かれたカードが中心を陣取る。

シャランとメッドの腕に、首につけられた金色の装飾品が地下水道に鳴り響く。

「今、ドラメッド三世の命により宿し力を解放せよ！」

紫水晶の瞳が瞼の奥から輝き出ると同時に、カードに記された数多の剣が実体化。

風が、突風がピンク色の長い髪を振り乱し　その風によって剣が敵に向かって突き進む。

風を切るその速さについていける者はいなく、つぎつぎと固体へと変化した怪物たちを粉碎していく。

「な、お前たちは！」

この天上世界に来たのか。

ドラリーニヨからそういう通信があったが……。

レディナの額から冷や汗が流れる。

その呪文に、術、間違いはない。

妾の魔術を打ち破る、光は。

「魔術を……力を……間違った方向で使う輩は、我輩が許さないである！」

「まったくもってそれには同感だな」

ピンク色の長い髪を靡かせた占い師と紫色のネコ型ロボットが薄暗かった地下水道に一筋の光を差し込ませる。

「あ……」

体中がドキドキする。特に心臓が。

この感じ、この思い。

間違いない。

「ドラメッド……がすぐ近くにいる……」

黄緑色の猫耳が嬉しそうにゆれ、無邪気な笑顔が綻びる。

「えい！」

リーニヨの軽い体に、羽根が生える。

リュック型のビク・ザ・ドラに与えられた秘密道具によるものだが。

天上人の恐怖をエネルギーにした、最凶の羽根だが。

今の僕には羽根がある。

君を……君の……あれ、何を見たいんだっけ？

また肩の辺りが熱くなる。

本当に見たいものって、なんか、違う気がする……でも。

「ドララ？」

「あ、みんな……」

みんなだって、見たいよね、ドラメッドの……、あれ……。

「僕、どうしちゃったんだろ……」

また忘れちゃったのかな。

なら思い出さないと……。だから、僕は……。

「ドラメッドに会いに行かなくっちゃ！」

第三十七話 プレイヤーにダイレクトアタック！（後書き）

予告通り天上世界に焦点をあわせてみました。

それにしても……ドラパン久しぶり～。キャラが多いとありがちですが。

映画ドラえもんゲストキャラとドラえもんズとの出会いも着々と進んでいます。というか進ませないとまずいデスヨ～内容的な意味で。

不思議な剣さん、青猫さん、コメントありがとうございます。

では次回もまた、たぶん、ドラズとゲストキャラのコラボをお楽しみください。

第三十八話 玩具が世界を危機に瀕したり、救ったりするのって実際どうよ？

玩具会社の陰謀だけどさ……。

時間軸的にはドラマッドたちが天上世界でパルパルに出会っていないとき。

そして今回の主なネタはアニメでは背景担当……あ、漫画バージョンではそれなりの活躍を見せていますね。だからネタにしたんだけど……続々集まってきた留学生の前に自身アニメの後期の扱いの二の舞になるのが間近な方のデッキです。（2009年9月現在
雪子のかつてな判断によるものです）

第三十八話 玩具が世界を危機に瀕したり、救ったりするのって実際どうよ？

只今の状況を確認します。

中国妖怪が襲いかかってきた……そこはまだよしとしよう。

鬱蒼としたブナや檜の原生林の山奥でもなく、はたまた灼熱の砂漠でもなく、愛らしいぬいぐるみと薄桃色の壁という女の子の部屋で。

「似合わない！」

「もう少し場所をわきまえろ！」

ギャラリーの皆さんは怒り心頭。

「うるさい、お前らの都合なんてどうでもいい。それよりも、エドさんにキッドさんよ」

金角は瓢箪の蓋を取った。

「なんや？」

「な……むぐ」

返事を返したのはエド。

キッドもしかけそうになったのだが、寸でのところでドラえもんの手が遮った。

小学生サイズの手がキッドの口に入り込むような形で。

小さな身体で思いつきりジャンプして金髪碧眼美女に口に拳骨をしているようにも見える。

「げふつ、なにしやる！」

と、いつもだったと言っていただろう。

目の前で起きた光景がなかったら。

「ウひゃアアアアア、あんさああアアアアあああああああ
あああああんううううううううううううううう」

これは一瞬の出来事だった。

この部屋の中では巨体のエドがあんな小さな瓢箪の中に入ってしまった。
うなんて。

「馬の酒はあまりおいしくはないが、まあ、ないよりはマシだろ」
引つかかってくれる馬鹿が居てよかったぜ、と瓢箪の蓋を閉める。

「金角の瓢箪は名前を呼ばれ返事をしたものを吸い込む力があるんだよ」

「なんだって！」

西遊記で有名な金角の必殺技。

閉じ込められたら、妖怪だろうと溶かし、頃合を見て、酒として飲み込んでしまう恐ろしいものである。

「ロボットの身体のままだったら溶けないですむんだけど……」

どこでもドアで脱出も可能なのだが、今の僕たちは乙女なのだから下手するとやばい状態に……。

ここが十八歳以上立ち入り禁止小説になる可能性の出てくる！
いろいろな意味で！

エドを止められなかったのはたまたま気がついて彼の口を押さえるものが近くに居なかったからである。

「あぶねえ。しかし、よく気がついたなドラえもん」

「いや、あははは……」

笑って誤魔化しているが、かつてドラえもん自身ひっかかったからすぐ対応できたのである。

「それにしても……よくも、エドを……」

おまけに四次元ハットも瓢箪に入ってしまったのだが。

「許さねえ……」

「待って、キッドここ室内だから、君の空気砲だとやばいって!」

仲間がやられたら冷静でなくなる熱血野郎にはいかなる説得も無意味である。

「ノー、プロブレム。復元光線で何とかすつから!」

……未来の道具って本当に便利であった。

キッドの空気砲によって標準をあわせ打ち放たれるのは黄色の竜巻

部屋の強度と、瓢箪のことも考えてか威力は弱。

金角の、瓢箪を持つ手を目掛けて突風が吹き上がる。

「させねえよ」

横切ってきたのは、銀角の三叉。

青い色の壁が、黄色の竜巻をあさつての方向へとはじき返す。

「な!」

壁を壊さないように威力は調節していたけど、再生怪人って普通弱くなるんじゃないか?

なのに、強化されてねえ?

まさか、そういえば最近墓地から特殊召喚されたモンスターが効果発動でいろいろと強化されるっていう話を聞いたことがあるが……まさか、そっちのほうを採用しているのか!

ドラ・ザ・キッド、どこまでも日本のアニメやゲーム関連に詳しい男であったという。

「ふん、弱いままで配下に加えようとする世界征服結社のほうが異常だ!」

製作者の都合によるもので実際の団体にはまったく関係ありません。

「いや、手札から魔法カードを発動させて、自分のフィールド上のモンスターを融合するとき、とかに必要になるかもしれないじゃないか、弱いままのモンスターでも！」

アメリカでも絶賛放送中のアニメデュエルのネタでお送りしました。

「キッド、カードゲームから離れようよ！」

そりゃ、水曜の夕方、早起きして土曜の朝（再放送）にも見るけど。アニメだけでメイン商品買ってないけど、さ。

だって対戦相手がいないから……集めるだけのカードほど空しいものないから！

ちなみにのび太の学校で流行っているのはポ モンバ ラーだったりする。

……よりにもよって。

ここはつい最近映画化もしているほうを取り上げるべきだろうとお
思いの方、結構いらっしやると思いますが、いかんせん、リアル小
学生にうけ度と作者の独断と偏見、あとキッドのカラーでカラー色
寮の空 気 王のネタになりました。

PS：作者が元いた地域では土曜の朝しかやっていない（放送して
いるだけマシだけど……年単位で遅れているけど……アニメの地域
格差に涙目）

「まあ。デモンストレーションはこれぐらいにして。それにしても
……孫悟空、お前、命狙われているの……わかってないのか？」

復活したときは三蔵法師の生き胆を喰うために攫うという命令を受
けると思ったら、悟空の抹殺を命じられた。

強化されているからといっても相手はあの牛魔王を倒した存在……

冷や汗モノだった。

だが、目の前にいるのはあの孫悟空ではないような気がしてならないくらいの貧弱な小学生。

女性の後ろで震えていて。

ツツコミを入れるところだけは把握しているが、戦いにおいてはまるで役に立っていない。

一言で言えばマダ小（まるで駄目な小学生の略）。

「兄貴、俺たち妖怪に手段や過程は関係ねえよ。とにかくソイツをぶつ殺せばいいんだからな」

ぼりぼりといかにも面倒くさそうに頭をかく銀角。

青ダヌキに怨みはあるが、殺すなど念押しされている身なのでストレスがたまっているんだぞ、俺。

己の赴くままに殺戮できない中間管理職の気持ちがわかるか、ガキに。

「死ねっ！」

お子様にいわせたくない、いわせない言葉を叫び、銀角は叉をのび太に差し向ける。

「危ない、のび太君！」

咄嗟に動いたのはまたしてもドラえもんだった。

朱色の日本傘を背中から取り出し、ガード。その間、煙が六畳間に広がる。

「何だ、こんな狭いところで！」

「逃がすか！」

煙幕を張って、どこでもドアというものでどこか安全なところに逃

れる気なのだと銀角は思った。

あたりとは言い切れずともはずれということもなさそうだ。咄嗟に取り出すのは小さな、小さなスロットマシン。お菓子売り場で売っているような玩具である、見た目は。

「ビック・ザ・ドラ様からいただいた、コレで……」

レバーを引いてくるとパネルを回す。

サクランボ、コイン、星……そしてあるパネルの柄が現われる。山……富士山のようなものではなく、よく中国の掛け軸で見る山のようなソレ。

「くくく。俺たちは紅孩児様とは違って自力で空間を捻じ曲げることは出来ねえが……これぐらいの芸当は出来るようにしてもらったのさ！」

銀角が不気味に笑った。

彼を中心に空間が拉げていく　その空間の穴が、しずかの部屋にいた、ドラえもんたち一団を吸い込もうとしている。

見た目はラムネつきで三百円で売ってそうなのに、中身は高性能であつた。

「うわぁああぁぁ！」

「どららー！」

ドラえもん、ミニドラ一体が吸い込まれた。

「ドラえもおおおん！」

のび太の絶叫。

「来ちゃ、駄目だ、のび太くううううん！」

僕の後を追おうとはしないで！

すっごく悪い予感がするから……君にとって。

ほら、僕なら、平気だよ……。命はとられないから。こいつらがビ
ック・ザ・ドラと協定しているのは確かだから、僕の命は絶対助か
る。

ミニドラだってドラリーニョのチームメイトだし。

だから……。

「僕たち……」

あ、言葉が続かない。

困ったな……。のことは大丈夫だからとか、月並みな答えをだしたら、
のび太君が大粒の涙だしそうだし、死亡フラグ立ちそうだし。

……ん、は君の元に必ず帰る、よりはマシだった気もするけど……。

なら……。

ドラえもんはにっこりと笑うことにした。

柔らかな笑顔で。

本当は……体ががくがく震えている。足からはいつていることにこ
こは感謝しよう。かわいそうなくらい震えている下半身は見えなく
てすむから。

でも、唇、震えていないよね……。僕に出来る……。のび太君を安心
させる行動、これしか思い浮かばなかったのに。

「のび太君……」

オニキスの瞳は力なく、笑うしかなかった。
それが、のび太に対する思いやりだと信じて。

うつん……でも、そんなのじゃ足りない。

君も溢れる涙が止まってくれそうもないよね。

完全に吸い込まれる前に、ドラえもんは右手だけに力をこめ、伸ばす。この伸ばした手は、君を掴むためでも助けを求めるものでもない。

君を元気付けるために……僕は会えて……親指を立て、勇気を！

「頑張れ、のび太君！」

僕たちは僕たちで頑張るから！

守ってみせると言っていたけど……それができなくなってしまうのが心残りだけど。

君なら……。

「ドラえもん……ん！」

のび太のこの一言を最後にドラえもんは完全に空間のねじれの中に落ちていった。

だが、容赦なく、彼もまた取り込もうと空間がねじれる。

「のび太！」

ジャイアンが吸い込まれそうだったのび太の手を掴む。

「え、ジャイアン！」

意外、だった。

いつものび太を殴る手が今だけは救いの手となり、のび太を現実世

界に留める。

力強くて暖かい手がそこにあった。

「よくわからねえが、このままあの空間に行つては、今のお前は駄目だ……」

野生の感が、よく分らないところに飛ばされる恐怖なのか。

「とにかく、お前はここに入るな!」

普段ならガキ大将の権限をフルに利用する嫌な台詞なのに、やさしく聞こえた。

そしてジャイアンは己の怪力で思いつきり、のび太の身体を投げ飛ばす。

「うわあっああああ!」

渾身の投げは、のび太を宙に浮かせペンダントライトにぶつけさせた。

むぎゅうつう。

しかし、ソレによって天上にあるコードがのび太に絡み、銀角が作り出したと思われる空間のねじれから逃れることが出来たのであった。

「そろそろか……」

そう金角の呟くと、空間のねじれが止まる。

「大丈夫か、のび太」

「その声はキッド。僕はなんとか……」

少し眼鏡が拉げちゃったけど。

形状記憶合金でも使われているのではないかと思われる眼鏡フレームなので次のコマには直っているだろうし。

「ドラえもん、ミニドラに……」

ジャイアンもまたしずかの部屋から消え去っていた。

ぐしゅ、じゅ、ぐしゅっゅ、しゅ……。

僕の顔から汗が……やだな、目にも鼻からも出ている。

泣いている暇ないのに。

「ああ、わかつている、だが……」

部屋に残っている、金角をキッドは睨む。

ドラえもんズの分断を狙った奇襲が成功したのか、金角の耳まで裂けた口が残酷に歪む。

ビック・ザ・ドラの秘密道具、ちんけなおもちゃのようなスロットマシンの効力がどんなものか知らないが、それは銀角と共に異次元に行ってしまったドラえもんたちに任せるしかない。

それよりも……。

「こいつを倒さないと俺たちもおしまい、みたいだな」

童話や世界昔話に興味がないため、金角という妖怪のキャパシティがどんなものかわからないが……。

「俺は負けるわけにはいかないんだよ！」

これからが、本当の地獄だ……としても。

そして空き地では。

雲が多くなってきたが、まだ雨は降らない。
降るわけがない。

我々は、まだ次の段階まで来ていない。そう悪夢の豪雨を降らせる
ための準備が出来ていないのだから。

「逃げられてしまいましたね……」

紅孩児は残念そうに、ポツリと呟くとくるくると己の武器と回し、
異次元へと戻す。

これからしなければならぬことから、戦闘は一時お預け。
真に遺憾だが、仕方がない。

「それにノア計画のキーを見つけたのはいいのですが、地下の下水管にいるとは厄介ですね……そういうことでこんなところでのん気に昼寝をする暇はないので、天上世界に戻りますよ」

昼寝というか高速で電磁頭脳直撃の体当たりされたため強制的にシヤウトダウンした紫豆電球を軽く突付く。
これからが本番なのだから、ノア計画の。
キーを持つ天上人を見つけたのだから。

「嘆いていても仕方がないですね。それよりも前向きに考えましょう」

ニコフを逃がしたといえども、地上すべてを大洪水で洗い流そうとすれば天上世界に必ず来る、正義の味方。キーさえ手にすればわざわざこちらから来なくてもよくなるのだ。

「では、この場から我々は退散としますか」

ナポギストラーを羽交い絞めする。

ある程度接触していないと一緒に転送できないからであり、それと違った意味はない。

マントの奥にある装飾品を一つ砕き、転送装置を発動。黒翼の天使は次なる戦場へと向かう。

第三十八話 玩具が世界を危機に瀕したり、救ったりするのって実際どうよ？

ちなみに、アニメが年単位でおけている理由

1、もともと一年遅れだ。（中には一期をフツ飛ばしていきなり二期がきたときもある）

2、ゴルフの試合やら、主にスポーツ系の放映のためお休み……この二つが主な要因です。

ほとんどというか、動画サイトで最新アニメをチャックする日々……

…地上波？ ソレが来たのも最近だ！

衛星系？ 電波が……なんかよくわからない力（主に国の何か）で時々変になる地域ってあるんだよ……。

（何かって、ソレは大人の都合上というのはさすがに悪いものです。断定しようもないし。でも、あからさまにソレが悪いとしか……思えないんだよね……）

まあ、引越しをしてアニメの問題は解決しましたけど（笑）

という、アニメ地域格差についての嘆きはここまでにして、次回こそニユードラえもんを……言い続けて何話かつたんだろ……（遠い目）

次回もお楽しみに！

第三十九話 大丈夫、いまだったら鯨だって白い学ラン着ているから！（前書き）

ジャ プネタが多いのでたまには小 館のサ デーから。

アニメではないので結構苦しいかもしれないけど、おもしろさと熱
い拳は一見の価値あり。

おすすめです

第三十九話 大丈夫、いまだったら鮫だって白い学ラン着ているから！

世界を消滅させる力と守り通す力、どちらが強いのでしょうか。

「くっ、思ったよりつれえな、本当」

ヒラリマントを手にする闘牛士は弱音を吐いた。

時間の流れをコントロールする力を駆使して住民たちを守ることに成功したが、建築物はものの見事に破壊尽くされている。

「私もまさかここまですごいとは思いませんでしたよ」

ゼーゼーと肩で息をする、三つ編みお下げ。

戦闘用に作られた自分の身体にはあれ以上の力を備え付けられることも可能だったのかもしれないと思うと鳥肌が立つが、そこまで必要だったのだろう。

この天上世界を滅するためには。

布地の服ではなく、光沢のある、メカニックな戦闘服に着替えているがもとがたんぱく質の塊。鋼鉄の、本場モノの戦闘兵器にはこれでも役不足なのか。

エル・マタドーラと王ドラはメカトピア製の最新鋭のスーツを着込んでいる。

お風呂で身体を清めたのはただ身体を清潔にするためだけではない。真空パックの理論を用いた、この戦闘服を着こなすためである。アンダースーツはぴっちりと素肌に密着するつくりのため汚れ（垢など）が付着しているとごく微量ではあるものの内蔵されている計測器に誤差が生じる。

そうになると、肩につけられているブースターの速度やバランスも最高のものが出せなくなってしまうのだ。

機械はたしかに便利で強力だけど、ちゃんとした手入れがなされていないといけない。この背景に瞬時に溶け込む隠密性に長けた光学迷彩高性能スーツには、とくに。リルルがそこまで細心の注意を払ってこのスーツを着させたのも納得している。

通信機を通して会話できるこのスーツはありがたいし。

今、彼女たちを窮地におちいらせている敵　全く、違うのだ、今までの敵と。

いや、彼を敵としてみるのはまったく見当違いだろうが。

冷酷な機械人形がモニターに映る。

ビュッ、ボツビュシウウウルウウウウ！

氷の爪が壁を抉り、紅蓮の炎が舞う。

もう何発もそんな苛烈の攻撃を受けた建物は砂と大差のないものに変わってしまったのに、彼はただ、忠実に、アウノウンが向かった場所を攻撃している。

「くっ、感はいいな、アイツ」

こちらは不可視モードにしているのに、小さな音に反応してこちらの様子を疑っているとは。

つか、味方かもしれないだろ、敵じゃないなら！

少し泣きたくなってきたよ、恐怖で。

「じつとしてくださいよ。私たちはまだ、出合うわけにはいかないのですから……それにすぐ近くに天上世界の無人戦艦が近づいています。そちらに気をとられている隙に、逃げますよ」

住民たちをリルルのいるところに避難させ終えたのだからこの居住区にはもう用はない。

エルと王は隠れつつ、天上世界を守ることを余儀なくされていた。

この天上世界の最後の日と記されている時間。

地球側の最後の総攻撃が会った日。

それはこの時代にあるすべての戦闘兵器が突入したことを意味している。

そして、その中には　。

赤い瞳の狼もまた戦場で吼えている。

空き地から逃走し、一息ついたのは橋の下。
どんよりとした雲が立ち並びつつある空では川の水もまた薄暗い。
一時的に危機から逃れたのはいいが、まだ好転もしていない自分たちの状況を鏡で写して見ているようだった。

「どうやら、追ってこないみたいだな」

のび太と同じ顔ではあるが、行動力と判断力は桁違いの王子、ティオ。

「ええ」

魔法の絨毯にとまるように命じるのは美夜子。

「魔法の絨毯に酔ったのですか、ドラニコフさん」

「がウウ……」

ピンクのボール兔はメイド服の少女に声をかける。

真っ青の顔。

ニコフは酔ったのではない、ナポギストラーのウィルスに犯されていることによつて体調を崩しているのだ。

（思っていたよりも、侵攻が早い……）

抗体プログラムが正常に作動したのはいいが、電子頭脳を蝕んでいた。

中枢プログラムの奥に入り込んでいるらしく……しかし、本来だつたら瞬時に宿主の思考プログラムを乗っ取り書き換えるように作られているのだからよく持ちこたえているほうだろう。

（たぶん、これが……エルやリーニヨの中に……）

あの、狂宴を嬉々としてするのはこれぐらいのウィルスではないと駄目だろうが。

はは……強すぎるよ、これ。

「タップ、これを……」

エプロンのポケットから取り出すのはマイクロMD。

もしものことも考え、空き地に行く前までにドラパンが得ていた情報を写し取ったものがここに入っている。

「君の、プログラムなら、読み取れることが出来る筈……」

はず、じゃなくて出来るんだ。

だって、僕的能力は……。

「は、はい」

「これを、読んで、すぐに……」

震える手で、指差すのは天　　天上世界に向かつてくれ　　その意図も彼らならわかる。

いや、わかることになっている。

ウィルスの熱によって意識を飛ばされる前にニコフは出来る限りの布石をうつ。

これで、僕のできること……すべてやったよね、……。

ニコフはかつて出会ったことがある天上人を思い出した。敵である僕に親切に温かくおいしい紅茶も振舞ってくれた老年の女性。

しよぼしよぼで皺だらけの顔であったが、目に宿す光は僕なんかよりも美しく、毅然としていた。

何もかもが嫌になっても、自然と彼女の顔が出てきたな……。

生きていれば、新しい希望が出来るとう優しく微笑んでいた彼女……とういえば年齢から逆算すると、彼女は、確実にこの世界で、空にいるはず……。

彼女もまた、恐怖に蝕まれているのだろうか……だろう？　なにをそんな甘いこと言っているんだろう。

当たり前、じゃないか。

アイツが、ビク・ザ・ドラがのつといっているんだろ、天上世界のすべてを。

あの場所にいるすべての人々に……あのころの僕と同じように……恐怖と畏怖を与えているに違いないじゃないか……。

狂気の殺戮人形が！

希望を、夢を踏みにじってきたくせに。

今更、体のいい、都合のいい発想をするなんて馬鹿げている。

胸の奥が痛む。

古傷が痛む、そんな感じなのかな、人間ならば。

でも、僕は……ロボット。

今は理由があつてたんぱく質で構成された身体にいるけど、傷つかない、傷ついてもすぐ作り変えられる便利な身体のくせに。はは、随分ネガティブだな。

風邪、ひいたからかな。

熱に浮かれるとよくそういうわけわからないけど罪悪感とか、恐怖感とか、未来への絶望とか負の感情がでてきやすいって……。うん、たぶんSonなかなジ……。

文字が形成できなくなっていく　意識が混雑していつて、そして長い眠りへと、ドラニコフはオチタ　。

「ど、ドラニコフ様~~~~~~~~!!!!!!」

ぐるぐる回る奇妙な黒鉛の雲。ドラえもん、ジャイアン、ミニドラの周りを絶えず、囲い込む。

「なんだ、これ」

触ることの出来ないし、ずっと見ていたら目が廻ってしまいそうだし。

スプーンでかき混ぜられるコーヒーのミルクになるしかないのか、俺たちは。

あ、白くないから違うか……あ、でも、CMのって白いボンドだったよね、本物のミルクだとすぐに濁ってしまうし、水に浮かないため見た目的な問題であの白いものは。つつか飲めないもの作るなって！

……て、コーヒーみたいなもので実際はただの黒い《何か》だというのもCMではよくある話で。

イメージ映像です

これってつまり実際の商品とは異なっていますってことだから……いいのか。

虚偽と大人の都合は使いよう。

「ふ、まだ時空が安定していないだけだ、猪八戒」

「銀角！」

目の周りがくすんでいる青鬼がドラえもんたちの前に立ちはだかる。腕を組む傲慢な態度に、人を小ばかにしたようないやらしい目つき。耳まで裂けた口の見るからに悪鬼が。

「俺たちをこんなところに連れ出して、どうする気だ！」

自由に動く身体ではあるものの、これからどうするというのが。おとなしく拘束されるなんてことないからな！

「ブーブーとうるさいな。まあ豚はよくないているやつのほうが油のついておいしいものだが……」

そういえば、この中国妖怪どもには食人属性もあつたけ。

鬼のぺろりと卑しい長い舌がちらりと見て、ゾツと肌が震える。

「ん、そろそろか……」

捻じ曲がっていた空間が安定する時間が。

先ほどまでの不気味な螺旋は消え去り、背景は中国の山林へと変わる。

「ここは……」

見覚えがある。

そうだ、この銀角と始めて遭遇したあの山に。

「俺はこういうところのほうで戦いやすいからな」

ごちゃごちゃとした小物が溢れる小娘の部屋ではおれとしてもテンションが下がる。

戦闘に相応しいのは、こんな場所であろうと、なにげに前回の意見を聞き入れているサービス精神旺盛の妖怪だった。

「それに……一つ、いいことを教えてやろう」

本当はこんな台詞は言いたくねえが、いわなければならぬ。

こいつ、青ダヌキの能力をここで使われると困るから。なんだかんだといって世界のすべてを自分の思い通りに書き換えられる、というチートな能力に気付かれたとしたら厄介だ。多少の犠牲を覚悟するとか、しないとは別問題にしても、だ。

まあ、気付いたら確実に青ダヌキは能力を使用するだろう。

このままおとなしく、ビツク・ザ・ドラの元に連行されるぐらいなら、な。

銀角の目がつりあがる。

「俺を倒せば、この空間を消え、お前たちは元のところにすんなりと戻れるぞ」

目先にニンジンをつら下げておけば、周りをよく見ようとする思考を妨げられる。

そう、俺との戦いで勝利すればいいという餌をつるし、戦闘だけに考えを向けさせるための言葉なのだ。

ほら、現に俺を見る目が変わる。

ぎらぎらとした、獣の目に。

「ふ。それでいい。さあ、俺を、消滅させてみる！」
できるものなら。

「やってやるさ、のび太君とまた会うためにも！」

オニキスの瞳が闘志に燃える。

彼女の両手に持つ朱色の日本傘がバツと開く。

前が隠れ、傘の柄を右手だけ持ち替え、利き腕のほうに傘を向けさせた瞬間、そこにはもうぶにぶにした小学生の姿はなかった。

蒼い雅結いの髪はかわりがないのだが、蛹から蝶に変化するがごとく、ぺったんこな胸はマシユマロみたいな柔らかくて揉みごたえの有りそうな大きなおっぱいへと変わり、可愛い姿は可憐ではあ

るものの凜々しくものとなっている。

「……」

ただ、一つだけ問題があるとしたらたぶん、あれだ。

「どららった〜？」

ミニドラはまったく違和感がわからないだろうけど。

ジャイアンとドラえもんの顔が何で渋っているのか、この愛らしい小型ロボットは首をかしげている。

「ドラえもん、どうして……」

キッドが社長秘書の格好になったのもちよつとは驚いたが、ドラえもんは今のところジャイアンが見ているもののなかで段違いにこの場にあっている。

「……言わなくてもわかってるよ、ジャイアン。でも、僕の胸のサイズ上あったのが占い師か、これしかなかったんだ」

占い師はドラメットのほうが能力上と似合っているので譲ってしまった。だから、これしかなかったのだ。

「僕だって、ドラパンにこんな格好をするようなところで潜入調査もしたのかとツツコンださ、昨日！」

青いスカートは膝上十五センチのミニスカート。

学校指定のわりには改造されているものだとしてすぐにわかるが、いやその前にこれどこの学校のものだよ。と、いうか、何で学校って言葉が出るのか。

ドラえもんは学生服の美少女になったのである。

前回の袴姿と同じく日本の学校の制服をアレンジしたのだろう。

しかも……。

「今時、長ランなんて着ているやつがいるのか！」

応援団でも珍しいぞと、ジャイアン。

胸のサイズ上と違っていったもの、それでもマントのような変形詰襟制服の胸のボタンはすべて外されている。

胸と肉感的なウエストの前では苦しくなるだけだからだろう。

下の白いシャツと白絹の手袋が清潔感と男らしさを演出している。

ていうか、男装なのか、これ。あ、スカートははいているから上だけだね、男物。

「これで鉢巻と応援団旗があつたら、本気で夏の甲子園のほうに行っていたよ、僕」

朱色の日本古風傘でも十分応援に行つてそうだけど。

レッドゾーンアニマル並みに珍しい服装になったドラえもん。

そう、彼女は番長になっていたのだった。

ファイル　タヌキじゃないよ、ネコ型ロボット　未来番長。

本名：ドラえもん

戦闘スタイル：未来の道具を使用

武器：日本傘（仕込み武器）

所在地：練馬区

在籍：セワシ

好きなもの：友情、ドラ焼き

嫌いなもの：ネズミ

キャラクタープロフィール・トップシークレット（判押しで）
量産型の子守用ネコ型ロボット（MS-903型）。

ロボット学校在学中に行われたロボットオーディションにて、幼児

だったセウシが間違って購入ボタンを押したため、セウシの家の子守りロボットとして働く。

今は彼の祖先でのび太の未来を変えるために、のび太の家へと送り込まれた。

だが、ビック・ザ・ドラによって乙女に変えられ、しかもものび太の命と自身を狙われるはめに……。

のび太を守るため、温厚である性格を隠し、敵に向かって容赦なく名刀電光丸で切り裂くことも厭わない。

ところで、雅結い（俗語）であるが……現実問題そんな髪型で戦えるというのはすごいとしか言いようがない。

決め台詞「のび太君は僕が守る！」

決め台詞2……只今考え中（爆）

必殺技……未来の道具名でお願いします。というか、ないんじゃないかね？

第三十九話　大丈夫、いまだったら鮫だって白い学ラン着ているから！（後書き）

と、いうわけでドラえもんたちは正確にはまだ攫われてはいませんが、デネブキャンディーさ～～ん。

いや～、そう想像されてしまっても仕方がない文にしちゃった雪子が悪いです（汗）

王ドラとエル・マタドラーも衣装チェンジしましたが、今回は背景に溶け込んでいるため、描写できませんでした。（残念！）
べ、別に考えていないわけではないからね（汗×2）

では、次回もお楽しみに

第四十話 頭にトマトケチャップをつけるとピアノに逢えるらしい（前書き）

あけましておめでとうございます。

と、元旦の挨拶はそこまでとして……。ちょっと考えること。ドラズの場合は3D 作った会社は倒産しているので……絶望視だな……とか思っていましたか……。

よくよく考えてみれば、ドラえもんズは全員ロボット。

ロボットといえば……スーパーロボット 戦！

マシ ロボの口 兄さんたちがいけたときからちよつといけるんじゃないかと思っていたらNOでついにアイソーガーの方々が……。

等身大のロボットもオツケーなのですね、バン イナ コゲームス様！

大 のぶ ボイスでドラえもんとかザン ット3が操作できるという夢の共演がありえるかもしれないのですね！

雪子の暴走&妄想はそこまでにして（夢ぐらい見ますよ、公式でまったく出番がないから。空しくって、長くってごめんなさい）久しぶりに本編、始まります！（冬コミ原稿のため遅れていました、すみません）

第四十話 頭にトマトケチャップをつけるとビビアンに逢えるらしい

しずか宅。

金角と対峙するのはドラ・ザ・キッド、ミニドラ。そして、これ汗で顔全身がビジョビジョになっているんだからね、絶対涙じゃないからね、……僕は弱虫だけど、強い子だから、今は泣いたりしないんだ！　といいはる眼鏡少年のび太。

「悟空、その言い訳は無理じゃないか？」

金角、正論。

「うっさいな。妖怪の癖に細かいことを気にすんな！」
のび太、悲しい主張。

「妖怪つて、妖怪関係ないだろ、それ」

文法上の問題を指摘しただけD A K A R A！

親友が消え去ってしまったことに動揺しているのだ、のび太は。これでは彼が得意とする射撃さえも、この妖怪ならよそ見しながらかわしそつだ。

（俺が、何とかするしかないよな）

心臓をのび太にわからないように押さえ込む、キッド。

大丈夫、まだ動く。

だが、長時間の戦いは無理だ。すべては一瞬で決める。

この服の機能も着た瞬間からわかるという親切設定のおかげで十分戦える。空気砲を構え、碧眼が光る。

「行くぜ、金角！」

手加減はしない。

あの銀角が俺の銃撃を跳ね返すほどの反射神経を持っていたというのに、奴は俺ではなくドラえもんのほうを吸い込んで消えた。

おそらく、それは計算のうち。

エドがひょうたんに吸い込まれてしまっているのだから当たらないように攻撃するしかない……ドラえもんの名刀電光丸のほうが優位に見えても仕方がない。

銃の欠点　相手に狙いを定め、引き金を引く、撃つ　この三つの行動をしなければならない。どうしても近距離、こんな狭い空間で戦うには行動が遅すぎる。

だが、それは俺の技能でカバーしてやる。

「どっかーん！」

撃った。

金角の脇腹を掠める。

「くっ、お前！」

「おらおらおらあああああ！」

間も入れずに空気砲がうなる。

一発、二発、三発、四発……。迅速に、黄色い竜巻は金角に襲い掛かる。

強風によってピンクの壁紙が剥がれ、カーテンははじけ飛ぶ。

「どららー」

ミニドラは風に吹き飛ばされないようにのび太の服にしっかりとつかまる。

ドッカン、ドカン、ドカアアアアアンウィウウウウウ！

優勢に見えるキッドの猛攻。

だが、キッドの顔は渋るばかりだ。

（妖怪だからこいつもタフなのか……？）

爆風にさらされる一角鬼のシルエットは不気味だった。

奴は立っているのだ。直立不動で。

微動だもせずに。

先ほどから、奴の骨盤を打ち砕くつもりで撃ち続けているというのに　なぜ、キッドは頭を撃たないかというと、脳みその半分が飛び散っても十メートル歩行して襲い掛かったという怪物を聞いたことがあるからだ。それでなくても相手は妖怪。韋駄天時との戦いでもほぼ反則技で瞬時に回復、復活してきたのだから頭を狙っても奴らが死ぬとは限らない。

なら、物理的に歩行できなくなる方法を選んだ。

もし腰骨に当たり、ダメージを与えられていたらばたりと倒れるはずなのだ。

（くっ、これでは倒せないというのか……）

酷使したために空気砲のバッテリーが切れ、ぽふっと間抜けな音を出した。

「もう終わるか、子猫ちゃん」

金角がにたりと邪悪な笑みを浮かべる。

イエロータイフーンは確かにこの妖怪に打ち付けられていた、どてっ腹の金と書かれている文字がかすれているのが何よりの証拠……ただ単純に攻撃力が足りなかっただけなのだ、この妖怪を貫くには。

「く、くそっ……、くっ」

キッドの口元から鮮血が流れ落ちる。

赤く、どす黒い血。あまりいい色の血じゃない……体のあちこちの機能が正常に動いていないせいなのか。

銃の撃つ反動で身体が思っていた以上にダメージを受けてしまった。絨毯に死の匂いが漂う赤い色の液体が落ち、楕円形のシミをつくる。

「キッド！」

のび太の悲鳴。

（見、見られた……隠しようがねえからだけどな……）

どくん、どくんと心臓が不規則で嫌な音しかしなくなっていくもし、俺が本当の人間だったらお花畑が見えているのかな……。

生憎、電子頭脳はのび太がまた顔全体に汗を流そうとしているところしか見えてない。

「だ、大丈夫だ……」

「いや、どう見ても大丈夫、なわけないよ、キッド。っていうか、顔も青いよ！」

「いいや、それは……ほら、黄色から赤になったら、次は進めで青くなるじゃないか……」

「信号機、信号機なの？　　というか、あれ毎度思っけど青？　緑にしか見えないよ……で、ここボケるところじゃないよね、どう考えてもボケ倒しできないよ！」

それにキッド、青くなっても進むってかんじしないよ。

足が、腕が、力が入らなくなってプルプルと小動物のように震えているよ。

キャッシュカードがあつたら、すぐさまお持ち帰りしてもらえそうなペットシヨップのガラスのケースにいられている子犬になっているよ！

意図せず身体を張った芸になってしまっている寸劇を金角は鼻で笑った。

「ふん、憐れだな……キッド。人間のために戦っているのに、人間のせいでお前は十分に戦えなくなるなんてよ」

「そ、それはどういう意味なの」

思わずのび太は聞き返す。

胸騒ぎとちよつとした好奇心によるものだった。

できれば、外れて欲しい予感のために。
でも……。

にたりと妖怪は薄気味悪く笑う。明らかに馬鹿にしている、目。
何もしらねえの、お前ら人間の残酷な行為を。まあ、ガキだからな
……。未来の話だし、な。過去の世界の甘ちよろいマダ小のおつむ
では考えもつかないだろうが。

「や、やめろ……いうんじゃないねえ……そのクソ妖怪、くっ」
新たなシミができる。

「……」

それとも隠してただけか？

なら楽しめそうだな。

舌なめずり。

「なあ、悟空。こいつら、ドラえもんズには強力な力をアクセスで
きるテレカを持っていることを？ 硬い友情によって結ばれたもの
だけが持つことができる、伝説のアイテムによって、な」

友情テレカのこと、だよな。

強力な力……あの不思議な夢を思い出す。

七つの世界を変える力。

あの、誰だかわからないけど同じくらいの年の少年が見せてくれた
ビジョン。ドラえもんズが誓いを立てる……世の平和のためにこの
力を使おうとする

「でだ、人間どもに恐れられ、プロテクトをかけられた」

「そ、そんな……」

ま、まさかキッドが血を流しているのはそのせいなの？

のび太の顔色がどんどん青くなるのを妖怪は計画どおりと邪悪にあ
ざ笑う。

「人間なんてそんなものよ。己よりも高い知能を有し、言うことを
何でもきく存在を作り出しておいて、脅威となる可能性があれば簡
単に破棄する。たとえそれがお前たちと同じような《心》持ってい

るものでもだ。万物の頂点に立っていていいのは人類じゃないと
きがすまないようにで」

身勝手に。

あんなこといいな、できたらいいなと高性能のロボットや道具を作
っているくせに。

裏切られる……その可能性だけで簡単に……。

まだ俺達みたいに人間どもに反逆もしていない、いいロボットなの
に、な。

「まあ、破棄はしていないな。プロテクトをかけられた、ただかも
のな。体を蝕める、厄介なウイルスを！」

ヒヤアハハハアハハハハハハハハハアッハアアアア！

闇が高らかに笑った。

天上世界中央州中央市。

ビク・ザ・ドラがどこかしらから取り寄せた豪華な赤い王座のある一室に紅孩児たちは一瞬で戻ってきた。

「ビク・ザ・ドラ……いますか？」

黒翼の天使は運命につなげられた《弟》の名を口にする。

通信する前に戻ってきたので彼がどこにいるかはつきりとはわかっていない。

だが、彼なら……己を監視するように未来の道具を使って『みて』いる彼ならば、ナポギストラーとともに帰還しているのはわかっているはず。

そしてあの強制脱出装置を使ってまずここにくるのも予想できる。

だから、言わなくてもいいことだろうが……紅孩児の喉から零れ落ちるようにその言葉が出る。

「任務、失敗しました」

忠実な僕として組みかえられた身体ゆえ、彼への報告は一言でも欠かさないようになっていようだ。

わなわなと唇は言い終えた後、奇妙な感覚に震える。

自分の意思とは関係なく声が出てしまうとはこんなにも気分が悪いものなのか。

「ああ。それにしてももう少しだったな」

王座から少し離れた窓の影にビク・ザ・ドラがニヤニヤと口元にシニカルな笑みを浮べている。

「ええ。あのタップというブリキ人形に邪魔されなければニコフ様

を我等が手中に抑えられたものを……残念です」
うつろな表情で淡々と。

この《弟》はどうしてこんな人形を欲しがるのかと、さめた心の中で紅孩児は思った。

忠実に、ビツク・ザ・ドラを悦ばせるためだけに紡がれる言葉を話さないといけないと脅迫概念に近い思想が渦巻くこの身体。

反逆、または彼が嫌いな陳腐な正義感のある思念は瞬く間に書き換えられ、不快を表す電気信号が全身を駆け巡るようになっていく。

……人間を嫌っているくせに、ずいぶん人間らしい傲慢で愚かな行為なんだろう。

それに気がついていいるのだろうか？

気づかないふりをしているのだろうか？

不意に全身を不快な圧迫感が覆う。

（これはなんです……ああ、そっか、今私の心の中で思っていることは……）

反逆の恐れありと判断され、全身に毒が回っているかのようにじわじわと負の感情に犯されている。背中に冷や汗が流れるほどの不快感、その痛みに耐えている……どうして、そこまでして自己を保とうと頑張るのか？

別に……いいじゃないか、彼にすべてを任せてしまえば。唯の駒として。

破壊の限りを尽くせば、いずれ……。

もしかして、私は何か、待っているのか、希望というのを？

馬鹿馬鹿しいのに……あの人の顔を見てから少し変だ……。

（孫悟空……）

厳密には悟空にそっくりなティオという人物なのだが、紅孩児には見分けがつかなかった。

あのときの感動を、心揺さぶる体験が目の前の邪悪な存在によって

奪われてしまっている状態では。

「……で、これからどうします」

次の指示を待つ、プログラム。

「そうだな……この地下にノア計画の鍵を持つ天上人の女がいるから、攫ってくれないか？　すぐ横に地底人が守っているが、兄さんほどの使い手ではないから楽勝だと思うけど……」

ビク・ザ・ドラが何かに気がついたらしく、言葉が詰まる。

「レディナの両手がいかれたな……なかなかやるな地底人……ん、これは、ドラメッド三世！　ここにきたということか！」

「ドラメッド三世様が、ですか……」

興奮しているビク・ザ・ドラと逆に紅孩児の目は胡乱でいた。

ドラえもんズの魔術師がここに潜入してきたということで紅孩児を蝕んでいた毒がきれいさっぱりと消え去った。

最も重要なドラえもんズの捕獲と比べれば詮無きことということと判断されたのだろう。

「では、本気を出してもかまいませんね」

時空の穴を割り、召喚するのは錫杖。

波動を突き進まんとする《弟》のために地獄の業火を呼び出そう。

それが黒翼の天使に期待されていることであり、存在意義。それ以上の何かを望むのは……囚われている限り、無理というもの。ならせめてこの天上世界を涙で濡らそう。邪悪な妖怪らしく。

この感情もまた目の前の《弟》に都合よく作り出されていても。

「ど、どうなっているんだ！」

今あなたの目の前に広がっているのは焼け焦げた土管に、氷の山……リトル・不思議空間といえば聞こえがいいが、異常な光景が空気にできていました。

「ドラえもんさん、がまた何かシタノデショウカ？」

狐の着ぬいぐるみのミクロスが呆然としているスネ男に現時点考えられるもつともな的確な答えを述べる。

「まあそれしか考えられないけど……さあ……」

疑うも何も、この町で不可解な事件が起るときはいつもきまつて野比家にやってきた未来ロボットが関与しているのだ。

今の科学力では考えられないことなら特に。

たしかに焼け焦げた土管はまだ何とかなるかもしれないが、空き地に突き刺さっている巨大なツララはどう考えてもこちら辺の一般市民が作り出すとは考えにくい。

「何が起きたんだ、もう……」

一人のけものかよ。

僕だって、ドラえもんのこと心配なんだよ。

ぶつぶつと一人厭味の二つ二つを呟いていると、何か光るものを見つける。

「これは、なんだ？」

無造作に拾い上げるのは、壊れたプレスレット。

紅孩児が転送するさいに使用したものだった。

「ん、なんとなく気になるし……あ、ミクロスこれ持っていてく

れないか？」

「はい。スネ男」

この服には両脇に大きなポケットがあるからそれぐらいの装飾品なららくらく収納できる。ミクロスは狐の可愛い手で受け取り、主の言われるままに砕けたブレスレットを保管した。

「で、どこにいきますか……」

後はこれといって変わったことは……えっと、手にして持ち出せるものはないな。（巨大ツララは自然に溶けさせることにした。）

ドツカン、ドカン、ドカアアアアアンウィウウウウ！
けたたましい音。

「な、なんだ！」

発信源はどこだ！

「しずかさんのお宅からキコエマス！」

ミクロスに装備させている聴覚システムが導き出した答え。

「いくぞ、ミクロス」

全速力で。

第四十話 頭にトマトケチャップをつけるとピアノに逢えるらしい（後書き）

はふゝ、おひさしぶりですゝ。今までもっていてくれた方、更新が遅れてしまい本当に申し訳ありませんでした。そしてやっとのことで現代組みの時間軸がそろいましたゝ。
と、いつてもまたずれが生じそうですが。

さあって次回はどこから始めようかな。今の今まで暖めていたネタに到達しようとする瞬間ってどうしてこう気分がハイになるんだろうゝ

デネブキャンディーさんにあつと驚くような仕掛けをこれからも用意していきたいゝ。

では、次回も、今年もよろしく願います！

そしてついにブルー（相棒）のほうが本気になったらしくこのドラえもん（女体化）ブログをはじめましたゝ（冷やし中華風に）
リンクは『<http://brsneik.blog.shinobi.jp/>』。

漫画を描くんだと言っていましたねゝ。あと、キリ番（100）もあります。そっちのほうもよろしく願います

第四十一話 携帯小説をパソコンで閲覧している少数派に僕はいるよ（前書き）

そもそも、パソコンでこれを構成している雪子です。携帯電話でも見られるようにと、参考になっているのはもちろん携帯小説で、パソコンでみて、文字配列などを参考にしているわけです。

だいたい雪子は携帯電話をプッシュしたのとパソコンのキーボードに触れたのでは後者のほうが圧倒的に長いです。パソコンであるのは……住んでいた所がたまたま圏外だったとか、まだ黒いフロッピー（Windowsがまだ支流ではなく、インターネットもない）時代からパソコンを家庭の事情で見っていたとか、辞書ツールに『のび太』、『スネ夫』、『王ドラ』を入れているから一発変換できるなどと……パソコンで文章を打つほうが好きなんですよね、これでも結構打つだけなら早いほうですよ。あと、パソコンだと画面大きいし。 （小型ゲーム機をPS“ピー”レベルの画質になるまで持っていなかったのも大体そんなかんじ）

そんな、雪子の都合で今回もまたパソコンから投稿されています。あと所持している携帯がパケット定額でないので、携帯からだ料金上まずついていうのもあります！（超絶重要）

と、長々とドラえもんズ小説はこうしてできている講座第一弾終了、そして講座最終回！

早い話一発ネタ（爆）！

第四十一話 携帯小説をパソコンで閲覧している少数派に僕はいるよ

これはまだドラえもんズが学生だったときの話……。

タンタン、タラタタタン、タッタタラ、タタタ……。

どこからともなくオルゴールの音がしていた　短調の音がよく響くぐらい澄んでいて心地のよい風が吹くロボット学校内。小さな、人工的に土が盛られてできた山にドラリーニョとドラメッド三世はいた。

授業が終わり、宿舎に帰る前に、披露したい魔法があるから来て欲しいとメッドは昼休み前に言った……その約束を忘れてしまうのはリーニョのお約束なのだが、帰る直前気が付いたメッドがリーニョの手を握った。

暖かくて、大きな手。

白玉みたいな鋼鉄の手なのに、不思議に冷たいとは思えなかった。

「ドラメッド、新しい魔法って何？」

この前　学校襲撃後に見せたドラ焼きが空から舞い降りてきた

よりもすごいものなのかな、と期待。

結構ドラメッドの力って綺麗だし、凄いから好きなのに、ね……なんで忘れちゃったんだろう？

僕、だから。

記憶媒体がごく僅かなのだからと誰かが、いや本当は複数の人にいわれ続けていると思う。でも、本当に誰が言ったのかまで覚えていない。

少し不安に思うこともあるけど、それもまたすぐに忘れて好きなことをしている。

だって、覚えてないのだから。何が原因なんて、のも忘れちゃった。みんなが余所余所しくなるのだけが、つらいかな。

僕、一人……が怖い、のかな。

でも、今はドラメッドがいる。

仕方がないでござるな〜といって笑って、僕の手を握ってくれるドラメッドが。

現実、彼のおかげで助かっていることも多い、と思う　なんでそう思うのかって、忘れてしまうことが多いから正確な件数はいえないけど、僕、助かっている。

なんとなく、というよりも確信に近いよ、だって、ドラメッドぐらいだもの、何をすればいいのか忘れて迷っている僕に真っ先に見つけてくれるの。

「見ていればわかるであゝる、アラブカタブラ〜」

青い空に響く、ドラメッドの言霊。

風がワルツを踊るようにつむじ風が巻き上がり、一つの丸い物体の影を宿すとともに、拡散する。

「わ〜」

ドラリーニョの歓喜の声。

手元に舞い降りた、サッカーボールに。

「ドラメッド、スゴイスゴイ!」

「約束であつたからな」

「!?!」

そんな約束いつ、したっけ?

キョトンとする僕を見てドラメッドの顔がやや困ったように笑う。

「~~~~~」

思い出したい、と僕は思った。

きっと、僕覚えている、忘れるわけないと……なにか、きっかけがあつたら……。

思い出せるような気がする。僕は少ない頭でも、友達のこと……

思い出すんだから!

葛藤している最中、陸上部のマットが目映った。

「あ!」

あのマットに包まって……ドラ焼きをもらって……。

「僕、次はサッカーボールを出してっってお願ひしたんだっけ！」
無邪気な笑み。

「わぁゝありがとう、ドラメッド！」

サッカーボールと一緒にドラメッドに抱きつく。

「！リーニョ！」

「それに僕、忘れてしまうからこういう約束……守ってもらえるの、少ないから……」

メッドに抱きついたことによつて、リーニョの顔は見えないが少し声が震えていた。

肩にかかる水滴。

「……」

そつと、やさしくドラメッドも抱き返す。

「僕、どうしてそんなに忘れやすい、のかな……」
嫌だった。

昔から……次の瞬間には何で嫌悪していたことを忘れ、能天気になつてしまつていた。ごしていた。

でも今日だけは　この友にだけは僕の、この悩みを打ち明ける。

「リーニョ……我輩ではリーニョのその欠点を直せないであるが……」

……その代わりといつてはなんであるが……」

ドラメッドがリーニョの耳にささやいた言葉。

自慢の魔法ではない、でも、リーニョにはとても素敵な呪文にも聞こえた。

がさがさ。ざっざ。

ドラメッド三世が天上世界に來たという情報が流れ、ネジリン將軍率いるロボット軍は地下水道に集まってきた。

ミニドラと大差のない身長なのだが、これでも戦闘用。

しかしチャモチャ星限定だけど。

ただナポギストラーの目となりえるからと動く監視カメラとして大量に送り込まれた感もある。

「全体止まれ！」

髭の將軍が兵たちたちにストップをかける。

「どうしましたか、ネジリン將軍！」

「アレを見て見る！」

剣で示す方向には地下水道の赤いレンガ……向こう側の光によって見えるお団子お下げの影。光の角度によるものか低めの身長がやや高く見える。

「ドラリーニヨ様！」

おもちゃの兵隊たちは一斉に青ざめる。

ぽんっ、ぽんっボールを軽快に蹴る音もあつて疑いようもない。

「あれれ、君たち、えっ」と、誰だっけ！」

ずば抜けて明るい声。地下のじめじめしたこの空間に似合いそうもない、あっけらかんとした少女ならではのものだろう。その声に兵士たちは身震いをし、中にはつぶらな瞳の目じりに汗が溜まってきたものも現れている。

そんな中果敢にもネジリン將軍は大声で叫ぶ。

「わ、我々はナポギストラー様の配下で、あなた様の味方です！」

「ふん……」

思案する、間。

薇仕掛けの心臓部の音のドキドキ音が止まらない。

なぜ、そんなにドラリーニョのことを恐れているのか、それは彼女が本当に無邪気なのだ。ビツク・ザ・ドラによって善悪の区別なく邪悪なオーラに満たされていようと、根っこにある無邪気さには何の影響も及ぼさなかった。そう、彼女はただ純粹に、破壊を愉しんでいる。

それが敵、味方も関係なしに……。

己の能力で傷ついていたものを一瞬に直せるのだからと、復活直後に被害にあったもの雑魚は数知れず。

さすがに親玉をしていた方々は少し残念だとその残虐性を抑えていたが、雑魚はいくらでも恐怖植えつけてもいいとにつこりと笑ってやっていた。

ノア計画の鍵を持つ者を探すまでに……。

「ドラメッド、そっちにはいないってことだよね……」

「は、はい」

「ん、僕、ウォーミングアップたりないから、誰か、的になってくれない？」

兵士、一斉に脱兎。

ドラリーニョがいるってことはそちらには侵入者なんかいないんだ、そうなんだ、きまっているんだ、だから……僕たち、私たちは任務を放棄したわけではないんだ！

必死に脳内で弁解しながら、彼らは走る、走る、走る！

後に残るのはシルエットのみ。

「あ………退き帰しましたね………」

ドラリーニヨの、声？

いえ、これは……ドラリーニヨのものとしては落ち着いていて、大人びている。

「まさかこんな方法でいいなんて……」

シルエットからお団子が取れる。

「それほど恐れられているのだな、ドラリーニヨという人は」
「……」

小劇場『ドラリーニヨ？』

スタッフ

音声担当 タップ

シルエット担当 美夜子

効果音担当 ティオ

脚本・監督ドラニコフ

以上のメンバーでお送りしました。

力だけではないのだ。頭を使って無駄な体力消耗を避けるのは当然のこと。

「これだけでこのエリアには兵士は近づいてきませんね」

「しかし、にわかには信じられんな。ここに地上を消し去るだけの雨を呼び出せる魔術があるということは」

半信半疑。いや信じたくないだけかも知れない。

「……でも、事実だから……」

メイド服のドラニコフ。

まだ少し頭がくらくらするけれど、動けるまで回復した、という。

「ティオの言うこともわかるわ。でも空を浮かぶ王国もあるのだから、この地球ではあり得ないとは言いきれないのかも、ね」

宇宙にだって飛び出せる魔力のある世界でもまだ出来ない技術がここにあるのだから。

「その通りです。それに、のび太様たちの身の危険が減るのでしたら私は喜んでこの計画を実行させてみせます！」

ノア計画を執行する機械を壊してしまえばいいんじゃない部隊、華麗に暗躍中。

そんな人知れず暗躍している王子を知らず、役目を終え、攻撃対象を失ったカードたちは魔術師の手の中に戻っていくのを電撃により両手が焼けただれた魔女は消えゆく呪にただ啞然と眺めるしかなかった。

紫色の狸も厄介だが、ピンク色の長い髪の魔術師は己よりも強力な魔力を駆使できると一瞬で悟った。

……折角獲物を見付けても、この状態では圧倒的に不利。

仲間……いや、利害が一致しているから群れを成しているだけの自分達では『助け』というものはこない。この戦いが終わったら寝首をかくものも出てこよう。まあ、その前に各人の怨念を晴らす方に故郷に向かうだろうが 己以外のものを大して必要としない、ただ強靱な力を持っているからという理由で媚びるぐらいのことはしておいたほうがいいと打算的な考えしかない妾たちがこの状況で手を貸すという正義の味方みたいな行為をするだろうか？

それに、妾たちは……。

ふ、と自嘲気味にレディナは目を閉じる。

何を甘つちよろい幻想について考えているのか？ 闇に墜ちたときに既に諦めたものだというのに。

ピチャン。

魔女の思考を打ち止めたのは、パイプについていた水滴がレンガに落ちた時。

「くはははは」

突然、奇怪に笑い出す、魔女。

「？」

首をかしげるのはパルパルだけ。

見えたのだ、その場にいる戦う力を持つものたちは。

そして魔女は自身の苦痛を取り除く人物が現れたのを確信したのだ。

それは黄緑色の髪をお団子にした妖精。

磁器のような、曇りなき白い肌。あるべきものがあるべきところに、最高のバランスで配されたくりくり目の秀麗な顔立ち、可愛らしい子猫のような容貌の美少女。

「あれれ、レディナ、もしかして、マジでヤラレル五秒前つてやつ？ 略してMY5？」

コギヤル語（死語）を懐かしんでください。知らない方は90年代にそっくり流行語があったという豆知識をどうぞ。補足：劇場版でドラパンがいった『チヨベリバ』（巨大化したドラメッド3世から逃げている最中に発しています）もコギヤル語（死語）の一種。

とにかく邪気を発し、羽ばたかせ、彼女はやって来た。

いつもいるミニドラたちをおいてきて まあ、本気時のリーニョのスピードについていけるものは早々いないので仕方がないことだろう。

「ドラリーニョ……」

「わーい、メツドだー！」

ふんわりと地下水道の床のレンガの上に着地し、リーニヨは楽しそうに微笑んでいる。

猫耳と尻尾をばたばたと揺らし、恋人に出会ったように甘く、そしてこれから起こる素敵な出来事を思い浮かべては恥らうように高揚する乙女。

しかし、それには。

「邪魔なの、いるよね」

冷酷に言い放つ。

「はい。リーニヨ様……しかしご安心を。先ほどビック・ザ・ドラ様から応援が来るとの報告がありました。ですから、ここで数名取り残しても問題はありません。それに……そのまえに肩慣らしもいかがでしょうか」

レディナはそういい終わると、目を瞑り小さく唇を動かす。

呪文、だとはわかる。

だが、敵を攻撃するものではなく……魔女の胸から血が噴出す。

「きやあああああ！」

あまり光景に目を逸らす、女子一名。

悲鳴を上げずとも、眉をひそめるもの多数の中、邪悪な妖精だけは笑っていた。

血の噴水の中、首飾りが出てきて、それを魔女はどこかに転送させる。おそらく、ビック・ザ・ドラの元に、だろう。

「これで準備は万端です、ドラリーニヨ様……」

白い肌は青く、血によって真紅に染まる衣服に痙攣し出した体。だが、魔女は極上の笑みで死神に妖艶に強請る。

「うん、いいよ」

この醜い体を、消失させることを。

高速繰り出されたサッカーボールによって魔女の体は粉々に砕け、塵に帰る

「リーニヨ様、ありがとうございます……」
レディナはそう宙に消える瞬間呟き、ドラリーニヨのウォーミングアップのため、消滅した。

「ひ、ひどい」

目を逸らしたため一部始終見てはいなかったが、パルパルには信じられなかった。

味方を容赦なく滅した妖精を。

「ひどいって、どうしてそういうこと言うの？　だって、役に立たない物ならすぐに新しい物にしてあげた方がいいじゃない」

物、扱い！

あまりの言い分にドラリーニヨ以外、絶句する。

「あれ〜、どうしてそんな非難する目で見るのかな〜。一度としてそんなこと思ったことないなんていう聖人君主なんていないの？　同じだよ、み〜んな。同じ」

同じあなのムジナ。

仲間のため、自分自身のためといって人や物が傷ついても平気なくせに。

むしろ喜んでいくせに！

「だから良いこぶらないでよ！　ネガティブな発言しないでよ！　むかつくから！」

瞳孔の開いた邪悪な少女は叫ぶ。何かスイッチが入ってしまったようだ。

唇はわなわなと震え、声を荒げる。

同情と憐れみ、そしてなによりも彼女にとって嫌なのは格下に思われることなのだろう。

下に見られたものは嫉み、妬みを感じられずにはいらなかった。へらへらと表面上で笑っていても心の奥まではわからない。いや、わからないで、見ないで……間違っているのはわかつている、けど、負の感情は止まらない……。

どくん、どくんとリーニヨの心の闇に反応して邪悪な意志も活気だすかに思えたが。

「やめるである、ドラリーニヨ。我輩と戦って勝ってから……お主の好きなようにするであゝる」

「メツド……遊んでくれるの？」

怒りから一転。

恍惚に頬を赤らめメツドを見る。

「そうである」

「じゃあ、もしかして仲間になってくれるの？」

目の前に美味しい餌をぶら下げられた時の子犬の瞳。

どんな姿になろうともどんなに心があつた邪悪な存在に蝕まれていようと、リーニヨはリーニヨ 嫌なことをいわれたら感情を高ぶらせて怒り、抗議し、好きなことをしてくれるのなら甘えを全面的に出した期待の眼差しで見つめてくる。

ドラメツドにはそれがひどく悲しいと思う反面、嬉しくもあった。友の根本的には変わらない態度に『希望』が『視』えるから。

「……お主が勝てたなら、であるぞ。その時は……」
自身が堕ちることになっても。

「焼くなり煮るなり我輩を好きにしていいでござる」

手が震えている。

褐色の肌なのに……このときだけは青白く、見えた。

「ドラメッド三世……」

「あとはまかせたである、ドラパン」

だが、友にそんなな避けない姿を見せ続けるわけにはいかないと、メッドは心を奮い立たせる。

「ああ……」

ここまでは想定内なのだ。

「やった〜！　じゃ、いいよ。お前ら、いないから。ここから逃げて、僕以外の誰かに捕まっちゃえ！」

「そうはいかないぜ、なぜなら私は天下の大泥棒、ドラパン様なのだからな！」

事前にメッド自身からリーニョと対決するという意図は聞かされている。ドラパンは騎士と少女の手をとり、黒いマントをパタパタと羽ばたかせて　飛び出す。

「……」

リーニョのメッドに対する執着心を利用して、なんとか鍵を守るこ
とが出来た。

（それでいい……それでいいのである……）

諦念したわけではない。

我輩は、勝つ。

ただ、それだけに今集中すれば良い。

バトンタッチが終わったこの瞬間、一介の戦士としての役割を果たせばいいだけのこと。

ただそれだけ、なのだから……。

「さあ、リーニョ……始めるであるよ……」

占い師の紫水晶の瞳は憂いながらも、奥では鋭い光を放ち、褐色の手の中に収められていたカードがきられる。

二人の運命のカードが、『友情』というカードが 逆位置と正位置どちらに『世界』という名のテーブルの上に置かれるのか、この戦いで決まる。

第四十一話 携帯小説をパソコンで閲覧している少数派に僕はいるよ（後書き）

はふゝ。次回、ついにリーニョとメッドの直接対決ですにやゝ。2月22日に更新というわけで、今回の後が気は猫語で言ってみたにやゝ。いにやゝ今回、相当の難産でしたにやゝ、次回もこの調子にやかも知れにやいけど、お楽しみににやゝ

第四十二話 トウばさ広げて、トウメで終わらせない弾幕はパワーだZ E

祝PV 100,000突破！

これも皆様のおかげです

今回のお題ネタ、後半部分はわかる人は多そうですが前半部分はちよっときついかなく。

予告どおり、ドラメッド三世VSドラリーニョの始まり、始まりです。

第四十二話 トウばさ広げて、トウメで終わらせない弾幕はパワーだZ E

ドラメット三世が手にするタロットカードが主を守るように、主の言霊を瞬時に応えるために円陣を組みまわりだす。

幾多のベールに身を包む占い師はシャリと金の装飾品を鳴らしながら褐色の細い腕を前に突き出す。

歌姫のように。

ぷつくらとした艶かしい唇が呪文嚙みだす。

「ドラメーディア タロートーリア マハーラージャ……邪悪なる存在に真実を隠すカードよ 今、ドラメット三世の命により宿し力を解放せよ！」

銀色の、いや、姿を写し取る鏡が下水道を出入り口、周辺を覆いつくし 幾多の枚数と角度を積み重ね、ミラーハウスを作り出す。

「あー！」

光の反射により、ドラメットもリーニョも無数存在する。ひよろ長いものをでぶつちよ、歪の形もちろんあるが圧倒的に多いのは同じ大きさの彼女たちである。

「ドラパンの、真似？」

ドラパンの場合ひげを西遊記の孫悟空のように分身にさせて僕たちの偽者を作り出してこの場を混乱させていたけど。

「そう思われても仕方がないでござるな」

眉を逆への字にして苦笑する。

「まだまだ我輩の魔術は終わっていないでござるよ……ドラメーディア タロートーリア マハーラージャ……聖なる光に満ちたカードよ 今、ドラメット三世の命により宿し力を解放せよ！」

何処からきたのか、無数の光がドラリーニョを貫こうと現われる。

問題は、どのドラリーニョに向っているのか。鏡のせいでどれがド

ラメッド自身に呼び出された光なのかわからない。

「やるね」

リーニヨはとりあえず、向ってきそうな光だけを避ける。まやかしのなか、本物なのか。その中で、サッカーユニフォームにこすれたものがあつた。

「ん！」

どうやらこの光が本物らしい。だが、過ぎ去つた。それで終わりかと思つた。後ろの鏡に当たつて光が反射してくるまでは。

「な！」

避けきれず、直撃を受ける。後ろにつけられた邪悪な羽によって致命的なダメージは防げたが、背筋が凍つた。

「この魔術コンボは一定の密室でしか効果が発動できないのが弱点である。が……調度ここはその点はクリアしているである」

『鏡』と『光』のカード。

何かに当たり消失するまで『光』は『鏡』の迷宮の中で踊り続ける。もちろんドラメッドに当たること考えられるが、『鏡』によつて本物の彼女が何処から狙っているのかわからない状態では魔術を繰り出している彼女のほうが反射角度を計算する上で回避に関しては有利。無数の『光』のまやかしに包まれていたら野生の感で避けきるにはリーニヨクラスでも難しい。

「さて、いくであるよ。ドラリーニヨ！」

タロットカードが光りだす。

無数の光が交差し、おどろおどろしい妖精に向つて執拗に追いかける。

「むゝ、だったら、こんな鏡、一つ残らず叩き壊してやるんだから！」

羽からサッカーボール上の球体を作り出し、壁に向つて高速で蹴つ飛ばす。

がしゃん。

魔術で作り出されているとはいえ、今のリーニヨの蹴りにはビック・ザ・ドラの力も合わさって簡単に砕け散ってしまう。だが、伊達に幾多の鏡を重なり合わせて作られたミラーハウスではなかった。元のれんが部分にまでは到達しきれず、ひび割れたガラスと壊れたガラスによってボールの進攻を足止めする。

「ちっ」

舌打ち。

一筋縄ではいかないことに苦々しく思うエースストライカーと反対に、占い師のほうは伏し目がちであるものの闘志の宿った瞳をよりいっそう熱くさせる。

「カウンター魔法発動！ 真実の姿をさらけだすである『ガラスのソリッド・スファイア』よ！」

ドラマメッドの言霊にのって、砕けたはずのガラスは再び躍動する。まとまり、一つの球体となり、リーニヨに向って突進してくる。

「ええ〜！」

咄嗟に手で頭を守り、ダークパープルの羽も防御モードへとシフトさせ、耐える。

キラキラと輝くそれは綺麗な見た目に反して重く容赦ない一撃をリーニヨに与える。

「くううううう」

幾多の色を吸収し、反射させた剛球を受け……。

「やっぱり、メッドはすごいな……」

恍惚に頬を桜色に染め、球体を消失させる。

ゾクゾクする 酔ったように顔を赤らめ、ふらふらと危なげな足取りをしながらも、リーニヨは再び羽を広げる。興奮している

込み上げてくる戦闘狂の本懐を抑えきれないようで無邪気に微笑み。邪悪な『気』を、サッカーボール状にした無数の弾丸に具現化。

リーニヨの体系は中学生の中でも貧相な部類に値する。だが少年のように引き締まった小尻に太ももは健康的で、彼女はその美脚を高く掲げ、ボールを蹴り飛ばす。

「いづくよ、ドラメッド！ シュートオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！」

その数、両手では数え切れないくらい。

下手な鉄砲数うちや当たる。それに癒しの力が使えるドラリーニヨなら即死技でもなければ恐れるに足らないのだろっし。

「僕だつて、遊ぶんだからね」
この考え方。

「……リーニヨらしいである」

リーニヨがここまで考えているかわからないが、『鏡』のカウンター魔法は強力だが、ドラメッドが発動スペルを時間内に唱えないと不発に終わってしまうという弱点がある。

詠唱時間がある分、力で押し切られれば、圧倒的に不利なのはメッドだ。

だから策を練る。

『光』と『鏡』はコンボ魔法ではあるものの、決定打ではない。むしろ、リーニヨの注意力と……とをここに向けさせるための罠。あと少し……懐に隠し持っているカードさえ発動できれば……メッドの役割は終わる。

（……ドラパン）

神出鬼没の怪盗と友になるなんて数年前までは考えもつかなかった。だが、彼の魂に宿る強い正義の光に対峙するたびに気がついて……信じて、いいと思えた。いいやそんな生半可な言葉ではない、確信したのだ。

天上世界で合流、そしてこのカードを手に説明、これから我輩が何をするのかドラパンに伝えきったとき。

「おい、そんなことしたらお前は……」

さすがの天下の大泥棒も顔を真っ青にしていた。物理的に敵わない相手なのならば、その方法しかないが……危険すぎる。

「だから、我輩が抜けた穴をドラパンに埋めてほしいである……巻き込んでしまつて本当にすまないであるが……」

王ドラがエル・マタドーラとともに時空の檻に閉じこもってしまったように。

あれは偶然がなされた事故みたいなものだが……。メッドがしようとしているものはそんな生半可なものではない。

「巻き込まれたのは別にどうでもいい……知っていたらすぐにでも駆けつけるからな。だが、そんな危険な賭けには賛同は出来ない」友として、真剣に彼女の心配をしている。

嬉しかった……でも、そんなドラパンの気持ちを踏みにじむように悪いが、これだけは変えるわけにはいかない。

「どちらにつくかまでは分からないであるが、我輩は我輩の信じた道だけは違えたくないのである」

今出来る全てを、賭けて。

「……わかった。メッド」

頑として譲らないこの魔術師にもう何を言っても無駄だ。そこに惚れこんでしまった自分。シルクハットで目から流れそうな汗を隠しつつ……振るえる声　いろんなものに対して怒っているためどれにたいして怒り振るえているのかわからないが　ドラパンは言う。「これだけは約束してくれ……泣くなよ。苦痛で心の中で悲鳴をあげ、泣いているお前の顔はどうしても私は好きにはならない」

「そうであるな」

二人は目じりの熱いものを必死にこらえる。

「ただ……我輩たち、ドラえもんズはすれ違っていただけでござるよ……。今、元に戻っただけ……」

ビク・ザ・ドラによって書き換えられた悲しい事実を、正すために、ちよつとコンビニに行くみたいな気持ちで。

ドラパンは深く被っていたシルクハットを上にならずらし、紫水晶の瞳をじつと見つめる。

「ドラパン……」

彼の熱い目が、想いが滲み出ている……メッドは瞬きすることも忘れてしまっていた。

「……善に進もうが悪に進もうが、それは客観的な判断によって決まること。私たち、当事者によるものではない……たとえば、ビク・ザ・ドラに加担する運命に導かれてしまっても……私は、ドラメッド三世お前の友でい続ける」

それが私の『正義』だ。

「友達だからといって馴れ馴れしい関係というわけではない。時にはぶつ飛ばしてでも間違った道から外させてやる！」

「……ありがとうで、ござる……ドラパン」

すまない、ではない。

ほんのちよつとだけ強く色づいた紫水晶の瞳。

うまく表情を表せることが出来たか少し不安だが、この姿になっ
てはじめて心から微笑みたいと思ったから。

弾幕だらけのベストミラーハウスは激震に揺れていた。

万華鏡を絶えずぐるぐる回しているように、浮遊し、技と魔法を繰
り出し、激突、相殺、大反響。ガラスの壊れる音が絶え間ない。

「メッド……やるね……」

サッカーユニフォームのあちこちがほころびてきている。

「……リーニョ……こそ……」

対面している占い師のほうが酷かった。

光沢のある美しかった布は無残に破れ、かろうじて肩に引つかかっ
ている程度。

体のあちこちには数日間の戦いで出来た痣や怪我があり、満身創痍
になるのも時間の問題といったところだろうか。

ゆらりと、身体が勝手にふらついてきた　駄目、意識が朦朧とし
てきた……咄嗟に意識を高めるためにメッドは唇を噛み、遠のきそ
うだったそれを掴み取る。

流れ出る赤い血。

肩で息をして、汗で目が曇ったりするけれど、まだまだ、倒れるわ
けにはいけない……やっとな、ここまで来ることができたのだから……

…。

魔法の鏡もほぼ破壊され、リーニヨを攪乱させる役割はもう持たない。吹雪のように無数の『鏡』の欠片が幻想的に舞い散り、二人の戦いを彩る。

「だけど、この一撃で僕がこの勝負を貰うよ！」

リーニヨが突進してきた。『ガラスのソリッド・スフィア』対策だろう。確かにこれだけの『鏡』の欠片があれば極大の球体が出る。

サッカーボールだけでエースストライカーの蹴りがメッドの眼下に放たれようとする。

「これを待っていたである！」

左腕で受け止め、力を振り絞って、掴み　リーニヨの身体を引き寄せる。

「わ！」

すかさず隠し持っていた一枚のカードを彼女の額に押し付け、唇を動かす。

「ドrameーディア　タロートーリア　マハーラージャ……かのものの精神に我輩を導くカードよ　今、ドrameット三世の命により宿し力を解放せよ！」

唱え終わるとともにドrameット三世の身体が透けていく。いや、リーニヨの額にあるカードに肉体が吸い込まれていくようだった。

「メッド！」

「そして……カウンター魔法発動、真実の姿をさらけだし、我が友リーニヨを邪悪なる存在から見えぬように包み込むである『ペルセウス・ソリッド・スフィア』よ！」

消えゆく占い師の掛け声とともにまだ形態が残っていた『鏡』たち

はれんがから剥がれ落ち、散らばった『鏡』の欠片達は一斉にリーニヨの身体を中心にすっぽりと覆い　地下水道に大きな銀色の球体が出来る。

「こ、これは……ドラメッド！」

リーニヨが見たときにはもうドラメッドの体は霧のような存在に変わっていた。

「今こそ……約束、果たさせてもらうであゝる……」

ピンク色だったはずの長い髪が摩きカードに吸い込まれ　優しく微笑むとともに、ドラメッドの体は完全に消えた。

「ど、何処だ！　ドラメッド！」

リーニヨの声が響く……そして額につけられたカードが光りだす。ホワホワしていて……気持ちいい……この暖かいに光は……。

「もしかして、ドラメッド！」

カードにはハート型の入れ物が描かれていて……中に長い髪の乙女の眠っている姿が浮かび上がっていく。

胸の大きい、占い師のような……。

「ここにいるの……」

あれ、なんか……眠くなってきた。ちやった。

ドラリーニヨは華奢な身体を丸くし、銀色の、色とりどりの鏡の揺り籠の中　気持ちよさそうにうとうとと目を細め、すやくと寝息をたてる。

ここが本当に安心な場所だから……。

ひらりと、一枚のカードが手から滑り落ち、ゼッケン部分でとまる。カードに絵のほかにも『夢』と文字がでかでかと書かれていた。

ずっとずっと……この約束は……我輩忘れないでござるよ……だつて、それは……。

ずんぐりとした緑色の法衣を身に纏ったタヌキ……もとい猫型ロボットが降り立つ大地は、人工芝生が地面を覆う、コロシウム。見覚えがあった。いつの日だったか……ブラジルでドラリーニヨが選手として出たサッカー場によく似ている。似ていて当然ではある、ここはドラリーニヨ自身の『夢』の中。

ドラズ全員が応援に駆けつけたのであったな……。
あのときの皆の笑い声が懐かしくて……どうしても取り戻したくて……。

「だから、我輩は……お主を倒してみせる……ビク・ザ・ドラの影！」

使用中の『夢』以外のカードを手に、ゴールポストにいる悪霊を睨みつける。リーニヨを邪悪な気で抑えつけている悪魔はいやらしく笑っていた。

第四十二話 トウばさ広げて、トウメで終わらせない弾幕はパワーだZ E

気がつけば二年目突入。更新と字数を加算すれば決して遅くはない
と想っていたのですが……すみません、いろいろこつちやたから。で
も納得しないのをだしても面白みもないのでこれからもこんなペー
スでやっていきたいと思っています。

そして今回は題名を間違えず入力しましたよね、デネブキャンデ
イーさん！

では、次回もお楽しみにね

第四十三話 感性の違いで太陽の色は黄ってという国があるけどいいよね、答えは

ちなみに虹の色は六色という国もあります。仲間はずれになれるのは……藍色。

あ、なんか、無性に泣けてくる……。

え、なぜかって？ ん……この前文のネタわかる人？ そりゃ……素ではぶられている『豆電球』のほうが残念だよとつつこんだら、確実にわかる人です（笑）。

答えは聞いてない（マイナーだからね！）ので、わからない人はわからないままでも大丈夫です。では、豆知識はこのへんにして、本文をお楽しみください。

ねえ、どうしてドラマメッドはそんなに悲しい顔をしているの？

わからない。

わかりたい。

でも、何か頭の中にもやややるものがあったて、それがそれでいい
といってくるの……今のメッドはそういう顔をするのが当然で……
そういう顔をさせる僕は楽しまなくちゃいけないって。

ん、友達を悲しませるのって、よくないのに？

でも、今は悲しませないといけないって。

だって、ビック・ザ・ドラ様の命令だから。

それは絶対。

それ以外は芥の如し。

……でもそれっ……すごい、怖い考えだと思う。

あ、そんなこと思っちゃいけないんだ！

思ったら強制的に僕の心は閉じられる。

……。

苦しいよ。

どうしてこんなに苦しいの。

二つのまったく違う考えが僕の心を揺れ動かしているから？
忘れちゃいけないこと思い出すだけで、痛いよ……。

ドラマメッド、僕、こんなに痛がっているのになんで？

でも、僕……ドラマメッドに約束してもらったことあったから……。

あ……もしかして、僕大切な何かを忘れちゃっているの？

タロットカードの『夢』の力でドラリーニョの心の中に入ってきた
ドラメッド三世。理性を司るゴルポストがビック・ザ・ドラの影
によって汚されているところを見ると同時に、まん丸の白玉手を強
く握り締め、緑の法衣が大きく揺らした。

「我輩、怒ったである！」

『夢』の中、一時的にドラメッドの姿は元にもどっていた。外を鏡
の結界で覆わせたためビック・ザ・ドラによる干渉が極力少なくな
っているためだ。

鋼鉄の猫型ロボット。

二十二世紀のハイテク魔術師。

魔法道具のエキスパートが、今生のもてる全ての力で邪悪なる影を
消そうと立ち向かう。

「フハハハハッ！」

影が、笑った。

あのビック・ザ・ドラと同じような声色で

いや、彼の分身なの

だからこれぐらいの芸当はあってもおかしくはない。

「さすがだな、ドラメッド三世。まさかここに来るとは、恐れ入ったよ、いや、素晴らしい」

「下手なお世辞はいらないである」

「それにしてもよくこんな手を思い浮かべたものだ。感心する」

「夢の中で引きずり込み、我輩たちを操ろうとしていたのは知ってたでござるからな……」

意識を失った瞬間、囚えるために入れ込まれる影。

ただ、のび太と出会っている、またはのび太がいる時代にいけば入ってこられなくなる。それはのび太がビク・ザ・ドラを倒したことによって力に対する耐性があるのだ。アンテナの役割を持つ影ぐらいの力なら打ち消してしまう。

夢の中の奥に居座っているものは除いて……。

「例えるならばお前は殻のなかでじっとしているカタツムリみたいなもの。ビク・ザ・ドラに絶間なく与えられている力を封じた今、徐々に力を失っているであるが……」

「私が消える前に、お前の防御魔法は途切れてしまう、のだろ。あんなに傷ついた身体では意識が遠くなるのも時間の問題だからな！」

「く……」

悔しいが、影の言うとおりだ。

こう話している時間ももつたない。

「ここは一気に蹴りをつけさせてもらうである、いけ、タロットカードたち！」

ドラメッドの命令にカードたちは次々と本性をむき出しにする。

茨が、剣士が、僧侶が　悪に絡めとり、切り裂き、種を滅しようと影に襲い掛かる。

「ふん、そうやすやすと余は倒せんぞ！」

地面から衝撃波が発せられる。

衝撃波は壁となり、向かってきたカードの精霊たちを受け止め、弾き返した。

「な！」

悲鳴を上げる精霊たち。

強固なシールドに守られた影に近寄ることも出来ない。

「フフフフ。ただ宿り主に寄生するだけが能ではないわ。それなりのセキユリティー機能がなければな」

「我輩の方がウィルスだといいたいのであるか！」

ドラメッドはランプの中から笛を取り出し、色とりどりの蛇を召喚する。

そしてありったけの魔法道具が、はじき返されたカードの精霊たちの壁、地面への激突を防ぐように優しく包み込む。

マスターの心遣いに精霊たちは皆頬を少し緩ませたが、目下の敵に手も足も出せなかったという事実には歯軋りし、苦々しく顔を歪ませる。

そんな殺気立つ精霊たちの視線にも飄々と影は立ち振る舞う。

「そうだろ。ゴールを守っているのは余であるからな」

いやらしく口を歪ませ、影は笑う。

その姿はドラメッドの心を激しく揺さぶる。アウェイなのは自分たちなのだ。

リーニョの心を歪ませているこんな影でも、彼の心に取り入られているという事実が重く押し掛かる。

「そうでは、あるが……」

だが、譲れない。

退くことも、任せることも出来ない。

ふと思い出すのは……学生時代の「コマ」。

忘れやすいのは他者に言われてやっとわかること。自覚がないからといって、友達を傷つけている事実には変わらない。

厄介なことにまたやってしまったという感覚しか残らないので、同じ失敗をしないようにしようとしても対策が練れない。

そのことで……涙をそつと流していた者は誰だ。

どうして自分にこんな欠陥ができてしまったのか、友達の約束を忘れてしまう悲しさに震えていた親友。

ソレを少しでも和らげるために、自分はリーニヨに約束したのだから。

約束だから。

守りたい、彼の……笑顔を！

「我輩は……リーニヨが、忘れたことを……何度だって、何回だって思い出せるまで教えるである！」

強い意志の光とともに、白い煙と大きな音をだし、漲る魔力によってみるみるドラメツドの身体を大きくくなっていく。

召喚された大蛇は主人を守るように身をくねらせ、カードの精霊たちは闘志に燃やし、魔法道具と共に影に突進してくる　変則超次元PK戦が始まった。

一枚のカードがくると回転し、何かと交信している。発動キ―ワードを入力、術形式にエラーがないかチャック、完了。悪質な妨害……なし、プログラムを無事ダウンロード完了……実行にうつる。『星』のカードが力行使する　晴天なのに、色鮮やかな星空となり、輝いたと思ったら流星となって降り注いだ。

グラウンドは揺れ、大きなクレーターをいくつも作り出す。

影の波動は地面を破り、受け止め、返そうとするが、寸でのところで生い茂る緑の芝生が巨大化し、さらに防御を司るカードたちが一斉に行く手を遮り、ブロック。

その隙間から攻撃を得意とするカードたちが一斉に飛び掛ってきた。
「む……」

影は咄嗟にシールドを張り、やり過ごす。

だが、突き破ろうと星は、カードたちは攻撃の手を緩めない。

中には力及ばず、シールドの瘴気にあてられるだけで身を滅ぼしかねないぐらい壊れていくものもいるが、回復を司るカードたちが必死になって攻撃を司る彼らを癒していく。

「雑魚が！」

カードたちをなぎ払おうとすると、魔法道具がすかさずフォローに入り、邪魔してくる。

そのせいで影は致命的な攻撃を出せずにいる。

焦る。

疲れも、恐怖もすべてどこかに捨てきつたように猛攻してくるドラメッドのカードたちに。

「皆、一時退避するである！」

後方に位置していた巨大化ドラメッドが笛を鳴らす。優雅ではあったが力強く噴かれるメロディーによつて、再び手元にもどってきた流星たちを自分の頭上に浮かせ、再び勢いよくゴールポストにいる影に容赦なく突き進めさせる。

シールドにひびが入った。

跳ね返すように命令する時間を与えずに、カードたちも必殺技を叩き込んでくる。

一撃、一撃が弱くても集中して叩き込めば、打ち破れると信じて。

「……………」

さすがに怒れる魔術師を一人相手にするには荷が重過ぎるのか？
肉体的には限界に近いというのに…………手負いの獣を侮ってはいけ
ないということか？

負ける気はしないのに…………勝てる気がしない。

時間がたてばたつほど力が消耗するというのはお互い同じ条件だ。
どちらか一方が力尽きたら終わるというのも、変わらない。

だいたい…………魔術を打ち破るには魔術と世界のリンクを断ち消せば
いいのだが…………それがうまくいかない。

…………。

…………、…………。

「あ……………」

ビック・ザ・ドラの影の表情が曇り始める。

「あ、あ……………」

どうして、ドラマッドが魔術を使用できるのか？

巨大化したメッドから繰り出される鉄拳に耐えながら、影は思う。

ここは……リーニヨの『夢』の中なのだぞ！

ここを支配している己に許可なく魔法が使えるわけがない。

いくら優れた魔術師であるドラメッド三世といえども、ここと繋がっていない状態なら……ロボットの身体に戻るのは仕方がないにしろ……カードたちには蓄えた魔力が込められているのなら使用可能だが……メッド自身の笛の音に応えるこの力があるわけがない。

だが、この目の前の現実はなんだ？

「はあ……はあ……」

カードたちは疲労が蓄積し、皆息絶え絶えとしていた。ありつたけの魔法道具たちもバッテリーがきれて、うんともすんとも言わない蛇たちも焦点の合わない目でそれでも主のために影に立ち向かおうとうねるが、途中で力尽きて……グランドに転げ落ちる。

そこまではいい。

「……皆……」

巨大化していた身体が……徐々に小さくなっていく。

魔力が、空になるうとしているのだろう。

だが……。

「我輩は……まだ……」

ここからだ、おかしいのは。

「リーニヨとの……約束……」

うつろになりつつ瞳でも、消えていない緑の魔術師の気迫に恐怖している影がある。

おかしい。

……そんなことがあつてはならぬのに！
震えてはいけない、臆してもいけない、だが、口から、鼻から流れるこの赤いものはなんだ！

「今度こそ、守らせてもらうのである！」
もう邪魔なんかさせない。

親友の意識を乗っ取らせなんかしない。
お前なんかに、お前なんかに……！

「我輩たちの友情を壊させないでえあああああるううううううう！」

パリンっ！

振り下ろした最後の拳で影のシールドをドラメッド三世は見事に打ち砕いた。

キラキラとシールドの破片は空を舞い、卵のような形に形成しなおそうとしていた。

硬く、頑丈に。

それは邪悪な存在を受け付けまいと、確固たる信念をもって作られていく。

びきっ。

何かが卵の中から突き出そうとしていた。

丸い手　ずんぐりとした、おおきなボディ　さらに太陽の色と芝生の色が重なり合い、変形していく。

見覚えがある、見間違えるわけがない、それは。

「まさか、リーニョ……お前……！」

抗おうとしているのか！

うん、そうだよ。

僕やっぱり、ドラメッドが辛そうな顔をしているの……楽しくない。

やっと、気がついたんだ……。

この肩の悲しみと……温かみが……。

そう、僕……やらなくちゃいけないことがあった！

どこからともなくホイッスルの音がする。

「選手、交代だよ！」

黄緑色の、エースストライカーが、倒れかけた親友を抱きかかえる。

「ドラリーニョ……お主……」

人懐っこい笑みを浮かべた、彼がいた。

幻ではないかと、あの影が作り上げた偽者なのか……その考えはすぐに否定される。この子供のような特有の高い体温は、彼以外にあるわけがない。

待ち望んでいた彼。

忘れんぼうでも、人の話を聞かないで突っ走るときもあるけど、すばしっこくて心優しい親友の姿がメッドの目に映る。

「遅れちゃったね」

ドラリーニヨとして彼はドラメッドを支えていた。

「ごめんね、ドラメッド。僕、また大切なこと忘れちゃっていた…」

…」

操られていた記憶は消えていない。

ドラメッドを何度僕は泣かせてしまったのだろう。

何度傷つけてしまったのだろう。

謝っても謝りつくせない。

「メッド……」

親友は忘れてはいなかった。

僕たちの約束。

卵の殻のかけらが集束し、リーニヨの足下に現れ……友達、サッカーボールとなって推参。

「ありがとう。僕、今度こそあの悪いの、倒すから」

いつだってメッドは呼びかけてくれた。

それを僕は聞いていたけど、すぐ忘れていたんだ　この悪い奴に、

記憶奪われちゃって。

「ちよつと、まつである、リーニヨ」

ふらふらの身体でもドラメッドは力強くリーニヨの腕を掴む。

「ここで交代、というのはいささか友がちがないであるよ……まだ、我輩……決着をつけてないであるから」

大きくて暖かな手に心も熱くなる。

そう、僕らは一人じゃないんだ。

友と友が手と手を取り合っていていかないといけないんだっただね。

「そうだね。僕たち、じゃないといけないよね！」

訂正する。

「いくであるよ、ドラリーニヨ！」

「オッケー、タイミングはメッドにちゃんと合わせるから」

うん……涙を流すのはその後でいいよね。

……そうであるな。

それに、こんな仮初の……『夢』の中じゃ、僕、まだ実感湧かないや。

夢幻ではなかったと確認するには……まずはあ奴を倒さなければならぬである！

心と心が通じ合っていることを感じ、リーニヨとメッドはお互い不敵な笑みを浮かべた。

シャアツアアアア！

歓喜した蛇が、サツカーボールを空高く飛ばす。

ソレが始めの合図だ。

メッドは魔力をリンクさせるために詠唱する。

「ドラメーディア タロートーリア マハーラージャ……全てのカードよ……」

主の力強く、喜びに満ち溢れた言霊にタロットカードたちは勢いよく集まっていく。

「今、ドラメット三世の命により、我が親友に力を預け、邪悪なるモノを滅せよ！」

リーニヨを中心に。彼に相応しい形となってサポートするために、カードたちは道を作り出していく。高く、カーブのある道となって

「いつくよー！」

その道を猛スピードで駆け上がる、エースストライカー。

一步、一步タロットカードを踏みあげるたびに、光が、メッドの力が、カードたちの声援が、リーニヨの身体を熱くさせる。

高揚する。

身体を動かすのはもちろん好きだ。だけど、もっと好きなのは……。

「とって、ぱの……」

道が途絶えた先につづるのは 右足、サッカーボール、ゴール……

…そしてビツク・ザ・ドラの影。

綺麗な一直線だった。

「にゃんころりの、シューウウー——トオオオオオオオオオ
オオ！」

迷いなんか、
なかった。

友情を信じ。

自分を信じ。

完璧な整列に感激し、邪悪な存在に全力全開の一撃を叩き込めはそれでいい。

僕、難しいことわからないけど、勘はいいから。

絶対うまくいくって、思ったから。

「僕とメツドの勝利、なんだからね！」

決まっているから！

「ぎゃあ ああ ああ ああ ああ ああ！」

サッカーボールの光が影を消滅させようと強く放たれている。

遠のく、邪念。余は無へ還るといつのか！

……どこから、間違えていた？

リーニョの心を操り、メッドに執着するようにしたときからか？

しかし、そうしなければリーニョの心をつまく操れなかった。リー

ニヨはメツドに絶大な信頼を向けているからだ。

友の記憶が消えてしまっているように見せるため、影は記憶を封じ

表に出せないように、と命じられてはいた。が……強すぎる絆まで封じることができなかった。そこで考えられたのは、友に対する信頼を歪ませることだった。

信頼が高ければ、高いほど……獲物として興味を持つように運命を変えた。

だからリーニヨはメッドに執拗に付狙い、機会があればすぐに飛び出してメッドと対峙していたのだ。

だが、本来の絆に気づかれてしまった。
取り戻してしまった。

……悔しい。妬ましい。

影は消えゆくこの身を嘆きながら、恨めしく思っていた。
……。

このことを読みきれなかったのか、本体は？

本当に、そうだろうか？

消えてしまう瞬間みた、緑の魔術師の背後に見えた闇。それは……
次の段階に持っていくための布石ではないだろうか。

あ……。

「ふは、ふはははははは！」

遠退いていく意識の中で、想像する未来の世界を思い、影は笑っていた。

そうだ、そうに、違いない。なら、安心して消えることが出来る。

なんだ、これは……なるべきになったことだったのだ！

次の段階へは、他の魔性が導いてくれるだろう。

ドラリーニヨに仕込まれていた影は完全に消滅した。

「ドラメッド〜！」

黄緑色の髪を靡かせ、瞬く間に起き上がったドラリーニヨ。

悪『夢』から覚めて、まだはつきりしていない頭でも、友の作り出した硝子の球体の中心でメッドを探していた。

「メッド、メッド〜！」

「……そんなに、大声出さなくても我輩ならここにいるである」
くすりと笑う大人の女性。

リーニヨは振り向くと、『夢』のタロットカードを他のカードと一緒ににしまつ占い師の姿がそこにあった。

「わ〜い、ドラメッド〜！」

満悦の笑みを浮かべ、ドラリーニヨはドラメッドに抱きつく。彼女となっっているメッドの体は暖かくて、ふわふわしていて、すごく気持ちよかった。

「ごめんね、ごめんね、ごめんね」

たくさん傷つけてしまつて。

たくさん心配かけてしまつて。

ん〜と、それに……あ、うまく言葉が出ないや。とにかく、僕は…。

「メッド、ありがとう」

夢の中じゃなくて、現実でも言えた。

少し目から熱いものが流れているけど、それは嬉しくって流れてきている。

えへへって笑ったら、メッドも微笑み返してくれる。僕、メッドの親友でいいんだよね、って思える。

「どういたしましてで、ござる」
欲しかった言葉も言ってくれる。

リーニョはそれがうれしくて喉をごろごろさせながらメッドに接近する。とくんとくんと規則正しくなる心臓音に耳を傾けながら……。

「ドラリーニョ……」

だから、リーニョは気づけなかった。

メッドの顔色が優れていないことに。

そして ドラメッドの背中から流れてくる大量のなにか、にも……。

第四十三話 感性の違いで太陽の色は黄っていう国があるけどいいよね、答えは

ドラリーニョファンの方、長らくお待たせしました。やっと、ドラリーニョが仲間にもどってきたよ！

わゝ、わゝ！ もう、二年以上たっているけど！ 今四十話過ぎているけど！

構成自体は出来上がっていたけど……なかなかすめなくてごめんなさ〜い！

それについては今回のお題ネタからなんとなくわかると思いますが、意図しています。

今回のネタは簡単ですよねゝ、デネブキャンディーさん。

どうネタもないですし（笑）

と、全面的に今回は祝　ドラリーニョ帰還となっておりますが、なかなか不安な空気が出てきちゃいました。

まあ、ビック・ザ・ドラとの決着はまだまだなので本編はまだまだ続くのですけどね……。

フラグ回収も（爆）！

では、次回もお楽しみに！

第四十四話 普通の女の子に戻……れるわけがない！（前書き）

そもそも、ドラえもんズの普通はタヌキ……もとい猫型ロボットである。ビック・ザ・ドラによって擬人化女体化しているので（ここでの設定では）。

今回は視点がころころと変わります。わかりにくかったら、ごめんなね

……可愛くいってごまかすのは常套手段です（笑）。

第四十四話 普通の女の子に戻……れるわけがない！

時は遡り、学校で襲撃があったその夜 王ドラ特製の傷薬を塗り治療を終え、崩していた服を正していた時だった。

「いいですか、ドラメッド」

橙色の三つ編の乙女は目隠しと使用していた博多名物をずらし、ドラメッドに真摯に告げる。

「私の塗り薬やメッドの治癒魔法では表面の傷をふさぐのが精一杯です。ゆえに深い傷はこれから時間をかけてゆっくりと治るのを待つかありません」

骨折が完全に治るのに何年も掛かるように。

新品のパーツを付け替えることが出来ないたんぱく質の身体では致し方ない。

「わかっているでござる」

「そうですか？ それなら怪我をしてこないでくださいよ。一度傷ついてしまつては、完全に治るのに時間がかかりますし、なにより脆くなつてしまうのですよ。同じ攻撃を受けてしまつたら傷がある分、そこから裂けて肉体への損傷がひどくなる一方なのですから」

気をつけてくださいよと強い口調ではあったが、翡翠の瞳は心配そうにドラメッドを見ていた。

それはメッドがいくら逆境に立たされても……涙を零すのはいつも友のためだから。

自分のための涙を流すことの少ない大人。

その優しさが、メッドの心と身体がどんなに傷ついているのか、判断を鈍らせる。今日の傷だつて骨を折らない、致命的な傷を避けて

はいるものの、全治二週間はらくらくこえている。

「まったく無茶をして……困った人ですね」

「それはお互い様でござらぬか、王ドラ」

クスクスとほんわかとした笑みでそう答えられてしまったら、腹黒優等生とて頷くしかない。

（ドラメッド、あなたのいう人は……どうしてここまで気遣えるのですか……）

哀しいぐらいに……。

その優しさに、自分以外の大切な人も傷ついてしまいかもしれないというのに……。

「……無茶、しないでくださいよ」

王ドラはかすれそうな声で念押しするしかなかった。

そして、現在 暖かい……。

お子様体温のドラリーニョが抱きついて離さない。ずっとずっと抑えつけられていた大切な気持ちが溢れている。とくんとくんと鳴る心臓音を聞きながら、すりすりと頬摺り、もう記憶から消えてしまわないようにと友のドラメッドに必死にくっつき、足りなかった何かを充電しようとしている。

「ドラリーニョ……」

いじらしくて。

微笑ましくて。

だから……この友に背中から噴出す大量の血を悟られるわけにはいかない。

どのタイミングで傷が開いたかは覚えていない。治りきっていない
たくさんのドラメツドの身体の怪我が付録などのミシン線のように
切りやすくなっていたため、一撃であっさりと彼女の背を切り裂い
てしまったのだ。

はつきりいつて痛い、苦しい。

いつ意識を失うか、問題である。

だが、この傷は今のドラリーニヨでは癒せない。なんとなく、だが、
わかる。どういう仕掛けが仕込まれたのかわからないが、たしかに
メツドには予測できた。

この傷を見せてしまったら……またドラリーニヨは遠くに行つてし
まうことを。

そしてそのときは……己も……。

「リーニヨ、我輩の願いをきいてくれないでござるか？」

精一杯の笑顔で、友に、託す。

ドラリーニヨに仕込んでいた影との通信が途絶えた。
嫌な予感はない。ここまで計算どおりなのだから。

「……やはり、こうなりましたか」

紅孩児は暗い地下道の中、感じ取っていた。友情という、なにやら不快を感じなければならぬことによつて、大事な駒が乗っ取られてしまったことに。

「まあ、取られたら、取り返せばいいだけのことです。ナポギストラー一世様、いいですか」

「……ドラリーニヨ、がな……」

無邪気な笑顔でネジリン隊長といった部下をすぐ復活させるからといって嬉々として壊していったあの子が……。

衝撃だった。

あらかじめこういう運命になるとわかっていないものにとつて見れば普通はそうだ。

しかし、ナポギストラーにはまったく考えられないような、心底残念そうに、そして哀しそうに呟いてしまった。

発した本人も驚いた。

（声が似ているとはいえ……重ねていたのか……？）

つぶらな瞳のあの子と。笑い声がよく似ていて……ついつい部下たちを好きにさせてしまった。

あの子の声を聞きたくて。

あの子に……また会えたような気がして。

感慨深まる紫豆電球を冷ややかに見る紅孩児。

「あの、ナポギストラー一世様、わかつていることと御思いですが……壊れてしまったものは取り戻せないのですからね」

冷たく、響く妖怪の声。

「紅孩児殿……どこまで知っている!」

ナポギストラー一世は苦虫を噛み潰したような顔をする。

わかつている、あの子は戻って来ないことを。

それに自分と違い邪悪な存在でもなく、死を受けたのだ、あの子は大切な存在を守れたことに。

大切な存在の腕の中で復元不可能になつて。

潔く、残されたものにとつて残酷だが……。

「全て、ですかね。あなた様の過去を詮索するようなまねは悪いとは思いますが、私たちも素性の知れないものを客将とはいえ迎え入れるわけがありませんから」

「ふん。気に食わんが、当然だな。わしがそつち側のほうにたつていたら間違はなく賛同しているところだ。わかつているなら不愉快な気分になつているのも予測できただろ。これぐらいの不快感を顕にするぐらい多めに見て欲しいものだな」

……本当に……どんな形でもよかった、もう一度あの子に会いたかった。

でも会えない。

だから声が似ていたドラリーニョにあの子の影を知らず知らずに求めてしまったのかもしれない……。

「はい。プライバシーに関わることを告げてしまった私がいけませんから、申し訳ございませんでした」

謝罪をしてくるが、いけ好かない妖怪。弱い感情を見透かされてしまつて、いい顔をする者はいない。

「それで、ですが……ナポギストラー一世様にお願ひがあります。

ノアの鍵のほうの探索に向かってくれませんか？」

「ふん。どうしてだ。捕縛なら、我々二人で行ったほうが現実ではないのか」

「それもそうなのですが……失礼ですが……今のあなた様では彼女の悲鳴に耐えられないと思っっているからです」

「本当に失礼だな、貴様は……」

怒りをぶつける相手は違うのも理解しているし、この妖怪の言っていることは正しいから。

正直、あの子と同じ声の悲鳴は聞きたくない。

ただ慟哭を指摘されてしまったので、元皇帝としてのプライドに傷がついただけ。

見た目が子供ゆえに余計に腹ただしい。

「まあいい。紅孩児殿ならうまくやれるのであろう」

心の奥底ではほっとしているくせに。

こういう厭味のようにしか言葉を発せられなくなった己に少し嫌悪しつつ、ナポギストラー一世は向きを変えた。

「では鍵のことはお任せましたよ、ナポギストラー一世様」

口をいやらしくゆがめさせ、妖怪は闇に溶け込むように奥へと進んでいく。

……確かにこうなることは予測していた。ドラリーニョの洗脳がとけるが、ドラマッドが大怪我を負ってしまうこと。

ぼろぼろの二人なら、妖怪である紅孩児が負けることはないのだが

……気になるところは、タイミングが速いのだ。

微妙に。

僅かなのに……胸騒ぎがする。

「この誤差に何か意味があるの、でしょうかね……」

紅孩児は足を速めた。

一方こちらはドラパンが決死の覚悟で手にしたデータを見ながらノア計画を引き起こす機材が並んでいると場所へと着々と進むドラニコフ一行。

ただいま、天上世界の商店街と思われる場所の監視カメラの死角を巧妙につき、進んでいた。

「地下道から出てこられたのはいいが、まだまだ気をゆるますことはできないのだな」

「……うん、その通りだよ、ティオ。敵の戦力はほとんど地下道に向かっているけど……」

まだ僕たちは見つかるわけにはいかない。

それに、まさか僕がこんなにはやく回復しているとは思っていませんし……。

メイド服の美少女は慎重に、慎重にルートを確認しながら目的地に一步一步近づいていく。

「わかっています。それにしても……私、正直驚きましたよ、ドラニコフ様の回復力」

同じロボットだからわかるウィルスの脅威。

「……僕は君が有効なソフトを用意していたことに驚いているよ」

ドラニコフがウィルスの熱で倒れたとき、咄嗟にタップは彼自身に備え付けられているプラグ装置をナポギストラー一世がつけていたイメコンを同じ箇所張り、ワクチンをインストールしていたのだ。

「それについてはガリオン様に感謝してください。ガリオン様、今はイメコンによって操られていたロボットたちの修復をお手がけになられているので、ナポギストラーの作ったものについての対処方は一日の長がおありになります」

誇らしげに創造主を褒め称えているタップ。

「でも、最後のほうはタップが直接コンソールにプログラムを叩き込んでいたように見えていたけど……」

魔法社会にもパソコン（動力は魔力だけだね）が存在しているのでなんとなくはあるが美夜子にもわかる。

「あゝ、それですか。新種だったので消しきれなかったところをちよっと。私もガリオン様のお手伝いをしていることもありますからある程度の知識はありますよ。それに私の抗体プログラムは結構すごいらしくてナポギストラーのウィルスを受け付けられないのですよ」
「どうやら、最後はタップの抗体プログラムを入れてもらっていたらしい。」

ドラニコフの電子頭脳も彼の抗体プログラムの素晴らしさに歓喜し

ているほどだ。

「チャモチャ星か……」

ガリオン・ブリーキン侯爵のことは知っている。ハードおよびソフトの両面に優れた科学者で、後の世にはチャモチャ星の五大科学者の一人として名を残す人物である。

息子サピオについては科学者ではないが、彼の功績を知らない者はいない。

そして彼を守るブリキのロボットたちもまた有名であるのだが……。

（タップ、というブリキロボットについてのデータはない……）

彼の忠誠心や、能力を考慮するとサピオの護衛ロボットとして名を残さなかったのは不思議でならない。

（それとも、僕……覚えていないだけかな？）

ニコフはそれでもなくとも戦闘と演劇以外のデータはまるつきし興味が無い。

地球と敵対したことが無い、平和なチャモチャ星のことなんか頭の片隅に僅かにあったぐらいだ。テストに出てこなかった項目をいちいち覚えているわけもないって……また、テストかよ！

（……綺麗な世界だったんだな……）

アイスグリーンの瞳に映る、天上世界。

こここのエリアはノア計画用の装置があるのでリーニョとエルに破壊されていなかったので美しい景観が残っていた。

太陽の光と風によって全てのエネルギーをまかなえる科学力を持つ、この地球では最高峰の世界。

狼の耳に靡く涼しく、爽やかな風の音は心地よい。緊迫な場面にも関わらずこの地に散りばめられた花々は優しく迎えているようだった。

あの時と変わらず。

己が後に……炎と氷でめちやくちやにになってしまう世界なのに。

「…………ごめん、ね…………」

ニコフ以外に今、この言葉を震えるように呟いた意味を知る者はいない。

その先の未来の天上世界。

ドラニコフが言っていた台詞の意味が体験的に理解できる姿なき二人の乙女　業火が吹き上げるこの大地で、全速力で逃げていた。

「どわああああ、何が大丈夫だ、ぜんぜん目くらましもならなかったじゃねえか！」

「私も予想外ですよ。もう、あの飛空艇は何ですか、ほんの数秒しかもたないなんて…………！」

それほど現役殺戮兵器が恐ろしいなんて。

「と、それにしても私たち……何話ぐらい出てきていないのでしょうか……」

遠い目。

アニメでもメタな発言（おかしなお菓子なオカシナナ参照）をしていた王ドラさん。

「**気にするな、気にしたら負けだ**」

しかも今回もちよいつと出ただけになるのではないか。

「そうですね。しかもまたプロットの出番が先延ばしされますよ、私たち……」

顔見せ程度でごめんなさい。

彼女たちはドラえもんたちとは違い、ドラえもんの現時点いる地点を基準とすると、時間軸的に未来の世界で頑張っています。

そしてエルと王のことも忘れないでください。

「うわ、なんか不吉な文章が！」

「……キャラが多いとこういうことになりやすいのですね……」
 なんだか語尾に哀愁と悲壮感が漂ってきた。納得するとはまた違う、
 ということだろう。

出番に関しては人一倍気にしていたからね、王ドラ。

そして、危機的狀況も変わらない。

エル・マタドーラと王ドラは雑談しながらも、瓦礫を飛び越え、廃墟をぶち破り、とにかくまっすぐ地平線の彼方にいくことしか逃れる方法が思いつかなかった。

「！うううううううううう」が

破壊者の牙、爪の彼から。

緋色に輝く狂気の瞳の狼は不審な物体に執拗に追いかけている。

「うわっ、まだこっちに来るぜ」

「といますか……明らかに私たちを狙っていますね。ハハハハハ

……ハウ」

すぐ近くで爆音と閃光。

すれすれに避けながら、ため息。

周りに溶け込み、姿を巧みに隠しているというのに、我々を見つけられる瞳ははつきり言って完敗としか言いようがない。

「しかし、まだ私たちは、会おうわけにはいきませんよ。ドラニコ
フ……」

天上世界歴史的崩壊まで あと二時間。

なんとしても、過去の、【冷烈の破壊者】という二つ名を世界に轟かせていたドラニコフからわが身を守れ、エルに王。たとえ巨大ツララが降り注いできても！

第四十四話 普通の女の子に戻……れるわけがない！（後書き）

パウル君（ワールドサッカーの勝敗を占っていた蛸、ドイツ在住）が普通の蛸にもどったことであやかった今回のお題。後書きで答え出してみました、デネブ・キャンディーさん。

まさか蛸ネタできたとは想像つかなかったでしょう……。大元ネタはキャン〇ーズ、ですけどね。あとは格ゲーの某ロボットを足しましたけどね。『なわけがない！』って否定的な。

次回はそろそろのび太（実質上主役）視点（予定）です。

キッドのほうを目立たせる気満々ですけどね。では、次回もお楽しみに、ね！

第四十五話 名探偵のヒロインは気高く、美しく、そして強くなければならない

雪子的には明智さんところの文代嬢にときめきを隠せなかった。彼女、敵なのに明智さんを庇うというシチュエーションがあつてそこで惹かれました。ネタばれしてしまうけれど……お家の騒動といえますか、祖父代の恨みでいろいろとあり、後に日のあたるところに戻ります。BY「魔術師」

その後、恩人の明智さんの助手（そして嫁）となつて登場したときには興奮しました。（なお、雪子は「魔術師」のほうを先に読んでいます。いや、少年探偵団読むよりさきに、題名で惹かれてソッチのほうを先に読んじゃったんですね）

小学校の文庫本で嵌った探偵物。江戸川乱歩シリーズっていいよね。

第四十五話 名探偵のヒロインは気高く、美しく、そして強くなければならない

ヒヤアハハハアハハハハハハハアッハアアアア！

妖怪金角の不気味で高慢な笑い声が耳によく響く。

口元から血が流れ震える身体を叱咤しながら掠れていく目でキッドは妖怪を睨みつけた。そう、彼女自身の闘志を失っていない。

泣き崩れるのび太に優しい言葉一つもいえないがさつで不器用な自分には、目の前の妖怪を倒すしかない。

（しかし、どうすればいい。俺の攻撃がきかないなんて）

何か、見落としているものはないか。

こいつは確かに妖怪だ。

一般常識に囚われていては倒せない敵だ。

（くそ……せめて俺の能力が使えれば……）

弱りきったこの身体ではリンクできなくなっている。

メモリーを身に着けてはいるものの自己防衛本能のほうが強く警告している状態では、無理な話なのだろう。

（いや、ないものねだりしてもだめだ。ここはよく考える。考えなければならぬ）

いい案が浮かばない。

このスーツに備え付けられている道具を利用すればあるいは……しかし、逃げる時間を稼げるとは到底思えない。

冷や汗がキッドの額に伝う。

「どらら〜！」

これは小さな、小さな抵抗だった。

小さな身体をいかし、気付かれないようにそっと回り込む。リーニョのチームメイトのミニドラは金角の背後からミニ空気砲を発射。

「なぬ！」

その一撃は金角の笑い声を止めさせた。

照準が甘かったため、頬をかすれる程度であったが、青い血が流れ落ち、あれだけ撃ったキッドの弾に平然としていた妖怪に焦りの色が見えた。

「！　そうか！」

小さな希望の光が今、大きな躍進へと変わる。

金髪を靡かせ、キッドは大きく迂回　その間に空気砲のエネルギーパックを素早く取替え、金角に向けて、再び砲弾を撃ち込んだ。

「ぐっ！」

横から打ち込んだ弾は金角に身体にめり込み、更なる悲鳴を与えた。

「当たり前判定つてやつか、金角さんよ！」

シューティングを始めとした、ゲームでお馴染みの弱点以外はダメージを受けない仕様である。

ケース1：黄色い悪魔に泣かされた。

ケース2：正面からの攻撃がまったくきかない3Dポリゴン野郎に腹を立てた。

ケース3：特定の方向（前が多いけど）からの攻撃を全て返され、カウンター攻撃をくらって、『ゲーム・オーバー』　そしてタイトル画面へ　

などなど苦い思いをした方も多いと思う。

金角はこのなかではケース2といったところであろう。

碧眼に光が差し、キッドの勝気な笑みが浮かんできた。

「ふん、わかったところでどうする。お前の体はもう限界だというのに！」

空気砲の反動でさえ、その華奢な身体では耐え切れないもの。

今更弱点がわかったところでなんになるというのだ。
恐れることなんか一つもなかった、そのはずなのに。」

「のび太……聞こえているか」

キッドの声にのび太の耳がすぐに反応する。

「返事はしなくていい。聞いてさえいればいい。たしかに金角のいうとおり、俺達ドラえもんズにはプロテクトをつけられている」

事実は変えられない。

だが。

「それは、傲慢だとか身勝手だとかそんな問題じゃねえ。確かに恐れられているには違いねえが……それなら、俺達だって同じ。強力な力であればあるほど使う俺達だって神経を尖らせないといけない。なる。生憎俺はな、絶対の正義やら、高尚な思想を持ってねえ。感情一つで行動しちゃうような単純な野郎だ。そんな奴に、世界をいじくられてみる。俺なんか、悪の魔王になりかねえ」

一時の感情で世界を動かしてしまったらどうなることやら。
破滅しか思い浮かべない。

「強大な力をふるうには、大きな責任がついてくる。その責任の一つに和解ってもんがなければ、そっちのほうがおかしいだろ。プロテクトをつけるのは和解に必要なただけに過ぎねえよ」

理を説くように。
そして。

「それに俺は納得している。そして、この場にいるんだ、のび太」

これ以上難しい話は出来ねえよ、と苦笑する。

人間に恨みがないと言い切れない。

だけど、人間を恨みきれからといったら、絶対にNOだ。
人間によって作られ、この世界の仲間として受け入れられ、受け入れたのだ。

「これだけは間違えないでくれ……今の俺は、操られていた俺を正気に戻し、俺達の友情を取り戻したお前を……のび太という俺達の友を、俺は守るためにいるってことを、な！」

キッドは宣言する。

同時にキッドのソウルのファイヤーが熱く、燃えたぎり、敵の妖怪を睨みつけ、完全にこの妖怪を倒すこと以外考えないように集中しだす。

「金角さんよ、あんたの見立ては確かにあっているぜ」

実際、体は失神寸前だ。

「だが、よ。俺は……ドラ・ザ・キッドっていう頑固者なんだよ！」
最後まで抗ってみせる。

「それが、どうした」

金角がその巨体から考えられないような素早さでキッドに向かってくる。

捕獲するように言われているが、無傷に、とまでは命令を受けていない。どうせ傷ついても治すだろうし、キッドの魂、心を折れさせないとビク・ザ・ドラの元に連れて行けない気がする。

それほどキッドの勝気な笑みが気になっていた。

闘志を失っていない彼女を絶望の渦に叩き込まない限り、この奇妙

な感覚を拭い去ることはできないと、妖怪は確信した。

だから全力で、力でねじ伏せなければならないと判断したのだ。

「おうおう。この俺に武力制圧が通じると思っているのか！」

勝利の女神が微笑みだす。

「これでもくらいない！」

ぴつちりとしたブレザーの隠しポケットから取り出されたのは、手錠。

そう、このスーツは見た目こそは何の変哲もない秘書が好んできそうなスーツなのだが、ドラパンから譲り受けたものになにも仕掛けがないわけではない。

王ドラ用に調整されてはいるものの、キッドでも十分にこのスーツを使いこなせる。なんとたつて本業が本業であるからだ。

ソウルと同じ色の赤いリボンで結んだ金髪が摩くと同時にキッドは器用に、迫り来る金角の足を目掛けて手錠を投げる。

「何だと！」

右足に輪が引つかかると、グルリと一回転　遠心力を利用し、右足についたそれはカチツと音を鳴らせ施錠する。

右足に気をとられていたら、左足のほうにもカチツといやな音がした　回転した拍子に左足に取り付いた手錠の輪が、ロックした音である。

「こ、こんなもの……」

粉碎しようと足に力を入れるがまったく反応がない。

それどころか妖気が吸い取られる気がするし、両足に繋がっているのだから……。

「うおっ！」

バランスを崩し、倒れこむ。

「いてて……」

右から絨毯に向かってダイブしたため、尖った右耳が擦りむいた。そんな小さな傷を気にしている場合ではない。

すかさず、彼の大きめの左わき腹を、黒いエナメル質のパンプスを履いた美人秘書の美脚が踏みつける。

「~~~~~!」

金角、悶絶。

「犯罪者を捕まえるのも俺の仕事のうちなんだな」

犯人を拘束する技術がなくてはならない。

普段はロープであるが手錠でもキッドにはうまくこの技術を応用できる。

「ジ・エンド、だ」

金角の横腹をさらに強い力で踏み押さえ、頭に空気砲を押し付ける。キッドはのび太の精神衛生のため己の背で撃ち貫くところが見えないように隠し、道具を発動させようとする。

（こいつも妖怪だと言うし、倒した瞬間消えるだろう）

黄色い空気の弾が金角の頭を吹き飛ばせば、今の危機的状況を打破できるとキッドはそのときは信じていた。だが、割れた窓ガラスから、突風が舞い込んでくる。

「何!」

突然のアクシデントに叫ぶ。キッドは金角を倒すチャンスを不意にするわけにはいかず、足にさらに力を入れ踏ん張った。

「ぐあああああああああ！」

金角の叫び声。

その声が高くなると共に風の勢いも高くなっていくような気がした。

「どらら〜、どら〜！」

「ミニドラ、ごめんよ〜！ がんばれ〜！」

のび太のほうは 未来の道具ミニサイズであるものの、それなりの性能を誇る秘密道具を持ってミニドラが懸命に突風から小学五年生を守っていた。

「くっ、なんだ、この風は……！」

自然に発生したものではない。

窓ガラスが完全に割れ、窓枠まで吹き飛んできた。さらに、カーテンもスタボロとなり、女の子らしいしずかちゃんの部屋が、舞い込んできた埃や落ち葉よって、大幅に改装されてしまった。もうここまできると災害後の一室だ。

バキッ、ベシヤ！

一際大きな音 屋根も吹き飛んだとき、風がおさまった。

「……」

これは故意だ。だが、誰がそんなことをする 敵！

「ハァー、ハハハハ。惜しかったわねえ、ドラ・ザ・キッド」

上空から声がした。

金角を抑えつつ 先の突風によって失神したらしいが油断することなく足で踏みつけている状態 碧眼が顔を上げると、そこには漢服姿の貴婦人がいた。

彼女は着丈の長い、裾の広がったゆったりした漢服を着こなして大

きな扇を片手にゆらゆらと宙に浮いている。頭髮を鬘巻きにし、筭を刺して固定。髪の上にはかんざしをしていた。つり上がった狐のような目尻には朱色のラインが引かれ、闇色の瞳を凶悪なほど美しく、妖しく魅せている。

だが、死人のように青白い肌と、見下したような傲慢な態度、何より邪悪な妖気によって見惚れることはなかった。

「まさか……羅刹女！」

「フッフ、ふさしぶりだねえ、悟空」

牛魔王の妻で強風を巻き起こす芭蕉扇を持っている妖怪である。牛魔王がのび太に倒されると同時に力を失い、マグマに落下し絶命したはずののだが……どうやらこの妖怪もまたビック・ザ・ドラによって蘇ってしまったのだろう。

「そっか、この風はお前の仕業だったのか！」

何度も苦しめられたので、忘れるわけもない芭蕉扇の強風。一振りするだけでもぶっ飛されたのは苦い記憶だ。

自慢の武器の力を思い出されたことに、少し機嫌がよさそうに羅刹女は冷ややかながらも唇を酷薄に歪ませながら話し出す。

「ご名答。まあ、金角と銀角のことだから詰め甘いことになっていると思っていたら、案の定だったねえ」

金髪碧眼美女に足蹴にされ失神した金角をみて、ため息一つ。

「まったく、人間に言いようにされるなんて妖怪の風上にも置けない奴だねえ。そう、思わないかい、キッドとやら」

「さあな。お前たちの流儀なんか、俺が知ったことか」

「ああ、つれないねえ。もう少し愛想をよくしたほうが身のためだ

と思うよ。せつかくの美貌も台無しだしねえ」

人妻の妖艶な色っぽさを持っている妖怪にそこまで言われると癪である。

「うっせ、俺はこんな身体でいたいわけじゃねえし！」

この身体はビク・ザ・ドラによって変えられたものである。本人の希望ではない。

「それでもないがしろにするのはいささか美への冒瀆というもの。それに品のない言葉遣い……世の青少年の夢を壊していいものさねえ？」

「ぐぬぬぬ〜！」

……女に口げんかしても敵うわけがない。
単純王キッド、完敗である。

「それに、これからビク・ザ・ドラ殿の寵愛を受けることとなる身ではねえ」

含み笑い。

この女妖怪は自分が勝利することを確認している。
なぜ、そこまで自信たっぷり。

バサバサバサ。

羅刹女の側に無数の影が見えた。

蝙蝠妖怪たちである。まさか奴らに絶対の信頼でもあるのか？

いやそれはない。

戦隊モノで言うところの戦闘員、脇役の皆さんだ。無名の劇団員がアルバイトでするような役である。もしくはスタントマンの新人さんがするような仕事である。

こんな奴らを名の知れた妖怪が頼るわけがない。

（では、なぜだ……。何処からそんな自信が……。）
キッドの体を蝕んでいる苦痛だとしても決定的、とはいえないのは
ここで気絶している金角がいい例である。

「ハハハハハ、そろそろこんな無駄な抵抗はやめてもらおうかねえ。
ピク・ザ・ドラ殿が首を長くしてお待ちしているところだし」

勝ち誇り、魔王笑い。

スツと羅刹女が右に移動すると、男性陣（本来の性別を含む）は驚愕した。

案の定、女妖怪の後ろには蝙蝠妖怪はいた。

そこまでは予想通り。問題はない。だが、彼らの尖った爪がある手の掴んでいるのは何だ。

キャシャシャシャと不気味な笑いをしながらも、妖怪としては

丁寧に、見せ付けるように、彼女たちを抱えていた。

「そんな……しずかちゃんっ！」

「ド、ドラミイイイイイイイ！」

のび太とキッドの悲痛な叫び声。

その声に反応するのは妖怪のみで、その叫びを待っていましたといわんばかりに腹を叩いて笑っていた。

一方で二人の想いの人はずっとたりとしていてピクリとも動きはしない……。

「お前たち、声が大きすぎよ。ちつとは静かにおし！」

羅刹女の叱咤する声で蝙蝠妖怪たちの笑い声が一齐に終わった。

「おっと、そんなに睨まないで欲しいねえ。なあに、彼女たちは無事さ。ちょっと深く眠ってもらっているだけさ、あたしの妖気でね

え」

命には別状ないと太鼓判を押す。

「それとあたしを倒して無駄さ。あたしたち中国妖怪軍団の力は基本、あたしの夫がこの世にいるうちにはなくならないのでねえ」
牛魔王のことを指しているのだろう。

「……何が、狙いだ」

震える声で、キッドは言った。

「そりゃ、キッド、あんたさ。あんた一人こちら側に来てくれれば、すぐにでもこの二人を開放するさ」

「……嫌だといったら」

「決まっているだろう……すぐにでもあたしらは退散するのさ、この二人を連れてね。まだ人間を食っていないんでねえ、あたしらもそろそろ遅めの朝食をとってもいいとさえ思っているよ」

脅迫。

妖怪らしく若い女を人質にして。

「……」

屈するわけにはいかない。

「……」

「くそっ」

キッドは自分の胸につけていた黄色のメモリースティックを外し、のび太の元にいった。

「キッド……」

「どらら……」

のび太とミニドラが子犬のように震える瞳でキッドを見つめる

ツカツカとパンプスが無情な音を出して、キッドは無言でのび太の手に、黄色、黄緑、緑のメモリースティックと空気砲を手渡した。

「キッド、まさか！」

「どら、どららあ！」

駄目だよ、とは言えなかった。

やめて、とも言えなかった。

碧眼の目がキツと睨んだ先には羅刹女がいる。

「羅刹女、これだけ言っておく。例えお前の妖気にあてられ眠らされたって、ビク・ザ・ドラによって俺が操られたって……のび太に手を出す奴は俺がぶったおす！」

約束、出来なくても　大事な空気砲を預けた男、認めた男の絆によつて燃え上がる魂の炎よ、天まで届け！

第四十五話 名探偵のヒロインは気高く、美しく、そして強くなければならない

羅刹女登場。これで劇場版の名ありの敵は全員でできましたかねゝ（名前のみも含む）。いやゝ、真面目に読み返していないので大体そんな感じのような気がします！（おいっ）

なお、『のび太と鉄人兵団』の敵キャラである、メカトピアの隊長ロボットなどは出てきません。理由としてはパラレル世界になったことによつて、『存在』が消えてしまったからです。

『パラレル西遊記』のほうは紅孩児が三蔵法師に引き取られたため、『存在』したという事実が出来たことにより魂が残っているのですよ。

そして、今回苦情覚悟でキッド、大ピンチです。

これについてはノア編冒頭（第二十四話 無理と諦めたら終わりである！）参照です。

では、これ以上はまだ言えないので……次回を待て！（BB戦士コミックス風に）

第四十六話　くっ、ガッツがたりないって……いわせないよ！（前書き）

随分古いネタがお題になってしまいました。あ、でも同人ゲームで元ネタと同じシステムが組まれているのもあるからわかる人にはわかるかも……。毎度のごとくマニアックな知識を求めていますね
（

今回の視点はドラリーニョがメインです。

今まで敵サイドだったので書いている雪子自身は新鮮な気持ちです。

第四十六話　くっ、ガッツがたりないって……いわせないよ！

僕は広いフィールドを、駆け巡り　　風になる、それだけで満足していたはずだ。

「どらら……どららら、どら」

地下水道の中で、一体の、ドラパンと共に天上世界に来ていたミニドラが、四体の同機の友達を説得し終えていた。

「どらら」

「どら」

「どららららら」

「らー！」

ここにはミニドラ用翻訳機がないので彼らの可愛らしい声をそのまま流しています。

けして手抜きなんかじゃないからね！

「どら、どらら、らら」

彼らはチームメイトのドラリーニョの洗脳が解けると共に、正気に戻ったようだ。うろんでいた瞳はさっぱりし、今は驚きの輝きをもっている。

これからどうするかを考え、彼らは決断を下した。

「くくくどら」「くくく」

そう、とにかく、大好きなドラリーニョのところへ向かおうと。小さな身体を小刻みにうごかしかけていく。

……できるだけ急いで。

そうじゃないと……手遅れになるから。

僕たちの動きで。もし、遅れてしまうなんてことになったら、友達の運命が、また……黒く塗りつぶされてしまう。

そんなの、いやだ。

絶対、ぜええええたい、間に合ってみせるから！
だって、僕たちもまたドラリーニヨの友達だから！

どのくらい時間がたっただろうか。

ドラメッド三世は血を失い続けて、途中気を失いそうになっても…
…それでもこの無邪気な友に己が足かせにならないために、今度こそ彼自身が信じる最良の道を進ませたくって、メッド自身が知っていることをできるだけ話した。

ドラパンから聞いた親友テレカの能力と、自分たちが狙われている真の理由……そして、これから予測されている未来。

丁寧な、何度も。

ドラリーニヨがわかるように。

聞き始めは、なんでこんなことを話すのかって顔で、リーニヨは不安そうに悲しそうに顔を曇らせていた。

珍しい、ことだった。

きっと、明日は雨が降るのではないか……と誤ってしまっぐらいにこのままいけば……確かに雨が降る。世界の、人間たちの文明と文化をきれいさっぱりと、残酷に洗い流す雨が。

そうなってしまったら、メッドはもう止められない。

メッド自体が……変わっているだろうから。

この身体ではあとは……信じるしかないのだから。

だから、話した。

終始、困惑気味だった金色の瞳に光が差したことを確認したとき、メッドの褐色の肌が震えた。

冷たくなって……まぶたが重くなり、ぐらぐらと天地も一緒に揺れ動いているような錯覚がしてきた。

（ああ、もう……限界であるか。我輩、たすきを無事受け渡せたであらうか……）

その結果は次、目を覚ますまではわからないけれど。我輩ができることはすべて……終わった……。

やさしいリーニョに残酷な選択をさせてしまうかもしれないことに心がちくりと痛む。

（後は天に運を任せるなんて言わないであるよ……）

そう、目の前にいる友だ、我輩が……。

「……リーニョ……」

紫水晶の瞳は、やさしく微笑み、眉をひそめ、すまなそうに、最後にこうささやいた。

「ドラリーニョ……あとは、まかせたである……」

信じるものは……。

ドサリッ。

ドラメッドの身体が力なく倒れこんだ。

「ドラ……メッド……」

金色の瞳に映るのは弱々しい呼吸しつつも暖かい手を自分につなげたままの友。

「メッド！」

二人を囲んでいた硝子の欠片も力をなくし、皆、シャラシャと音を立てて、地下水道のレンガの上に落ちてくる。

これがアトラクションの一種だったら目を奪われるほどの絶景だったかもしれない。が、事体は深刻である。

メッドの魔力が、意識が完全に失ったということが目にみえてわかる。

透明な欠片と同じ色の雫がまたリーニヨの瞳から零れ落ちる。

「うわぁ……あ……」

しんとした空間の中、リーニヨの嗚咽はやけに響いた。

「あああああ……ぐずびい、うあああああああ、ひゅ、うわぁああ、ああああ」

子どものような声を絞り出し、リーニヨは横たわったままのドラメッドの前で泣いた。

ユニフォームを崩し、髪を乱して、身も世も無く泣き乱れた。

「ごめんね、ごめんね……」

それでも鼻をすすりながら、今までのことと、これからのことと……友に前もって謝っておく。

「きつと、僕……メッドにひどいことしちゃう。だけど、僕、謝ることできないと思う」

勘、である。

リーニヨの胸の内には、ひどい不安感の様なものが渦を巻いていた。低い状況把握能力を補うように、常人より遥かに研ぎ澄まされた第六感が、しきりに警鐘を鳴らしている。

ここから確実に何かが起こる。確信に近いほど胸の奥がじわりじわりと危機感に圧迫される。

でも、運命は変えられない。

地獄の炎をまといし、黒翼の天使が近づいているのだから。それまでには……目をはらそうが、涙をなくさなければならぬ。

紅孩児は単身ドラメッドと洗脳が解けているリーニヨを相手取るため奥へ奥へと向かっていた。

恐ろしく、速く。

獲物を逃がさないようにじりじりと。

ボロボロの漆黒のケープは彼が素早く動くと同時にちぎれていく。

その布切れはまるで黒い羽。漆黒の羽は地下水道のレンガに舞い落ちていった。

「……」

フード越しで彼は口を少し歪ませる。

……己はビク・ザ・ドラの駒として役割を果たしている。

なのに、なぜだろう……さきほどからひっきりなしに胸騒ぎがする。タイミングが当初予定していたものよりも違うと。

しかもその違いを喜んでいる。

（……リンレイ、まさか……）

封じ込められた己の名前。

もう二度と表に出てくるわけのないはずなのに……。

郷愁の念が出てきてしまう。

おかしい、なんで……。それに目からこぼれてきそうなこれもなんだ。熱くなる目頭を抑え、紅孩児は崩れていく硝子の音を発する一角に飛び込んだ。

ブハッ。

音を立てて妖怪はリーニョの目の前に立っていた。

畏怖と恐怖を引き出すためにわざと彼は異形の姿を金色の瞳にさらす。

「紅孩児……」

ビク・ザ・ドラの片腕としてよみがえらせた人食い妖怪。

小学高学年ぐらいの体格ではあるが、彼はたしかにあの集団の中では最高クラス的能力を持っている。

顔のほとんどはフードによって隠されているので、リーニョ自身彼の素顔を知らないし、表情もわからない。ただ少年独特の高い声は不気味なほど落ちていた。

「澄んだ瞳……まことに残念です、ドラリーニョ様。あなた様にはあのよんだ瞳の方がお似合いましたのに……」

ぞくり、と肌が震えた。

「いやだ、いやだよ……、いやぁ!」

振り絞って出た言葉は自身でもあきれんぐらい稚拙なものだった。

「ささ、似合わない戯れはここまでにしましょう。ドラメッド様の体調も優れない様子。はやく『城』に戻りましょう。いやなことは一瞬です。あとはまた楽しくなりますよ」

大して彼は優雅な姿勢を崩さない。

精錬された言葉遣いでは、間違っていることを言っているのに、心地よく聞こえてしまつて……彼の主張が正しいと思つてしまう。

たしかに、この妖怪の言い分もわかる。

リーニヨ自身、記憶を歪曲され、精神を乗っ取られたことに関して

あの時、確かに、自分は幸福だった。気持ちよかった。

行きつく先さえ邪悪なものでなければあのまま酔っていたかったほど、気分は上々。高揚していた感覚だけがかすかに残っている。

だけど……求めるものとは違う。

「だめだよ、僕、決めたもの……僕は……」

氣と血を失つても友の手を握る暖かいものがなかったら、リーニヨは漆黒の天使に立ち向かう勇氣が奮い起こせなかったかもしれない。自分が壊しておいて。

自分がメッドをここまで傷つけたくせに。

それでも、ここで引くわけにはいかないのだ。

「僕たちドラえもんズは……悪い奴に味方しないもん。僕たちの友情を傷つけるものなんかに、屈しない！ 屈してなるものか！」
冷たくなるドラメッドを肩車し、俊足のストライカーは決断する。

立ち向かう、と。

勝率は……悲しくなるぐらい、0に近かろうと。

「困った方ですね」

邪悪に口を歪ませ、聞き手である右手に愛用の武器を召喚。

「聞き分けのない駄々っ子にはしつけをしなければなりませんよ」
禍々しいオーラを放つ錫状を構え、漆黒の炎の玉に自身を囲むように呼びつけた。

地獄の業火はけっこう離れているというのにリーニヨの肌をちりちりと熱で焦がしていく。

「それと、メッド様を背負って私と対峙しようとは……リーニヨ様、正気ですか？」

「……うん。僕は本気だよ」

この炎の威力と彼自身の格闘技術は確認済みだけど。

それでもリーニヨはドラメッドを背負うことを選んだ。

友の熱がなかったら、泣きわめく自分の心が完全に折れてしまいそうだから。

随分弱気だなと、自分でも思う。

仲間がいないのが辛くて、苦しくて……甘い誘惑に乘せられてしまいそうだった。

どうやらまだ頭の中にビク・ザ・ドラに植えつけられたいやなものが残っているのかもしれない。

それとも自身の力が友を救えないことに対する苛立ちが不安をより掻き立てているのか。

そう、今のドラメッドにドラリーニヨの癒しの力は通用しない。
なぜか……それはリミッターのせいである。

リーニヨに施された制御は三十分……三十分前の傷なら完全に治療できるようになっている。メッドの場合、度重なる戦闘によってできた傷が、裂けたことによって出来てしまったため、三十分ルールの適応外なのである。

傷が塞がらず、未だにどくどくと赤い液体を背から流す友を、一刻も早くタイム風呂敷かお医者さんカバンで治さなければならぬのであるが……。

四次元ポケットは空。

ぐったりして息を荒立てる友に自分は何も出来ない。

無力。

その現実は一ニヨの心をえぐる。

（メッドは言っていた……たしかに、ビック・ザ・ドラに下れば……メッドの背の傷を癒やせるだろうって……）

代償に自由を奪われる。

自分ひとりだけだったら、メッドと一緒にいたら……だめだ。

あんなこと、あつてはいけない。

細い脚が震える。リーニヨは奥歯を砕きそうな程に力を込めてかみ締めた。

（たとえ僕が嫌がっても、それでも紅孩児によって連れ戻されてしまいかもしれない）

圧倒的な力の差で。

サッカーボールを持っていないドラリーニヨ。

天上世界の科学力で作ったおどろおどろしい羽は、正氣に戻った瞬間仕えなくなってしまった。今は捨てて、どうかそのへんに転がしているぐらいだ。

攻撃、は考えられない。

逃げるしかないが……目の前の妖怪ははたして逃がしてくれるだろうか？

捕まってしまうのではないだろうか。

それについて聞いたとき、困った顔でドラマッドは答えをはぐらかした。

おそらく、メッドは……メッドを犠牲にすればリーニヨを逃がせるという未来があることを知っている。むしろ、それを望んでいるのかもしれない。だから気を失う瞬間、あんな顔をしていたのだ。

（悲しすぎるよ、メッド）

占い師をがっしりと自分の身体に密着させる。
背中の温かさを失わないために。
失おうとしないために。

（……でもね、メッド）

……まだ、そこまでは決まっていないうよ。
だから……。

「僕のこと、信じる仲間がいる限り、あきらめないもん」
祈るように吼える。
絆を、自ら断たないために。

「試合は、あきらめたら終わりだから！」
金色の瞳がさんと輝き、希望をつくろうと、うなる。

「……どららー！」「……」
その光を追い求めたのか。
どこからともなく、小さな、小さな丸いずんぐりむっくりとした物体が飛び出してきた。

五体のミニドラたちだ。

「み、みんな！」

「……どらった！」「……」

皆、目が澄んでいる。

「どら、どらら」

そして一体のミニドラがサッカーボールを取り出す。

それは珍しく、ミニサイズではなく通常サイズのものだった。

「これを、蹴っていいの……」

「どら」

。このために僕はドラパンとともに潜入調査していたのだから。

「未来を変える、ということなの……」

ミニドラ語検定一級保持者ドラリーニョ氏の理解力である。

短い会話だけど、もうこれで自分のすべきことはわかった。

飛び出してきたミニドラたちがリーニョを中心にふるフォーメーションを形成していることも。

ぞくぞくと歓喜に身体が震えた。今までの弱気がどこかの山奥にでも吹き飛んでしまった。

今こんなにも仲間がいるのだから。

一人じゃない。

その想いが、リーニョに大きな力をわき上がらせる。

「みんな、僕に力をかして！」

「……どらら！」「……」

これだけで十分だ。

あとは、勇気とタイミング！

高く、高く、跳んで……ミニドラたちもボールと一緒に……。

「ミiiiiiiiiiiiiドおおおーあ、シューシューユートおおおー！」

全力で蹴る。

「ふ、無駄ですよ」

対して、紅孩児は冷静だった。

「三昧神火！」

漆黒の地獄の業火の前では、ミニドラたちの力を借りていても彼を打ち破ることは不可能。

そう、ドラリーニョの勘が訴えている。

（だから、僕は……）

この地下水道でこの技を使ったわけは……この妖怪を倒すためではない！

「えっ！」

構えていた紅孩児を尻目に、リーニョたちは彼のすぐ横の地面に突進した。

下を覆っていたレンガを砕き、色とりどり、複数のポンプを蹴散らす。

あっという間に紅孩児の視界から消えた。

「うおおおおお」

そして誰も手をつけていなかったたのであろう最奥の地面を押してまいる。

この地で……ミニドラたちの力があつたからこそ選んだ……。

よくみるとミニドラたちの手にはモグラ手袋が装着されている。掘りながら、回転。土をかきだし、効率よく、素早く、地面を突き進

んでいく。

音なんか聞こえなかった。むしろ音が追いかけてくる奇妙な感覚がする。

これは音速を超え、地面を削る、『超音速突貫大脱出』なのである。

「ま、まさかこんな手を……うわっ！」

紅孩児はリーニヨの思惑に気がついたとき、すでに遅かった。

音の後にきた衝撃波が、黒翼の天使の羽をむしり取るように迫ってきたのだ。

「くっ……」

こういうとき小さなこの身体は不利である。

この衝撃をやり過ごすために、身体を縮め、おとなしく待っていないければならない。

無理矢理動いてもケープを羽織っていることもあり、吹き飛ばされるのがオチである。

土だらけのユニフォーム、肌にも泥土が付着してきた。けど止めない。

これが、紅孩児の目を欺き脱出する唯一のタイミングだったのだから。このチャンスをいかして、何としてもこの世界から出て行かなければならない。

行つてやる！

「もう、ちよつと、もうちよつとだからああ！」

下から光が見える。

それは細長かったが、力を込めていくとともに分厚く、拡大していく。

そして　突き破った視界の先には空。
青い空だった。

どうやらどんよりとした雲より高度が上だっただけらしい。

バアアゴオオオナアアアアオゴオオン！

けたたましい音がドラリーニヨの耳に入ってきたときには、突風によつて土垢が吹き飛ばされていた。

「やった……、やったよ、メッド！」

背中にいるメッドの温かい音を感じながら、リーニヨはやり遂げたことに感嘆の声を上げた。

さんさんと輝く太陽の光がまぶしく、リーニヨたちを包み込む。

まるでそれは、祝福を与えるかのように……。

母親が子供を撫でるような、くすぐたくもうれしくなるような、温かい感覚が冷たかった肌にやんわりと触れた。

第四十六話 くっ、ガッツがたりないって……いわせないよ！（後書き）

というわけでリーニョとメッドは天上世界からログアウトしました。

この撤退の意味するところとは。

そして、後何話続くのか？

……雪子もわかりません（爆）。

では、次回もよろしくお願いします

第四十七話 そんなことしたことが、と轟き叫ぶ（前書き）

はい、題名からわかった方もいらっしゃると思いますが、今回は未来番長ことドラえもんのターンです。そして微妙にスネ夫の声の人（2010年現在）のネタ。いやゝ、やつぱりかつこいいいですよゝ。ド〇ンの時もよかったけれど、今年は石田三成でますます……はふうゝ、ごちそうさまです。

叫び声がこんなにもかつこいい声優って貴重だと思えますマル（小学生の感想文のような台詞で）

第四十七話 そんなことしたことが、と轟き叫ぶ

異次元 中国の山林。

ここから出るには銀角を倒さなければならぬことを知ったドラえもんは長ランの学生服姿、通称番長スタイルに変身。彼女はジャイアンとミニドラを背後で守りつつ、再生中国妖怪（漫画版某カードゲームの黄色の人の妖怪デッキ仕様）と戦うことになっているのである。

「のび太君のところに帰るためにも……銀角、お前を倒してみせる」
「ふん、できるのか、そんな貧弱な身体で」

見たところ未来の秘密道具は差し向けられている日本傘のみ。

他に隠し持っているかもしれないが、ヒーローマシンのないのならば返事をただけで吸い込まれるということはないだろう。

「俺はこのときはずっと待っていたぜ……てめえにはコケにされたからな！」

銀角は大きく息を吸い込み、吐く。

「な！」

いやな予感がして未来番長は咄嗟に傘を広げた。この番傘に使われている赤紅葉柄の傘布にはヒラリマントと同じく磁気力を応用して弾丸や放射系ビームの攻撃を反射する性能があるのだが、跳ね返すことは出来なかった。

「なぜ……あつ！」

冷たいと、肌が感じる。

「どらら〜！」

体が小さいミニドラがそれにより足元から凍らされていく。どうやら銀角は凍てつく氷の息吹をドラえもんに向けて吹きかけてきたら

しい。

「ミニドラ！」

冷気は下へいく性質を持っていることと、ミニドラの自身の小さい体 内部温度がこの中（ドラえもん、ジャイアン、ミニドラ三名）で一番で低かったことによって最初の餌食になってしまったのだ。

（まさか……そうか、だから……ヒラリマントでは対応し切れなかったのか！）

ヒラリマントが発動するには直線的なものに対してだ。周辺に撒き散らすタイプ、風や雨に霧といった気象系を反射することは出来ない。

銀角のプレスは気象系に属するようだ。

「くっ、厄介だな……」

某最大氷系魔法とは違うとは。ドラゴンの吐き出した炎だって反射できたのに……悔しいが、魔法と妖術は別物だったということだ。認識不足が不幸を呼ぶ。

またはテキオー灯かあべこべクリームを事前に使っていればよかったのだ。ただ……銀角が冷気を吐き出す能力がプラスされているとは思わなかった。

……どちらにしろ、今となっては遅いけど。

「どうした。もうおしまいかな、ならば大人しく氷の美女にでもならないか？」

この妖怪はドラえもんズの捕獲用に強化されているのだろう。

幸い、日本傘によって直撃を避けたのがよかったのか、ポケットの部分までは凍らず、ミニドラはポケットの中からホッカイロを取り出し凍りついた脚に直接押し当てる。

「ちよっと、驚いたただだよ」

今の持ち物の中に上記の秘密道具がないことが悔やまれるが、仕方がない。

それに冷氣であるのならば、例えこの二つを持つてしても自身の周辺を氷で固められて動けなくなつてアウト。ならば凍えるというリスクを承知で、冷氣を感じているほうが周りに気をつけてられる分いいのかもしれない。

そう、今もっているこの武器ならば……そつちのほうが。
オニキスの目を見開き、覚悟をきめる。

「僕は大切な人を守るために戦うよ！」

【未来番長 ドラえもん 参戦】（ドドン！）
某スタイリッシュ戦国アクションゲームのデモムービーが終わつたがごとく、青い髪を雅結い（俗語）にした番長が朱色の日本傘を手に青鬼に立ち向かつていく。

「ふ、かつこつけたところで、この姿でどこまで動けるといふのか！」

再び息を吸い込み、冷氣を吐き出す。

「術つていうのは同じように繰り返しても意味がないよ、銀角！」
傘の柄につけられたスイッチをポチッと押す。瞬時に傘がガキガキと音を鳴らし、ドラえもんの身体さえも大きく包み込める広さへと変形する。対角線の部分を押したり引いたりするだけで即座に簡単に展開・収納ができる、ミウラ折りを応用したらしい 直径およそ二メートル、これによって彼女たちの姿を完全に覆い隠す。

しかもこの広くなつた傘の面は、山折りと谷折りの位置が固定していて破れ難いのが特徴。この程度の風では穴を空けることはまず出ない。

番傘の本来の弱点を補うかのように強化改造されているのは、さすがはドラパンプロデューズといったところであろう。

「この青ダヌキが！ 直撃をあくまでも避けるというのか、だが、周辺の冷氣まではどうしようもないぞ！」

ミニドラがこの状況を打開するような画期的な秘密道具がないことは明白。

もともとドラリーニヨのチームメイトなのだから、この子自身の主な活動拠点はブラジル。周りを熱くさせる道具は エキサイティング的な意味のほうはありそうだが、ヒーティング的な意味のほうはほとんどない。

「でも、僕にはちょっといい話があるからね」

ドラえもんの余裕ある声。

「そう、ミニドラの……この子の手にもつホツカイロはたまたま前の日にのび太くんのママさんから譲り受けたもの。ママさんはブラジル在住者のこの子たちがこえていたのを見たので、これをこすると暖かくなるわよって使い方も教えたよ」

以上、ちよつといい話。

「戦いに関係ねえええ!」

アホだ。

まったくの阿呆である。

……あほらしいが……。

銀角は注意がおろそかになっている。

静かに、すり足で向かってくる者の気配に気がつかない。

(もう少し……気付くなよ、銀角……)

ドラえもんは地面をするように移動していた。

そして、銀角との距離を詰め……左足で地面を蹴る。

右足はまっすぐ前に出し、あげすぎない　まるで清流のような動きだった。

そう、ドラえもんは防御に適した傘布部分をジャイアンとミニドラを守るように指示し、解体した中棒……いや、名刀電光丸を光らせる。

「もらった！」

右足で踏み込み、すぐに左足を引き寄せる。教科書に出てくるような完璧な体捌きである。

「な！」

キンッ。

刃物と刃物が火花を散らす。

咄嗟のことなのでどちらもこのときは刃が重なり合ってしまった。ギリギリと音がするのはどちらの歯ぎしりか。

（あ、危なかった……、やはりあなどれんな、青ダヌキ……）
銀角は寸でところでドラえもんの動きを、風をよめた。

辛苦をのまされた相手が道化を演じていてもけて油断はするなど表面上はどうあれ、心の奥につっこんでいたことが功を奏する。

「ほう、隠し武器か、化け物タヌキらしいな」

「タヌキじゃない、ネコ型だ！」

その猫型も今となっては何処吹く風の超絶美少女ではあるが、タヌキといわれたのなら、つつこまずにはいられない。

あのずんぐりとした鋼鉄の青いボディ。愛嬌はあるもののお世辞にもかっこいいという部類ではないが、それでもドラえもんはあの姿に、ネコ型だという誇りを持っている。あの身体であつたからこそ、ドラえもんズの一員となつて友情を育むことが出来たのだ。

タヌキ型ロボットを卑下しているわけではないけれど、タヌキだつて間違えられたら即座に訂正する理由なのである。

「それにタヌキ型だったら……一定距離を猛ダツシュすれば尻尾で空が飛べるし（Pパタをつかえば一面ずつと飛びっぱなし）、地蔵に化けて敵の攻撃を無効にする！」

「マ○オのタヌキスーツかよ！」

ジャイアン、傘に隠れつつ思わずつつこむ。

二十二世紀の科学力の真髄は、マニアやオタクたちがこんなことできたらかつこいいなゝ的な欲望によるところが多いらしい。そうでもない、ドラえもんがもっている見た目はファンシーor普通、中身は高性能の理由がつかない。

……それよりも、ジャイアンがこのタヌキスーツマ○オ（初出、マ○オ3：ファ○コン）を知っているほうが謎である。

「俺様にとってはそんなことどうでもいいのだが……な！」
「くっ」

踏み込みが甘かった、とドラえもんは唇を噛み、一端跳躍し、銀角から離れる。

銀角の武器は刺又。さすまた

リーチの関係上、刀と刺又ではどうしても刺又のほうが有利だ。そこで傘を立てることによって銀角からドラえもんの姿が見えない

ようにし、さらに彼の二つの目がそこに集中している間に駆け寄って刀のさびにするつもりだった。

悔しそうにドラえもんが見るので、銀角は気分をよくしいやらしく笑う。

「……賭けは、俺の勝ちか？」

「ただだよ。だって僕はあきらめないからね」
「ぱちんと指を鳴らす。」

ドラパンによって強化改造されている未来道具　傘に引き続きジヤイアンを守るように設定し、己は名刀電光丸をまっすぐ銀角に向ける。

「言っておくけど、僕は道具の使い方については自信があるからね」
取り出すまでは普段整理整頓をしていないから、あれでもないこれでもない慌ててしまっただけ。

ちゃんと取り出せたときはお役に立ちます、未来のネコ型ロボット。火の中、水の中、猛吹雪、などといった天災だって強力サポート。

「いくよ、名刀電光丸！」

ドラえもんの秘密道具を取り出すときのいつもの間延びした声とは裏腹に、鋭い気合を発し、再度跳躍。数々の名人の技をトレースし活用できる電光丸は、使用者に源義経の八艘跳びもできるのである。
「おのれ、ちょこまかと……」

不意打ちは失敗したが、まだこれからなのだ。
体力、気力が尽きるまで。

間合いに飛び込み、

「斬滅、するからね……銀かあああああくうううううう！」
ドラえもんの手の中で名刀電光丸の刃がすばやく回転した。

長く艶やかな青髪を翻し、長ランの裾はもちろんミニスカートまでまくり返して、刺又を向ける銀角にお手本のように突きを片手で、左手でうつ。

それによつて銀角のもつ刺又よりも長い距離をえた。

「なんだと！」

唸りを上げた刃の先端が、銃弾のごとく銀角の喉仏に突き刺さる。だが喉に激突する寸前で刺又が刃に迫ってくる。

「はっ」

真剣で真剣を受け止めたり、つば競い合つたりなんかしたら一発で刃がこぼれる。なまくら刀ならすぐ折れるのだ。なので、真剣同士の試合のときは相手の攻撃は流すか、かわすかのどちらかが基本。名人の動きを忠実に再現するドラえもんはすぐ左手で刀を引き寄せ、構える。

「やるじゃねえか……青ダヌキ」

妖怪の額から冷や汗が流れる。

刃が触れた喉からはうっすらと青い血が流れた。

その一連のスピードは銀角が思っていたよりも数倍はやい。それは銀角がイメージしている剣と異なっているためだ。 それ

「刀はね、斬るための道具だから！」

両手でバットのように持つていると思つていように見えるが、実際刀は左手で持ち、右手はそえるだけ。さらにいうならば、握りこぶし一つぶん開けている。

刀自身は日本独自のもので、中国妖怪である銀角たちの剣、こちらは剣の重さを利用して叩き割るスタイルがメインの武器とはスピードが段違いで違う。

そのぶん殺傷能力は使い主の技量となるが、達人の技を使いこなす名刀電光丸ならば、まず遅れはとらないだろう。さらに、ドラえもんの衣装には秘密がある。

「ふんっ、だからめえは……こんな長いものをきているってわけか」

翻る長ランは、影となって手元を隠す。

それによって刃がどこを向いているのかわからなくして、ギリギリまで次、どの手をうつのか銀角に悟らせないようにするためである。

相手の間合いを見定めながら一瞬のすきについて勝負をつける真剣の戦い。

敵を翻弄させる手を使わずに何とするか。

「ふふふ」。そういうことだよ」

おどけたように、陽気に応えるがドラえもんには越えられない問題がある。

その問題は、体力。

人間の身体であるドラえもと妖怪の銀角では、スタミナは鬼のほうが有利。

さらに冷氣によって、熱と体力が大幅に奪われ、ドラえもんの身体の動きは徐々に鈍くなっている。

（速く、決着をつけないと……）

内心はハラハラ。

ただど目の前の妖怪に切羽詰った危機感をもっている、恐怖していると悟らせるわけにはいかない。すきができてしまえば、この妖怪に骨の髄まで喰われてしまっただろうから。

「どうする、銀角。降参するか？ のび太君の元に戻る許可をとらないとここから出られないっていうし」

悠然と、機敏に、狡猾な青ダヌキを演じる。

「……」

一方、こちらは傘に守られているジャイアン。

マジックミラーと同様に向こうの様子を伺えるため、ドラえもと銀角の戦いも見ることができていた。

「白…… かつたな……」

鼻から赤いものがタラリと垂れ落ちる。

そう、ジャイアンは見ていたのだ。刀を片手にドラえもんが長ランの裾はもちろん腰を、尻を覆う短い布までまくり返したあの時、スカートの下に見え隠れする逆三角形の布切れが！

（すごい、ハイレグでした……）

…… ラッキースケベ事件は通常運営しておりましたと、さ。

第四十七話 そんなことしたことが、と轟き叫ぶ（後書き）

本作品の仕込み傘は、毒ガスなどを噴くタイプやマシンガンを撃つタイプではなく、アキバで四万八千円（三桁目四捨五入）で売っているタイプを採用しています。

そして超私事ですが、冬コミ受かりました。でもジャンルは東方（笑）。乙・ドラのうすい本も出すよ！ です。

二日目 木曜日 東地区 “ア” ブロック 43a サークル名：
ファンブル

こうして更新がまた遅くなってしまうのです……。妙子さんをはじめめとする読書者さま、申し訳ございませんでした。

では、次回、ドラえもんたちVS銀角（おそらく完結編（予定））をよろしく願います。

第四十八話 喧嘩は相手を殺す気で殴っているほうがむしろ常識ですよ

（前

遊びから発展していく喧嘩は僕たちの世界では喧嘩とは言わない。ただの戯れ付き（じゃれつき）である。そもそも喧嘩とは、言い争いや殴り合いをすること。手加減して出来るのはよほど人ができてないとできないというか、『指導』に近い気がしてくる。（僕たちの世界では）

手加減する気だったらそもそも喧嘩なんかしない。やらなければ、やられないから、しかたがなくするだけ。

不可抗力でなければ、もしくはそこに意義があるなら。といっても、たいした意義でなければ鼻で笑われるのがオチだけだね。

第四十八話 喧嘩は相手を殺す気で殴っているほうがむしろ常識ですよ

風を切り裂く派手な音が異次元の大地に鳴り響く。

「だあああああああああ！」

ドラえもんは刀を振り落とし、青鬼に迫りくる。

何度も、何回も。

スキを作るために、体が凍結する前に。

無数の、歪なかたちの銀色の三日月が銀角に襲い掛かってくる。

「くう」

猛攻。

この女の体からどうしてこんな重く、素早い太刀が生み出せるのか。太々・雁金・乳割り・腋毛・擦付け・一の胴・二の胴・三の胴・車先・両車……わきの下からへその下位までの区分を、突き刺そうと刃が果敢に、華麗に舞うようにせわしなく動く。

「このタヌキが！」

「僕はネコ型だ！」

横からではなく、面打ちを狙って縦に素早く下ろされた垂直からの一撃。急に攻撃の手を変えたというのに、銀角は受け止めた。その銀角の反応速度も驚くべきものであったが、弾くと思われた名刀電光丸の人工頭脳の思惑を裏切る形で銀角は刀をしなやかに掃う。

受け流すような所作にドラえもんの眉が驚くように動いたのは一瞬で、また、刀が妖怪の胴元に狙いを定めた一撃に、銀角は攻撃に転じた。刺又の突きは的確に番長の肩を狙う。

「やるね、銀角！」

その狭く定めた的をドラえもんは体を僅かに軽やかに捻って交わし、「僕は、のび太君のところに帰るから、負けない！ 負けられない

いんだあよおおお！」

銀角もその動きを最初から想定していたかのように、次の攻撃を繰り出す。

番長と妖怪の攻防は加速を増し、激しさが加わっていく。

苛烈に動き、攻撃を繰り出し続けなければ……ドラえもんは負ける。動きを止めたその瞬間、加速するこの時間の中では置いていかれてしまうだろう。それだけでなくとも銀角が吐き出した冷氣は、ドラえもんの身体を確実に、じわじわと捕らえてきている。何時まで動くこと出来るの。後30……25……。

この戦いは刺又の鋭利な光だけではなく、凍結によるリミットもドラえもんを追い込んでいるのだ。

焦りがドラえもんの精神を極限まで追い込む。

「くそつ、俺はただ見ているだけなのか……」

焦る未来番長の横顔に目をさらせなかった。食い入るように見つめながら、ジャイアンは何も出来ない……傘に守られているだけの自分が悔しくて齒軋りをしていた。

だからといって戦いの間に飛び込むわけにはいかない。どう考えても自分では足下にも及ばない……十中八九、自分は大怪我をするだけ。その姿を見せたら優しいドラえもんに余計な気苦労をさせてしまうだろう。早い話が真剣勝負の足手まといになるという、最悪なビジョンしか浮かんでこない。

「どらら……」

ホッカイロによって足下の氷を溶かしたミニドラが心配そうに、慰

めるように、ジャイアンの肩に飛び乗った。

「ムリムリ」

「U、U、U」

ポケットから取り出したのは小さな爆弾だった。（実物の詳しい描写は、劇場版の『ザ ドラえもんズ おかしなお菓子なオカシナナ?』で）

「まさか、これは……」

「U、N」

ミニドラのジェスチャーからすると、手元にはこれ一つしかないことがわかった。

そしてこれを使うタイミングは……。

「だあ ああ ああ ああ ああ ああ！」

銀角に向かい立つ位置を左にずらしてから歩み寄り、間合いに入るや左足前で刀に手を掛け、右足を相手に向けて踏み込むと同時に片手抜き打ちに相手の右頸部を斬りつける。

「なに……がつ！」

驚愕する妖怪を尻目にドラえもんは続いて、左、右足とさがって間合いを取り、ただちに中段に構え右足から踏み込んで妖怪のみぞおちを両手で突く。

ドビュッ。

青い、妖怪の血が刀に染み込んでいく。

「やったの……終わったの」

希望的観測を口にしつつ、突き刺したみぞおちにさらに力を加え、引き裂こうとする。

「くくくく……」

不気味な笑い声が不協和音を奏でる。

「銀、角……？」

「残念、だったな」

耳まで裂かれた醜悪な口から大きな牙が覗き見えると同時に、ドラえもんの華奢な身体が吹き飛んだ。

「うわあああああ！」

横腹が撃ち抜かれるかと思うぐらいの重い一撃によって、身体が山の傾斜にうちつけられる。黒い学ランは土埃まみれ。衝撃によって胃から逆流してくるものを抑えつつも、切れてしまった唇から鉄の匂いと味がした。

「どこから、そんな手が……あ……！」

オニキスの瞳は、異形の者をとらえる。

不気味な赤い蛇のような軟体動物が、鬼の腹を切り裂いて割って出ていた。うねうねと動きながらも統率された一定の範囲に留まっているところからして、銀角の意思があるのだろう。

「驚いたか」

「驚くよ……なんでまた、こんな不気味なものを飼っているのか」
ぬるぬるとした不気味な光沢がある赤蛇たち。それが束となって、ドラえもんの身体を押し上げ、傾斜に叩きつけたのだ。

「こいつは俺の奥の手なんでね」

ニユルリ、ニユルリと歓喜に満ちた踊りをしてくるものだから、余計にドラえもんを不快にさせる。

（……まいったな、無防備なときに、強烈な一撃を受けたものだから、体が痙攣を起している……）

しかも時間がたつにつれ、冷気によって本格的に動きが封じ込まれてきた。

これでは銀角と赤い蛇を引きちぎって、千切りにすることは不可能だ。

この絶望的な状況で奇跡の大逆転となると、どうすればいいのか……と皮肉にも奇跡の力を持つドラえもんが悩まなければならなかった。

くくく……。

苦悩しろ、絶望しろ。

解決できるはずだった事柄を、愚かな人間によって阻害されてしまったことをお前は悔やまなければならないのだから。

ハハハッハッハアアアアッアアアアハッハア！

闇が高笑いをする。

しかし、青髪の番長の危機を黙って見逃す、ガキ大将はいなかった。「さ・せ・る・かーっ！」それは完璧なフォームだった。

足を高く上げ、体のばねを最大限に利用した投球は銀角の顔を目掛けて吸い込まれるように飛びついていった。

「今更何をする……猪八戒、何！」

丸いような物体は銀角の顔にめり込むように頭突きしてきた。そうそれはミニドラだった。

「いて」

お星様が飛び散ると同時に、ミニドラの小さな脚は銀角の角にまたがり、体勢を整え、ポケットからすかさず道具を取り出した。

「どらら〜！」

タバスコースス二刀流。

ドラリーニヨの好みのドラ焼きの味付けがいつでも出来るようにと、ミニドラサッカーチームは全員所持しているのである。

この真っ赤に燃えるスパイスを青鬼の顔全体に振り掛け、塗りたくる。

「ぐあああああ！」

地味に痛い。

妖怪といえども、感覚は人間のそれと変わらなかったのだ。目、鼻、口の粘膜から、燃えるような熱さを感じながらうな垂れる。

「この、タヌキ、どもがああああ！」

タバスコによって目が見えない状態である銀角であるものの、怒髪天を衝く勢いで、ミニドラを掴もうとする。が、ちょこまかと高性能未来の小型ロボットは鬼の体に纏わりつくように動き、鋭い爪を持つ手と赤い蛇から逃れていく。

「どら、らった」

エキサイティングな熱さをたっぷり銀角に味合わせると、今度は銀角の肩から、力強く脚を蹴って、ドラえもんに向かって空高くジャンプ。

けたたましい音と爆風が鳴り響いた。

ジャイアンが投げたのはミニドラから託された爆弾だったのだ。それが火を噴き、不気味なわりにはデリケートな粘膜を破片が食い干切るように襲い掛かる。

「どらら〜！」

爆風の波によって吹き飛ばされたミニドラは、ズボツという擬音とともにドラえもんの胸にホールイン。

「うわっ」

マシユマロおっぱいによって衝撃はそれほどではないが、いきなり乳房に入ってくるのだから驚きと戸惑いの声が出てきてしまった。しかたがないだろう。

（えっ、暖かい……）

ホツカイロで凍結を溶いたのは伊達ではない。さらに動き回り、おまけの爆弾の熱によってミニドラは簡易あんかとなっていた。

それに爆風によって今まで縮こまっていた身体に、熱が浸透してくる。

脈が、血が、身体を平常に動かせるように変えていく。

「ありがとぅ、ミニドラ、ジャイアン……」

白い息を吐き、この最後のチャンスにすべてをかける。素早く、ドラえもんは右足から進み、左足前で刀に手を掛ける。刃が下になるように向け……。

「名刀おおおお、電光丸うううううう！」

右足で踏み込むと同時に右片手で右逆袈裟に斬り上げた。

「なあああああ！」

今までの剣さばきによる細かな傷に、赤い蛇が割って出てきて、仕舞いには爆風によって脆くなった銀角の身体を守っていた鎧は既に鎧としての役目を成していなかった。銀の刃が青い血を吸出し、噴出させる。

「まだまだああ！」

続いてドラえもんは両手で左袈裟に斬り下げ、返す刀で右胸を水平に斬り抜く。

オニキスの瞳の奥に赤い炎のような気合が宿り、燃え盛る。心の友がくれた機会を無駄にしないようにドラえもんは力を与えているのだ。

今の未来番長は想いと気迫が籠った大変いい目をしている。

この目を向けられたんじゃないや、な……。闇に濁りきれないじゃないかねえか……。

「ぐう……タヌ……いや、ドラえもん……」

左袈裟に斬り下げた刀を止める事なく瞬時に右胸を斬るという鮮やかな三段斬りに銀角は、肉塊となり、大気に飲み込まれ前に、舌を巻きながら呟く。

「俺の、完敗だな……」

銀角がドラえもんに固執していたのは、実力で負けたのではなく、騙されるかたちでヒーローマシンに吸い込まれてしまったからだ。それが悔しくて、情けなくて……ドラえもんを甚振ってしまいたい衝動に駆られていた。

ビック・ザ・ドラにドラえもんのことを任されたとき、実は心が躍っていた。

そして、今。

「くくく……やはり、妖怪はこうやられないと、逝けねえや……」
嬉しそうだつた。

「銀角……」

三步退きながら切っ先を下げたドラえもんはこのとき消え逝く銀角の表情を見つめた。
妖怪の口には似合わない穏やかな笑みを浮かばせていた。

「俺は……ゲームでの悪役だぜ……」

強い者に 仲間との連携で倒される。悪役としてこれ以上の幸福はないのだ。

そして、ビック・ザ・ドラの力が抜けていくと同時に、銀角は悪役として作られたものとは違う、彼自身の心が表れてきているようだった。

銀角は満足した顔でドラえもんにむけて言葉を紡ぐ。

「なあ、ドラえもん……この感覚を味あわせてやってくれや。悪人が正義の味方に敗れるのは、結構嬉しいものだから、な。そして……紅孩児様のことを、頼む。あの人だけは……今でもあんならの……」

「紅孩児……っ、それってまさか……」

「頼んだ、ぜ……」

好敵手に助言を贈るように呟くと、目を閉じた。次の瞬間銀角の身体が芥となり、異次元に掻き消されていく。

「……銀角」

ドラえもんは消えていった妖怪に切っ先を向けて残心を示し、横血振りを行う。

秘密道具名刀電光丸に大量に付着していた青い血であったが、霧と

なつて刀からすべて 風波とともに消え去っていった。

こうして銀角との戦いは終わった。

「やったな、ドラえもん」

ジャイアンが駆けつけてくる。

「ありがとう、ジャイアン。助かったよ」

一息つくのは、まだ早いけれど。

「どら」

胸元から出てくるミニドラに笑みを零しながら、ドラえもんはこの勝利をかみ締めた。

「さて、これからどうなるのかな」

銀角が持っていたビック・ザ・ドラのアイテム……お菓子の玩具コーナーにおいていそうなスロットマシンが転がっているのが見える。ガタビシと、持ち主が消えたのを確認し終わるとショート、爆発。同時に中国の山林がペンキで塗られた絵が崩れ落ちるように消えていき、ドラえもんたちを世界へと戻すゲートへ変わっていく。

「これで戻るようだな」

「そうだね、ジャイアン……」

「どらら」

仕込み番傘を元の形に戻しながらドラえもんはこの地に飲み込まれる前に別れてしまった、仲間たちのことを思う。
しずかちゃん、キッド、ドラミ……そして……。

「のび太君……無事でいて……」
オニキスの瞳に宿る朱はまだ消えられない。

第四十八話 喧嘩は相手を殺す気で殴っているほうがむしろ常識ですよ

というわけで、次回予告、しずかちゃんの家でいろいろと起こっちゃうよ！ ということでヨロシクお願いします〜

第三部、長！ 考えている雪子がびっくりだよ！ しかもテロップ的にまだまだ続くよ、ノア編。

このペースで行けば後何回費やす気が……。そして冬コミの原稿をどうする気なのだろうか。雪子の新刊は東方のコピー本にするってきめちゃったし、しかもR18で。あ、今回は漫画本がメインだから小説はおまけて感じなんで。既刊のドラズ本も何冊かもって行く予定。と、年末ドラズ系の予定は以上ですね。

という、宣伝はここまでにして……。場面しずかちゃんの家、クライマックス突入。どうなる、キッド、そしてのび太の決断は……。まったく出番がなかったあの子が意外な活躍？ をお楽しみに、ね

予定は変わることもあるのでご注意ください。ジャプの次回予告並みに。

第四十九話　こんな飛行石で大丈夫か　　ああ、問題ない（前書き）

冬コミも無事終了し、通常運転に戻ります。

題名はネットで話題になった流行語をアレンジ。

これを書いている最中、何度も感想ページに書かれまくって、思ったこと……それは……苦情覚悟（第四十五話『名探偵のヒロインは気高く、美しく、そして強くなければならない』の後書き参照）でピンチは演出したんだっああああ！

・
。
。
。
*
。
+
。
。
。
*
。
+
。
。
。
。
。
（
ノ
、
）

……とりあえず、海まで走ってきます。

第四十九話 こんな飛行石で大丈夫か ああ、問題ない

武器を待たず、無抵抗をアピールする金髪碧眼の美女が覚悟を決めて、羅刹女の所に足を一步一步と歩ませている下で ひたすら息を潜め、しずか宅の門の茂みに隠れている小学生＋ラジコンロボットのがいた。

消えてしまったはずのパラレル西遊記の中国妖怪たちが現れ、上空でしずかとドラミが捕らわれている状況に驚き、身体を震わせていた。

（どうしてこうなった！）

…… 本当はどうしてこんなことになってしまったのだろうか。
狐顔のいやみな小学生はこれまでのことを振り返ることにした。

空き地で巨大ツララを見た。

こんな奇想天外なことは未来の道具をもつドラえもん関係しかない。
後片付けもしていないところを考えると危機的状况に違いない。
で、しずかちゃんの家の方が光ったので駆け込んできた。

以上四行で回想できるスネ夫たちの行動である。

そして吹き飛んでしまった屋根から見えるしずかの部屋で展開されている、卑怯妖怪たちによる戦隊モノでよくある人質を盾にするシーン
を素で見て、正直ひきながらも、身を隠しているのだ。

（くっ…… 僕はなんて無力なのだろ……）

力もなければ勇氣もない。

悔しい、けど。小学五年生にこれ以上期待しては酷というものだろう。

「ピピ、スネ夫、ココは危ナイです」

ミクロスが木陰の隙間から見える空を見上げ、スネ夫に忠告する。

「そりゃ、妖怪がいるからね……」

「イエ、落下物のホウです。我々はソレに当たる可能性が80パーセントもアリマス」

たしかに、それは危なかった。目をこうもり妖怪たちから外して見上げれば、キラリと真上に光る七つの光。

大きいのが二つくっついていて、小さいのが五つ。

「相手に気ヅカレズに、家に入り込むシカ回避不可能と思ワレマス」

「結構難易度高いよ、それ」

「今ならダイジョウブデス。ホラ、妖怪たちはソチラノホウニ眼を向けていますから」

どうして、とか考える前にスネ夫はミクロスの言う通りに、出来るだけはやく、しずかの家のたまたま窓ガラスが開いていた応接間に入り込む。

ドガラガシャ、シャーン。

けたたましい音がした。

そして……。

「ま、まさか……」

スネ夫は落ちてきたものに驚愕する。

「空から、女の子が……」

某有名映画の主人公の台詞が思わず口から出てきてしまった。

スネ夫がミクロスの忠告を聞いていた、そのころののび太たちというと……。

金色のポニーテールを靡かせ、真紅のスーツには先ほどまでの乱闘により少し土埃がついているが、装着者の美貌を曇らせることはなかった。

踏みつけていた金角から足をずらし、美人助手は強く凛々しい瞳のまま。顔に浮かぶのは微笑みと、決意の色。

恐れ、なんかない。

怖がることも、ない。

勝気なキッドには例えこの状況だろうと絶望はない。

だから、はつらつとした言葉でキッドはバトンをのび太に渡したのだ。

「あとは任せたぜ、のび太」

眠らされ、こうもり妖怪たちに捕らわれてしまった、しずかちゃんとドラミを解放するために、一人、キッドはのび太に武器を渡し、無防備に、無抵抗で羅刹女のもとに一步、一步静かに歩んでいた。

人質交換。

羅刹女がキッドたちに要求してきたことを一言で表すならば、そうなる。

キッドはわが身を犠牲にして二人を助けようとしているのだ。

策がうまくいき、邪悪に耳まで裂けた口で嘲笑う妖怪たちではあるが、羅刹女は芭蕉扇で口元を隠しつつ、じつと様子を伺う。

「んぬ。孫悟空。ほんにお前さんは弱くなったのだな……」
のび太をそう評価していた。

羅刹女やパレル西遊記でドラえもんたちと戦った妖怪たちはみんなそろってそう思っているのだ。それは彼らが目にしてきた孫悟空は、女の影でびくびくしているものではなかったから。

お調子者ではあるが、先陣をきって妖怪たちと戦った孫悟空。

二人の三蔵法師を捕らえたときには、火焰山の猛火に囲まれた畏だらけの城に紅孩児の案内があつたからといつても、取り戻すために最強の妖怪に立ち向かったのだ。

その覇気が、この小学生からはまったく感じられない。

中国妖怪たちはひどく落胆した。

随分平和ボケをしたものと、羅刹女たちは冷やかに、見下ろす。

そんな妖怪たちの視線を知っていようとあえて、この子はのび太を守るために素早く移動する。

「どらら……」

そしてさらにミニドラは小さな身体でのび太の前に立つ。

彼を守るために。ビック・ザ・ドラの魔力を無効化し、ドラえもんの正気を保たせているのは、後ろにいる眼鏡の小学生なのだ。

「どら」

そう、僕のチームメイトが僕たちにも教えてくれた。

「ミニドラ……」

「どら」

のび太の考えていることはわかる。こんな小さな僕が立ち幅かっても無駄だとか、傷つくだけだと思っっているだろう。だけど、弾除けになるのなら、僕は……。

ミニドラもミニドラで自分の役割、そして願いのため……妖怪たちからのび太を守ろうとしていたのだ。

のび太は止めることはできなかった。

だって、そうだと……、このキッドの決意に水を差すことなんか、出来ないのだから……。

「キッド、ミニドラ……」

受け取った空気砲がずっしりとのび太の腕の中で押し掛かる。

涙がザザーとか鼻水ビョーンとかしている場合ではないのだ、マダ小（まるで駄目な小学生の略）！

あふれ出る涙を袖でふき取り、鼻水を器用に振り落とし、キッドから譲り受けた空気砲を手に装着する。そう、のび太は彼自身で己を守らなければならない。そして、ドラミやしずかが解放されたとき、眠らされ無防備な彼女たちをミニドラとともに妖怪たちの魔の手から防ぎきらなければならない。

（僕は……戦わなければならない）

のび太がピンチの時助けてくれる、親友の妹ドラミのためにも。のび太の射撃の腕を信じてくれた、友であるキッドのためにも。のび太を小さくても守ろうとする、可愛いミニドラのためにも。のび太が結婚したいと思っている、愛しい人しずかのためにも。

そして、自分自身のためにも。

決意を胸にキッドから渡されたメモリースティック三つを左手で握り締めながら、羅刹女を睨んだ。

「ほう」

芭蕉扇に隠してある口元がわずかにつりあがる。

いい目をしてきたと、好戦的な妖怪としての血が騒ぐ。

だが、まだ足りない。

足りるわけがない。

何か、決定的な何かが今の悟空に足りないのだ。

カツ。

部屋の奥でひっそりと置かれた金色の環が ミニドラたちが持つ

てきて使い道がないと思っていた誰にも気づかれずに わずかに

光った。

中国妖怪たちの卑劣な作戦に怒るかのように。

のび太が戦うことを決意したことに共鳴するかのように。

まだこの時代に残留している、未来のデパートで売り出していたゲームの世界を構築していた粒子が、竜の咆哮とともに集まっているのだ。

我が恩人であり、そして友との友情のため闘う者のために……今生に残されたわずかな力よ、魂よ……集まるのだ……。これは契約ではない……。

『願いだ』

丁度そのころ 重力に逆らうことなくスカイダイビングをしている、ドラリーニヨとドラメッド三世そしてミニドラ×5。そう、天上世界から落ちていく最中のことだった。リーニヨの猫耳がピクピクと何かを受信したのは。

「ん、君は？」

なんか、懐かしいような……。

「俺だよ、俺！」

「おれおれ詐欺？」

確かに懐かしい振込み詐欺である。

「ちげえ！ 俺……のこと忘れたのかよ、ドラリーニヨ、天邪鬼だよ！」

「あまの……、じゃつく……天邪鬼！ 元気だった！」
妖怪界にいる友達の声がしてきた。

「……まあ、元気だよ」

少し照れた、天邪鬼のぶつきらばうな声がリーニヨの耳に届く。

「どうしたの、妖怪の世界がまた悪くイヤつらに支配されちゃったの」

「それはこっちの台詞だ。リーニヨなんかついさっきまで悪いやつらに操られていたくせに」

「む。でも……まあ、そうだけど、ね……」

天邪鬼の言っていることは事実だ。

背負っているメッドを強く抱き寄せる。

友をここまで傷つけた自分。天上世界から逃げ出したのはいいけれど、まだメッドの背中の大怪我を治療する術は……ない。

「お、おい、ちょっと、勘違いするなよ！　べ、べつにお前のこと卑下しているわけじゃねえ。俺だって、お前の友達だから……心配していた、ただだ。正直お前が元に戻らなくなるじゃねえかと、ハラハラしていた」

声だけでも、あの天邪鬼が率直にリーニヨの無事を願っていたのがとれる。

「天邪鬼……」

金色の瞳からうつすら見えた涙が引っ込んだ。

「ただだよ、俺の声が届くってことは、正氣に戻ったってことだろう！　よかった。本当に……俺は、妖怪の国からずっとお前たちを見ていただけだったが……ようやく、力がかせる」

次の瞬間、リーニヨの中に何かが入り込み、はじけるような感覚がした。

「え、これは……あう……」

身体が軽くなり、温かくなる。

気持ちいい。

ドラリーニヨは夢つつつの心地よさとともに高揚する。

「龍神のじいさんみたいに大きな力ではねえが……俺を生き返らせることをまず願ったリーニヨ、お前だからこそ俺の力を上乘せすることが出来る」

天邪鬼は、これから控える妖怪たちやよみがえった悪人たちと戦うのならばこの力が必要となるだろうと、恩人であるドラリーニヨに力を貸す。

「おれだって、曲りなりとも、鬼だ。あの……羽と同じくらいの力なら……ある」

「はあう！」

ぞくぞくとした感覚が背中から首へと駆け抜ける。

同時に、ドラリーニヨの背に再びピクシーの羽根のような美しい羽根がついてきた。

「天邪鬼、もしかしてこれは……」

ビック・ザ・ドラの力にモノとは違い、朝日のような輝きを持つ羽根。

「ああ。癪だろうが、あの羽根を参考にした。あれと同じ力があると思っでいていいぜ。それと、あと伊豆の天城山の天邪鬼と、まだはいかねえけど、それなりの速さも付け足した」

「ううん、僕は気にしていない……ありがとう、天邪鬼！」
嬉しい。

僕にはたくさんの友達がいる……心配してくれる、友が。

「僕、頑張るから……天邪鬼、よく見てね」

「ああ。人間界をあんな狸にくれてやるなよ。なんたって、お前たちドラえもんズがいる限り……」

「世界を暗黒になんかせないから、ね」

君の瞳ではなく、笑顔は百万ボルト。

希望は、彼女たち自身が掴み取らなければならない。

「じゃあ、またな」

天邪鬼からの交信が途切れる。

羽根を得て、ドラリーニヨはますます精神が高まる。

「ところで……ミニドラ、僕と君たちは離れているようだけど、本当にそれでいいの？」

メッドを担いだまま羽根を広げ、着地体制をとろうとするドラリーニヨ。

「どらら、ら」

まったく問題ない。

五体のミニドラが各自自信満々のポーズまで決めた。

「みんながそういうなら……」

確かに離れているとはいえ、三メートルぐらいだ。

少し神経質すぎたかな、とドラリーニヨは思っ羽根を、メッドを包み込むように展開する。

「なんだって、すぐ……のび太のところに行くから」

今、秘密道具お医者さんかばんを持っていると思われるのは、のび太を守るために配置されているドラえもんズの誰かである可能性が高いのだ。のび太に襲い掛かるビク・ザ・ドラの手駒がいるだろうが、メッドを救うにはあえて敵陣につっこむ覚悟が必要となった。

「だけど……僕、戦うよ」

友を救うなら。

「メッドだって、のび太だって、守らないといけないからね！」

「……どららー！」「……」

掛け声とともに上空から見えた先には 半壊した家にあると思わ

れる、不気味な黒い豆粒。

「どら、らら、どら」

「え、そんな、無茶だよ！」

「どらら、どららら」

「……わかった。たしかに僕の今の身体は人間だから、任せたよ」
「どら」

ドラリーニョとミニドラが空中で考え付いた作戦についての詳細を知りたい方はミニドラ語検定に受かるか、この先もお読みください。

思えば……戦局はたびたび覆された。

金角の圧倒的な優位だった戦局だったはずだが、ミニドラの空気砲によって弱点が判明され、キッドの根性の空気砲の連射と隠し武器によって足をとられてしまう。

キッドの勝利目前に、横槍を入れてきたのは金角の上司という存在である羅刹女。悪女は洗面所にいたドラミとすずかを妖術によって眠らせ、こうもり妖怪たちに命じて拘束。

か弱い少女たち姿をキッドたちに見せ、ドラえもんズを生け捕る任務を遂行させようとした。

そして、今……。

「くくくくどらららら〜!」「くくく」

ミニドラたちがこうもり妖怪たちの頭に目掛けて落下してきた。

「なにつ!」

急な攻撃により羅刹女の動きがこの状況を冷静に対処しようとするので大きな隙が出来た。

「……、今だ!」

むしろ 今しか、ない。

このチャンスを逃したら、駄目だと、のび太は構えた空気砲を連発する。

ドカン、ドカ、ドカカン!

息をつく暇もなく、無言で、腕が痛くなろうが のび太は撃ち続けた。

第四十九話　こんな飛行石で大丈夫か　　ああ、問題ない（後書き）

作中で出てきた『伊豆の天城山の天邪鬼』とは、怪物で恐ろしい力持ちだったといわれています。あるとき自分の住処である天城山の上で遠く北の空をみていると、自分のいるところより高い富士山がみえました。癪にさわって、夜中に大きな鍬等をついで駿河に向き、富士のてっぺんを掘り削りつていたといえます。それ明け方まで繰り返し、天城へ帰り、日暮れにまた富士へきたけれど、何日もやったが富士山がなかなかひくくならなかったので、疲れてあきらめてしまった、そうなる。尚、この切り崩しで富士山の遠望がよくなったという……そんな話があります。

伊豆から富士山まで往復する脚力だけでも十分すごいですが、この天邪鬼は。

文章上には入れられなかったので、あえて後書きで。

話は変わりますが、冬コミで遊びに来てくれた方、ありがとうございます！

この場をお借りして御礼申し上げます　（ 〉 ・ ） b

そして……2011年も、乙女・ドラえもんズをよろしくお願い申し上げます。

第五十話　ぶよぶよするな！（前書き）

ドーマン、セーマン、すぐに呼びましょ、陰陽師いー イエーイイ！
という有名な空耳から今回のお題をチョイスしました。今回はもう
この珍しく短いお題ですべてを語れるような気がします。ダジャレ
的な意味で。

そしてついに50話突破（プロローグは含まれていません）です！
うわあーい、長あーい！　読んでくれている方に感謝、感謝です。

第五十話　ぶよぶよするな！

羅刹女は齒嚙みしていた。

「くっ、やつてくれるねえ。孫悟空」

空気砲によって撒き散らかされる土煙や爆発音よってこちらは視覚や聴覚を狂わされているというのに、のび太は正確に、精密に当ててくるのだ。

「ぎゃしゃ」

「がああ！」

連れ立ったこうもり妖怪たちが一斉に悲鳴を上げるのを聴くたびに、のた打ち回る光景が目には浮かぶ。

しかも、五体の小さな鉄球みたいなものに当たった者は完全に昏倒したのか、消滅したのかまったく気が読み取れない。忌々しい。

芭蕉扇でひとふりしようにも、空気砲の弾丸が羅刹女にも当たってくるので、ガードするので手いっぱいなのだ。それにこの土煙が晴れてしまつたらおそらく不利になるのは自分たちだ。手駒を減らされ、羅刹女がそれこそそのび太に攻撃したとしても、あの側に控えていたミニドラが身を挺して守るだろうし、目に見える武器はなくなるとあのキッドが本当に丸腰で前に突っ立っていると思えない。

おそらくこの混乱に乗じて、ドラミとしずかを取り戻そうとするだろう。

五体の鋼鉄が降ってきたとき、とつさに位置をずらしているのだが、この土煙が消えてしまつたらいま自分たちがどこにいるのかがばれてしまう。

それでは取り戻してくださいといっているようなものだ。

（くっ……ここは一時撤退しかあるまい）

ドラミとせずかにはビツク・ザ・ドラの息がかかっていないので、転送装置は使えず、彼女たちを天上世界に連れ去るには自力で運ばなければならぬ。

問題は空を自由に飛びまわって、追ってこないかということ。

（それならば、この芭蕉扇で片をつけよう）

宙にふよふよと浮かぶ中国妖怪は酷薄に唇を歪めた。

妖怪たちにむかって何かが降ってきたため場が混乱したので、好機と思い中国妖怪たちを撃ち貫いた。ほとんど急所に当たったと思うが……あれらは妖怪なのだ。命中しても無力化ができていたとは限らない。もしかしたら受け流しているのかもしれないし、金角みたいに前面ではダメージを受けないとか強化されているかもしれないけど、今ののび太に出来る最大限のことをした。

「はあ……はあ……」

腕が痺れ、息が荒くなったときには……空気砲のバッテリーが切れたのか、スカスカと音が鳴る。

熱気と煙によつてのび太のメガネのレンズは曇り、空気砲による反動で足はがくがくと震えるし、大粒の汗も流れた。

（ドラミちゃん、しずかちゃん……）

彼女たちの安否は。

眼鏡を外したらほとんど見えない、しかも3の数字となるのび太の目が必死になって煙の奥にいるはずの彼女たちを探そうと凝らすのだが、疲労した脚はすでにのび太を支えることが出来なく、膝をつかせる。

「くっ……」

「どろろ……」

ミニドラが小さな身体でがっしりとトレーナーの切れ端をひっぱり、何とか額が地面にダイブするという事態だけは防いだ。

「ミニドラ、ありがとう……」

「どらら」

どういたしまして。

のび太は一端身体を休むことにした。希望的観測をしてもこの身体ではドラミやしずかを救い出せる、とは思えない。

「キッド……」

そう、のび太は一人ではないのだ。

空気砲の弾幕によって中国妖怪たちとともに煙に撒かれた、友の機転にすべてを賭けることにした。

赤いスーツの美女は金髪のパニーテールが爆風で靡き、碧眼をぎらぎらと輝かせていた。

「ヒュ〜。派手にやってくれたぜ、のび太」

ニツと、形のよい唇をわずかに吊り上げる。キッドの目も例外なく土煙によって視界が悪くなっているのだが、その視界の悪さを補うぐらいの、実戦で培われてきた勘が西部の保安官にはある。

気配を殺し、人質のところに真っ直ぐ向かっていく。メモリースティックと愛用の空気砲がないキッドの武器といえば 勇気だ。

スーツの中に隠し持っていたタケコプターを頭につけ、警棒を握り締める。銃の腕前ほどではないが、この手の防衛機器を扱うのはお手の物なのである。

妖怪たちが約束を守るとは思っていない。

ただドラミとしずかが無事であるならば、キッドが一人犠牲になる

のは安いものだと思っただけ。妖術によって眠らされているとはいえ、術に詳しいドラメッドならいい案があると思うし、なにより牛魔王を倒せばこの妖怪たちの妖力はなくなるのだ。

牛魔王をいかに引つ張り出すかになるとそれはもう、武闘派の自分よりも知能派の友に任せたほうがいいに決まっている。だから、交換に応じようとしたのだ。

だが、情勢は変わった。

キッドの動体視力でわかったことだが　五体のミニドラが降ってきたのだ。しかも、金色の羽根を広げた、友とともに。

……キッドのこれはいわゆるカンピュータが囁いているのだ。彼女もまた、この場で、様子を伺っている。

（ドラミとずかのことは俺に任せろ……）

だから、お前は……。

空気砲によって出来た弾幕が晴れた

「お前たちは天上世界にお行き！」

「きゃしゃあ」

こうもり妖怪たちに命じ、妙齡の漢服姿の女性は大きな扇を振り落とした。

「芭蕉扇！」

先に仕掛けたのは逃げの手を打つ気でいた、羅刹女だった。

ポスンポスンとバッテリー切れの空気砲を牽制しているわけではないのだが　逃げている途中万が一でも、飛び道具が使われ、背後に下がらせ守りに守っていた人質を抱えているこうもり妖怪たちを撃ち落とされてしまったのならばたまったものではない。

殿を務めるために、妖艶な貴婦人は前に出て威嚇する。

「うわぁああ！」

芭蕉扇による凄まじい風はのび太に容赦なく降りかかってきた。それをいち早く察知したミニドラにより、眼鏡少年は守られ、事なきを得る。だが、これで、のび太の動きは舞い上がった砂埃によって完全に掌握。

のび太はここからしばらくは一步も動くことはないだろう。

そして次に羅刹女の目が向かうのはキッド。

タケコプターによって空を飛び、のび太とは反対方向にいたため、芭蕉扇による突風を受けなかった。

そしてキッドはこうもり妖怪たちの近くにまで警棒を持って突進してきている。

羅刹女の見込みによると　この距離ならば、芭蕉扇の有効射程距離。人質を抱えたこうもり妖怪たちを巻き込むこともまずない。

この場でキッドを捕まえられるかどうかは不明だが、人質がいるならば天上世界にこの美女は必ず乗り込んでくる。乗り込まないにしても今後のことを考えれば使えるカードが増えることにビツク・ザ・ドラは文句を言わないだろう。

意気揚々と高らかに緑色の扇を掲げ、羅刹女は宣告しようとした。

「芭蕉せ……」

一振りすれば、勝てるはずだった。

だが　芭蕉扇をこれ以上振り落とすことが出来ない。

扇の中に金色も丸い大きなエネルギー弾が入り込んで、風を、芭蕉扇の術発動の条件を遮断してきたのだ。

「何！」

一体誰がこんなことを。

朱で整えられた目を白黒させ、上擦った声で叫ぶ。邪魔が入ったこ

とに、ワケがわからないとヒスを起す。

青白く細い指先を動かし、扇の角度を少し変えれば、エネルギー弾はギョルルルと音を鳴らしながら真つ直ぐ発射した力の導くままに扇からは外れていった。が、この光の弾のせいで折角の絶好のタイミングを逃されてしまったことには変わりなく、羅刹女は怒りを隠しきれない。

「誰よ、われらの邪魔をするものは！」

敵意を顕にし、弾が放たれたと思われる方向を睨みつける。そして、ハッと宙に浮きながらも、竦む。

「僕、だよ」

黄緑色の髪を二つに分け、お団子ヘアにした、エースストライカー。どこから調達してきたのか、妖精のような金色のハネをはばたかせ、太陽のような笑みを浮かばせて羅刹女と対峙しているではないか。

「ドラ、リーニョ……この澄んだ瞳は……まさか！」

顔面蒼白、つり上がった細い目をこれ以上ないほど見開く。

あの、妖怪にとっては心地のいいすさんだ瞳と気配が少女から消え去っている。ビク・ザ・ドラの呪縛が解かれているのは一目瞭然だ。

「なんと浅はかなことを……」

悔しそくに、美しい作品が醜く塗り固められたものを見るかのように嘆く。

「浅はか？　僕はもう、ビク・ザ・ドラに操られたりしないから！　僕の、友達を守るから！」

気を引き締め、ドラリーニョはサッカーボール大の光の弾を出現させ、羅刹女にむかつて蹴り上げる。

「ちいっ」

小さく舌打ちをしながら、羅刹女はすぐさま応戦する。

気位の高い羅刹女はこれ以上、例えば予測不可能である事柄が続けざ

まに起ころつと醜態を曝すことを、よしとしなかったのだ。
意地と矜持。

この二つが混乱している頭を急激に冷却させる。

わが身が惜しいとは思わない。

牛魔王に、ビック・ザ・ドラがいるのだから己は例え消失してもよみがえることが出来る。

功を焦ったために失敗したわけでもない。

現に、眠り続ける術を不意打ちでくらわせ、しずかとドラミを捕えることは成功していたのだ。あとはキッドを手によれば、このまま足手まといを残して己は立ち去るつもりだったのだ。

それがうまくいかなかっただけ。

ドラミとしずかを連れ去るという逃げの手を打った今、これ以上の策などないといに言い聞かせ、羅刹女は手下に言い放つ。

「お前たち、その心の臓がやられている半病人にやられるんじゃないよ！」

こつもり妖怪たちに人質を任せ、羅刹女は気を取り直して、ドラリーニヨへと立ちはだかる。

「ドラリーニヨ……貴女の足を止めよう」

盤上で鉢合わせになった限り。お互いこの場でもっとも危険となる相手を牽制しつつ、死闘が繰り広げられようとしていた。

黄色い弾丸ではないか、と思われるぐらいの速さで真っ直ぐに彼女は駆け上がった。

「でえりゃあああああ！」

気合の声とともに警棒を片手に、瞬く間にこうもり妖怪をなぎ倒していく。

確かにキッドは心臓に爆弾を抱え、本来だったならば指先一つでも動かすこともままならない重病人のようなものだった。だが、手負いの獣と同じように、己の限界を超えて、守るべきものを守ろうとする精神力が今のキッドを支えている。

「ぎゃしゃ！」

「ていつ！」

こうもり妖怪たちの鋭い爪を身体の一部に打ち当たってきてても、臆することもなく、何倍にして警棒で殴り倒す。

ビク・ザ・ドラの力に反応して電流が流れる仕組みとなっているソレは、取り巻きぐらいなら一撃で倒せた。

（いい仕事してくれるじゃねえか、フランスの大怪盗さん！）

心の中でドラパンに感謝しつつ、キッドは追いつがる。一刻の猶予もない。肉を抉られ、骨が折れようと、驚異的な頑健さと強い意志をもって、妖怪たちを蹴散らし、消失させていく。

近づく邪魔するものをすべて己のファイヤーソウルで溶かし、突き進むその姿は、流星のようであった。

燃え尽きるまで　そう。

「俺はお前を守るって決めたんだ！」

黄色い流星は、ドラミとしずかを抱えている、こうもり妖怪たちにまで暴力の風に巻き込ませようと手を伸ばす。

「きゃしゃああやあ！」

「はあああああ！」

電流が、一線を描き、瞬時にドラミを抱きかかえていた妖怪の腕を痺れさせた。そのまま勢いよく上昇し　上空から警棒を、しずかを抱えていたこうもり妖怪の顔面に投げ捨て、怯ませる。

「もう一丁！」

タケコプターのスイッチを切り、重力に身を任せてキッドは落下。

そのすれ違い様に、右手でドラミのリボン、左手でしずかのパジャマの襟の部分を掴み、電流で痺れた妖怪たちから奪い取った。

「ざまあねえな！」

勝利の女神は微笑み、妖怪たちから重力に引つ張られながら離れていく。

（と、いつでも……ここからがちいつと問題だけどな）

キッドは理解していた。

親友テレカの力を使わずに、ドラミとしずかを救えたのはよかったが、もうこの身体は限界が近いということ。

キッドの意志の力に、反応速度に耐え切れるほどこの身体は強くはないのだ。

（ハハハ。だけど、なあ……）

ドラミとしずかを上に持ち上げる。

キッドは自分のボロボロの体をさらに酷使して、地面からの衝撃を吸収しようとしているのだ。

もちろん、無事ですむわけがない。

それでも守ると決めた女が無防備な状態で地に落ちるよりはずっとマシなのである。

（俺、一人犠牲なって二人を守れるならば、安いものだから、な）
俺にもしものがあってもなくんじゃねえよ……ドラミ。

キッドの祈るような思いが、眠り続ける二人の女性を残酷なくらいに優しく包み込む。

「ミクロス、急げ！」

「ハイ、スネ夫！ 距離、速度的に落下地点はココ、です！ 間違えアリマセン！」

甲高い声と旧ロボットによく使われた電子音がキッドの猫耳に聞こえてくる。

電子音にはまったく聞き覚えがないが、子供独特の高い声が聞いたことがある。

たしか……のび太の友達の声。

「……？」

今際のきわの幻聴か？

それでも、なんでそんなに面識のない子供の声がしてくるのだろうか。

それに。

ポフンッ。

落下するキッドの身体は固い地面でも、細かに突き刺さりそうな密集した葉と枝でもなく、ましてやしずかの部屋を粉々にしてしまった際に庭におちた瓦礫でもなく、なんとも弾力性のある柔らかい感覚によって受け止められているのではないか。

「これは……」

「よかったあー、間に合った」

スプリングがまだボヨンボヨンとキッドや妖気によって眠らされているドラミとしずかを揺らしているが、狐顔の少年は安堵していた。

誰かはこの空中戦で落ちて来るとは思っていた。

だから、スネ夫はミクロストともに無断で悪いとは思ってはいたけれど、リビングにある大きなソファを前もって庭に運んできていたのだ。

じつと様子を見ていて キッドたち三人が落ちてきた時は流石に焦ってが、ミクロスの電子頭脳をたよりに必死になってソファを落下予定地点に持ってきた。

「僕だって、役に立てたよな」

スネ夫は今まで見ていただけしか出来なかった悔しさによる、鬱憤が晴れたようにすがすがしい気分で……いつもの調子で偉そうに胸を反り返りながら言った。

第五十話　ぶよぶよするな！（後書き）

とりあえず、フラグを回収、回収です。

ちなみにドラメッドはしずかの家のリビングで安静にしています。

さてと、今年も雪子はいろいろと実験作をどこぞにアップして文章力、表現力のレベルアップに勤しんでいます。とりあえずペンネームは《雪子》か、それに近い何かなので、もし見かけたとしても温かい目で見守ってください。

では、いよいよ、しずか宅での戦い終着（予定）。

感想も随時募集中です。いつもネットにつないでいるとはかぎらないので返信が遅くなる可能性大ですけどね。

次回もよろしく願います

第五十一話 盤上で小宇宙を感じたら、何とかするしかない！！（前書き）

ヒルの暮風の言葉と、決める！キラメキシユート（ギャクマガ日）最終回のロゴで今回のお題が出来ました。

あいかわらず、お題はジャブネタが多いです。とはいいますが、どうしてそうなっているのかといいますと、小館ネタはぶっちゃけネタにしてもわかってもらえるかどうかを考えれば……きつい、の一言で終わってしまうからです。

早くいえば、個性的なものが少ないのでしょうか。
といいますか最近はスクニで活躍した漫画家の作品が目立っているような……。

金 番長が連載終了からまた内容が薄く、なりましたし。雪子
ただたんに濃いのが好きなだけなんですけどね。

では、まったく本編とは関係ない前書きはここまでにして、ネタバ
レ防止策のため前書きをここまで係わり合いのないものにした、第
51話の始まり始まりです〜！

第五十一話 盤上で小宇宙を感じたら、何とかするしかない！！

おかしい。

黒いフードつきのボロボロのケープを羽織った少年は、凄まじい加速をつけて地上へと落ちていた。

自分が いや、ビック・ザ・ドラの考えでは、本来ならば自分はメッドを連れて王座に向かうはずだったのだ。なのに、現状はどうだ。

追いかけるよう地上に向かっているとはいえ、メッドはリーニョの肩に背負われながらも紅孩児から逃げ果せた。

運命、が変わったとしても言うのか？。

（そんな都合のいいことがおきようとしているのですか？）

いや、そんなことがあるわけがない、そんなわけは……。

紅孩児の身体に打ち込まれた『ビック・ザ・ドラの影』が早々と否定してきたのだが、焦る色が見えてくる。

彼もまた、この事態は想定外なのであろう。

歯軋りに、カリカリと爪を噛む音が聞こえてくる。

（……ビック・ザ・ドラ）

忠実な手下として、黒翼の天使は優しく、諭すように言葉を紡ぎだす。

（運命は、オセロの白と黒の面のようになにが違って変わりますよですが、最後に勝てればその間の過程など些細なことではありませんか）

そうだ、最後に笑っていられば、どうともなるのだ。

（私は、あなたの駒であればいいのですから。あなたの思うように、私を動かしてください。私は、あなたの絶対的な味方となっているのですから）

地獄の業火を身に宿した妖怪として、この世に存在し続ける限り、紅孩児はビック・ザ・ドラを裏切ることはないのだ。

（さあ、ビック・ザ・ドラ。ご命令を）

決断が、下される。

くっ。

キッドにおめおめと人質を奪い取られた羅刹女は、口惜しくて仕方がなかった。

畜生、と思わなかった訳ではない。罵り、泣きわめきたいような衝動が無かったといえは嘘になる。気位の高い羅刹女はそのような醜態を曝さなかったが、作戦が失敗に終わったという事実に関心は冷や水を被った。

慟哭、している。

金角は倒れこんでいるままだし、こうも妖怪たちもまたほとんどのが消滅してしまった。

（こうなれば……）

牛魔王の妻としての誇りが、彼女を動かした。

「芭蕉扇」

「なんのっ！」

ドラリーニヨの金色のハネが即座に予測される突風に應對しようと、
防御の姿勢をとるが……。
ビュッ。

何かが高速で動いた音はするが、突風は吹かなかった。
いや、吹けなかったのだ。

芭蕉扇の持ち主である、羅刹女はそこにはいなかったのだから。
「うわっ！」

ブハッと大きな緑色の扇がリーニヨの視界を覆い隠す。
予想外のことでエースストライカーはあたふたと、顔に張り付くよ
うにへばりついた芭蕉扇を外そうとするのだが、慌てているため手
が滑ってうまく取れなかった。

リーニヨが芭蕉扇の新しい使い方に悪戦苦闘している様を尻目に、
羅刹女は急降下していた。
目標は。

「悟空うううううう！」
のび太、だった。

そう、彼女が選んだ選択肢は撤退ではなく、強襲だった。

ビック・ザ・ドラの駒を多くしようとしたのが間違えなのだ。

飛車や角を取らなくても王をとれば、ゲームは終わる。

芭蕉扇が無くて、あんな子供の細い首ぐらいならば、花を折るよ
うにたやすく妖怪である己は討ち取れるのだ。

「どららー！」

のび太を守るように前に出ているリーニヨのチームメイトであるミ

ニドラが果敢に、羅刹女に飛び掛る。

「どら」

「どらー！」

さらに、五体のミニドラ爆弾実行隊もまた、跳びつく。

「邪魔！」

が、彼女も金角、銀角の例に漏れず、強化された妖怪であつたのだ。羅刹女の手の甲から平べったい楕円形の物体を投げ出す。そしてそれらは、弾けた。

いや、爆発したのだ。

「どららっつ！」

ミニドラたちが、一斉にふき飛ばされる。

「われに気安く触れるではない、豆ダヌキどもが！」

しかも爆破のタイミングを計算しているのか、羅刹女にはまったくダメージは見られない。

ひらひらした漢服に焼け焦げた後も見られないところからも、短い時間　瞬きするぐらいの短い時間にもかかわらずに、綿密に火薬の調節ができていたようだ。彼女が凄腕の爆弾魔としての能力が備わっていることは明白である。

ミニドラたちの必死のディフェンスを爆散させ、羅刹女はのび太のところまで向かい、小学生の弱々しい体を、胸元をつかんだ。

「うわっ」

軽々と持ち上げられる、のび太。トレーナーが首に食い込んできて、息が苦しくなる。

「ら、羅刹女……どうして、いままで……」

爆弾魔としての能力を持っていたのにソレを引き出していなかったのか。

「……爆風によって、ちゃんと止めがさせているかわからぬからよ」
例え重傷であろうとも、命が止まっていなければ、お医者さんカバンでたちまち傷が治るのだ。
本当、秘密道具って便利だね

「だが、悟空、お前の頭を直に吹き飛ばせば……どうかな」
もちろん今のび太を抑えている羅刹女の右腕も犠牲になるが、そんなこと勝利の前では些細なこと。

隙について妖気で眠らせた人質を取り返させられるという失態を帳消しにするためならば、名誉を挽回するためならば、腕の一本や二本など、ゲームの妖怪にとって見れば安いものである。

「さよなら……孫悟空」

漆黒の爆弾がのび太の眼下に投げられる。

王手。

の、はずだった。

「なにっ！」

羅刹女が爆弾をのび太の額に投下する、その寸前にどこからともなく金色のディスクのような円盤に弾かれたのだ。

誰もいないところで虚しく、ドカンと音がする。

煙によって視界がやられ、すぐに邪魔をしたものが見えなかったが、ソレも見たとき、羅刹女の顔が青くなる。

「な、なにが……」

変な話だが、のび太は息苦しいので、生きていると思えた。

妖怪に胸倉をつかまれたままであるが、急に頭の奥から声がする。

老獺で、壮大な　だが、聞いたことのある声。

いつだったか　そうだ、この声は竜のもの。

「ふんっ、気づくのが遅いぞ。ノビタニヤン」

少し拗ねたように、竜の谷に住む竜の声だけがのび太の額を中心に響いてきた。

「ど、どうして、君が……」

のび太と夢幻三銃士ででてきた未来の世界のゲームの竜が、なぜここで。

「ワシは、ただお前たちの力になりたいという奇特な輩に呼ばれ、伝言を頼まれただけよ……それも、二十二世紀のゲームの敵に対抗

できるように、ゲームの力をお前に与えるために、な」

孫悟空の衣装である金の環にリンクさせて。

どんなスゴ技を使ったかわからないが竜は淡々と話を進めていく。

「ともかく、ワシがノビタニヤン、お前に出来るのはこれだけだ。

いいな」

「あの、話しの筋がよくわからない……」

「あっちの世界では、孫悟空か。とにかく、その力も使えるようになる」

抑揚もなく、竜は一方的に話す。

どうやら、気絶して保健室のベッドで眠らせていたあの時と同じで、時間に制限があるだろうか。

空気を読んだのび太はこの際黙って竜の話を聞くことにしたのだった。

「さらに自由の女神とやらも協定してな」

ぱっと思いつかべるのはしずかちゃんによく似た女神。洗脳されたキッドによって閉じ込められていたけれども、救い出し、そのお礼にとキッドの心を取り戻すアイテムに、最終的にはドラえもんズを復活させる手助けをしてくれたありがたい女神である。

「え、まさか、ドラえもんたちの力も使えるの!」

能力いただきリングを作ったのはドラえもんズの先生だけど、自由の女神はそのリングの力をトレースした力を与えたいらしい。

「友情で繋がれば、な」

そりゃそうだね……と妙に納得するのび太だった。

「ワシから言えるのはここまでだ。後は何とかするがいい」
本当に何とかするしかないけどね。

でも……。

「竜さん、ありがとう」

僕が、僕の足や手で立ち向かわなければならぬことなんて、当然であり必然なのだ。
力を貸してくれた、だけでありがたいのだ。

「僕も、僕の友情のために……頑張るから！」
大切なもの。

譲れない決意。

後は僕の思いを見ていてくれればいい。
眼鏡の奥の瞼が閉じられる。

そして改めてのび太の意識は目の前の敵の羅刹女に向けられた。

「なにっ！」

羅刹女の驚愕の顔　　どうやらのび太の頭の中に直接響いた竜との
会話はほとんど現実の時間は経っていないようだ。

（時が止まっていた、のかな）

どちらかという感覚を引き伸ばされたような気もする。

爆弾を弾き飛ばしたときに感じた額の違和感。冷たく、なんとなく
引き締まるようなこれはなんだろうか。

そして、今のび太の服が　身に着けていた黄色のいつものトレー
ナーでなく、紅いものへと変わっている。しかも前を左右に打ち合
わせ、帯を締めて止めるという、洋服では有り得ないものだった。

「この衣装、まさか……」

のび太の脳裏に思い浮かべるものは、昨日、ミンドラたちが押し入
れ探索をしていたときに発掘された、学芸会の衣装がしまったダン
ボール。

その時しまわれていた衣装の中に確かにこれと似たものがあつた。
さらにいつの間にか右手に握られているのは 如意棒。

左手にメモリースティックを持っていたことと、ついさっきまで右手にあつたのはキッドから渡された空気砲があつた バッテリー切れもあつてミニドラに手渡しておいていた ため、気がつくのは遅れたが、たしかにこの朱色の棒は、如意棒だ。

「と、いうことは額についているのは」

十中八九、金の環であろう。

そう、のび太は西遊記の孫悟空の衣装を一瞬で身に纏っていたのだ。

（変身、だな……）

羅刹女が驚くのも無理ないね。

僕だって、信じられないぐらいだし。

でも、折角竜さんが、自由の女神が分け与えてくれた力。

有効に使ってみせる。

のび太は咄嗟に判断して、右手に持った如意棒を羅刹女に向けた。

斜め、四十五度。

そしていう言葉は決まっている だって、僕は戦うって決めたのだから……。

「伸びろ、如意棒！」

のび太の言霊に反応して、長く、長く、それは天高く伸び始めた。

「あああああああつ！」

腹を突き刺す勢いで、ぐんぐんとそれは伸びていく。

突き破られなかったのは、ここは洞窟でも巢窟でもないから、天井がなかったことぐらいである。

だが、勢いよく押し出されてしまうのには変わりがなく、そのスピードと力に羅刹女は悲鳴を上げた。

「くっ、孫悟空……」

苦々しく顔を歪ませる。

空中よろけたさい、伸びる棒の的からうまく外れたことで如意棒よって薄い腹にこれ以上追撃されることはなくなった。

それでも予期していなかったため無防備の状態で反撃を受けたこともあってか、口から苦痛に満ちた声が漏れてくる。

完全に、不利だ。

だが、プライドが、冷静な判断の邪魔をする。

「おのれ、おのれ……っ！」

羅刹女は、怒りを顕にして、それでも引かない姿勢を見せるのだが……。

「お止めください」

錫杖がわってでてきたのだ。

ボロボロの黒いコートを羽織った少年。

やっと芭蕉扇が顔から剥がれ、状況を確認しようとしたドラリーニヨはもちろんのこと彼の实力はどういうものか知らないのび太さえ、竦んでしまった。

怖い。

本能から、今は彼と戦ってはいけないと警告のシグナルが鳴り響いてくる。

それだけでなくもいつの間にか気絶していた金角を片手で米俵のよう

に担いでいるのだ。

疲弊している、連携がうまく取れていない、この状態で新たな謎の人物を相手取る余裕なんか、なかった。

「らしくもない、ですよ。こんな状況で戦い続けていては美しく無いではありませんが」

諫める唇はゾツとするぐらい冷たく、そして鋭い。

「……、そうだな……」

羅刹女はさすがにここまで言われたら頭が一気に冷えた。

ここはいったん退いたほうがいいだろうと考えに思い至ったようだ。

「……そういうことですよ。しかし……」

ちらりと、紅孩児は下を見ると、

「……」

孫悟空がこちらを無表情に見上げていて、ミニドラたちもまた集まってきた。

キッドに、三蔵法師、そしてドラミは、沙悟浄となんか狐のきぐるみを着たものたちと一緒にいる。

リーニョがここにいるということは、メッドもまた隠れてはいるもののこの近くにいるだろう。

「このまま逃げ帰るのも少し、癪でしょうから……」

錫杖の頭につく六個の金属環を振り鳴らし、黒い地獄の炎が現れる。「三昧神火！」

帰り際の一発というのであろうか、紅孩児は振り向きざまに技を放った。その後は一気に中国妖怪たちは光の帯となって消え去るのだが、のび太たちにしてみればそんなことよりも目の前の脅威である。

「うおおおおお！」

はじめに動いたのはドラリーニヨだった。

金色の羽を展開させて、紅孩児が放った六つの黒い炎のうち、五つを取り込んだ。

しかし、一つ、しずかのこの家に落ちようとしている。

ゆっくりと。

確実に。

「うわあああ！」

はじき返すという、便利能力は、エル・マタドーラのものであるため、彼と友情がまだ繋がっていない状態では無理。

というか、今の状態はまだドラえもんズの誰とも確かめ合っていないから、能力いただきリングの性能上誰の能力も使えないのである。

「あ、そうだ、芭蕉扇！」

リーニヨの顔にへばりついてたアレなら……。

たしか、取れたその後この青空部屋に下りてきたような気が……していたのだが、気絶している金角を抱えるという早業を見せたあの少年が、羅刹女の象徴的な武器の存在を忘れるということはなかったらしくちゃっかりと回収していたようだ。

どこにも、火を噴きとばすぐらいの大風を吹かせる扇が見つからない。

「どららった！」

ミニドラたちはヒラリマントを出すが、あの極大の地獄の炎を弾き飛ばせるほどの面積と性能を持ち合わせているわけもなく……。

「どらあ〜」

「どらあ〜」

きりきりマイマイと飛び散ってしまっている。

ピンチである。

どうしようもなく。

ピンチである。

孫悟空になろうとも、のび太はのび太である。

悔しいが、目の前の炎に手も足も出ない。

ならば、彼に出来ることは、何だ　のび太はため息をつき天を仰いだ。

「うっ、ドラえも〜んっつ!」

「のび太くううううん!」

彼らは最大の理解者であり、親友の名を叫びあっていた。

同時にかかと強大な雷の閃光が、爆発が周辺にまき散らかされる。

銀角を倒し、異次元から元の世界ドラえもんが戻ってきたのだ。

「おまたせ、のび太君」

オニキスの黒いつぶらな瞳を輝かせて　未来番長はたしかにのび太の真ん前で彼を守っていた。

「遅いよ、ドラえもん」

そういうのび太は笑っていた。

お互い、見えない時間の中で激戦を乗り越えてきたことぐらい解っているのだ。

のび太は如意棒を、ドラえもんは名刀電光丸を手からいったん外し、親友同士、にやりとその手を上げた。

パンツと高らかに大きくていい音が天に響く。

それはドラえもんと のび太は、手と手を合わせて、ハイタッチをしたときに鳴った音だった。

第五十一話 盤上で小宇宙を感じたら、何とかするしかない！！（後書き）

というわけで、しずかの家での戦闘はこれにて落着です。

まだまだ、問題（ドラミとしずかが眠ったまま、メッドは重傷など）がありますが、それについては次回で。

というわけで今回名前（！？）が出た竜さんは、1994年公開映画『ドラえもん のび太と夢幻三剣士』のキャラクターです。

敵キャラのほうは残念ながら、とある事情によって出演はしませんでした。ご了承ください。といいますか、見える死亡フラグは立てたくないのが本音ですけどね。

この映画は、のび太の直接的な死の描写があるので、出しにくかったのですよ。

映画初、（といいますかそれ以降（2011現在）もないです）ですけど……ちょっと……。敬遠させていただきます。

そんなこんなで、次回もよろしく願います！

第五十二話 とりあえず、黙って笹かまを食べようか（前書き）

3月11日の東日本大震災……お見舞い申し上げます。

さて、4月7日の余震でまた停電しましたが、いつかは電気、ガスが供給され、何とか動けるようにまでになった工場。造られて、出荷されていく産地の特産物。

その利益が、この会社の、そして地域に潤いと、再生の力を育みます。

元・宮城県民（戸籍上）である雪子はこう、主張させていただきます。

募金活動も大事ですが、なんだかんだといって消費者様の熱い要望がなければ、産業は成り立ちません。もちろん笹かま、だけというわけではありません。南部せんべいでも、赤べこの置物でも、なんでもいいのです。あなたが出来る、そしてあなたにも利益、満足する方法で少しずつでも構いません、一丸となつてがんばっていきましょう。

頑張れ、日本 なのです。

……ドラえもんズ、関係なくなかない？ ドラえもん募金あるからって題名こんなふうでいいのか？ といつてもこれからドラえもんたちの行動目的から考えると……無問題です！ 一応、水ですし！ なぜ、そういきれるかって？

それは本文で明らかにしますよ。
では、どうぞ。

第五十二話 とりあえず、黙って笹かまを食べようか

世界のどこかで……二頭の竜が対面していた。

といっても、正体が、であり。一体は竜のまま、もう一体は人間の老人のような格好をしていた。

そして、竜のほうは罰の悪い顔をして、老人を見ている。

それはいつも悪ぶっている小学生が横断歩道でお年寄りの手を引くという姿を、親しくもない級友に見られ、本当は優しい子なのだと思われてしまうという、居心地の悪さに似ている。

「ひさしぶりじゃのう」

好々爺のような姿で声を出して、己とは違う世界の次元を行き来している竜に声をかけるのは、龍神。

彼は妖界を守ることを使命としているため、人間界のことを遠くからずっと見守るしかない。だが、人間嫌いで有名な同族を見かけたので、おや、まあと驚くように、そして羨ましく、微笑みかけていた。

「我は我々よりも弱く、すぐ死んでしまう人間なんかに構っているお前の方が珍しい。例えば悪に吞まれようと、たかが人間と人間の作り出した中途半端な機械仕掛けの物。我らの寿命と力の前には風の前の塵に等しい存在よ」

「それでも、ぬしの『個』を尊重したのではないか。われらを殺し、生き血を啜れば不老不死になるというのに。死におびえることもないというのに、のう」

「ふん。どうせいつの日かまた人間と戯れる日が来るのならば、あのモノたちに縁があるものの方がいいと思ったただけだ。それに手助けはこれまでだ、後は……知らん」

ドラゴンは大きな巨体を地面に伏せ、羽ばたくこともなく、消える

ように妖界から出て行った。

同じ竜族とはいえ夢幻の世界に生きる『ゲーム』のドラゴンは、思考一つで自分の世界に戻ることも、別の世界に行き着くことも出来るのだ。

同族が照れながらも、立ち去る姿を龍神は黙ってみていた。それは、ドラゴンの姿がまったく見えなくなっても、彼が向かったその方角を見続ける。

「ホッホホ。相変わらずのひねくれ者よ」

龍神は面白いものを見たと言を弾ませながら、瞼を下ろし、人間界に『眼』を向ける。

友情を信じ、立ち向かってく若者達を見守るために。

トクン……トクン。

流れていく血を減らすためか、生存本能だったのか、不定期に小刻みに揺れていた心臓の音が正常に戻っていた。

（我輩は……）

背中から強烈な痛みはなくなっていくと同時に、日向のにおいがしてくる。

それは好ましく、緊迫していた筋肉をとろけさせていく。

ああ……。

思わず、恍惚のため息が漏れる。

柔らかい、心地のよい感覚に胸が高まっているのを感じた。

「はっ！」

褐色肌の占い師が目を覚ます。

「ん……、ここはどこであるか」

見覚えはあった。

たしか、小学生に姿を変えていたとき、何度かお邪魔した家のリビングである。

どうしてここにいるのかを考えようと、目覚めたばかりの頭で考えようとしたのだが、

「わあ、メッド、気がついたんだね！」

すかさず無邪気で可愛い声が、メッドの猫耳を揺らした。

「……リーニョ？」

親友の声にゆっくりとうつ伏せだった身体を起き上がらせようとしたのだが、むぎゅっと、抱きついてきた金色の羽を持つ妖精にそのまま姿勢が逆戻り。

「わーん、メッド、よかった、よかったよ！」

もみくちゃにされる、ドラメッド三世。

嬉しくて、泣きすぎて、どうやらおかしくなっているようだ。

メッドのぼやけていた頭もだんだんクリアになっていく。

身ら先水晶の瞳に映るリーニョの顔は涙いっぱいだけど、嬉しさに満ち溢れたい顔だった。

「リーニョ……我輩は、いや、我輩たちは……」

これ以上は声が出せなかった。覚悟していた闇ではない、この暖かさに身体全体が感動で震えていたからだ。身体と心がこの喜びに追いつけないと困惑しつつも、リーニョから与えられるくすぐったくて楽しい気分にはメッドは笑みを浮かべた。

「よ、やっと起きたか、メッド」

グラスに水を持ってきた紅いスーツ姿のキッドが、親友達の熱い抱擁を覗き込んでいた。

「キッド、おぬしも無事であつたか」

「まあな」

メッドとキッドは女体化して初めての邂逅であつたが、お互い声がまったく変わらないことですぐさま気がついた。

「……随分、変わったであるな、おぬしも」

金髪碧眼の美人探偵秘書という、親友の姿に苦笑せずに入られない。

「そういうお前は随分色物になったな、メッド」

「あー！」

リーニョとの戦いで全身を覆っていたはずの……といってもほとんどシースルーみたいなものを重ね重ねにきていただけなので体の線自体はほとんど見せていたようなものであつたが……布地は破れ、切り刻まれたために、ほとんど下着同然に着けていたが最後の砦のビキニ姿へと衣装が変わってしまったていた。

早い話、ドラ エでいうところの、2の水の羽衣から、3の危ない水着（魔法のビキニでも可）から着替えたくらいの露出度アップである。

「あわわわ！」

メッドの表情が、ドットの立ち絵が変わってしまうぐらいの色っぱ

さに、赤面する想像力豊かな思春期男子中学生へと変わる。

8ビットでも、見た目女戦士と大差なくとも 完全武装していた武道家が鍛え抜かれた白魚のようなもろ肌を惜しみもなく、見せ付けるように脱いだということを妄想しただけでも興奮するものなのです。

「ん、メッド」

そんなことお構いなしに、メッドに抱きつきゴロゴロと喉を鳴らすリーニョ。

金色の羽を持つ妖精にしてみれば、やっと目が覚めた親友が幻でないことを確認するほうが重要なのである。

健全に考えれば、リーニョの方が正しいなあ、こりゃ。

「と、このぐらいにして……今はどうなっているのか？」

血を多く失って気絶していたメッドは、ここまで何が起きたのかわからない。詳細を希望するのは当然である。

「ああ。そうだな……」

といつても、お子様説明のリーニョとガサツ説明のキッドではうまく話しかせる自信がない。いくらメッドがおかん属性を所持していたとしても理解しきるには時間がかかるだろう。

そんな時間はもつたいない。

ならどうすればいいのか、解決策を持っていくキッドはピンク色のメモリーステックをメッドに手渡そうとする。

「これは何であるか？」

「……これを身に着けていれば今の状況ぐらいならすべてわかるぜ」
「？」

言っている意味がよくわからないのだが、親友の碧眼の瞳は真摯的

であったこともあって、メッドはハテナマークを浮かべながらも、指先でメモリーステックの先端を軽く触った。

「な……！」

ピンク色の長い髪が波立つように、大きく動き出す。

力を行使しようとしているのだ。

かつてない力に紫水晶の瞳が見開く。しかし、心地のよい感覚なので拒みもせず、与えられるまま、されるまま、力を受け入れていく。
チャンネルが、繋がった。

接続したとたん頭の中から、知らないはずだった光景が湧き上がってくる。

天上世界からリーニヨとミニドラたちとともに脱出したこと。

ドラえもんが銀角と戦い、勝利したこと。

そして……しずかの家で始まり、一時撤退という形で幕を下ろした中国妖怪達との戦い。

そのすべてが、まるでニュースを見ているかのように、情報が流れてくる。

それはメッドの親友テレカから与えられている力が、運命を見定めるものだからだ。

創られた運命、創ろうとする運命がどのように世界に馴染み、実行していくかを先見し、助言する。

キッドやニコフもある程度は『見える』が、切り取る、紡ぐほうを重視しているために、メッドほど正確に『見る』ことは出来ない。

すべてとはいいきれないが、リミッターから解放された力はメッドの知りたいと思う情報を展開させ、知らせてくる。

起こった、すべてを。

「……うむ。たしかに、わかったである」
随分と都合のいい能力であるなど、苦笑する反面、リーニヨのほうに顔を向ける。

黄緑色の髪と、金色の羽に　サッカーのユニフォーム。その胸元に輝くように名刺ストラップの要領で吊るされているのは黄緑色のメモリーステック。

リーニヨもまた力のリミッターがある程度はずれたのだ。
癒しの力　30分ルールから30年ルールへと変更。
しかも、魂さえあれば、例え肉体が滅んでいても瞬時に元の姿に戻してしまう。

それはビツク・ザ・ドラが悪人達を蘇らせていた力と同じである。
だから、リーニヨが先に狙われてしまったのであるか……。

のび太抹殺の一番の障害になる可能性が一番高い友。

背中を負っていた大きな傷が傷跡もなく、きれいさっぱりと消えていた。

「すごいであるな、リーニヨ」
「うん」

えへへ」と笑うと、もっと撫でてといわんばかりに猫耳をメッドにこすり付けるように寄せてきた。

メッドも察して、ばんばん、ナデナデとリーニヨの頭を撫でる。

幸せそうに目をお互い細める　微笑ましい、保護者とその子供の暖かい光景をお楽しみください。

「ああ。俺もリーニヨの癒しの力でここまで元気になった、しな」
金色の髪をかきあげ、戦いによって乱れた髪を整えポニーテルにするキッド。

彼女もまた、ドラミとしずかを取り戻すため随分と無茶をした。

能力の使いすぎで、弱まった心臓で限界まで戦い　紅孩児たちが立ち去り、地獄の炎が消え去った途端、気絶していた。

根性で気力をここまでもたせたのだけでもすごいだけだね。

「回復タイムのため、最前線からおいていかれたけどな」

薄汚れ、瀕死状態であったのだが、リーニヨの癒しの力によって体力を取り戻すとまず先に黄緑色のメモリーステックを手渡し、力をより強力に行使できるようにした。

そしてリーニヨの強化した癒しの力によって、運命を切り取る能力を使いすぎて傷ついていたキッドの心臓や、蓄積されたダメージによって大きな傷を負ったメッドが治ったのだ。

「あ、メッドさんも起きマシタか」

ウィウイ、ガシャンとエンジンと組み込まれた歯車の音を鳴らしてお留守番を任されたミクロスがやってくる。

戦闘能力ゼロだが、思いつきだけはいよいよいえば頭脳派ラジコンロボットなのだから、当然といえば当然であろう。

「お主がミクロス殿であるか」

「ハイ。後はお任せクダサイ」

後方の憂いはないと、安心して前進すればいいと。
大丈夫、狙われているのび太が天上世界にいれば 地上はノア計画を発動させるまで、手をつけられないのだ。

そこまでは、確定している。

後は……誰もわからない。

まだ、最悪の未来も、最高の未来も決まっていないのだから。

「ダカラ、ノアの洪水が起こらないようにしてクダサイ、ドラえもんズ」

リーニョが持ち込んできた、恐るべき事態。

顔が渋る占い師。メッドは一応先入捜査していたドラパンの報告から、もしかとは思ってはいたものの、力で『視て』確認した。

「そうであるか。ならば……いくしかないでござるな」

この世界を救うためにも。

「そうだね。僕達もいつてくるね」

先に行った、のび太たち、原作劇場版のパーティーから出遅れて。

「ああ。後は任せたぜ、ミクロス」

呪いによって眠り姫となった愛しい人を救うために。

「では、いくであるか。出でよ、魔法のじゅうたん、であゝる！」
ノア計画を阻止するために、天上世界へと向かう。

これでここにある、駒はすべて天上世界へと揃おうとしていた。
地下水道でノア実行の鍵を握る少女を守る、騎士と怪盗紳士。
恐ろしい計画を食い止めるために、動くのは地上を……恩人がいる地上を救うため、そして受けた恩を返すために異種異世界の同じ目的を持つ、暗躍するものたち。

元凶へと生き高々に向かうこの現代を生きる、正義の味方。

「僕、すつごく、頑張るんだからね！」

「当たり前だろ」

「ふふ。しかし、リーニヨらしいである」

「ポケットの中みんな（ミニドラ）も協力してくれるんだから、僕負けないもん！」

絶対。

絶対なんだからね。

金色の瞳は熱く、そして綺麗に輝く。

果てして、彼らは、王ドラとエル・マタドーラが見た最悪の結末を阻止することが出来るのか！

決してひとつではない未来。

絶え間なく移り変わる運命の中で、誰が最後に笑うのか。
すべては……力と力がぶつかった先にある……？

さて、この場にいる役者すべて揃いましたか。

闇の中に埋もれた誰かが、安堵していた。

いくつか運命を修正してきたが、ここからが正念場なのだ。

そう、これから。

また意識が闇に飲み込まれていく。

だけど、それでいい……操られている、今はそれ以上を望めない。
だから、ワタシヲ。

ビク・ザ・ドラによって要塞と変貌した天上世界の中心で、黒翼の天使が一人真上から西に傾きつつある太陽を見ながら呟いていた。

第五十二話 とりあえず、黙って笹かまを食べようか（後書き）

本格的にノア計画を阻止するために動き出しました。ぼろぼろと出していたネタが、ついにスポットライトを浴びたわけです。

津波と洪水は別物ですが、同じ水の災害ってことで。

といってもこちらは阻止するために戦うのですが。予言にもならないので…… たぶん大丈夫。

天上世界にて大暴れとなる次回。少しと気が遡ってしまいますが、お楽しみに！

第五十三話 リセットしたら援軍対策に予め回避率が高いユニットを出現ポイント

ス ロボの後半ではよくあることである。そうです、途中から現れた敵軍に何度も泣かされてきましたよ、雪子は！

大体きそうだなーと思うのですが、それは第二軍まで。第三まできたときにはリセットボタンに手が伸びます。

攻略本を読めばいいのですが、実際災難に会うまで気がつかなかった初期プレイ。

第四次Sは、もう、いっぱいいっぱいでしたよ。ヒロインがたまたま復活を覚えるタイプだったので、何とか（超ゴリ押しで）ゼゼーナンに勝てました。必殺技を叩き込んで止めを刺したときはもう、感動ものでした。（当時、よりにもよって、スーパー系でプレイ。

ヒロイン？ 彼女もちで説得したに決まっているじゃないですか！
ロフを説得して戦死を回避&セティとゼブとの戦いも回避。もちハッピーエンド。といっても、ターン数が多かったので、シュウたちは仲間にならなかったよ！）

第四次Sを知らない人からすると、何を言っているのかわからない前文で、申し訳ありません。

結構、配置や役割決めは大切って、ことで。では、本文をどうぞ

漆黒の宇宙。広大な真空の世界で、青く輝く星からそれほどなれていないところで、凄絶な雷が鳴り響いていた。

「ハーハーハー。弱い、遅い、こんなおもちゃで助け出すだと？」

救い出すだと？ 笑わせる。身の丈もわきまえない愚かな人間どもよ、この大魔王デマオンの力に屈するがいい！」

ギャシャシャシャシャ と、大魔王の背後に控えている、モンスタ―に跨り星の印のある尖がった帽子を被った配下の異形の者たちもいやらしく笑う。

ビク・ザ・ドラの力によりよみがえった、魔法社会の魔界の住民たち。

彼らは宇宙で何をしていたのか。それは雷によって焼け焦げた残骸らが物語る。

それらはいく数時間前までは、この宇宙を翔ることができた、最新鋭の、天上世界の宇宙船だった。

植物星に主要都市機能を移住させた天上世界ではあるものの、この地球にも地上の観察と交友という名目のため、ある程度地球に人を残している。

もちろん、ノア計画を何時でも実行できるようにと軍の人間も少数在住している。彼らとの定期連絡が途絶え、不審に思った植物星にいる天上人たちは偵察隊を向かわせたが……この通り、沈黙させられたのだ。

そう……王ドラが親友テレカとリンクさせて力を使ったのは、何ものび太や自分達のためだけではなかった。何も知らない現代に生きる人の犠牲を最小限にするために、このように宇宙からやってくる

者たちを巻き込まないようにしていたのだ。

だが、紅孩児が蘇ったとき、彼は地球を飛び出しのび太に恨みを持つ悪人達の魂の捌り所を回収した。これは徐々に王ドラの力が弱くなっていた証。

王ドラとエルが完全に相打ちに近い形で、力が暴走した結果この空間から切り離されたときには地球を覆っていた王ドラが張っていた結界の力は拡散、消失した。

干渉ができるようになったのだが、それは無関係な人を巻き込むことへと繋がる。

ビック・ザ・ドラの力の前では今の時代の人の力なんか、風前の前のともし火。……ただ、凶悪な者たちの無慈悲な力によって消え去るのみ。

「これぐらい派手に暴れれば、地球に向かおうとする者たちはいなくなるだろう。さて、天上世界へと戻り、ノア計画とやりに協力するか」

復活の令としてビック・ザ・ドラと契約した大魔王、地球へと鋭い目を向ける。

「どうやら、天上世界のほうが面白くなっているようだ……」

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオ！

下からだろうか、大きな音と振動が天上世界を揺らした。

「きゃっ」

「わっ」

「えっ」

魔法使いと、王子と、ブリキロボットが三者三様に小さく叫ぶ。

「……」

ただメイドだけは氷のような目で冷やかに、そして強い光を宿し、これから向かう大きな建物だけに焦点を合わせる。

雲をつけぬけ、そびえ立つ　　ノア計画遂行のためだけに存在するビル。

ここにある地上に大洪水を引き起こす装置を物理的にどうにかすれば鍵があるかと、ノアの洪水が発動することはない。

作り直すことも考えられるが、そんな時間をビク・ザ・ドラに与える気はまったくくない。

（それまで……ドラパン、君にかかっている）

ニコフはドラパンとはあまり親しくはないが、彼の名声はよく知っている。

そして、ドラメッドが絶対の信頼を寄せていることも。

（僕は、いや、僕達のすべきことを成し遂げてみせる）

美夜子、ティオ、タップ……そして僕の四人で。

ドラマメッド3世とドラリーニョとその仲間のミニドラたちが脱出するさいに起した貫通工事は地下水道を揺るがし、一部を大きく欠落させた。

「ひゅー、随分派手にやらかしたようだな、メッドもリーニョも」
ダイナミック 脱出の詳細は、第四十六話 くっ、ガッツがたりないって……いわせないよ！ で、ご確認ください。

怪盗紳士は、魔術師とエースストライカーとの激戦の影響範囲外にまで来たのだが、轟音は薄暗い地下に鳴り響き、いかにあのあと凄まじい戦いが起きたのか、肌の振るえとともに感じとれた。

（まったく、無茶しやがる……）

ニツと口元にニヒルな笑みを浮かべる。

懷に忍ばせている『正義』のカードは平然とその形を崩しも変えていないところからすると、メッドとリーニョはうまくやってのけたのだろう。

（さあて、私もそろそろ表舞台に出るとするか）

腰のベルトにちらりと見えるキンキンステッキ。

ミミミの父が開発し、悪人に悪用させたくない、あなたならば弱い人々のために使ってくれるからと彼女から手渡された物質変換装置を先端につけた道具。

（……メッドやドラえもんズに頼られる、とはな）

数々の事件を解決したけどその実体はおちゃらけ集団としか認識されていなかったが、たしかに、対立し協力し合ったのならわかる。あいつらはいつも大勝負に賭けているのだ。

ハイリスクだってわかっているくせに、賭けずにはいられない。

……物凄く度胸があるだけの、勝負師だ。

（ふ。まったく、スリル満天だぜ。だけど、それしかねえなら、しかたねえか）

ビック・ザ・ドラと話したことはない。遠目でしかドラパンは確認していないのだが、あいつは危険だと、第六感が警告してくる。そして悲しみにあけくれる人をあいつは多く作り出してしまうということも……教えられた。

（現に、この天上世界でさえ……）

ミニドラとともに偵察した、天上世界の現状は……悲惨としか言いようがなかった。

唯一、救いといえば囚われているが肉体的なダメージはないことだろうか。一箇所に強固の守りのある建物に押し込めているので、そこさえ注意すれば大暴れできる。

（……まあ、ビック・ザ・ドラも存在が消えないようにしているのだから、当然か）

予定されている未来を変えたら、どんなしつぺ返しが来るかわかったものじゃない。

そう、たとえ、この世界が　。

シルクハットを深く被り直し、横の二人に声をかけた。

「おい、あんた、まだ戦えるか？」

ドラパンの側にいるのは、パルパルとバンホー。

たまたま居合わせたためにこんな貧乏くじを引かせることになってしまったが、この際は成り行き上で協力していくしかない。

「ああ。私なら。だが、彼女は……」

「いや、バンホー、あんただけでいい。レディーは鍵を守ってくれただけで十分だ」

軽く名を呼び合うぐらいいつさつきした。

詳しく状況は話さずにはいないが、緊迫状態が続いている今は仕方がない。

「どうやらここに団体さんが向かってくるようだ。残念だが、交戦するしか方法がない」

逃がれる、道筋はない。

戦って勝つ以外は。

「そうか」

ここまで逃げてこられただけでも運がいいのだ。

ノア計画の鍵を持ってしまった少女とともに逃げてきた、恐竜人はただ頷き、覚悟を決める。

「派手にいこうではないか。いや、派手にいくしかないか」

バツと黒いマントを靡かせ、フランスの大怪盗はありったけの未来の道具を取り出し、この地点を出来るだけ自分達に有利にするために大改造を行う。

少しでも勝算をあげるために。

ドラパンは確かに身体能力が高い。が、それだけを武器にはしていない。攪乱する動きでより速く見せかける。相手の力を利用してかえすのもお手の物。

それには、仕掛けが必要なだけ。

大掛かりなときもあれば、ほんの小さなトリックを使用するときもある。

敵を迎え撃つために、ドラパンの都合のいい空間が即効で作られていく。

バチバチと火花が散る。

未来の道具とはいえ、目の前で変えられていく光景に、バンホーはある予感がした。

ドラパンの手際のよさから、予めこうなることは想定済みだったのだろう。なら、なぜ地上に逃げるではなく、ここで食い止めるという方法を取ったのも、何かを狙っている。その何かとは、今のバンホーでは到底知ることとは出来ないが、大体見当がつく。そうであっ

ても、そのせいで危険な目にあうことになっても、ドラパンを非難することは出来ない。

むしろ、最終目的である、ビック・ザ・ドラを天上世界から追い出すことに繋がるのなら、自分達が『多少の犠牲』になってもいいとさえ思っている。

それよりも、これだけは……なんとなく、なんとなくであってほしいのだが　これはかつて、彗星から引き起こされる異常気象から、恐竜達を生き残るために地下に聖域を作り上げたドラえもんたちと同じような、何か。

予定調和というべきか、未来に繋がるもの。

だけど　自分達があの時感じた、絶望から希望へと繋がるものではなく……終焉を見越した、残酷な感覚。

「……ドラパン君、少し聞きたいことがあるのだが、いいかい」
不意に竜の騎士の、重い口が開かれる。

「……」

ドラパンは躊躇した。

うすうすだが、逃げてきたこの青年は気がついたのかもしれない。兜によって目はよく見えないが、この声の震えかたから、ドラパンはすぐに彼が言おうとしている言葉が読み取れた。

「その答えを俺の言葉から確認するは、やめておいたほうがいいぜ、バンホー。あんたの考え『どちら』も大体あっているし、なによりこのお嬢さんには少し酷だ」

「……そうか」

これで確信にはなったな、とドラパンは竜騎士の聡明さに感心しつつも、少し可哀想に思った。

この青年は良くも悪くも、未来から来たという者たちが、何も気に

せずに大暴れするのは　けして、修復する手立てがある、だけではないということを気づいてしまったのだから。

パルパルはがっちりと鍵を自分が握り締めることと、これから敵を迎え撃つにいたって己が発する恐怖に打ち勝とうとしていることで手一杯になっているので、ドラパンとバンホーの会話などよく聞いている、見えていない。

……今は、それでいいか。

この先にある、戦いに集中するしかない。

ザッザッと規則正しく鳴り響く足音を、猫耳に備え付けられている視覚センサーで捉えながら、ドラパンはこれから来る敵のことを己の電子頭脳にきっちりと収めているファイルのデータと照らし合わせる。

足音からして、あちらは団体ではあるが　音は異様に忙しない。

これは、足の幅が短いからだ。

小柄な者たちが集団を成していることを予想できた。

（と、いうことは……）

チャモチャ星のかつての独裁者が指揮していた、ネジリン將軍率いる軍隊か。

（ちと、やっかいだな）

舌打ち。

地下水道で搜索するのだから、大柄や強大な力を持ったやつらは来ないとは踏んではいたものの、数が多くて隙が小さいものが来るということもあまり歓迎できるものではない。

数の暴力が、なんだかんだといって狭いこのエリアでは有効であるのだから。

（しかし……それだけ私がひきつけることが出来るのなら、ニコフには優位になる）

問題は時間。

鍵を用意しなオスのと、装置を用意しなオスのでは、雲泥の差がある。

（それに、どの後に来るのび太たち、もな）

はつきりいおう。

ドラパンたちは困なのだ。

ここは、守るには最良ではあるが、攻めるのは一苦労する、狭くて、道筋がごちゃごちゃしている地下水道。

（ここでなんとかしてでも、やつらを出来るだけ多くひきつけないとな……）

これはメッドがしようとしていたこと。

たしかに、派手に魔法をふんだんに使って、敵をミラーハウスに閉じ込めたり、攻撃を反射させたりすればたちまち混乱するだろう。

うまくいけば、応援を頼み、敵の駒をすべて地下水道へと誘い込むことも出来る。いざ、本拠地が手薄となって駆け込もうとしても、こんな狭苦しい場所じゃ、後退することも難しい。

（だが、メッドは……リーニョとの戦い……いや、友情をとった）
それは、俺がいるから、だけだな。

友に信用されているというだけで、胸が高鳴る。

その高鳴りは、高揚させ、この二人にも共鳴してもらいたくなる。

（気落ちするわけではないから、いいか）

むしろ士気を高めるにはいいかもしれないと、ポジティブに考えドラパンは恐竜人と天上人に声をかけた。

「バンホー、パルパル……本当に、巻き込まれたお前達にはすまないと思うが……力を貸してくれ」

「ドラパン君？」

「ドラパンさん？」

「月並みな言葉しか出てこないが、頼む」

これからの未来のために。

悪に歪まれてしまわないために。

強い輝きを宿した瞳でドラパンは懇願した。

「一緒に、戦ってくれ」

と。

ガシャ、ガシャとブリキの兵隊達が足音を鳴らし、やってくる。

そこには毅然としたフランスの大怪盗と竜の騎士が出迎える。後ろに控えている鍵を持つ天上世界の少女を守るために。未来を勝ち取るために。

「さて、私の本気にどこまでもつかない。ネジリン將軍」

不敵にバイキング風のブリキロボットに微笑む、ドラパン。

くるりと巻いた黒い髭を指先で触れながら、キンキンステッキを振りかざす。

「いや、私たち、のか」

…少し、照れくさそうに彼は言い切った。

第五十三話 リセットしたら援軍対策に予め回避率が高いユニットを出現ポイント

いよいよ、開戦です。ところで、はなしは前文のマニアックな話に戻りますが、雪子が主役にしたのはヘクトールです。理由は、お笑いを重視した結果です。といっても人間爆弾……やっちゃんしました。ごめん、回避できなかったよ、アキ……。

昔懐かしいゲームの話はここまでで、天上世界はいろいろと大変なことになってしまっわけなのですが……一応、『残酷な描写あり』のカテゴリーに属しているので、ある程度は覚悟してください。お願いします。では、次回もお楽しみに、ね

P・S といいつつも、ハッピーエンド、というカテゴリーにも属しています（笑）

第五十四話 自分が一切傷つかずに相手を一方的に痛ぶる方法を教えます（前書

今回、ものすごく、難産でした。

いや、たしかにいろいろリアルであつたけど、（具体的に、アーバビにはまったなど）ここまで更新が遅くなつてしまったのはアイデアが浮かんでも文章にうまくできなかったといういつものアレです。

といいますが、本当、文章化つて難しいものですよ、はい。それと捏造設定を付け加えたので余計に時間がかかりました。

以上、いいわけタイム終了。
では、どうぞ

第五十四話 自分が一切傷つかずに相手を一方的に痛ぶる方法を教えます

これは、数年前の出来事。

まだ、皇帝と名乗るのはもちろんのことなること考え付かなくて、人間を愚かな存在と認識することもなかった。暖かく、そして脆い優しい空間に満ち足りていた時。

白衣を着たナポギストラーは大きな豆電球のような頭を抱え、机にへばり付いていた。

この状態ならば、机とわし付き合っているんです、とか言ってもおかしくないぐらいの密着度であったという。

「くそつ、いくら高スペックのブリキロボットを作っても、使いこなせる人間がいなければ無意味ではないか……」

サルでもわかるニヨロニヨロにすると、機能が少ないと文句を言われるし。

「あ~~~~つ、どうすればよいのだ！」

人間に楽をさせる、機械。

一見すると楽そうなものだが、人間というものは欲深い。

それには多種多様のニーズにこたえなければならぬ、いや、こたえきらなければならぬ。

……。

無理じゃねえ？

その無理を可能にしなければ、作られた存在意義を失うことになるナポギストラーなので、無理だ、無理だと思っただけで、できるわけがなくとも、諦めてはいけないのだ。

そうまだ、希望を持っているからさ。

「博士……」

ぴよこりと大きな耳が机からはみ出すように出てくる。

「お前は……」

最近ナポギストラーが作ったブリキロボット。

有能な助手で、自立回路を組み込んだ、傑作である。

いや、もはや彼は最高傑作といってもいいだろう。さまざまな経験を入れ込み、学習する性能はナポギストラー自身も舌を巻くぐらいの経験を持っている。

「大丈夫ですよ、博士。僕は博士が努力しているのも知っていますし……なにより、博士ほどのブリキロボットはいないじゃないですか」

「それはそうだが……」

「このオイルを飲んで落ち着けばいいだけです。ちょっとエネルギーが足りなくなっているだけですよ」

トクトクと小気味のいい音を出して、ポットの中から出されるのは、琥珀色の液体。

……そういえばこのポット、華がないとかいって彼が自主的に買ってきたものである。

精錬されたホテルマンのように機敏かつ優雅なしぐさで助手はオイルを金縁のセンスのいいカップにいれ、ナポギストラーに手渡す。

「ナポギストラー博士……僕は信じていますから」

たとえ、あなたがさびしい思いをしようとも、つらい出来事で目の前が真っ暗になろうとも。

「博士なら、どんな屈強に立たされようと打ち勝つって……」
光は必ず、あるのだから。

「だって、僕を作ってくださった……最高の博士、何ですよ」

助手の微笑む姿。

「ううううううううう」

大きなグルグル眼鏡から零れ落ちる温かいものはなんだろう。

「あ、博士。僕、何かいけないことを……」

「違ううー……！ 大好きだああああー……！」

惚れる、という言葉をあの時理解していたら、間違はなく、ナポギ
ストラーはチャモチャ星の中心で叫んでいただろう。

とりあえず、抱きしめて、助手のフワフワモコモコの身体に頼ずり
しながら、彼は仕事の疲れとストレスを癒していた。

「もう、なんで、お前はこんなに可愛いんだ！」

モフモフ。

「わっぷ、博士、ちょっと苦しいです……あ、でも僕、嬉しいです。
博士が、元気になってくださって」

モッフモフ

「~~~~~！！（言葉にできない）」

助手のはにかむ顔がそれまた可愛くて、モフモフタイムが長引いた
ことはいうまでもない。

思えば、あのときほど幸せなものではなかったのかもしれない。

この後、どんなに豪華な装飾を施したカップにオイルを注いで
も、助手が入れたあの時のオイルよりもおいしいものはなかった

そして、現在

ネジリン將軍は齒噛みしていた。

折角目的の物を持っている天上人の少女を追い詰めたと思ったのに、この現実なんだ。

キリキリマイにキリキリマイと、ブリキロボット兵が電撃をくらっては狂い踊る。

「くそ」

ロボット兵たちはドラリーニヨ（演出。騙されました）から逃れたのはいいが、ボロボロになる運命は変えられなかった。つまりはそういうことなのだ、涙目で己の不運を呪っていた。

「將軍」

叫ぶ隊長。

数でおしているのに、この体たらく。

それは、こちらのブリキロボットはお笑いを第一に考えているのに、あちらの陣営は本気で勝ちを狙っている差。

そう認めなければならぬほど、コテンパンにやられている。

「うつひや」「こりやたまらん！」

……台詞が、もう吉本新喜劇の、やられ三下並みになってきている。後で覚えているよ、とか、今日はこのへんにしといてやる、とかいった途端に確実にコントになってしまう。

（それだけは、避けねば……）

でんりゅうは、電流は、ハッキリケーン！

しばらくピンクのサウスポーをお楽しみください

ピンクレディーのターンが終わるには変わりの曲を用意するしかない。

昭和の歌謡曲から、みんなの童謡へとターンが始まるには彼の登場しかありえない。

かつて大晦日……レコード大賞の会場から渋滞を乗り越えて、紅白歌合戦に何とか間に合った歌手は多かったこと。生放送の難しさを散々味わった方もいたことをけして僕らは忘れない。

いゝと、まきまき。

いゝと、まきまき。

ひゝいて、ひゝいて、とんとんとん。

そう、ついに彼が会場へと到達したのです。

さあ、歌ってもらいましょう、ナポギストラー一世氏による、いと……。

「誰が歌うか、そんなもの！」

というか、歌ったら敗北フラグじゃないかと、コンピュータウィルスによつて野望を打ち砕かれた氏は豆電球の頭に湯気を出した。

いくら前回お笑いシーンが少なかったからといって、ここでそのしわ寄せがこられても困る。

「皇帝陛下！」

「お前達、よくもこんな茶番にしたものだな」

顔から、やられ役だとわかっていても。

逃げてはいけない、屈してもいけない。

だって、やつらは……。

「人間どもが……」

ブリキの皇帝陛下のぐるぐるめがねが鋭く、凶悪な光を放つ。

（そうだ、わしは……人間が、嫌いだ）

役立たずで、愚かで。

それなのに、不意に思い浮かぶのは優しい笑顔。ナポギストラーがまだ皇帝と名乗る前の、一からすべてを自ら作り出した助手の顔だった。製造されて始めて作り出したおもちゃのようでも愛らしい助手。彼にとっては最高のブリキロボット。

（……ふっ）

ドラリーニヨとほぼ同じ音声を持っていたからな、あやつは。だから、あの無邪気な少女を甘えさせたくなくなってしまった。

（わしがあやつにもうできない……ぶんか……）

奪い返されて、ナポギストラー一世は憤りを感じている。

取り戻したい、と思っている。

それは、身勝手で自己満足だとはわかっている、だが。

（人間を痛みつけられかつ、あやつの声だけでもまた聞けるのなら……）

悪くはない。

皇帝として人間を駆逐しながら、あやつの喜ぶ声が聞いているのならば　至福だ。

「わしの力によって屈するがいい、人間^{クズ}が、そして人間^{クズ}に味方するロボットが！」

大量のイメコンがばら撒かれる。

取り付くのは　ブリキロボット。

そしてさらに、この地下水道がナポギストラーに集まる強大な力によって、崩れ、破壊されていく。

「フハアハハハハハハ！」

ビック・ザ・ドラに強化された能力が次元さえも超越した力となつて
新たな邪悪な存在を作り出す。

それは、歪で、傲慢で　しかし、哀しい。

「？」

ピンク色の兎の耳が揺れる。

「どうした、タップ」

「えっと、ここから、遠くで大きな音がしたので……」

「それは、たぶん……僕たちには、向かってこない……」

ドラパンがひきつけてくれるから、と。わかっているニコフは、それ以上はいわなかったが……タップは少し腑に落ちない顔で耳をピクピクさせる。

「気になるの……？」

「気になるといえば、気になるのですが……。あ、いえ、ニコフ様の勘を疑っているわけではありませんよ。ただ……」

ズシリと胸の中が重くなっている。

おそらくそれは、タップしか感じられないもの。

「どうして、なのでしょう……。私、哀しくて、しかたがないのです……」

タップがその理由を知るのは、まだ先は長い

そう……。

死人は、生き返らないのだから。

壊れたロボットも、それは同じなのだから。

死は平等でかつ誰も逃れることのできない必然的なもの。

ただ、彼は執着していた。

愚かな人間を滅ぼす、ということに。

その怨念は、一枚のCD-ROMになろうとも。

その執念は、ネジ一本になろうとも。

けして、消え去ることはできなかった。

ほとんどオリジナルと変わらないものができて不思議ではないくらいに。

ゴゴゴオゴゴオ
ゴオオオオオオオオオオ！

地面が隆起する。

地下水道で凶悪なエネルギーの塊が、あまりにも強すぎて行き場を失ったその力が暴発したために、地面が大きく揺らいたのだ。

「
八
八
八
八
八
八
八
八
」

ナポギストラーの笑い声がする。

その声が発せられているところからは小柄な豆電球はなく
数メートルの巨大かつ凶悪なブリキロボット……。

「まさか、こんなことが……」

漆黒のマントと秘密道具でその場をなんとか防ぎきったドラパンは

あまりの惨状に一瞬言葉を失った。
バンホーもまた兜によって表情が見えないが、ドラパンと同じ表情
をしているだろう。

「どうして……こんなにまで……なるの……」

揺らぐ少女の瞳に浮かぶのは、恐ろしさよりも、哀しみだった。

ただ、勝つために。

ただ、人間が嫌いだということ。

どこまで残酷になれるのだろうか。

敵対していた者とはいえ、あまりにもむごい、この光景に天上世界の少女は涙をこぼした。

そう、あまりにも……。

「ふん」

ナポギストラーは鼻で笑う。

こんなものは、まだ生ぬるいほうだ。お前たち人間のほうが酷
なことをしたくせに。

凶悪な巨大ボディが冷たく光る。

ネジリン将軍が率いる軍隊の兵士たちすべてにイメコンを取り付け
たと同時に、彼らは分解されていった。

ロボットたちは泣きながら、吸い込まれるようにこの巨体を構築さ
せた。

苦痛と悲鳴がこだまする体内　まだ起動している部下たちの体を
繋ぎとめて、溶け合わせてできた巨大なブリキロボット　その頭
脳として君臨したナポギストラーは深く潜り込んでいく。

「そう、同情するのならば……はやく鍵を渡すことだな。そうすれば、この役立たずとはいえ同士であるブリキロボットを手早く解体、再構築しようではないか」

部下たちの悲鳴をもとめせずに、こう彼はいいのけた。

電子頭脳さえ無事ならどんな形態をとろうとも元に戻る、ロボットだからできること。

わかっていることではあるが。

「てめえ……」

ドラパンは物凄い形相で、睨む。

フランスの大怪盗ドラパンはこれでも多くの悪者と対峙してきた。

卑劣や、冷酷な者……数えたらきりがなが、悪人と戦うのは慣れているはずだった。

だが、ここまで反吐が出るものと出会ったことはなかった。

「てめえだけは……許せねえ……」

何が起こってロボットがここまでゆがんでしまったか、までは知らないが。

こいつをこのままにしては置けないことだけは確かだ。

「この私がきつちり引導を渡そうではないか！」

金色のステッキを強く握り、ドラパンはブリキのロボットに宣言する。

「ほざけ。このわしがお前のような三億年の生きた化石のようなものに負けるものか！」

「あゝゝゝ、気にしていることいったな！」

黒いマントがパタパタしている姿は、よくて蛭。

悪ければ……台所の神出鬼没の黒い悪魔、別名Gを想定しても……

まあ、仕方がないことなのかもしれない。

（くそ、ロボット破壊だけはしないでおうと思っていたが……こいつは必ず、しとめてみせる！）

己以外のロボットに対する非情さに怒りがこみ上げていたが、ゴキブリ発言にさらにドラパンの激情はヒートアップした。

（絶対、泣かせてやる……）

紳士的な物腰をとりながらも、怒りでわなわなと震える指先。手品道具を模した、秘密道具たちを瞬時に取り出し、ドラパンは改悪・ナポギストラーの前に放り込んだ。

「こんなもの、なっ！」

ただの丸い玉かと思ったら……違う。

いや、それでもなんらかしらの武器だとは思っていた。殺傷能力のある、何か。

だが、ドラパンがそんな単純な直球勝負に出るわけがないのだ。

ドラパンがとつさに目を覆い隠すマスクを出し、装着したのを確認していれば、もう少しまく対処できていたのかもしれない。

そう、捻くれて、騙して、驚かせる　それが、怪盗紳士としての戦い方なのだ！

「うわあああああ！」

閃光弾がまばゆい光を発して、ロボットのカメラアイの視界を奪う。……それは安全装置の副産物。

（こやつ……ロボットの欠点を利用するということか……！）

元は科学者のナポギストラーは瞬時に相手の出方を推測、攻撃パターンを解析しようとする。

（くくく……異星のロボットが、目に物見せてくれる）

四角や丸く羅列した数字が紫色の豆電球の上にポップと出現してきた。演算機能をフル使用し、怪盗紳士を捕らえようと忙しく動き出したのだ。

……フランスの大怪盗VSチャモチャ星の独裁者の戦いの火蓋は切った。

第五十四話 自分が一切傷つかずに相手を一方的に痛ぶる方法を教えます（後書

今回のお題ネタは、某悪役司教の台詞から。

今思えばあの連載当時が、ドクの黄金期だったのですよね。最新作の発表にはある意味驚きましたよ。オンラインゲームに向かないといわれている、Wi1で！

それだけでなくFFの最新作でこけたばかりなのに、オンゲー！なんでもかんでも、オンゲーにすればうけると思うなよ！

本当に、どうなるんだろ……そのうち、あの絵スエが、シスマアファみたいにKOTYの常連になって……しまわないことだけを祈ります……。

あ、オンラインゲームだったら選考外か。
よかった、よかった……てちがう！

三ヶ月以上も更新ストップさせてしまいましたが、何年かかっても完結させることが目標の乙女・ドラえもんズ。
これからも気長によりしくお願いします！

第五十五話 観光地のトイレは行列ができていて、すぐさま使えない（前書き）

そのころのび太たちはというところ……。ということで、ドラえもんサイドにカメラを切り替えます。ドラパンファンの方、ごめんね。

今回のお題ネタは遠足のときによくおきた事から。トイレ休憩の10分間の白熱のバトルは……いい思い出です。（笑）

最近は増設傾向なのでそうなることが少なくなってきましたが、近くのコンビニが使えなかったときはピンチに陥ります。

第五十五話 観光地のトイレは行列ができていて、すぐさま使えない

拝啓、読書者様へ。

この小説は二次創作で、冒険バトルものだよ。従来のドラえもんではなく、劇場版をメインにしているからね！

ドラえもんズの皆は女体化するという、特殊設定！

女体化と言うこともあって『ポロリ』もあるけど、R - 18指定には入らないぐらいの健全なエロを追求。

と、注意事項（しかも50話すぎてもいる時点で）からはじめたという、この僕、のび太は、今のこの状況から少しでもポジティブに考えるため、とにかく必死になって考えているわけで……。

とりわけポロリの部分を。エロに心を動かさない男はいない。

トキメキを隠せないものはない！

たとえ、小学五年生だろうと。

いや、小学五年生だから、川原に寄贈されたエロ本を読もうとするから。家にテイクアウトするから。こうやって大人への階段上るの。大人になったらこんなこと、あんなことしたいとかポジティブに考えるの！

そう、こういうときなのだ。

ポジティブに。

ポジティブなことだけを考えろ、僕。

この状況で一瞬でもネガティブなことを考えてみる、のび太。

あの眼鏡の二の舞……。

真下の竹串によって突き刺さり、こわれた眼鏡が痛々しかったという。

「のび太君……！」

青い髪の美少女番長は、落とし穴そして竹が突き刺さるという凶悪トラップに引っかかったのび太の安否を確認。

フルフルとチワワのように手足が震えているが、のび太は大の字になつて何とか踏ん張っていた。

残念ながら眼鏡は犠牲になつてしまったが、コピーミラーで同じ眼鏡を5作っていたほうなので、いじめられっこエスケープで逃げ切れたことは言うまでもない。

ただいま救出中、少々お待ちください

「はあ、はあ」

人をマジで殺す気で作られているトラップに、孫悟空となつたのび太であるうと元の運の悪さのせいか、このメンバーの中で一番引っかかっていた。

「まあ、罠に引っかかっているも生還できているから運がいいよ、のび太君」

ドラえもんは慰めるように言うが……そういう幸運は、罠に引っかからないほうに使いたいものである。

「それにしても、なんでここが罠の世界万博記念館になっているかのほうが知りたいよ」

先ほどスパイクボールをぎりぎりでよけたスネ夫も嘆く。

ここは天上世界、絶滅動物保護州。

地上で絶滅した動物、および絶滅危惧種の動物を集め、保護している州なのだが、植物星への移住計画時にほとんどの動物は移住先に移したらしい。

ジャイアンはパラパラといまどき珍しい筆記式の日誌を見ていた。

日本語バージョンなので、小学五年生でも読めるのである。

「どうやら、ホイたちはここにはいないようだな」

ここのセンターに置き去りにされた日誌を読む限り、地球に帰還する前のこの州の住民たちは遠い宇宙にいるが、無事だということがわかった。

「よかった」

のび太、一安心。

あの小人族の少年がひどい目にあっていないかどうか、心配していたのだ。

ドラパンによる報告では、エネルギー州と中央州のことしか記されていないかったので、潜入と様子見をかけてここから入り込んだのだった。

もちろん、ここは一度来たことがあるから入りやすかったということもある。

警備はあの二つの州に集中しているともあって、ここからなら敵に気づかれずにすむとは思っていた。警備がいらないだけなので、油断できないとも思っていた。

……思ってはいたのだ。

落とし穴トラップに引っかかること数十回。

つり天井が迫ってきたこともあった。

いきなり刃物や矢が飛びかかってくることもあった。

大石転がしゴロゴロお〜という定番もあった。なぜか包帯でぐるぐるになったミイラや骨、鎧騎士からにも逃げ惑った。

ここに来る前にトイレ休憩を済ませておいてよかったよ。

そして、尿道括約筋が強いほうの男性であってよかった。

下から出てきてしまったら、いろいろと終わってしまうから……。

失禁の心配がない喜びに思わず目を細めてしまう。そう現実逃避してしまいたくなるほど、罨が多すぎたのだ。

ここまで来るまでかかった罨の総数は、なんと、794。

な(7)く(9)よ(4)……偶然なのか、ちょうどいい語呂合わせ的な数字になっているよ！

平安京にGOしちゃっているわけでもないのに！

「乗り込んだのはいいけど、こんな調子で罨にかかりまくってたら、ビック・ザ・ドラまでたどり着けるのかなあ」

「……」

のび太のネガティブ発言にドラえもん、スネ夫、ジャイアンは反論できなかった。

のび太の不安はもつともである。

天上世界までは、秘密道具や筋斗雲で安心・安全・快適にいったのに、入り込んだときからほとんど、わな、ワナ、罨。

『ドキッ、罨だらけの自然保存州。コロリもあるよ！』

「そんなドキッはいらない！」

「って、コロリしてたまるかああああ！」

ファイトツ、一発！

ドッセイと辛くも罨から抜け出すのび太一行ではあるものの、こんな調子では体力がじわりじわりとなくなって、途中で力尽きてしまうのではないか。

ラスボスにHP1MP0の状態で戦いを挑むことになってしまうのではないか、と思ってしまう。

そしてセーブポイント先で死んでしまうとは情けないとか、言われそうである。

「罨発見器とか、そ〜いゝ道具はないの、ドラえもん」

歴代ドラえもん映画を視聴している方ならわかり切っている事だが、ドラえもんはそんな秘密道具をもっているわけがない。

いつも、未知なる地域でおっかなびつくりとさせられているのだから。

「ふう……こういうとき、リンレイのありがたみを感じるよ」

西遊記の孫悟空の格好を見ているせいかな、自然とスネ夫は思い出した。

「そついえばそうだな」

ジャイアンも賛同する。

妖怪のスパイとして三蔵法師の付き人をしていた少年であったが、改心し、仲間になった。

リンレイが知らなかった罨に落ちるまでは確かに彼のおかげで罨を回避してきたのだ。

もしかしたらあの落とし穴は、妖怪以外を感知したら落ちるような仕組みになっていたのかもしれない。

「と、言ってもないものねだりしても仕方ないな。ラスボス戦を瀕死状態で迎えるわけにもいかないから、作戦会議だ」

ジャイアンの鶴に一言により、とりあえず安全だとわかっている場所に皆、腰を下ろす。

「といっても、ビク・ザ・ドラも未来の猫型ロボットだから秘密道具についてなんらかしらの対策はもうとっているんだろうけど」

「そこだよ、問題なのは」

「やっぱりこのまま突き進むしかないってことか？」

「いっそのこと、このツキの月で……」

効果：飲めば三時間、信じられないほどの幸運がつきまくる。

普段不運な人ほど効果がある。

「……結局運で乗り切れってことか！……」

小学五年生三人につつまれるが、数分にわたる話し合いの結果、有効な対策はこれしか思いつかなかったという。

ちなみにこのツキの月はドラメッド三世が寄贈したものだったりする。

「あゝ、でもなんとなく、理由わかるな」

魔法使いとして主に仕えているのだから、人を幸せにする魔法を所望されることも多いのだろう。

のび太はゴックンとツキの月を飲み込む。

この道具の効果は体験済みなので、疑いもせずに、むしろ絶対的な信頼をよせていた。

「まったく、妖怪使いがあらいだすね」

ほとんど不眠不休で、長距離を行ったりきたりしている駒はこのとき、のび太たちのいる自然保護州の中央で浮いていた。

ボロボロの漆黒のケープは度重なる戦いによってさらに大きく切り裂かれ、風がなびくたびに彼の体長の二倍くらいの大ささの翼が羽ばたいているように見える。

「……詮無きことですけどね」

己はこのために、このただけに肉体を与えられ、使役させられているのだから。

この身体が芥へと帰すまでは、この血、肉、はビク・ザ・ドラの忠実な駒として現世にとどまるしかない。

「だから……」

浮遊妖力をいったん切り。

まっすぐに、抗うことなく落ちていく。

地面につくそのすれすれの瞬間、ひと際強く大きな突風は少年台の小さな身体を吹き飛ばす。

ああ、やはりまだ壊れられない。

絶望に近い感情が胸の奥を曇らせていく。

「たとえ、相手が孫悟空様といえども、私は全力で戦うしかないのですか……」

逃れられない、悲しみ。

だから。

……ください。ためらわずに……

ブルツとのび太は震えた。

（悪寒？）

嫌な予感に対してだけは的中率がいいのび太は管理棟を出た後、西の空の方を、目を凝らしてみる。

そこから何かが来そうなのだ。

何か、といっても具体的にはわからないが、何か……。

怖いような、恐ろしいような。

それとはまったく違うものも感じる。

「！」

大きな黒い影が、ものすごいスピードでこちらに向かってきている。

「ドラえもん！」

来る。

強大な敵が。

しずかちゃん家で見たあの子が。

「のび太く……」

……ん、どうしたの、という言葉が続かなかった。

大きな漆黒の炎の塊が、しかも六つ、飛び掛ってきたのだから。

「あちっ」

「わ！」

直撃は免れたものの、周辺をも溶かす熱気に少し皮膚がこげる。

そして突風。

みんながあさつての方向に飛ばされていくのをのび太は目視した。アレだけ熱を持つ物質が、高速で飛び交ってきたのだから、大気が

乱れ瞬間的に小さな竜巻ができ、ソレに巻き込まれたのだ。

ツキの月の効果によって吹き飛ばされた先、クッションとなる物質があつて、ドラえもん、ジャイアン、スネ夫はまったくの無傷。なのだが、のび太は知らない。

そう……のび太だけが、この場に残されたのだ。

孫悟空となつて、妖怪と戦うことになる。

「悟空様……」

錫杖を握り締めた、漆黒の天使が降り立つ。

「君は……」

誰だと、たずねるのも野暮かと思つたが、一応は聞こうとする、のび太。

といつても、奇襲してきた妖怪が、こんなおいしい状況で律儀に名を乗るわけがない。

自分と同じくらいの、背丈の妖怪は何も言わずに、のび太に向かって右手の得物で振り回してきた。

「うわっ」

咄嗟に如意坊を頭上で構え、受け止める。

バシツとした音が、鼓膜によく響いてきた。

「危ないな、もう」

孫悟空としての力が、目の前の妖怪と同じか、それ以上を引き出している。

「さすがは、悟空様」

単純な力比べでは紅孩児は不利だと悟り、右足を軸に身体を軽くひねって、左足に力を入れ、大きく跳ねた。距離ができる。

「ふう、怖かった……。じゃない、君は何なのさ、いきなり現れて。しかも武器を振り回したりして危ないじゃないか！」

羅刹女戸顔見知りであったところから、ビック・ザ・ドラに加担している敵だということはわかってる。

目を被い隠すフードをかぶってこんなボロボロなケープを羽織っている。不気味やつだ。

「……私は、悟空様の命を奪いに来たのですから、これは当然のことだと思いますが……」

あ、今回は言葉を返してきた。

言葉のキャッチボールができてちょっとうれしい。

「ところで、君の名前は？ 敵だってわかるけどさ、名前ぐらい教えてくれたっていいじゃない」

君、君って相手を呼ぶのもなんである、のび太は主張する。

少し、相手は身体をすくませたような気がするが、

「紅孩児、です」

はつきりと妖怪は名乗った。

……。

……、……。

「こづがいじ？」

のび太にしてみればピンとこない名であった。

「……………フフ」

それもそうか、とフード越しで紅孩児の顔に笑みが浮かぶ。寛容の目つきで孫悟空を見た。

……………おそらく己の名はリンレイで覚えられ、本名を記憶していないのだろう。さらに牛魔王と羅刹女の子供の名を平凡な小学五年生が知っているわけがない。

このとき紅孩児は、自分の本当の名と存在がマイナーであることに複雑ではあるものの、感謝したという。

これならば。

妖怪として、悟空と対峙すればいい。

気がつかないままでいて欲しい。

気がつくことがないようにして欲しい。

優しいあなたが傷つくことがないように。

……………この目の前の凶悪な妖怪を倒してください！

第五十五話 観光地のトイレは行列ができていて、すぐさま使えない（後書き）

と、ドラえもんたちのほうは散り 散り になってしまいました。

一対一の対決って燃えますよね
トーナメントはネタ的に無理なので、こんな感じにおちつかせました。

第二部では重要な場面でほとんどトイレにこもっていた描写が多かったのび太の活躍をお楽しみに！
じゃ、そういうことでまた！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0959e/>

友情伝説リターン・乙女ドラえもんズ

2011年10月10日05時38分発行